

高下遺跡 浅川古墳群ほか  
檣原古墳群 根岸古墳

一般国道2号改築工事  
(岡山バイパス)に伴う発掘調査

1998

建設省岡山国道工事事務所  
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告123

高下遺跡 浅川古墳群ほか  
櫛原古墳群 根岸古墳

一般国道2号改築工事  
(岡山バイパス)に伴う発掘調査

1998

建設省岡山国道工事事務所  
岡山県教育委員会



1. 高下遺跡弥生時代中期遺構（上空から）



2. 高下遺跡竪穴住居－3（南東から）

巻頭図版 2



1. 浅川 3号墳埋葬人骨頭部の状況（北西から）



2. 浅川 3号墳出土筒形銅器



3. 浅川 3号墳出土銅鏡



1. 楠原古墳群全景（上空から）

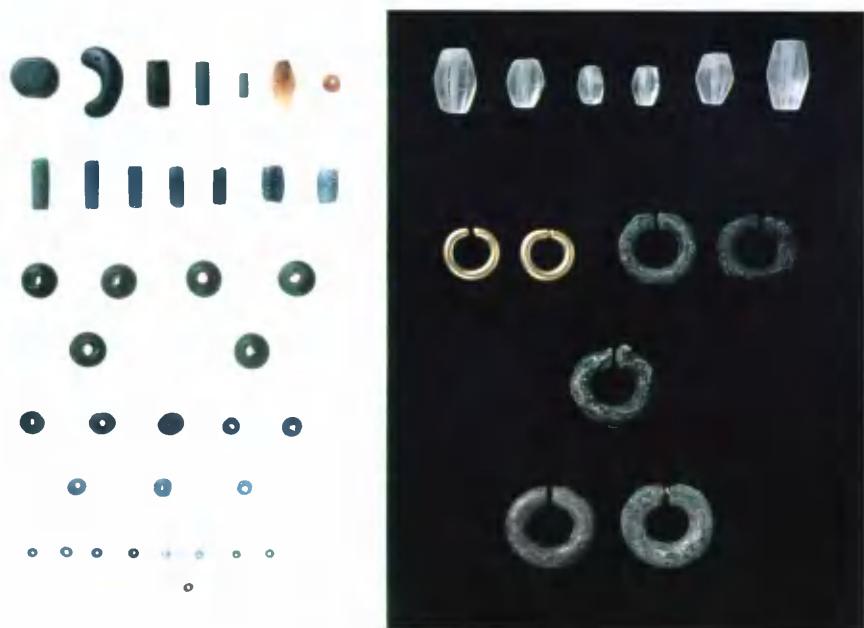


2. 根岸古墳横穴式石室（西から）

卷頭図版 4



1. 根岸古墳出土金銅装大刀金具・馬具類



2. 根岸古墳出土玉類・耳環

## 序

一般国道2号岡山バイパスは、岡山市浅川を起点とし、岡山・倉敷両市街の南部を西進し倉敷市大西で玉島バイパスと接続する延長38.3kmの大規模バイパスです。

このバイパスは、昭和38年度から事業に着手し、現在までに岡山市福治～倉敷市大西の区間、延長33.3km（全体の87%）を既に供用しており、残る未供用区間である岡山市浅川～福治間の5kmの工事を鋭意進めているところです。

この区間が完成することによって、岡山バイパスが起点から終点まで全通することとなり、年々激しさを増している岡山・倉敷地区の交通混雑の緩和に役立つことが大きく期待されています。

この岡山市浅川～福治間においては、竹原地区には高下遺跡及び根岸古墳が、樅原地区及び浅川地区にはそれぞれ樅原古墳群及び浅川古墳群が存在するため、岡山県教育委員会とその取扱いについて協議を重ねた結果、記録保存のための発掘調査を委託実施することになりました。

その結果、高下遺跡では竪穴住居や水田遺構などが、根岸古墳では横穴式石室や土壙墓が、樅原古墳群では2基の古墳とその下層から土器棺や集石遺構などが、浅川古墳群では2基の古墳と火葬墓などが発見されました。

本書は、これらの遺跡及び古墳群の発掘調査の記録であり、これが埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるとともに、学術・文化等のため広く活用されることを強く期待します。

なお、この発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成10年2月

建設省中国地方建設局

岡山国道工事事務所長 大寺伸幸

## 序

岡山市東部の吉井川西岸は、最も古い時期に築造された古墳の一つである浦間茶臼山古墳をはじめとして、一日市古墳や茶ノ子古墳などの前方後円墳が存在しています。また、周辺の丘陵上にも多くの前期古墳の存在が知られています。現在はこの地域に県内の大動脈である国道2号線が東西に貫いていますが、近年の交通量の増加に対応するため、岡山バイパスの建設がすすめられています。

岡山県教育委員会では、昭和62年以降建設省岡山国道工事事務所とバイパス予定路線内に所在する遺跡について保存協議を重ねてきましたが、ルート設定上避けることのできない高下遺跡・浅川古墳群ほか・榎原古墳群・根岸古墳の4遺跡については、やむなく記録による保存の措置をはかることになり、平成2年度から7年度まで（平成5年度をのぞく）岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施しました。

調査の結果、高下遺跡では、弥生時代中期と古墳時代初頭の二時期を中心とした集落遺跡が明らかになりました。弥生時代中期の遺構からは、工房跡とみられる竪穴住居などが検出され、古墳時代初頭の遺構からは、中部瀬戸内島嶼部との関連を窺わせる土器などが出土しました。また、浅川古墳群・榎原古墳群は調査例の少ない古墳時代前期の小墳であり、この時代を考察する際の貴重な資料となりました。なかでも浅川古墳群では、3号墳の箱式石棺の保存状態が良く、赤色顔料があざやかな人骨とともに、筒形銅器がみつかるなど特筆されます。根岸古墳では、長大な横穴式石室から金銅装の大刀や馬具、さらには各種の玉類や畿内風の土師器など、優秀な副葬品が出土し、当地方における最有力者の古墳であることが明らかとなりました。

本報告書が、文化財の保護・保存のために活用され、また、地域史研究の一助となれば幸いと存じます。

最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、国道バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方から種々の御教示と御指導を得、また建設省岡山国道工事事務所をはじめ、地元の関係各位からも御協力を賜りました。記して厚くお礼申し上げます。

平成10年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 篠 本 克 之

## 例　　言

1. 本書は、一般国道2号改築工事（岡山バイパス）に伴い、建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所の委託を受け、岡山県教育委員会が発掘調査を実施した報告書である。
2. 本書には、岡山市竹原に所在する高下遺跡と、浅川・檜原に所在する浅川古墳群ほか・檜原古墳群、および竹原に所在する根岸古墳を収載している。
3. 発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが担当し、高下遺跡を1990（平成2）年5月から1992（平成4）年10月まで、浅川古墳群ほかを1990（平成2）年4月から1990（平成2）年9月まで、檜原古墳群を1994（平成6）年4月から1994（平成6）年7月まで、根岸古墳を1995（平成7）年4月から1995（平成7）年6月まで実施した。
4. 発掘調査および報告書作成にあたっては国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

鎌木義昌（岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）1992年2月まで

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

角田 茂（元岡山市立岡輝中学校教諭）

西川 宏（山陽女子高等学校教諭）

高橋 譲（ノートルダム清心女子大学家政学部教授）1992年3月から

稲田孝司（岡山大学文学部教授）

小林博昭（岡山理科大学教養部教授）

絹川一徳（岡山大学文学部助手）1995年3月まで

松木武彦（岡山大学文学部助教授）1995年4月から

5. 報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて、平成8年1月から3月までは岡本寛久・内藤善史・三宅勝己が、平成8年4月から7月までおよび平成9年1月から3月までは内藤が専従し、文化財センター職員の協力を得て行った。

6. 本書の編集・構成は、内藤が担当し、本文の執筆は、第1章・第6章は岡本が、第2章・第3章・第4章は内藤が、第5章は宇垣匡雅が担当した。

7. 本報告書に係わる自然遺物のうち、一部のものについて鑑定・同定および分析を下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのいくつかについては報文をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

浅川古墳群出土の人骨

池田次郎（九州国際大学）

浅川古墳群の赤色顔料の分析

安田博幸・森眞由美（武庫川女子大学薬学部）

石器・石製品の石材鑑定

妹尾 譲（倉敷芸術科学大学）

浅川古墳群の石棺石材の産地分析

白石 純（岡山理科大学）

浅川3号墳出土筒形銅器の分析

財元興寺文化財研究所

[平尾良光・鈴木浩子（東京国立文化財研究所）]

高下遺跡中世水田跡の自然科学分析 パリノ・サーヴェイ株式会社

根岸古墳出土動物骨の同定 松井 章（奈良国立文化財研究所）

根岸古墳掘り方内埋土の分析 白石 純（岡山理科大学）

8. 卷頭図版1—1は、堀家純一氏がリモコンヘリにより撮影したものを使用させていただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。
9. 本書に用いた高度は海拔高であり、方位は第3章～第5章が磁北で、第6章は真北である。
10. 第1章第2図および第2章第1図は、国土地理院発行の1：25,000地形図「備前瀬戸」・「西大寺」を複製して加筆し、第1章第2図は50%縮小したものである。
11. 本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺率は、各図面に明記している。
12. 出土遺物ならびに図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

# 本文目次

序

例　　言

目　　次

第1章 地理的・歴史的環境 .....	1
第2章 調査の経緯および経過 .....	5
第1節 調査の経緯 .....	5
第2節 調査の体制 .....	7
第3節 日誌抄 .....	10
第3章 高下遺跡 .....	11
第1節 調査の経過 .....	11
第2節 調査の概要 .....	13
(1) 弥生時代の遺構・遺物 .....	16
(2) 古墳時代の遺構・遺物 .....	45
(3) 古代以降の遺構・遺物 .....	81
第3節 小　　結 .....	89
第4章 浅川古墳群ほか .....	91
第1節 調査の経過 .....	91
第2節 調査の概要 .....	92
(1) 2号墳の概要 .....	92
(2) 3号墳の概要 .....	96
(3) 榎原遺跡出土の火葬墓 .....	99
第3節 小　　結 .....	100
第5章 榎原古墳群 .....	103
第1節 位置および調査の経過 .....	103
第2節 調査の概要 .....	104
(1) 調査前の状況 .....	104
(2) 1号墳 .....	105
(3) 7号墳 .....	111
(4) 古墳築造以前の遺構と遺物 .....	115
(5) 古墳時代以後の遺構と遺物 .....	118
第3節 ま　　と　め .....	119
第6章 根岸古墳 .....	121
第1節 立地及び調査の経過 .....	121
第2節 調査の概要 .....	123

(1) 根岸古墳の概要	123
(2) その他の遺構・遺物	148
第3節 小 結	152
付載1 岡山市浅川古墳群出土の人骨	155
2 浅川古墳群中の2号墳および3号墳の埋葬主体部にかかる赤色顔料物質の化学分析	159
3 浅川2・3号墳箱式石棺の石材について	162
報告書抄録	165

## 図 目 次

第1章 地理的・歴史的環境	(1/4・1/2)	23
第1図 遺跡位置図	1	
第2図 調査対象遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2	
第2章 調査の契機および経過		
第1図 岡山バイパスルート図 (1/25,000)	6	
第3章 高下遺跡		
第1図 一次調査トレンド配置図 (1/3,000)	11	
第2図 遺跡分布および調査グリッド図 (1/2,000)	12	
第3図 主要遺構配置図(1/800)	14	
第4図 基本土層断面図(1/60)	15	
第5図 弥生時代遺構配置図(1/300)	16	
第6図 壇穴住居-1(1/80)	17	
第7図 壇穴住居-1出土遺物(1) (1/4)	18	
第8図 壇穴住居-1出土遺物(2) (1/2・1/3)	19	
第9図 壇穴住居-2(1/80) 出土遺物(1)(1/4)	20	
第10図 壇穴住居-2出土遺物(2) (1/2・1/3)	21	
第11図 壇穴住居-3(1/80)	22	
第12図 壇穴住居-3出土遺物		
第13図 壇穴住居-4(1/80)	23	
第14図 壇穴住居-4出土遺物(1) (1/4)	24	
第15図 壇穴住居-4出土遺物(2) (1/2)	25	
第16図 壇穴住居-4出土遺物(3) (1/3)	26	
第17図 壇穴住居-5(1/80) 出土遺物(1/4)	26	
第18図 壇穴住居-6(1/80) 出土遺物(1/2)	27	
第19図 壇穴遺構-1(1/60) 出土遺物(1/4)	27	
第20図 壇穴遺構-2(1/80) 出土遺物(1/2)	28	
第21図 壇穴遺構-3(1/80) 出土遺物(1/4)	28	
第22図 壇穴遺構-4(1/80)	29	
第23図 壇穴遺構-5(1/80)	29	
第24図 壇穴遺構-6(1/80) 出土遺物(1/4・1/2)	30	
第25図 壇穴遺構-7(1/80) 出土遺物(1/2)	31	
第26図 壇穴遺構-8(1/80) 出土遺物(1/4)	31	

第27図	竪穴遺構—9 (1/80) · 出土遺物 (1/2) .....	32	第50図	古墳時代遺構配置図 (1/300) ···	45
第28図	竪穴遺構—10 (1/80) .....	32	第51図	竪穴住居—7 (1/80) .....	46
第29図	竪穴遺構—11・12 (1/80) .....	33	第52図	竪穴住居—7 出土遺物(1) (1/4) .....	47
第30図	建物—1 (1/80) · 出土遺物 (1/4) .....	33	第53図	竪穴住居—7 出土遺物(2) (1/2・1/3) .....	48
第31図	建物—2 (1/60) .....	34	第54図	竪穴住居—8 (1/80) .....	49
第32図	土壙—1 (1/30) · 出土遺物 (1/4) .....	34	第55図	竪穴住居—8 出土遺物(1) (1/4) .....	50
第33図	土壙—2 (1/30) · 出土遺物 (1/4・1/2) .....	35	第56図	竪穴住居—8 出土遺物(2) (1/4・1/2・1/3) .....	51
第34図	土壙—3 (1/40) · 出土遺物 (1/4) .....	36	第57図	竪穴住居—8 土壙—2・3・4 出土遺物 (1/4) .....	52
第35図	土壙—4・5・6・7 出土遺物 (1/2) .....	37	第58図	建物—3 (1/80) · 出土遺物 (1/4) .....	53
第36図	土壙—8 (1/40) · 出土遺物 (1/4) .....	37	第59図	建物—4 (1/80) .....	53
第37図	炉状遺構—1・2 (1/30) .....	38	第60図	建物—5 (1/80) .....	54
第38図	炉状遺構—3 (1/30) .....	38	第61図	井戸—1 (1/30) · 出土遺物 (1/4) .....	54
第39図	柱穴内出土遺物(1) (1/4・1/2・1/3) .....	39	第62図	土壙—9 (1/30) · 出土遺物 (1/4) .....	55
第40図	柱穴内出土遺物(2) (1/4) .....	40	第63図	土壙—10 (1/30) .....	55
第41図	柱穴内出土遺物(3) (1/4) .....	40	第64図	土壙—10出土遺物 (1/4) .....	56
第42図	P—23出土遺物 (1/4) .....	41	第65図	土壙—11 (1/30) · 出土遺物 (1/4) .....	56
第43図	土器溜り—1 出土遺物 (1/2・1/3・1/4) .....	41	第66図	土壙—12 (1/30) · 出土遺物 (1/4) .....	57
第44図	土器溜り—2 出土遺物 (1/4) .....	42	第67図	土壙—13 (1/30) ·出土遺物 (1/4・1/3・1/2) .....	57
第45図	土器溜り—3 出土遺物 (1/2・1/3) .....	42	第68図	土壙—14 (1/30) · 出土遺物 (1/4) .....	58
第46図	遺構に伴わない遺物(1) (1/4) .....	42	第69図	土壙—15 (1/30) · 出土遺物 (1/4) .....	58
第47図	遺構に伴わない遺物(2) (1/4) .....	43	第70図	土壙—16 (1/30) · 出土遺物 (1/4) .....	59
第48図	遺構に伴わない遺物(3) (1/4) .....	44	第71図	土壙—17・18 (1/30) · 土壙—17出土遺物 (1/4) .....	59
第49図	遺構に伴わない遺物(4) (1/2・1/3) .....	44	第72図	土壙—19出土遺物 (1/4) .....	60

第73図 土壌—20・21・22	出土遺物(1/4) ······	61	出土遺物(1)(1/4) ······	76
第74図 土壌—23・24	出土遺物(1/4) ······	61	第95図 斜面上部溜り出土遺物(2)	
第75図 柱穴内出土遺物(1)	(1/4・1/3) ······	62	(1/4・1/3・1/2) ······	77
第76図 P—32(1/30) ·	出土遺物(1/4) ······	63	第96図 遺構に伴わない遺物(1)	
第77図 柱穴内出土遺物(2)	(1/3・1/4) ······	63	(1/4・1/2) ······	78
第78図 土器溜り—4出土遺物	(1/4) ······	64	第97図 遺構に伴わない遺物(2)	
第79図 土器溜り—5出土遺物(1)	(1/4・1/3) ······	64	(1/4) ······	79
第80図 土器溜り—5出土遺物(2)	(1/3) ······	65	第98図 遺構に伴わない遺物(3)	
第81図 土器溜り—6出土遺物	(1/4) ······	65	(1/4) ······	79
第82図 土器溜り—7出土遺物	(1/4・1/3) ······	66	第99図 遺構に伴わない遺物(4)	
第83図 土器溜り—8出土遺物	(1/4) ······	67	(1/2・1/3) ······	80
第84図 土器溜り—9出土遺物	(1/4) ······	67	第100図 建物—6(1/80) ······	81
第85図 土器溜り—10出土遺物	(1/4) ······	68	第101図 建物—7(1/80) ······	81
第86図 土器溜り—11~13	出土遺物(1/4) ······	69	第102図 建物—9(1/80) ······	82
第87図 土器溜り—14出土遺物	(1/4) ······	69	第103図 井戸—2(1/30) ······	82
第88図 斜面出土遺物(1)(1/4) ······	70	第104図 井戸—2出土遺物(1/4) ······	83	
第89図 斜面出土遺物(2)(1/4) ······	71	第105図 土壌—25(1/30) ·		
第90図 斜面出土遺物(3)(1/4) ······	72	出土遺物(1/4) ······	83	
第91図 斜面出土遺物(4)(1/4) ······	73	第106図 土壌—26(1/30) ·土壌—27出		
第92図 斜面出土遺物(5)	(1/4・1/3) ······	74	土遺物(1/3・1/4) ······	84
第93図 斜面出土遺物(6)(1/4) ······	75	第107図 土壌—28(1/30) ·		
第94図 斜面上部溜り土層断面(1/30) ·		出土遺物(1/4) ······	84	
		第108図 P—44出土遺物(1/3) ······	85	
		第109図 柱穴内出土遺物(1)(1/4) ······	85	
		第110図 P—52出土遺物(1/4) ······	85	
		第111図 柱穴内出土遺物(2)(1/4) ······	85	
		第112図 P—57(1/30) ·		
		P—57・58出土遺物(1/4) ······	86	
		第113図 柱穴内出土遺物(3)(1/4) ······	86	
		第114図 水田畦畔(1/400) ·		
		土層断面(1/60) ······	87	
		第115図 中世遺構出土遺物(1/4) ······	88	
		第116図 遺構に伴わない遺物(1)		
		(1/4・1/3) ······	88	
		第117図 遺構に伴わない遺物(2)		
		(1/4) ······	88	

#### 第4章 浅川古墳群ほか

第1図 一次調査トレンチ配置図

(1/3,000) .....	91	(1/4・1/2) .....	114		
第2図 浅川2・3号墳位置図 (1/2,000) .....	92	第14図 1号墳盛土下部および検出遺構 (1/150) .....	115		
第3図 2号墳墳丘土層断面図 (1/60) .....	93	第15図 土器棺—1(左)・土壙—1(右) (1/20) .....	116		
第4図 2号墳埋葬主体部(1/40) .....	94	第16図 土器棺—1(1/4) .....	116		
第5図 2号墳墳丘測量図(1/300) .....	95	第17図 土壙—1出土土器(1/4) .....	116		
第6図 2号墳出土遺物 (1/4・1/2) .....	95	第18図 榎原古墳群出土縄文・弥生時代遺 物(1/4・1/2) .....	117		
第7図 3号墳墳丘土層断面図 (1/60) .....	96	第19図 榎原古墳群出土ナイフ形石器 (1/2) .....	118		
第8図 3号墳埋葬主体部(1/40) .....	97	第20図 1号墳墳頂部近世以降遺構配置図 (1/150) .....	118		
第9図 3号墳出土遺物 (1/3・1/2) .....	98	第21図 石積遺構—1(1/30) .....	119		
第10図 榎原火葬墓位置図(1/300) · 火葬墓(1/30) .....	99	第22図 石積遺構—2(1/30) .....	119		
第11図 榎原火葬墓骨蔵器(1/4) .....	99	第23図 石積遺構—2出土遺物 (1/4・2/3) .....	119		
第12図 浅川古墳出土筒形銅器の鉛同位対 比 .....	102	第24図 榎原古墳群出土中世以降遺物 (1/4・2/3・1/3・1/2) .....	120		
<b>第5章 榎原古墳群</b>					
第1図 榎原古墳群周辺地形図 (1/3,000) .....	104	<b>第6章 根岸古墳</b>			
第2図 発掘調査前地形測量図 (1/300) .....	105	第1図 根岸古墳(矢印)周辺地形図 (1/3,000) .....	121		
第3図 墳丘測量図(1/300) .....	106	第2図 墳丘測量図(1/250) .....	123		
第4図 1号墳墳丘測量図(1/150) .....	107	第3図 墳丘(上)・周溝(下) 土層断面図(1/80) .....	124		
第5図 1号墳墳丘断面土層図 (1/80) .....	108	第4図 石室上面(1/60) .....	125		
第6図 1号墳主体部(1/30) .....	109	第5図 石室実測図(1/70) .....	127		
第7図 燃土盛土および下部の土壤 (1/40) .....	110	第6図 石室内堆積土層断面図 (1/60) .....	128		
第8図 1号墳出土鏡・管玉(1/1) .....	111	第7図 石室内排水溝平面図(1/60) .....	130		
第9図 1号墳出土土器(1/4) .....	111	第8図 石室内排水溝土層断面図 (1/30) .....	130		
第10図 7号墳墳丘測量図(1/150) .....	112	第9図 石室掘り方平面図(1/150) .....	131		
第11図 7号墳葺石(1/30) .....	113	第10図 石室掘り方内土層断面図 (1/60) .....	131		
第12図 7号墳墳丘断面土層図 (1/80) .....	114	第11図 遺物出土状態平面図(1/60) .....	132		
第13図 7号墳出土土器・鉄器		第12図 出土土器(1)(1/4) .....	134		
		第13図 出土土器(2)(1/4・1/2) .....	135		

第14図 出土土器(3) (1/4) .....	137
第15図 出土金属器(1) (1/2・1/5) .....	138
第16図 出土金属器(2) (1/2) .....	139
第17図 出土金属器(3) (1/2) .....	140
第18図 出土金属器(4) (1/2) .....	142
第19図 出土耳環 (1/2) .....	143
第20図 出土玉類 (2/3) .....	144
第21図 出土金属器(5) (1/2) .....	146
第22図 出土金属器(6) (1/2) .....	147
第23図 1号墓 (1/30) · 蔵骨器 (1/4) .....	148
第24図 2号墓 (1/30) · 出土遺物 (1/4・1/2) .....	148
第25図 3号墓 (1/30) .....	149
第26図 4号墓 (1/30) .....	149
第27図 5号墓 (1/30) .....	149
第28図 出土石器 (1/1) .....	150
第29図 石室埋土内古代・中世土器 (1/4) .....	150
第30図 石室埋土内中世・近世土器 (1/4) .....	151
第31図 石室内貝層・表土出土金属器 (1/2) .....	152
第32図 岡山県内における横穴式石室の規 模 .....	152
第33図 石室内器種別遺物出土状態 (1/80) .....	153

## 図版目次

卷頭図版 1	1 高下遺跡弥生時代中期遺構 (上空から)	2 高下遺跡堅穴遺構—3 (東から)
	2 高下遺跡堅穴住居—3 (南東 から)	3 高下遺跡建物—1 (南東から)
卷頭図版 2	1 浅川3号墳埋葬人骨頭部の状 況 (北西から)	図版 3 1 高下遺跡弥生時代遺構 (北から)
	2 浅川3号墳出土筒形銅器	2 高下遺跡土壙—1 (南から)
	3 浅川3号墳出土銅鏡	3 高下遺跡土壙—2 (南から)
卷頭図版 3	1 榛原古墳群全景 (上空から)	図版 4 1 高下遺跡堅穴住居—7 (南東か ら)
	2 根岸古墳横穴式石室 (西か ら)	2 高下遺跡堅穴住居—8 (東から)
卷頭図版 4	1 根岸古墳出土金銅装大刀金 具・馬具類	3 高下遺跡堅穴住居—8周辺古墳時 代遺構 (東から)
	2 根岸古墳出土玉類・耳環	図版 5 1 高下遺跡建物—3 (南東から)
図版 1	1 高下遺跡調査前北部 (北西から)	2 高下遺跡井戸—1 (南東から)
	2 高下遺跡調査前南部 (北東から)	3 高下遺跡土壙—10 (南から)
	3 高下遺跡堅穴住居—1 (南から)	図版 6 1 高下遺跡斜面堆積 (南から)
図版 2	1 高下遺跡堅穴住居—3 堅穴遺 構—9 (南東から)	2 高下遺跡古墳時代前期溜り土層断 面 (南西から)
		3 高下遺跡土器溜り—9 (西から)
図版 7		図版 7 1 高下遺跡古代柱穴群 (東から)
		2 高下遺跡井戸—2 (東から)

- 3 高下遺跡中世水田畦畔（南から）
- 図版8 高下遺跡出土遺物(1)（土器）
- 図版9 高下遺跡出土遺物(2)（石器）
- 図版10 高下遺跡出土遺物(3)（土製品・玉類・鉄器）
- 図版11 1 浅川古墳群遠景（東から）  
2 浅川2号墳検出状況（南西から）  
3 浅川2号墳主体部検出状況（北から）
- 図版12 1 浅川3号墳墳丘検出状況（西から）  
2 浅川3号墳主体部検出状況（東から）  
3 浅川3号墳人骨検出状況（北東から）
- 図版13 1 楠原火葬墓検出状況（北から）  
2 浅川2号墳出土遺物  
3 楠原火葬墓骨蔵器
- 図版14 1 楠原古墳群遠景（南から）  
2 調査前の状況（東から）  
3 1号墳・7号墳（南東から）
- 図版15 1 古墳群全景（北西から）  
2 7号墳（手前）・1号墳（奥側）（南から）  
3 7号墳北東葺石（北東から）
- 図版16 1 1号墳主体部（北から）  
2 1号墳主体部（西から）  
3 7号墳乱掘墳（南から）
- 図版17 1 土器棺—1・土壙—1（北から）  
2 土器棺—1・土壙—1出土遺物  
3 楠原古墳群出土遺物
- 図版18 楠原古墳群出土遺物
- 図版19 1 根岸古墳遠望（北から）  
2 調査前古墳全景（東から）  
3 墳丘全景（北東から）
- 図版20 1 山道堆積土層及び墳丘断面（北西から）  
2 古墳周溝（北から）
- 3 石室羨道部遺物出土状態（西から）
- 図版21 1 石室内土層断面及び遺物出土状態（北西から）  
2 玄室内遺物出土状態（西から）  
3 同上細部（西から）
- 図版22 1 横穴式石室玄室南側壁（北西から）  
2 石室奥壁（西から）  
3 横穴式石室玄室北側壁（南西から）
- 図版23 1 石室南側壁（西北西から）  
2 墳丘盛土内列石（西から）  
3 石室掘り方内土層断面（西から）
- 図版24 1 調査後古墳全景（西から）  
2 横穴式石室全景（北から）  
3 石室天井石（南上から）
- 図版25 1 中世土壙墓群（北から）  
2 1号墓（北から）・蔵骨器  
3 2号墓（東から）・出土遺物
- 図版26 根岸古墳出土土器(1)
- 図版27 根岸古墳出土土器(2)
- 図版28 根岸古墳出土土器(3)
- 図版29 1 根岸古墳出土土器(4)  
2 根岸古墳出土金銅装大刀金具（上）  
3 根岸古墳出土金属器(1)（下）
- 図版30 1 根岸古墳出土金属器(2)  
2 根岸古墳出土耳環
- 図版31 1 根岸古墳出土金属器(3)  
2 根岸古墳出土玉類(1)
- 図版32 1 根岸古墳出土玉類(2)  
2 根岸古墳出土金属器(4)

## 第1章 地理的・歴史的環境

国道2号バイパスは岡山市街地の南方を東西に走る。上り方面は岡山市西大寺の手前、岡山市君津から北東方向へ進路を変え、砂川の東岸沿いに遡る。岡山市竹原・榎原を過ぎ、岡山市浅川で国道2号線と合流する。本書で報告する遺跡は、この砂川流域の路線上に存在していた。

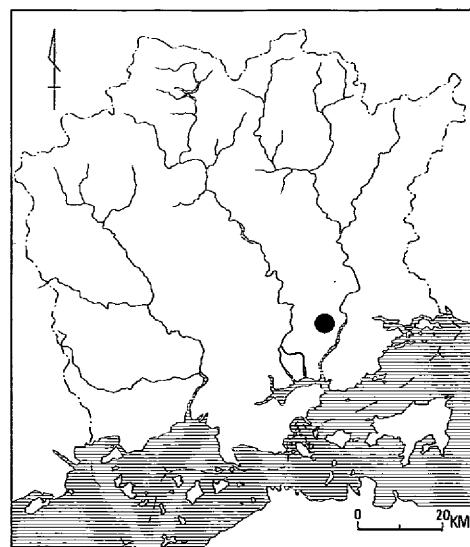
砂川は吉井町仁堀の山中に源を発し、吉井川と旭川の大河川に挟まれた赤磐山地に谷を刻みつつ南流する。赤坂町町苅田に至って丘陵地を抜け、氾濫平野を広げ始める。最初の平野は赤坂町南端から山陽町全域に及ぶ。南北6km、東西1.5kmの南北に長い平野で、北東一南西方向の谷筋が加わる。

砂川は、山陽町と瀬戸町の境にあたる、北東から南西に細長く伸び出した丘陵を切り通し、次の平野に流れ出していく。この平野は瀬戸町の西半分から岡山市東平島・南古都の一帯に広がり、南北約4.5km、東西約3.5kmの広さをもつ。しかし、平野の中央部にあたる岡山市沼から平島にかけては近世初頭まで沼沢地や後背湿地が広がり、耕作に適した土地ではなかった。瀬戸町の中心街からは北東方向に細長い平地が伸び、吉井川流域の万富低地に続いている。いっぽう、平野の南東隅にあたる岡山市浅川付近でも吉井川流域の低地とつながり、吉井川の分流が流れたこともあったとされる。

二つ目の平野の南を限るのは東岡山丘陵とその東に独立した大日幡山山塊である。その間を流れ出た砂川は流路を南西方向に変え、約2km東を流れる吉井川と平行するように下る。砂川の流域は幅0.5kmの低地となり、西大寺市街地の北西を通って江戸時代以降の干拓地に続く。この幅0.5kmの低地を北東に遡ると、岡山市才崎を経て内ヶ原で吉井川に突き当たる。この低地は吉井川分流の旧河道でもあり、本書で報告する高下遺跡や根岸古墳の下方にある根岸の集落付近では、旧河道の微高地が存在している。この砂川下流域と吉井川の間の丘陵は低平でいくつかの塊に分かれ、隔絶性は低い。

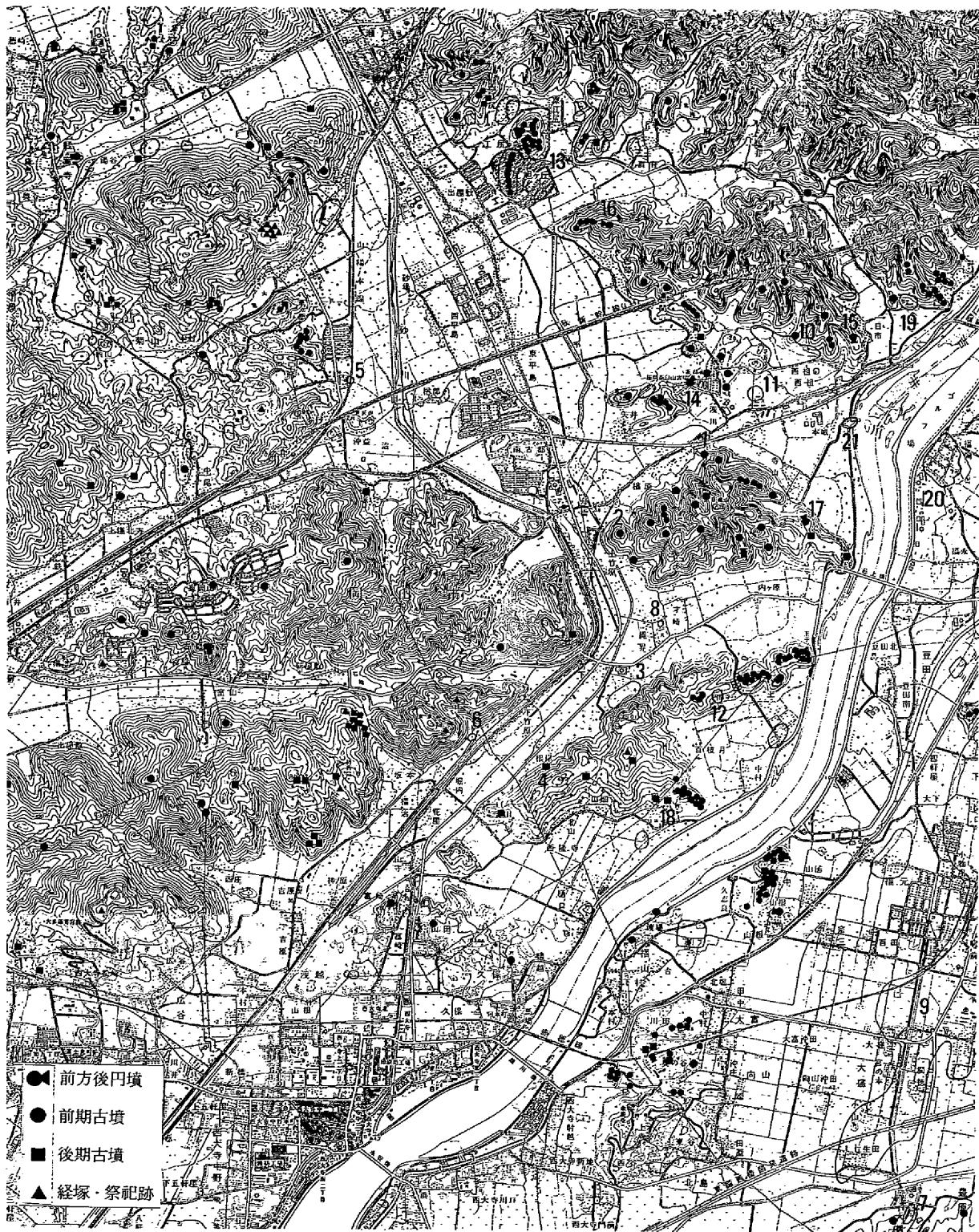
このように、砂川流域の平野は三つの部分に分けられるが、瀬戸町以南の中・下流域については隔絶性は低く、吉井川流域平野との広いつながりが認められる。大河川ではあっても水運の便もあり、ひろく吉井川下流域の一部と捉えることができよう。

この地域における人間活動の痕跡は旧石器時代後期に遡る。岡山市百枝月西畠と同市草ヶ部小廻山からは柳葉形尖頭器が出土している（注1）。遺跡は丘陵にあり、獲物を追って尾根伝いに野営地を移動する生活を想像させる。縄文時代に入ると砂川中・下流域の多くは海になったと思われ、これ以後は吉井川・砂川の沖積作用による平野部の埋積・拡張が続くこととなる。縄文時代の遺跡のあり様も前代と大きく異なることはなく、点々とした分布にとどまっている。この時代には貝塚が形成されるようになり、砂川流域でも二カ所の貝塚が知られている。岡山市沼貝塚（注2）は前期のもので砂川中流平野にあり、岡山市竹原貝塚（注3）は砂川下流の平野に位置する後期の貝塚である。どちらの貝塚も小規模なもの



第1図 遺跡位置図

で、季節的な移動に伴うものではないかと思われる。吉井川下流域の邑久町大橋貝塚（注4）では前期から後期までの長期にわたる土器型式の継続が認められ、規模の大きさからも、この地域における



第2図 調査対象遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

拠点的な集落と考えられる。砂川中・下流域では岡山市浦間茶臼山古墳（注5）や本報告の根岸古墳から縄文時代のものとみられる石鏃が出土している。集落を形成し、定住に近い生活を営みつつも、山野に獲物を求める生活が継続していたものと考えられる。

縄文時代の晚期には河川の沖積作用も進行し、吉井川や砂川の下流域に自然堤防を核とする微高地が広がってくる。吉井川の微高地上に所在する邑久町助三畠遺跡からは晚期後半の突帯文土器が出土し（注6）、微高地周辺の低湿地を利用する新しい生業、水稻耕作の開始を知らせてくれる。砂川下流域では、岡山市里前遺跡から晚期の土器が出土しているという（注7）。弥生時代に入り水稻耕作の本格的な展開が始まる。吉井川下流の邑久町熊山田散布地一帯では前期の土器が認められる。とくに、門田貝塚（注8）では前期前半以来の土器が大量に出土し、中核的な集落として存在していたと思われる。砂川流域では、中流平野の岡山市西祖山方前遺跡・西祖橋本遺跡から中期後半の土器が出土している（注7）。下流平野では本報告の高下遺跡が中期中葉から始まり、中期後葉に集落が形成される。このように、砂川流域では集落の形成は吉井川下流域に遅れるものの、順調な集落の発展を示していると考えられる。なお、吉井川流域になるが、岡山市百枝月西畠の円福寺裏山からは扁平鉗式袈裟繩文銅鐸が2個まとめて出土し、周辺からも銅鐸の破片が採集されている（注9）。

弥生時代の生産力の発展を基盤として、地域勢力の統合の動きが活発化する。岡山県では、のちに吉備と呼ばれる地域のまとまりが弥生時代後期後半には成立したとみられ、それを表象する遺物が特殊壺形土器・特殊器台形土器である。砂川中流域に望む墳墓遺跡の瀬戸町向山寄宮畠遺跡からは小形の特殊壺・器台形土器が出土している（注10）。国家の成立に伴い、身分秩序の表現としての前方後円墳を頂点とする古墳が全国に築造されていく（注11）。砂川中流平野の東端にあって、また、吉井川下流域にも接する岡山市浦間の地に、全長138mの前方後円墳である浦間茶臼山古墳（注12）が築かれる。初期の古墳としては吉備最大であり、同期最大の畿内大王墓である「箸墓」古墳の1/2の相似形をとることから、畿内政権との密接な関係が伺われる（注13）。浦間茶臼山古墳に後続する大型の古墳は吉井川対岸の平野部に移るが、浦間茶臼山古墳周辺でも岡山市一日市には全長55mの前方後円墳である一日市古墳が所在する。前方部がバチ形に開き、浦間茶臼山古墳と相前後して築造された可能性が高いとされる（注6）。これらに統いて、瀬戸町江尻・岡山市浦間に寺ノ奥古墳、岡山市寺山には茶ノ子山古墳が築かれる。前者は全長25.5m、後者は25.4mを測る（注6）。本書で報告する浅川古墳群や檜原古墳群も前期の古墳である。浅川古墳群は小規模な円墳であったが、3号墳からは筒形銅器が出土し、畿内との関係の中で入手されたものかもしれない。古墳時代の集落跡としては高下遺跡がある。高下遺跡から出土した土器は旭川下流域や足守川流域の土器とは異なり、瀬戸内島嶼部との繋がりが強い。このことは吉井川下流域にも通じる状況である（注14）。同じ砂川下流域の岡山市里前遺跡でも同期の土器が出土し、同じ様相を呈しているという（注7）。

古墳時代中期は、砂川上流平野では、県下第三位の規模を誇る巨大前方後円墳、両宮山古墳が築造され、吉備の首長権を競うほどの勢力の台頭がみられる。砂川中・下流域では、おもに箱式石棺を埋葬施設とする小規模な古墳からなる古式の群集墳が出現する。とくに、中流平野の東側の丘陵や下流平野の北東部周縁の丘陵上には密集している。高下遺跡でも5世紀代の須恵器を含む土器溜まりが検出され、集落が継続している。古墳時代後期になると砂川中・下流域における古墳の築造は減少する。とくに、中流平野縁辺での減少は著しい。奥まった小廻山の山裾と瀬戸町中心部の平野縁辺に群集する程度である。むしろ、これに変わるように下流平野南半部での古墳の増加が目につく。根岸古

墳もその一つであり、あたかも砂川下流域における開発が急速に進行したかのようである。吉井川流域にあるが、近接した重要な後期古墳として岡山市百枝月に所在する宮山西塚（注15）がある。直径25mの円墳で、全長13.7mの両袖式の横穴式石室に竜山石製のくり抜き家形石棺が納められている。

古代の砂川流域は備前国赤坂郡と磐梨郡、それに上道郡に編入される。上流域は赤坂郡、中流域の瀬戸町分が磐梨郡、そこより下流は上道郡である。国府は上道郡に置かれたが、西半の旭川流域にあり、国分寺は赤坂郡に建立された。周辺の遺跡としては岡山市吉井廃寺が知られている。平城宮式軒瓦や綠釉陶器が出土し、西門と築地基壇と推定される遺構が検出されている。吉井川が下流平野に流れだす地点にあたり、砂川流域との接点にもあるという交通上の要地に位置することから、官衙の可能性も指摘されている（注7）。なお、古代の山陽道は砂川上流の山陽町を横断していたと考えられている。高下遺跡からも古代の土器が多く出土し、その地名からも注意されるところである。平安時代の後期になると、砂川中・下流域にも莊園が立てられるようになる。中流域の東端は長船町福岡付近も含めて福岡庄となり、下流域は北から、竹原庄・浅越庄・金岡庄が立てられる。元亨2年（1322）右京権大夫藤原某奉書（注16）によれば「大和國大安寺領備前国上東郡竹原郷」とあり、地頭職として「根岸季兼」の名がみられる。平安時代の後期には山陽道は砂川の中流域を通過するように変わり、福岡庄には福岡市が開かれて賑わいをみせていたことが『一遍聖絵』に知られる。高下遺跡でも中世の土器が多く出土し、根岸古墳からも同期の土器が採集され、竹原庄との関わりが思われる。

室町時代以降、この地域から吉井川の下流域にかけては要衝の地として、いくたの戦乱の舞台となつた。嘉吉の変（1441）の後、備前守護職となつた山名氏は福岡に政所を置いた。この福岡城をめぐっての浦上氏と松田氏の文明15年（1483）の合戦はよく知られている。江戸時代、徳川幕藩体制の確立によって、砂川中・下流域は岡山藩領となる。明治4年（1871）の廢藩置県によって岡山県に属することとなり、現在はその大半が岡山市に編入され、中流域北東部は瀬戸町となっている。

- (1) 木村幹夫「原始・古代」『上道町史』岡山市 1973年
- (2) 注(1)、高橋護「沼貝塚」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986年
- (3) 木村幹夫「岡山県上道郡竹原貝塚について」『吉備考古』第87号 吉備考古学会 1953年、間壁忠彦「縄文後期彦崎KⅡ式（竹原）式土器をめぐって」『倉敷考古館研究集報』第15号 倉敷考古館 1980年
- (4) 木村幹夫「岡山県邑久郡豊原貝塚について」『吉備考古』第90号 吉備考古学会 1955年、岡本寛久「大橋貝塚発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』9 岡山県教育委員会 1979年
- (5) 近藤義郎・新納泉編『岡山市浦間茶臼山古墳』真陽社 1991年
- (6) 小郷利幸・草原孝典・馬場昌一・森宏之「吉井川、砂川流域の古墳の測量調査(1)」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会 1997年
- (7) 神谷正義・扇崎由「西祖山方前遺跡 西祖橋本（御休幼稚園）遺跡」岡山市教育委員会 1994年
- (8) 鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』第84号 吉備考古学会 1952年、近藤義郎「門田貝塚の発掘調査」『日本考古学年報』20 日本考古学協会 1972年、岡田博『門田貝塚』岡山県教育委員会 1983年
- (9) 近藤義郎「備前百枝月発見の銅鐸」『古代吉備』第4集 古代吉備研究会 1961年、近藤義郎「百枝月銅鐸出土遺跡」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986年
- (10) 矢部秋夫「陣場山遺跡について」『瀬戸町資料集』瀬戸町 1985年
- (11) 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説」『日本史研究』第343号 日本史研究会 1991年
- (12) 宇垣匡雅「吉備の前期古墳—1 浦間茶臼山古墳の測量調査—」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会 1987年、注(5)と同じ
- (13) 北條芳隆「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」『考古学研究』第32巻第4号 考古学研究会 1986年
- (14) 高橋護「弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究』（上） 山陽新聞社 1992年、中田宗伯「中部瀬戸内における甕形土器の地域色」『吉備の考古学的研究』（上） 山陽新聞社 1992年
- (15) 注(1)と同じ、間壁忠彦・間壁貞子「石棺研究ノート（一） 石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第9号 倉敷考古館 1974年
- (16) 『岡山県史』第19巻 編年資料 1297文書

## 第2章 調査の経緯および経過

### 第1節 調査の経緯

一般国道2号改築工事（岡山バイパス）は、岡山市浅川を起点とし、岡山・倉敷両市街地の南部を西進し倉敷市大西に至る延長38.3kmの大規模なバイパス建設工事である。昭和38年から事業に着手され、すでに岡山市福治から倉敷市大西間は供用されている。現在、岡山市福治から岡山市東平島交差点の国道2号線までは、県道西大寺山陽線を経て連結されているが常に渋滞をきたし、残る岡山市浅川から岡山市福治間の工事が急がれている。

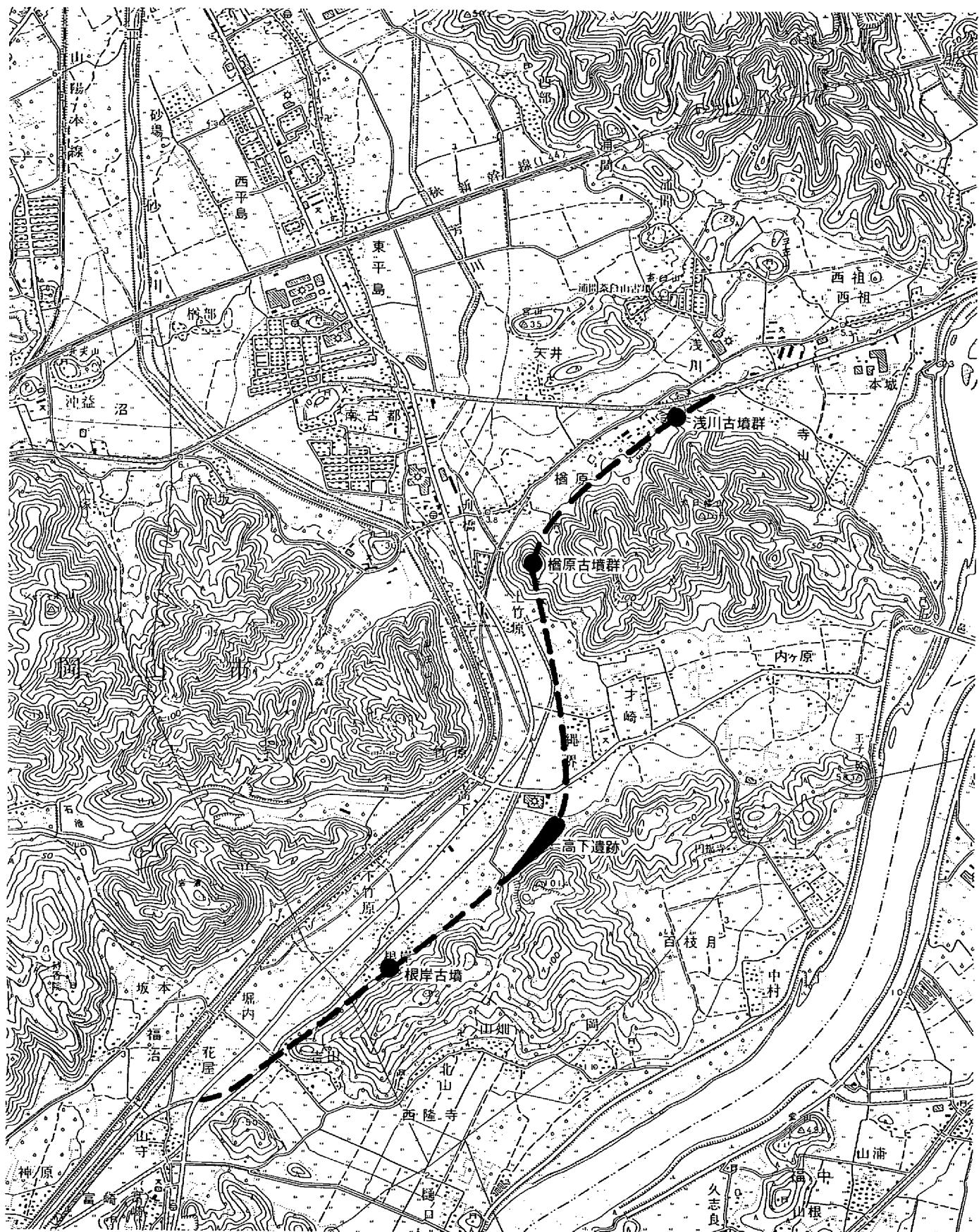
この路線内の埋蔵文化財の有無については、建設省中国建設局長から照会（昭和62年11月27日付け）があったのを期に分布調査を実施し、岡山県教育委員会教育長からの回答（昭和63年2月9日付け）をもとに、岡山県教育委員会と建設省岡山国道工事事務所との間で保存協議が始まった。路線予定地内には、浅川古墳群をはじめ檜原・根岸の両古墳や、弥生土器が散布する高下弥生散布地などが含まれるため、岡山県教育委員会はその後も保存協議を重ねてきたが、平成2年4月3日付で建設省中国建設局長から文化財保護法第57条の3に基づく協議書が提出され、最終的には記録保存の措置がとられることになった。そして発掘調査は、平成2年度から開始し、平成5年度を除き平成7年度第1四半期まで実施したものである。

調査は、まず用地買収などの条件整備が整い、かつ遺跡の範囲などの確定が急がれる浅川古墳群と高下弥生散布地についての一次調査を実施した。浅川古墳群は、用地内に2号墳が所在しているとみられるものの、現状ではその位置が明確でなく、また、丘陵の南西裾部は緩斜面で遺構などの広がる可能性があった。このため、丘陵上と丘陵南西裾部に位置している緩斜面にそれぞれトレンチを設定し掘り下げた。その結果、丘陵上の2号墳の位置が明らかになるとともに、新たに古墳（浅川3号墳）が1基確認されたほかには、遺構などは全く認められなかった。また、丘陵南西裾部の緩斜面は、開墾などにより一部の狭い範囲に包含層が遺存していたのみであり、そのほかに遺構・遺物などは全く認められなかつたので、包含層の部分を中心にトレンチを拡張した結果、火葬骨墓が1基検出された。

高下弥生散布地は、遺跡の範囲や遺構の状況を把握するため、用地内の地形と土器の散布密度を参考にして、トレンチを設定し掘り下げた。その結果、弥生時代中期から中・近世におよぶ複合遺跡の存在と範囲が明らかとなり、弥生散布地は新たに高下遺跡として発掘調査を行うことになった。

浅川古墳群は、用地内に所在している2基の古墳（2号墳・3号墳）を調査対象とし、一次調査終了後の平成2年7月から調査員2名で着手した。

高下遺跡の調査対象範囲は、12,000m<sup>2</sup>にもおよぶ広大なものであった。しかし、遺構の密度などに濃淡があり、中世遺構のみが調査の対象なった地区などは、大幅に期間を短縮することができた。調査は、浅川古墳群の調査終了後の平成2年9月に着手し、平成4年10月に終了させることができた。調査員は平成2・3年度が2名で、4年度は、岡山北バイパスの調査が一部重複したため、2～3名



第1図 岡山バイパスルート図 (1/25,000)

で行った。高下遺跡の調査終了後には、引き続いて榎原古墳群および根岸古墳の調査が予定されていたが、用地買収や隣接している墓地の移転などに時間を要することが判明し、これらの発掘調査は一旦中止された。

榎原古墳群の調査は、用地買収などの条件整備が整った平成6年4月に調査員2名で着手し、平成6年7月に終了した。また、根岸古墳の調査は、墓地移転などの整備が終了した平成7年4月に調査員2名で着手し、6月に終了したことにより、岡山バイパスの発掘調査をすべて終了した。

報告書の作成は、平成8年の1月から3月まで、浅川古墳群ほか・榎原古墳群・根岸古墳を3名が専従して行った。また、平成8年4月から7月および平成9年1月から3月まで、高下遺跡を1名が専従して行い、平成9年度に印刷・刊行されることになった。

## 第2節 調査の体制

### 国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員

鎌木義昌	岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員（1992年2月まで）
水内昌康	元岡山市立桑田中学校校長、岡山県文化財保護審議会委員
角田 茂	元岡山市立岡輝中学校教諭
西川 宏	山陽女子高等学校教諭
高橋 譲	ノートルダム清心女子大学家政学部教授（1992年3月から）
稲田孝司	岡山大学文学部教授
小林博昭	岡山理科大学教養部教授
絹川一徳	岡山大学文学部助手（1995年3月まで）
松木武彦	岡山大学文学部助教授（1995年4月から）

### 平成2年度

岡山県教育委員会	次長（調査第一課長）河本 清
教 育 長	竹内康夫
教育次長	竹本博明
岡山県教育庁文化課	総務課
課 長	課 長 竹原成信
課長代理	課長補佐（総務係長）藤本信康
課長補佐（埋蔵文化財係長）	主 任 平松郁男
	主 任 坂本英幸
伊 藤 晃	調査第一課第二係
主 査	課長補佐（第二係長）下澤公明
岡山県古代吉備文化財センター	文化財保護主任 内藤善史（調査担当）
所 長	主 事 石黒 勉（調査担当）
長瀬日出明	

平成3年度

岡山県教育委員会

教 育 長	竹内康夫
教育次長	森崎岩之助
岡山県教育庁文化課	
課 長	鬼澤佳弘
課長代理	大橋義則
課長補佐（埋蔵文化財係長）	
	柳瀬昭彦
主 査	時長 勇
岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	横山常實
次 長	河本 清

総務課

課 長	藤本信康
課長補佐（総務係長）	小西親男
主 査	平松郁男
主 任	坂本英幸
調査第二課	
課 長	正岡陸夫
第三係	
課長補佐（第三係長）	井上 弘
文化財保護主査	内藤善史(調査担当)
主 事	横山伸一郎
	(調査担当)

平成4年度

岡山県教育委員会

教 育 長	竹内康夫
教育次長	森崎岩之助
岡山県教育庁文化課	
課 長	渡邊淳平
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	
	柳瀬昭彦
主 査	時長 勇
岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	横山常實
次 長	河本 清
文化財保護参事	葛原克人

総務課

課 長	北原 求
課長補佐（総務係長）	小西親男
主 査	石井 茂
主 任	石井善晴
主 任	三宅秀吉
調査第二課	
課 長	正岡陸夫
第三係	
課長補佐（第三係長）	山磨康平
文化財保護主査	内藤善史(調査担当)
文化財保護主査	野上恵司(調査担当)
文化財保護主事	村田秀石(調査担当)

平成6年度

岡山県教育委員会

教 育 長	森崎岩之助
教育次長	岸本憲二
岡山県教育庁文化課	
課 長	大場 淳
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	
	高畠知功

主 任

若林一憲	
岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	河本 清
次 長	葛原克人
総務課	
課 長	丸尾洋幸
課長補佐（総務係長）	杉田卓美
主 査	石井善晴

主任	三宅秀吉	調査第三課	
調査第一課第一係		課長	柳瀬昭彦
文化財保護主任	宇垣匡雅(調査担当)	第二係	
文化財保護主事	山本晋也(調査担当)	係長	江見正己

## 平成7年度

岡山県教育委員会		総務課	
教育長	森崎岩之助	課長	丸尾洋幸
教育次長	岸本憲二	課長補佐(総務係長)	井戸丈二
岡山県教育庁文化課		主査	石井善晴
課長	大場 淳	主任	木山伸一
課長代理	樋本俊二	調査第三課	
参考事	葛原克人	課長	柳瀬昭彦
課長補佐(埋蔵文化財係長)	高畠知功	第二係	
		課長補佐(第二係長)	岡本寛久
主査	若林一憲		(調査・報告書担当)
岡山県古代吉備文化財センター		文化財保護主査	内藤善史(報告書担当)
所長	河本 清	文化財保護主任	三宅勝己
次長	高塚恵明		(調査・報告書担当)

## 平成8年度

岡山県教育委員会		次長	高塚恵明
教育長	森崎岩之助	文化財保護参考事	正岡陸夫
教育次長	黒瀬定生	総務課	
岡山県教育庁文化課		課長	丸尾洋幸
課長	大場 淳	課長補佐(総務係長)	井戸丈二
課長代理	松井英治	主査	木山伸一
参考事	葛原克人	調査第三課	
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 勝	課長	柳瀬昭彦
		第三係	
主査	若林一憲	課長補佐(第三係長)	岡田 博
岡山県古代吉備文化財センター		文化財保護主査	内藤善史(報告書担当)
所長	河本 清		

調査期間中および報告書作成に際し、亀田修一氏(岡山理科大学)をはじめ文化財センター職員の諸氏から貴重なご助言、ご助力をいただきました。また、調査にあたり建設省岡山国道工事事務所をはじめとする関係機関、地元の方々から有形・無形のご援助、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

### 第3節 日誌抄

平成2年度

- 4月1日 浅川古墳群ほか一次調査開始  
 5月2日 浅川古墳群ほか一次調査終了  
 5月7日 高下弥生散布地一次調査開始  
 6月22日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
           高下弥生散布地一次調査終了  
 7月2日 浅川古墳群発掘調査開始  
 7月16日 3号墳調査開始  
 7月28日 2号墳調査開始  
 8月10日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 9月1日 浅川古墳群発掘調査終了  
 9月3日 高下遺跡発掘調査開始  
           工事用道路立会い、表土除去開始  
 9月25日 水路調査区調査開始  
 11月20日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 12月17日 9～13—M・N・O区調査開始  
 1月11日 水路調査区調査終了  
 2月21日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 3月4日 8—J区調査開始  
 3月8日 9～13—M・N・O区調査終了  
 3月31日 8—J区調査終了

平成3年度

- 4月1日 7—J区、8・9—K区調査開始  
 5月9日 10—L(西)区、10—M区調査開始  
 5月22日 8・9—L区、9—M区調査開始  
 7月25日 7—J区、8・9—K区調査終了  
 9月13日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 11月14日 10—L(西)区、10—M区調査終了  
 12月3日 8・9—L区、9—M区調査終了  
 12月4日 9・10—I・J区調査開始  
 1月29日 11—M区、12—L・M区調査開始

1月30日 9・10—I・J区調査終了

- 2月20日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 3月31日 11—M区、12—L・M区調査終了

平成4年度

- 4月1日 付替え用水調査区、10—K・L(東)  
           区、11・12—K・L区調査開始  
 5月12日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 5月29日 付替え用水調査区調査終了  
 10月21日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 10月31日 10—K・L(東)区、11・12—K・  
           L区調査終了、高下遺跡発掘調査終  
           了

平成6年度

- 4月1日 椎原古墳発掘調査開始  
 4月8日 墳丘測量開始  
 5月2日 墳丘測量終了  
 4月14日 1号墳調査開始  
 5月2日 7号墳調査開始  
 5月27日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 6月7日 調査区全景空中撮影  
 7月14日 1号墳調査終了  
 7月18日 7号墳調査終了  
 7月31日 椎原古墳発掘調査終了

平成7年度

- 4月1日 根岸古墳発掘調査開始  
 4月17日 石室内掘り下げ開始  
 6月26日 埋蔵文化財保護対策委員会開催  
 6月27日 石室内調査終了  
 6月30日 根岸古墳発掘調査終了

平成8年度

- 2月24日 埋蔵文化財保護対策委員会開催

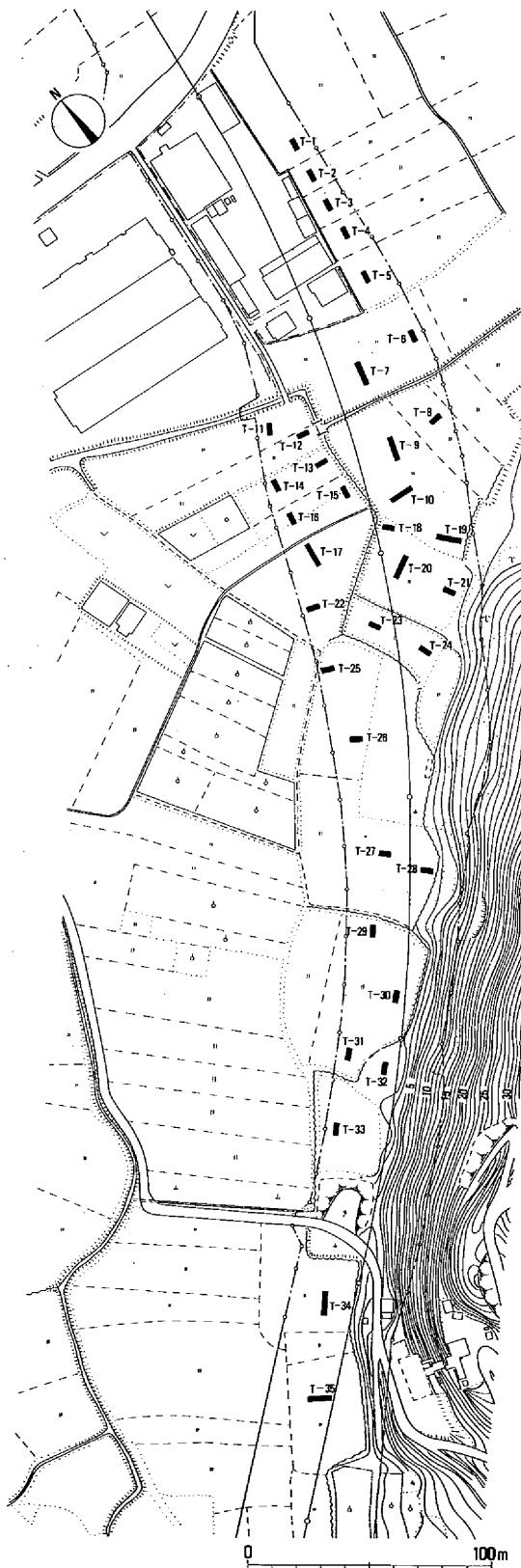
## 第3章 高下遺跡

### 第1節 調査の経過

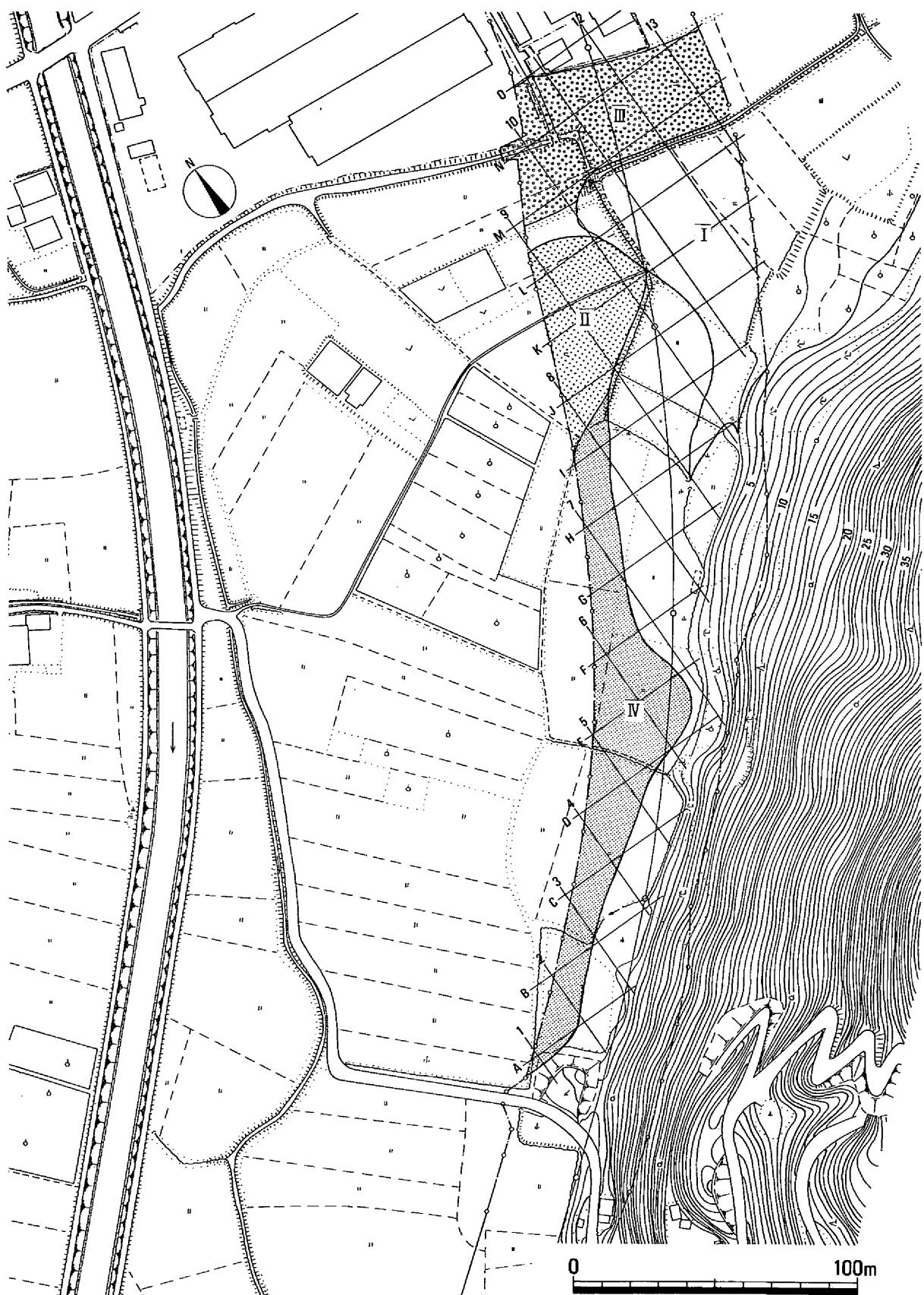
岡山市東部の県道西大寺・山陽線の東側、県道飯井・宿線の南側で吉井川右岸に、独立丘陵がある。その独立丘陵上には、吉井川を見下ろす東端部に王子ノ鼻古墳群が、その西には北ノ房古墳群が所在する。また、南斜面には、銅鐸の出土した百枝月西畠遺跡が知られている。しかし、北西側裾部の竹原地内では、畠の耕作土中から弥生土器が採集されているものの、遺跡の実態等についてはまったく不明であった。岡山バイパスは、この独立丘陵の北西裾部に計画されているため、平成2年5月から6月にかけて遺跡の掌握を目的として一次調査を実施した。調査は、路線内に36本のトレンチを設定して行った。

調査の結果、県道飯井・宿線から100m南までのT-1～5では、遺構・遺物ともまったく見られなかった。また、同県道から450m以南のT-34・35においても遺跡の広がりは認められず、遺構や遺物などが確認されたのは、その間のT-6～33においてである。丘陵裾部の水田や畠などとして使われていたところで、12,000m<sup>2</sup>が路線内に含まれる。このうち、T-6・7は、中世の水田のみが(Ⅲ)、T-25～33では、中世の溝が検出され、包含層から中世以降の遺物が僅かに出土しているのみである(Ⅳ)。一方、T-8～10・T-18～21にかけては、弥生時代中期から古墳時代初頭の遺構が検出され(Ⅰ)、遺物も多く出土している。また、T-13～17・22にかけてからは、古墳時代から古代・中世の遺構・遺物が確認されている(Ⅱ)。

これら一次調査の結果をもとに、平成2年9月から平成4年10月まで、発掘調査を実施した。



第1図 一次調査トレンチ配置図 (1/3,000)



第2図 遺跡分布および調査グリッド図 (1/2,000)

## 第2節 調査の概要

一次調査の結果に基づく調査の対象範囲は、検出された遺構の密度に濃淡があるものの、 $12,000\text{m}^2$ におよんでいる。このため、路線内の遺跡全体に、20mごとに調査杭による区分けを行い調査を実施した。調査杭の名称は、南から北に向かいA・B・C…、西から東へ1・2・3…とし、各グリッドの北西の杭名を調査区名とした。調査杭は、国土地理院第5座標系の南北軸座標値（X=−146.100m）をCライン、東西軸座標（Y=−249.00m）を1ラインとして区域割りを設定した。

なお、本報告書における遺構などの説明に際し、中世水田が確認された10—O区から13—M区の北半部をⅢ区、中世の溝などが検出された7・8—J区から1—A区をⅣ区、弥生時代から古墳時代の遺構が検出された10—M区から9・10—I区をⅠ区、古墳時代から古代・中世の遺構が検出された8・9—M区の南部から7・8—J区の北部をⅡ区とする区分けを併用している。

発掘調査は、工事工程の関係から、西側用地境の側溝部分を南から先行し、次いでⅢ区の調査を実施した。その後、Ⅱ区の調査に入り、最後にⅠ区に着手した。

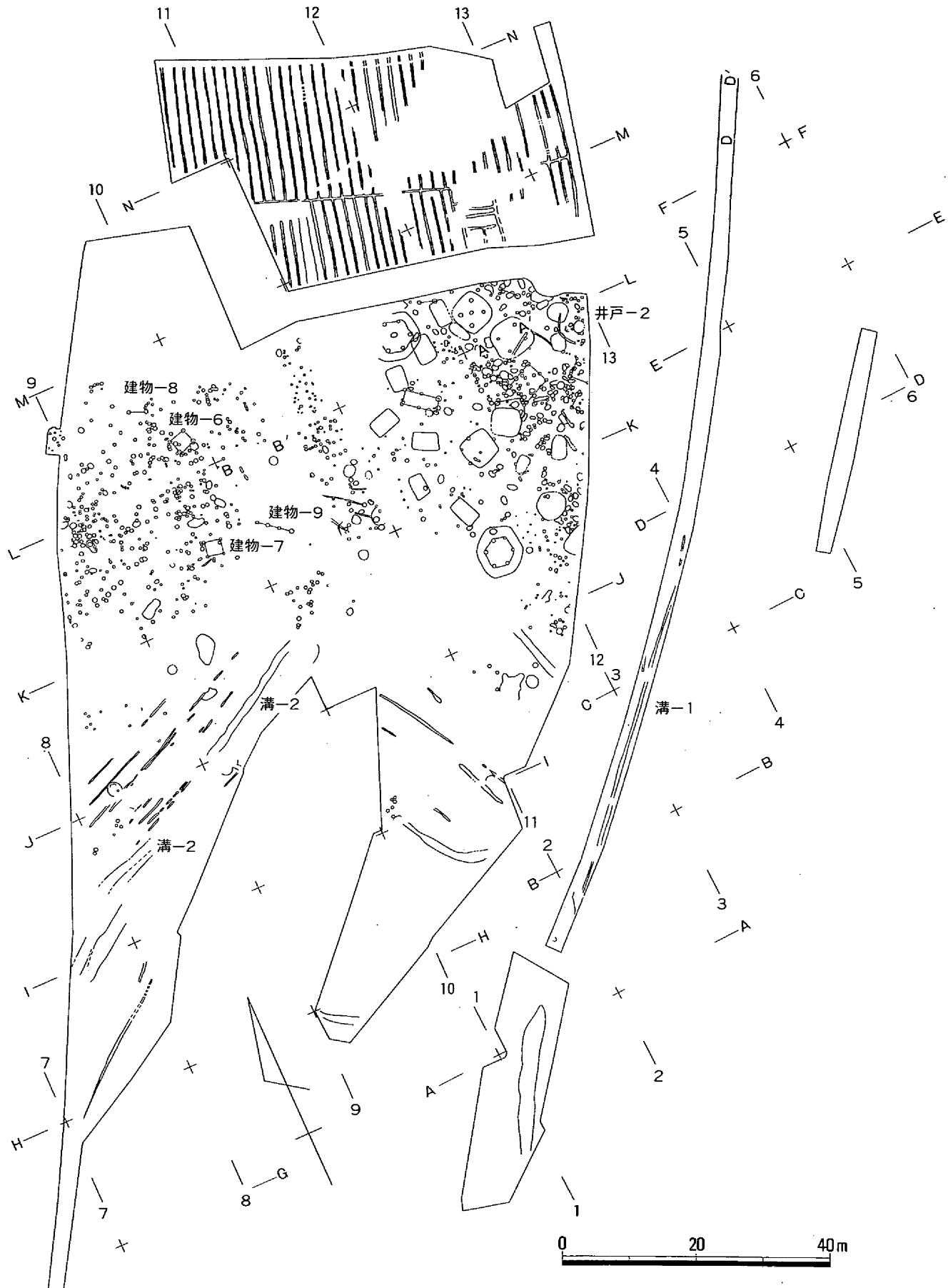
発掘調査の結果、Ⅳ区については側溝の調査区において中世の溝が検出されたものの、それ以外には出土遺物がほとんど認められず、4—D区から5—E区にかけて設定したトレンチからも遺構などが全く検出されなかつたため、側溝部分を中心とした調査で発掘調査を終了した。

Ⅲ区では、10—O区から13—M区にかけて中世水田の畦畔が全面において検出されたものも、それ以外の遺構は認められなかつた。なお、南西部の9・10—I区に水田は広がっていない。

Ⅱ区では、南部のKライン以南において、一部Ⅳ区において検出されている溝に関連しているとみられる溝や溝状遺構など主として中世の遺構が検出されている。また、Kライン以北では、中世遺構の下層から、同一の検出面において、古墳時代後期から奈良・平安時代の土器を伴う柱穴・土壙・土器溜りなどの遺構が数多く検出されている。さらに、包含層からは古墳時代中頃の土器を中心に多量の土器が出土している。なお、柱穴は柱痕跡の遺存しているものが数多くみられるが、建物として纏めることができたのは3軒のみである。Ⅱ区の北側は基盤層が高く、後世の削平を受けて遺構・遺物とも遺存していなかつた。

最も多くの遺構が検出されたのはⅠ区である。弥生時代中期後半と古墳時代初頭の二時期の遺構を中心として、弥生時代中期中葉から中世にかけて多種多様な遺構が検出されている。弥生時代中期後半の遺構としては、竪穴住居4棟を中心に竪穴遺構・建物・土壙などの遺構が検出され、微高地の下がり部分には、土器の斜面堆積が認められた。また古墳時代初頭の遺構としては、六角形の竪穴住居2棟をはじめ、建物・井戸・土壙・土器溜りなどが検出され、微高地の下がりに形成されている斜面堆積からは、大量の土器が出土している。なお、古墳時代初頭の斜面堆積の上面には、初期須恵器をはじめとする、古墳時代中期の溜りが確認された。

出土遺物としては、古墳時代初頭の斜面堆積から大量の土器が出土したのをはじめ、弥生時代中期中葉から中・近世まで、多量の土器がある。このほか、弥生時代中期の遺構を中心とし、石庖丁・石鎌などの石器・石製品も大量に出土している。また、古墳時代初頭の遺構からは、鏃などの鉄製品のほか、土錘や石錘が非常に多く出土し、製塩土器も多く認められた。なお、古墳時代の包含層中などからは、管玉・有孔円板や土製勾玉などが出土している。



第3図 主要遺構配置図 (1/800)

### 基本土層

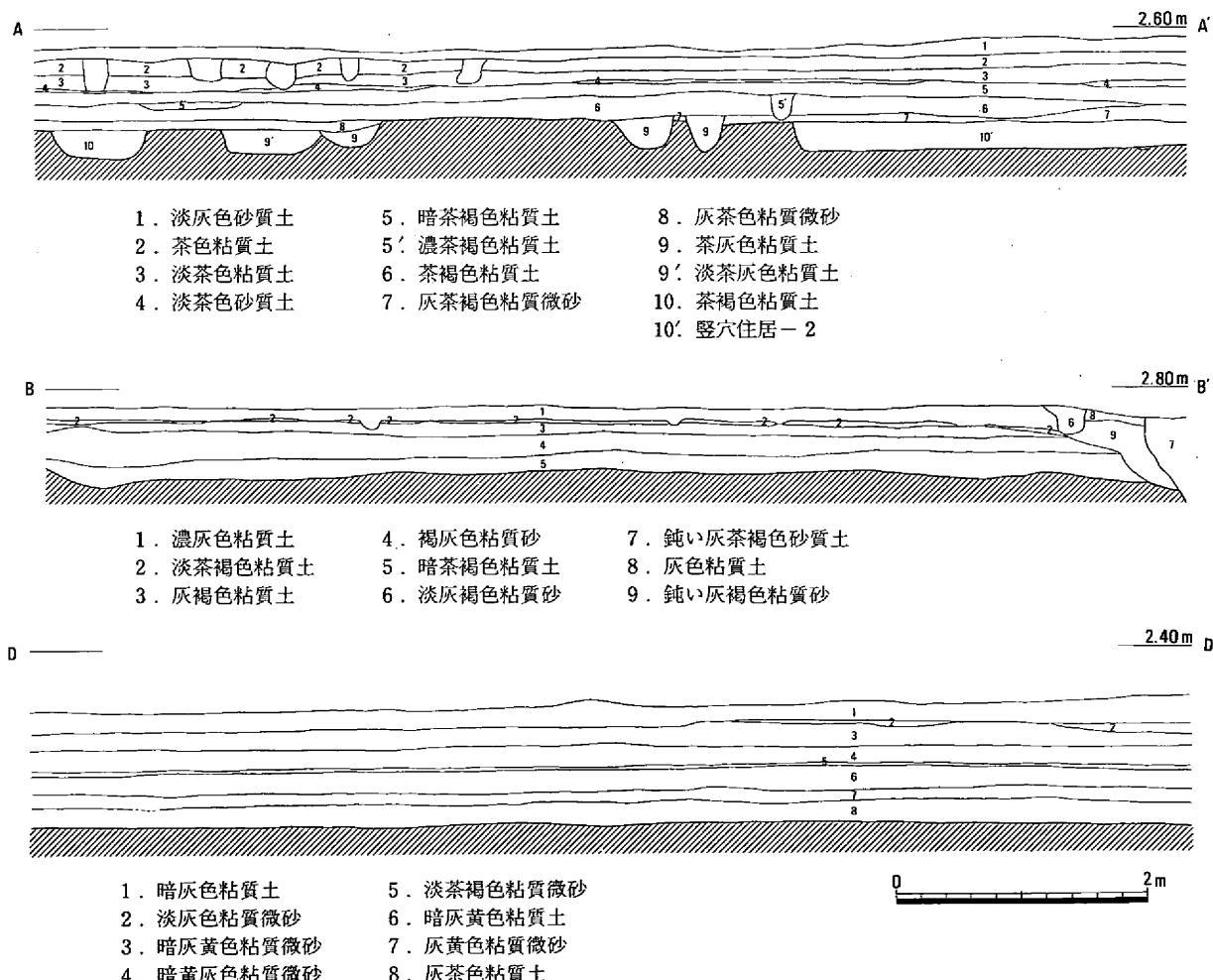
高下遺跡は、広範囲におよぶ遺跡であり、それぞれの地点で土層堆積状況は、若干異なっている。

I区（A—A'）では、1層淡灰色砂質土の水田耕作土の下に、床土の2層茶灰色粘質土と3層淡茶色粘質土が堆積している。5層の暗茶灰色粘質土は、古墳時代初頭の包含層で、その上に部分的に堆積している4層の淡茶色砂質土は、中世の包含層とみられる。6層および7層は、弥生時代後期の包含層で、基盤層は、暗黄褐色粘質微砂である。なお、古墳時代初頭の遺構埋土には、暗茶褐色粘質土が、弥生時代中期の遺構埋土には、茶灰褐色粘質微砂が多く埋積している。

II区（B—B'）では、1層濃灰色粘質土の水田耕作土の下に、淡茶褐色粘質土の床土が堆積し、3層の灰褐色粘質微砂がその下に堆積している。これは、古代から中世の包含層と推定できる。4層の褐灰色粘質微砂は、古墳時代の包含層、5層の暗茶褐色粘質土は、古墳時代前期の包含層である。この5層の包含層からは、比較的多くの土器が出土している。また、包含層中に炭・焼土が含まれている。

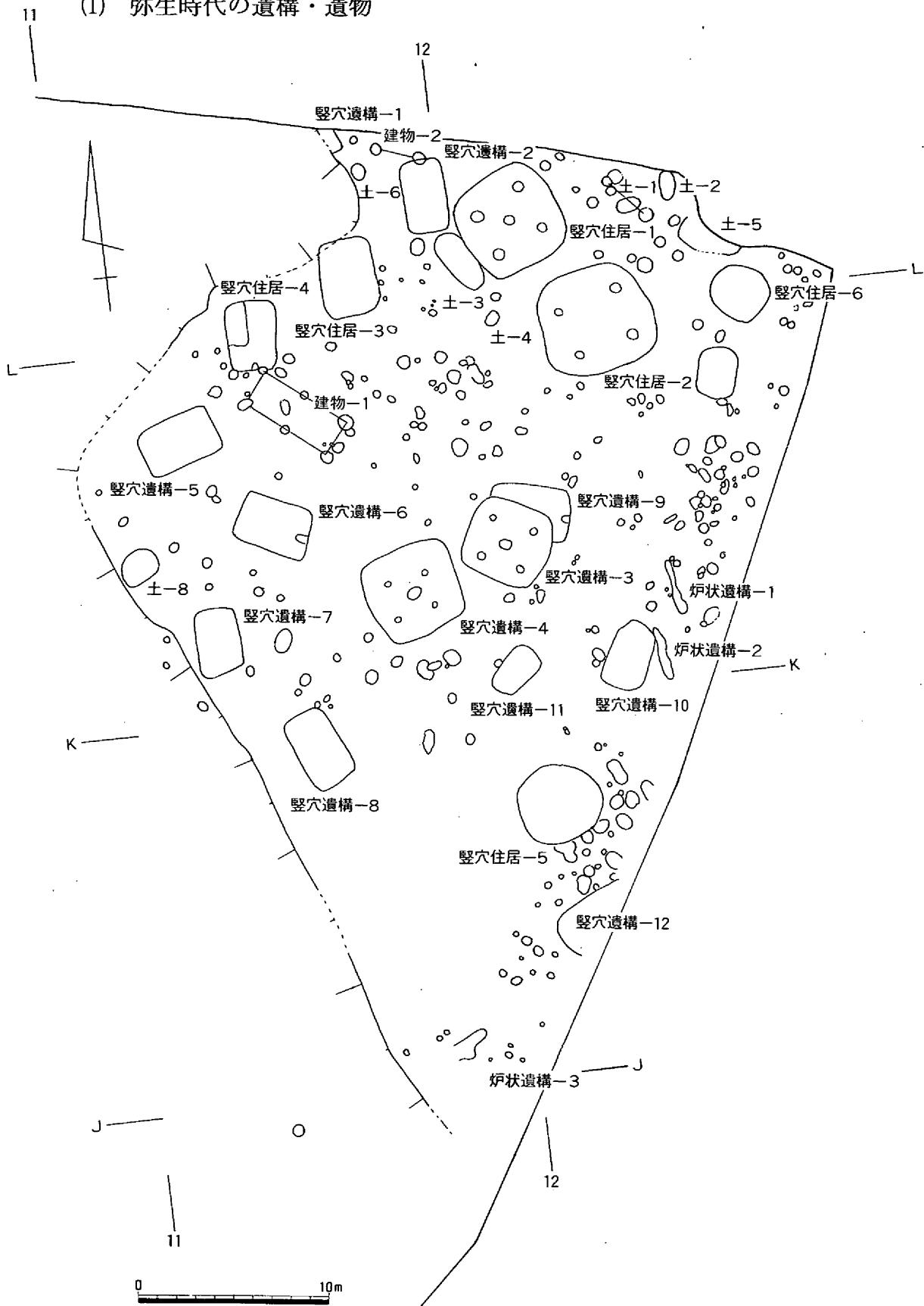
III区は、中世水田が検出されている地区である。具体的土層堆積については、後述する。

IV区（D—D'）では、1層の暗青灰色土の水田耕作土の下に、2層の明黄褐色土の床土が堆積している。3～5層は、近世以降の水田堆積層とみられ、6層の暗灰褐色粘質土は、中世の包含層である。7層の淡灰褐色微砂は、基盤層（中世）と考えられ、その下に堆積している8層は、青灰色粘質土で次第に砂っぽくなっている。



第4図 基本土層断面図 (1/60)

(1) 弥生時代の遺構・遺物



第5図 弥生時代遺構配置図 (1/300)

## 1. 壊穴住居

### 壊穴住居-1 (第6~8図、図版1-3)

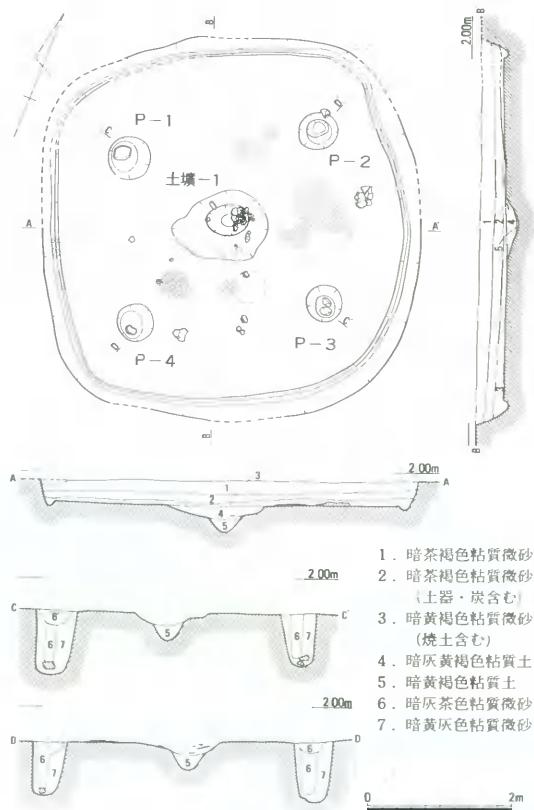
12-M区の南西部、壊穴住居-2の北西1.5mにおいて検出された遺構である。検出された平面形は、一辺5m程の隅丸方形を呈し、床面までの深さは約40cmである。壁面に沿って幅約10cm・深さ5cm程の壁体溝が巡る。覆土は、上層に暗茶褐色粘質微砂が、床面直上には暗黄褐色粘質微砂が堆積している。床面の数か所と西側の壁体溝などに焼土が認められる。中央部には緩やかな窪みがあり、その中心に60×45cm・深さ25cm程の土壤がある。柱穴は4本あり、径50~60cm・深さ75~90cmを測る。埋土は暗黄灰色粘質微砂で、いずれも暗灰茶色粘質微砂の柱痕が遺存している。P-1・3・4の底には、柱痕の下に柱の沈下を防ぐため、拳大の石が置かれていた。

遺物は、中央の窪みおよび床面直上と第2層から出土している。なお、中央窪みの南側からは、小チップ (14.7g) がまとめて出土したのをはじめ、サヌカイト片の総量は184gにおよぶ。

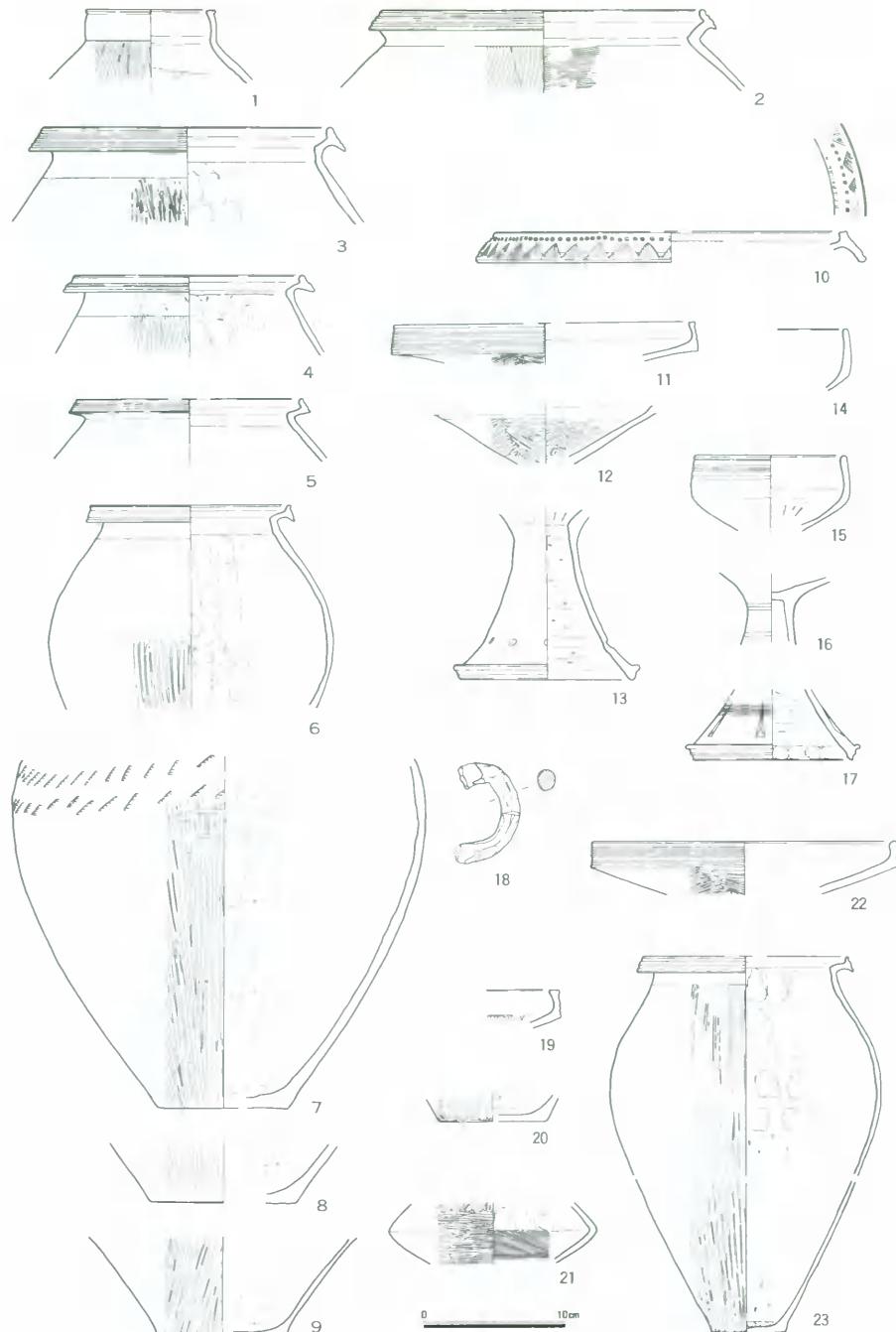
第7図はいずれも土器である。1は口縁部が上方に立ち上がる直口壺である。2~6は甕形土器の口縁で、折れ曲がって外反した

口縁端部が斜め上方および上・下に肥厚し、拡張した端面に凹線がめぐっている。7~9は甕形土器の底部片である。10は飾り高杯の口縁部片であるが細片で口径は推定である。拡張した端面に鋸歯紋および竹管文が巡っている。11~13は高杯形土器で接合することはできなかつたが、同一個体の可能性がある。上方に折り曲げた口縁外面に凹線が巡り、杯部は丁寧にヘラミガキされている。脚部内面は横方向にヘラケズリされ、裾部に貫通しない円孔が巡っている。14~17も高杯形土器で17の脚裾部には、貫通しない三角形の透かしが切り込まれている。18は把手付土器の把手片である。19~23はいずれも中央の窪みから出土した土器で23は接合することはできなかつたが、図上復元しているものである。

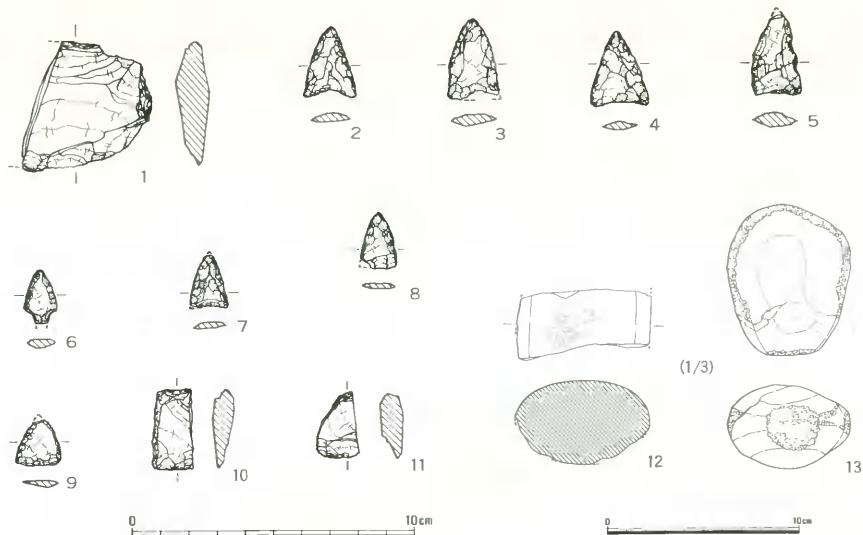
拡張した口縁端面に凹線が巡



第6図 壊穴住居-1 (1/80)



第7図 積穴住居-1出土遺物 (1) (1/4)



第8図 壇穴住居-1出土遺物（2）(1/2・1/3)

り、体部は中央より少し上方で最大径を測る。外面は縦方向にヘラミガキされ、内面は下半がヘラケズリ、上半は指ナデにより調整されている。

第8図は、壇穴住居-1から出土した石器である。1～11はいずれもサヌカイト製で、1はスクリイパー片、2～9は石鎌10・11は楔形石器である。2・4は完形でそれぞれ1.1g・1.3gを測る。3・8は下端の一部を欠いているが、それぞれ1.9g・0.5gを量る。また、5・7・9は上端および下端の一部を欠いているが、それぞれ2.3g・0.6g・0.7gを量る。6は基部の一部を欠くが、0.6gを量る。12は折れた大型蛤刃石斧を転用し、敲き石にしているもので、石材は砂岩である。13は花崗岩でつくられた敲き石である。

これらの出土遺物の状況などからこの壇穴住居では、契形石器はそれほど多くないが、床面に非常に多くのチップ片が認められることから何らかの加工作業が行なわれたものと考えられる。

時期は出土遺物などから弥生時代中期後半である。

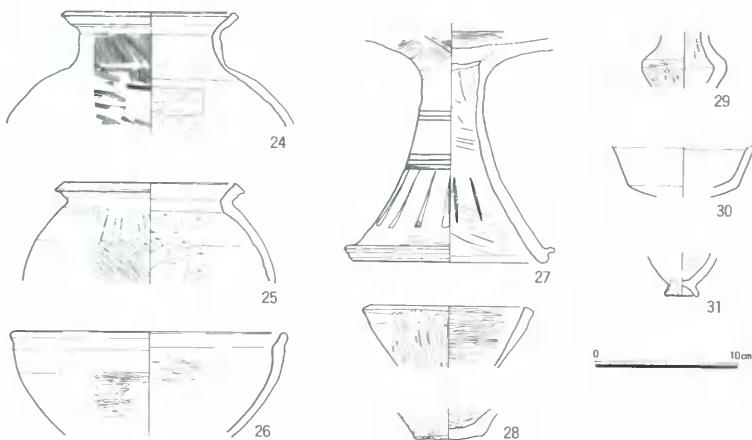
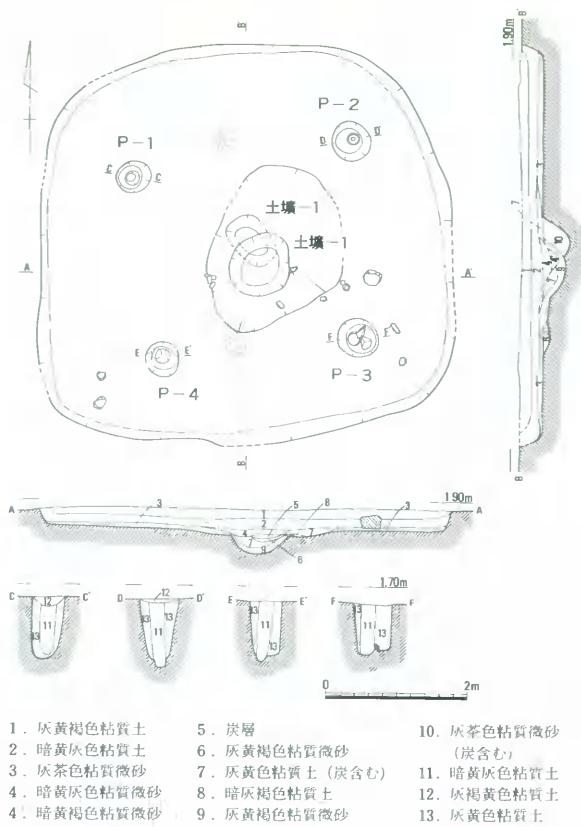
#### 壇穴住居-2（第9～10図）

12-L区の北部、壇穴住居-1の南東1.5mにおいて検出された遺構である。検出された平面形は、北辺5.5m程の隅丸方形形状を呈するが、北辺より南辺がやや長い台形である。床面までの深さは約35cmで、覆土は、第1層に灰黄褐色粘質土が、第2層に暗黃灰色粘質土が、第3層灰茶色粘質微砂が堆積している。中央部には緩やかな窪みがあり、その中央に120×140cm、深さ35cm程の土壙がある。なお、この土壙は、80×50cm、深さ40cm程の土壙を切っている。柱穴は4本あり、径45～60cm・深さ75～90cmを測る。埋土は灰黄色粘質土で、いずれも暗黃灰色粘質土の柱痕跡が認められ、P-2には柱根が遺存している。また、P-3の底には、柱の沈下を防ぐための石が遺存している。床面の一部には、焼上面が認められた。

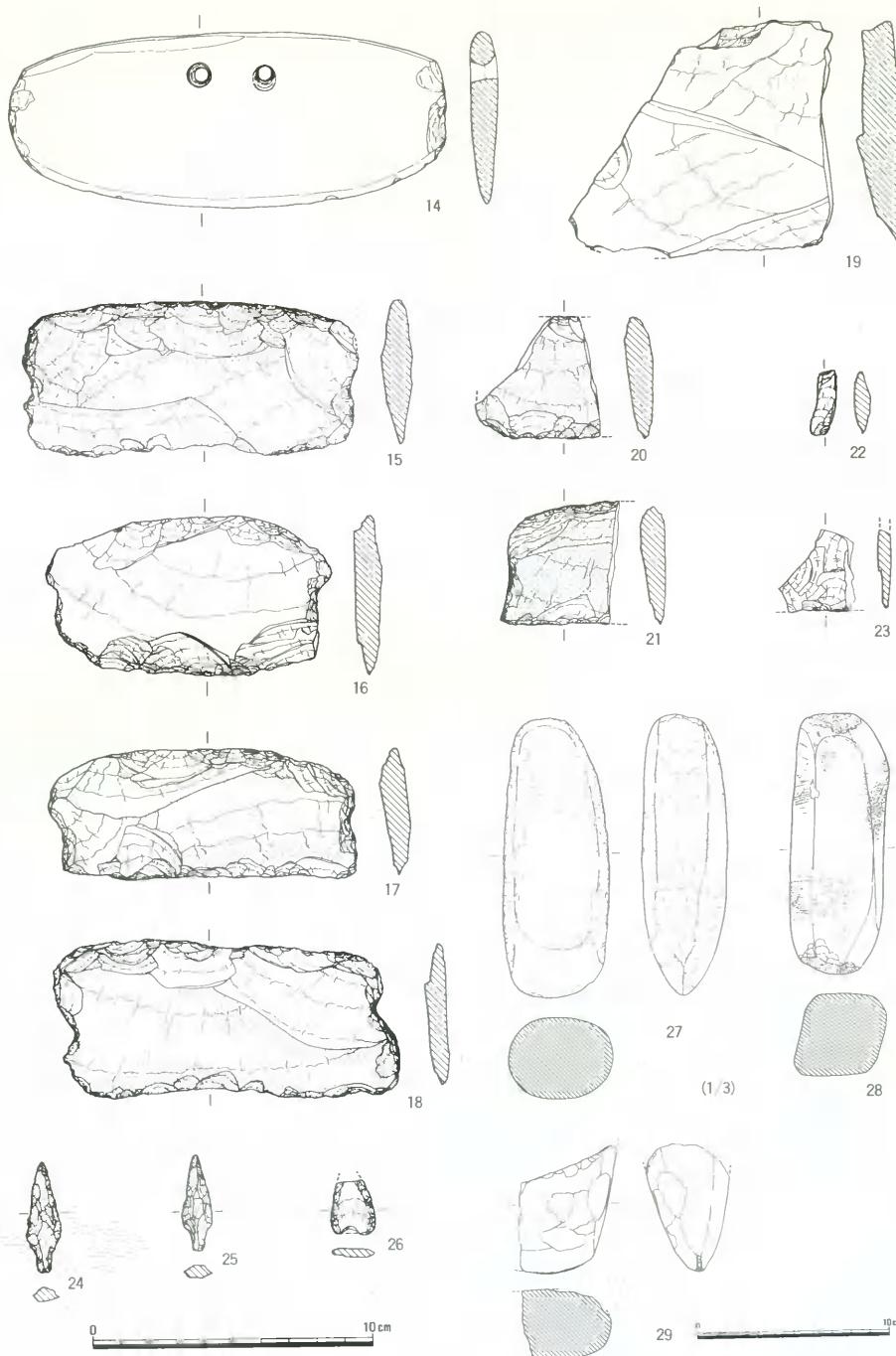
遺物は、いずれも床面を中心に出土している。第9図の遺物は土器で、24は外面をハケメ調整している壺形土器である。27は高杯形土器の脚部片で、螺旋状に巡るヘラ描きの沈線が二段あり、裾部に

は三角形の透かしが、切り込まれている。

第10図はいずれも石器である。このうち14~17は中央部の窪みの西肩部に重ねて置かれていた石庖丁である。14はほぼ床面に接しており、その上に15・16が、一番上に17が置かれている。14は蛇紋岩製の磨製であるが、ほかはサヌカイト製の打製である。いずれもほぼ完存しているもので、使用痕が認められる。重さは14が160.6g、15が94.3g、16が78.8g、17が81.3gを量る。また、18は中央部の窪みの南肩部にから出土したサヌカイト製の石庖丁で、ほぼ完存している。使用痕が認められ、重さは75.3gを量る。20~23は覆土中から出土したサヌカイト製の石器である。20・21は石庖丁片で、使用痕が認められる。22は楔形



第9図 積穴住居-2 (1/80)・出土遺物 (1) (1/4)

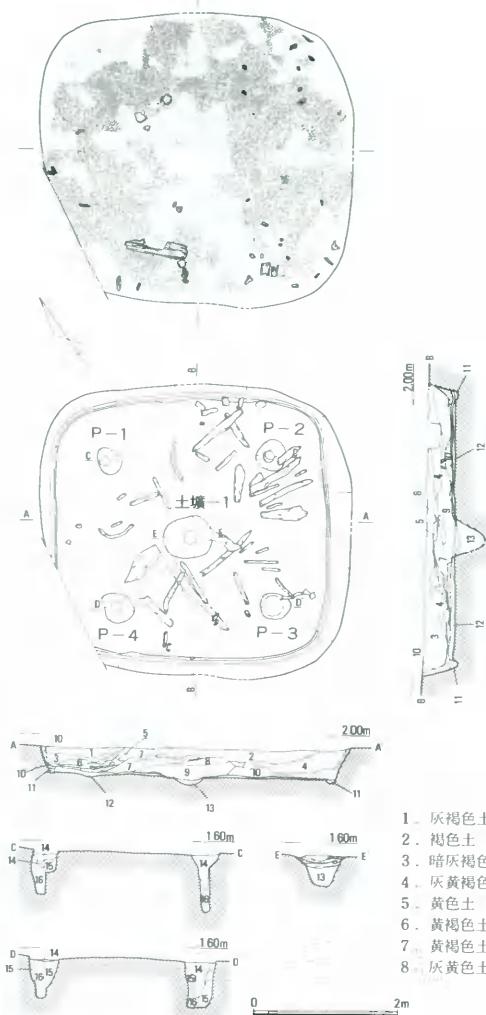


第10図 積穴住居-2出土遺物(2)(1/2・1/3)

石器、23はスクレイパー片である。24・25は床面から出土したサヌカイト製の石鏃である。いずれもほぼ完存しているもので、重さは24が1.6g・25が1.2gを量る。26は覆土中から出土したサヌカイト製の石鏃で、先端部を欠いている。27はP-3のすぐ東側の床面から出土した太型蛤刃石斧である。ほぼ完存しているものであるが、側部などに敲打痕が認められる。長さ14.9cm・重さ578.6gで、材質は閃綠岩である。28は覆土中から出土した敲石で、長さ13.9cmを測る。両端に敲打痕が集中し、側面の一部には擦痕が認められる。重さ572.1gで、閃綠岩が使用されている。29は覆土中から出土した太型蛤刃石斧の刃部先端の小破片で、材質は安山岩である。このほか覆土中などから、37.3gにおよぶサヌカイトチップや剝片が出土している。楔形石器の出土は多くないが、木器などの加工が行なわれていたものと考えられる。なお、一括して出土している石庖丁は、使用中のものの収納状況を示しており、この時期完全には打製に移行せず、磨製の石庖丁が併用されていたものと考えられる。時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

### 竪穴住居-3 (第11・12図、巻頭図版1-2)

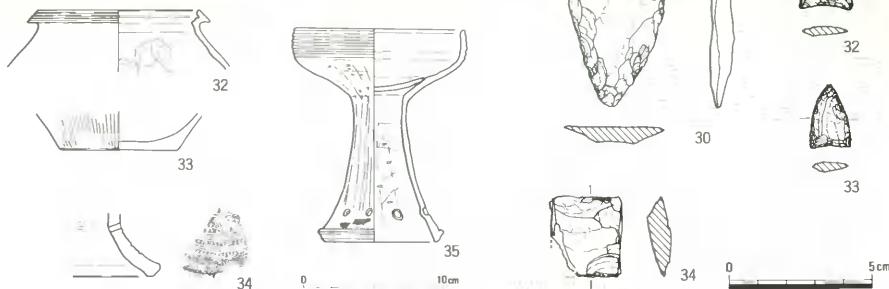
12-L区の西端部において検出された遺構である。竪穴住居-4のすぐ東側に位置し、竪穴遺構-9を切っている。検出された平面形は、一辺4.3m程の隅丸方形を呈し、方位は約45度東に振っている。検出面から床面までは40cm前後あり、炭化材・灰・焼土などで、覆われている。周囲に壁体溝が巡り、中央では70×55cm・深さ45cm程の土壙が検出された。主柱穴は4本あり、径40cm程の円形で、床面からの深さは、60~80cmを測る。床面上に遺存していた炭化材は、径10cm前後のもの



第11図 竪穴住居-3 (1/80)

が中央部から放射状に検出されている。これらの炭化材の上面を、灰および焼土塊が厚く覆っている。

出土遺物としては、土器および石器が若干認められているが、あまり多くない。32・33は甕形土器の細片、33・35は高杯形土器である。35はほぼ完形の土器



第12図 積穴住居-3出土遺物 (1/4・1/2)

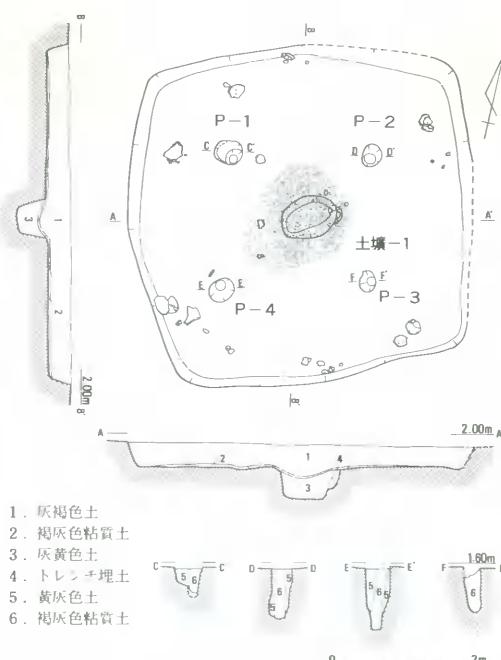
で口径11.8cm・器高15.2cmを測り、上方に立ち上がる杯部の口縁外面には5条の凹線がめぐる。脚裾部には8個の円孔が一段巡っているが、いずれも貫通していない。石器はいずれもサヌカイト製で、30は石槍、31～33は石鎌、34は楔形石器とみられる。31・32は先端部を、34も一部が欠けている。重量は、30が30.9g、31～33がいずれも1.2g、34が7.8gを測る。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

#### 積穴住居-4 (第13～16図)

11-L区の南東部において検出された遺構で、積穴住居-3のすぐ西に位置している。双方の積穴住居は非常に接しており、互いの壁までは60cm離れているのみである。また、遺構の方位も異なり、同時期には存在しなかったものである。検出された平面形は、一辺4.5m前後の隅丸方形を呈し、床面までの深さは約40cmである。中央に80×60cm、深さ40cmほどの土壤があり、周囲は焼土に覆われている。埋土は、灰褐色土が一層である。柱穴は4本あり、径30～40cm・深さ50～90cmを測る。

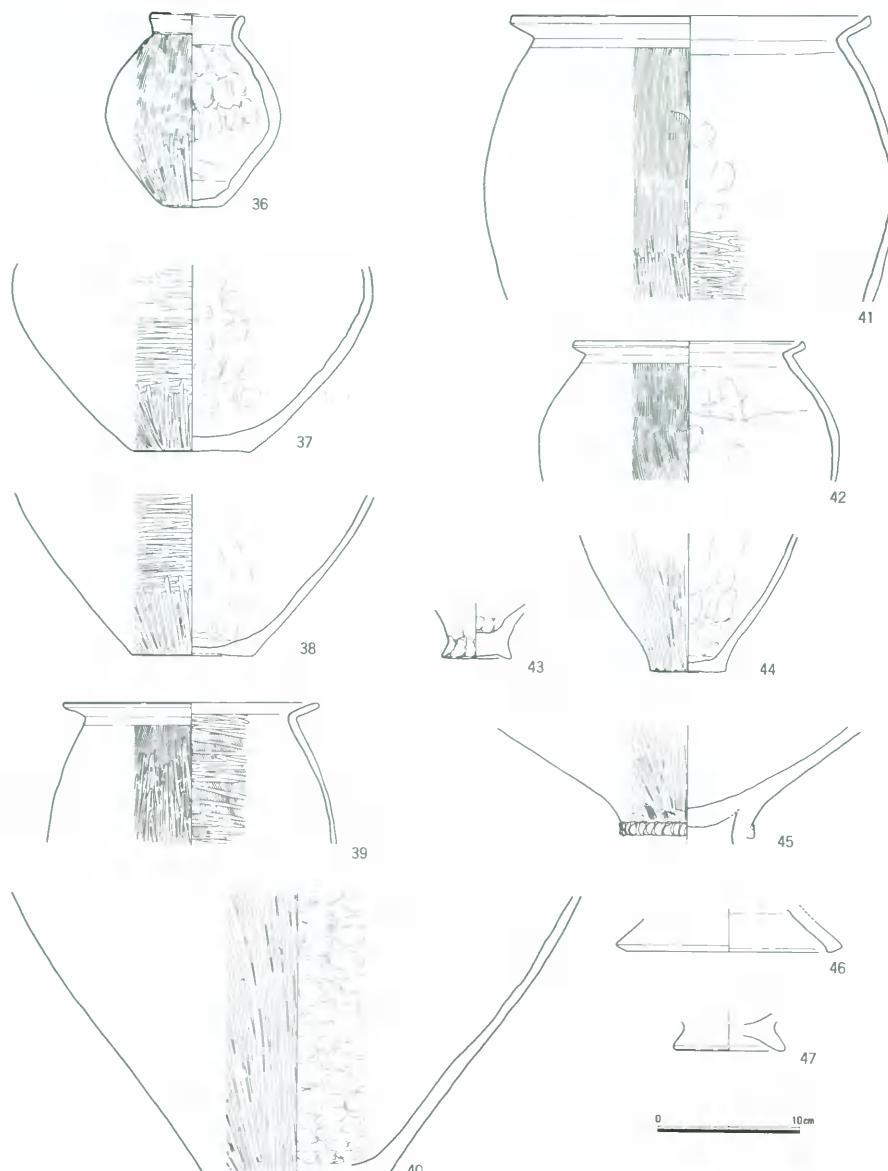
出土遺物としては、土器片のほか、床面上には非常に多くの石器およびサ



第13図 積穴住居-4 (1/80)

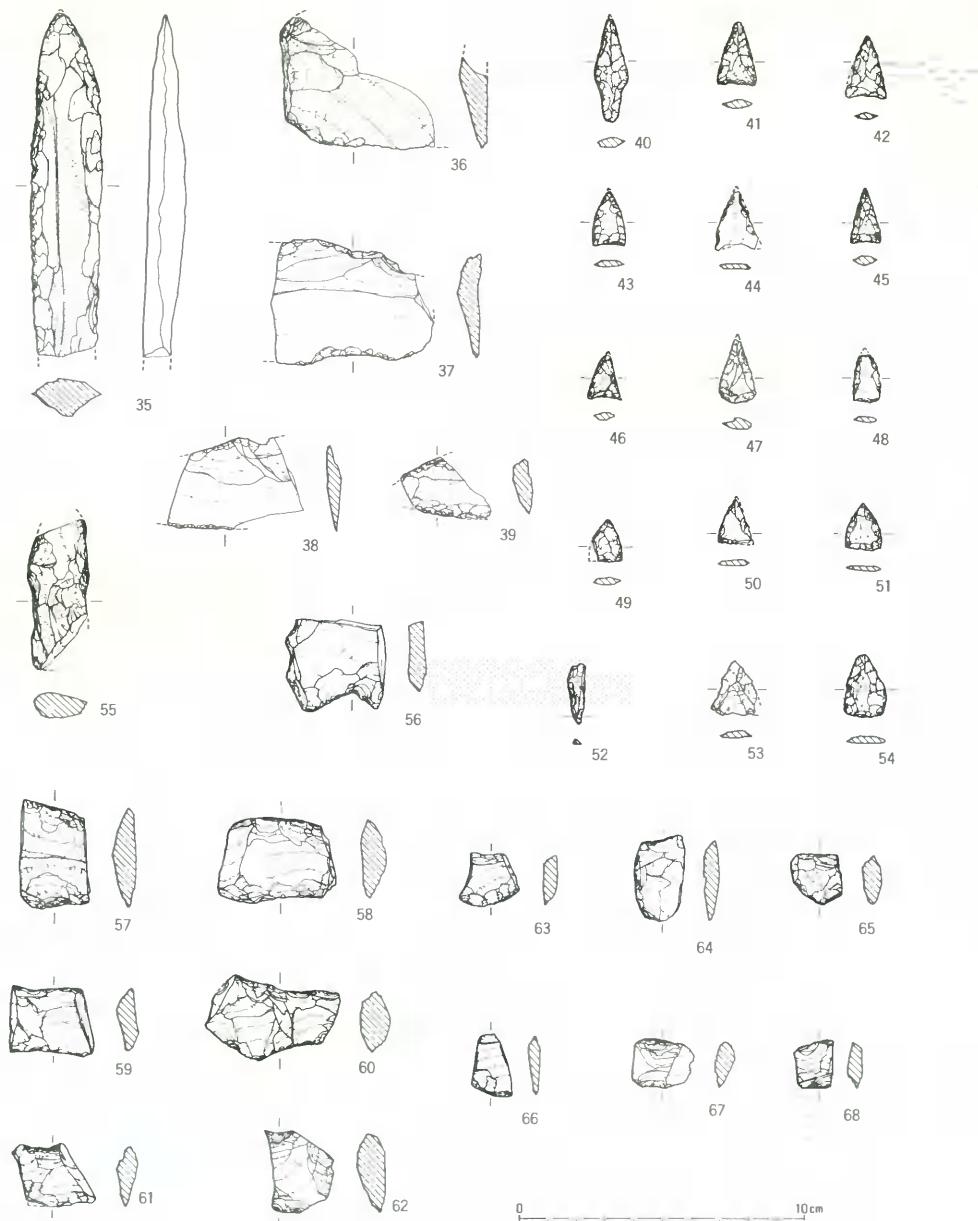
ヌカイトチップがある。第14図はいずれも土器で、36は復元器高13.3cm程の 小形壺形土器である。胎土は砂粒を含み暗茶褐色を呈する。37・38は壺形土器の底部である。39～44は甕形土器、45は高杯形土器の杯部下半、46は脚据部片である。また、47は台部のみの小片である。

第15図はいずれもサヌカイト製の石器である。35は石槍で基部が欠けているが、両面に刃が付き、重さは45.4gである。36は石包丁の小片で23.1gを測る。37～39はスクレイパー片で、下部に両面刃



第14図 壇穴住居-4出土遺物(1) (1/4)

が付けられている。重さはそれぞれ21.9g・9.4g・4.1gを測る。40は石鎌で、40は有茎タイプである。一部欠損しているものもみられるが、重さは40が1.2g、41が0.7g、42が0.6g、43～45が0.5g、47が1.0g、46・48・49・51が0.4g、50が0.3gである。なお、52は石錐で0.4gを量る。



第15図 積穴住居-4出土遺物(2)(1/2)

55は尖頭器の未製品、56はノッチドスクレイパーで、重さはそれぞれ、11.1g・10.2gを量る。57～68はいずれも楔形石器である。57は石包丁を転用したもので、重さは6.8gを量る。58～60は比較的大きなもので、重さはそれぞれ12.6g・14.4g・14.5gを量る。63～68は小形で、1.6～3.7gを量る。

第16図の69は大型蛤刃石斧を転用し、敲石したもので材質は花崗斑岩、重さ695.2gを、70は閃緑岩製の大型蛤刃石斧で510.9gを測る。この堅穴住居から

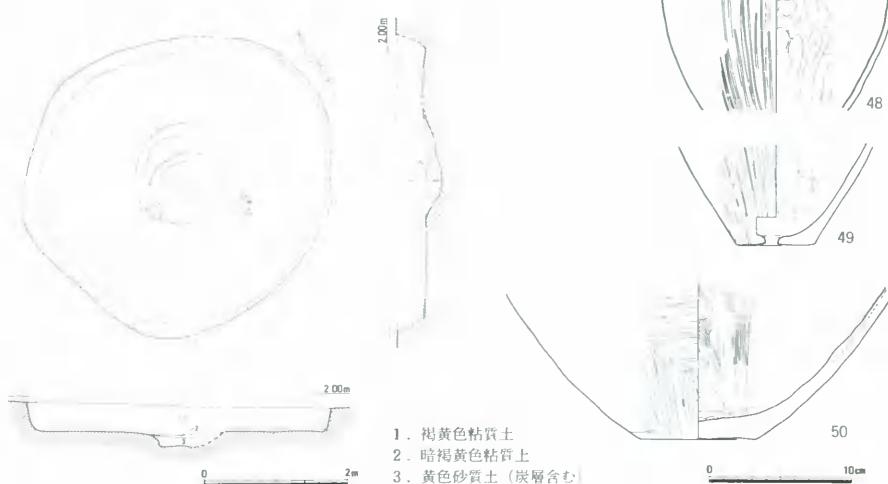
は総量973g以上におよぶ多量のサヌカイトのチップや石器の未製品などが出土している。

これらの遺物の出土状況から、この堅穴住居では何らかの作業が行なわれていたことが推定される。多くの石鏃等の出土は、石器の工房が考えられなくもないが、楔形石器の出土の多さなどから木器の加工が行なわれていたのではないかと推察される。

時期は、出土遺物等から弥生時代中期後半と考えられる。

#### 堅穴住居-5（第17図）

12-K区の北西部において検出された、径4.2m前後の円に近い平面形を呈している堅穴住居状の遺構である。堅穴遺構-12から3m北に位置している。柱穴は検出されていないが、中央に120×140cmで深さ20cm程の土壌がある。床面はほぼ平坦で、検出面から34cm前後を測る。埋土は、褐黄色粘質土が一層である。



第17図 堅穴住居-5 (1/80)・出土遺物 (1/4)

遺物としては、若干の土器片が出土している。48・49は甕形土器で、黄灰褐色を呈し、同一個体の可能性もある。底部は、焼成後に穿孔されている。

この遺構は、柱穴がなく竪穴住居か否か判然としないが、規模や状況などから可能性はある。

時期は、遺物などから弥生時代中期後半と見られる。

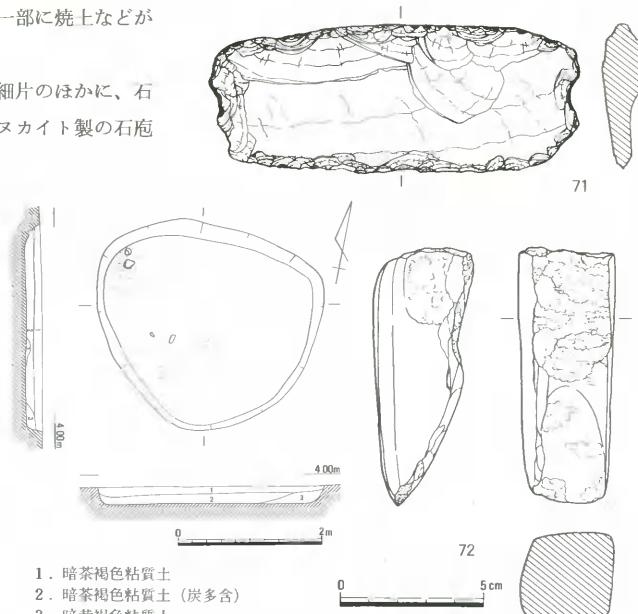
#### 竪穴住居-6（第18図）

12-L区の北東部において検出された、不整円に近い平面形を呈した竪穴住居状の遺構である。径は、3m前後で、深さは22cm程を測り、床面はほぼ平坦である。床面の一部に焼上などがみられるが、柱穴はない。

遺物は、床面から土器の細片のはかに、石器が出土している。71はサヌカイト製の石庖丁で、重さは108.1gを量る。72はかなり短くなっているものの、柱状片刃石斧で、材質は流紋岩（溶岩）である。重さは160.9gを量る。

この遺構は、規模が小さく柱穴などもないが、遺物の出土状況などから竪穴住居と同様の遺構と考えられる。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半と考えられる。

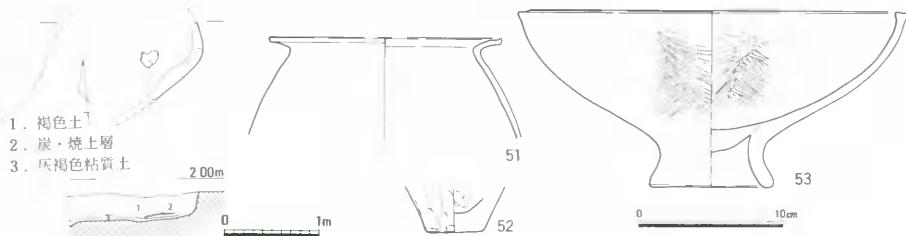


第18図 竪穴住居-6 (1/80)・出土遺物 (1/2)

## 2. 竪穴遺構

#### 竪穴遺構-1（第19図）

11-M区の北部において検出された遺構であるが、西側を竪穴住居-7に、北側を古墳時代初頭の下がりおよび現代の水路により切られているため、東側の角部分が僅かに検出されたのみで、全体の



第19図 竪穴遺構-1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

状況については、推定するのみであるが、堅穴住居あるいは堅穴遺構の一部と見られる。床面はほぼ平坦で深さは20cm程を測る。埋土は褐色土が埋積し、床面直上は灰褐色粘質土である。

床面から若干の土器が出土している。51・52は甕形土器片である。53は高杯形土器で口径16.0cm・器高12.0cmを測り、杯部外面はヘラミガキされている。砂粒を含む胎上で暗赤褐色を呈する。

時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と考えられ、今回高下遺跡において検出された遺構の中で最も古いもののである。

#### 堅穴遺構-2（第20図）

11-M区の東端において検出された遺構で、堅穴住居-1の西角にほぼ接して検出されている。長軸はほぼ南-北方向で、規模は長辺3.8m・短辺2.3mで隅丸長方形を呈する。検出面から床面までは30cm前後を測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、床面の中央やや北側に径80cm・深さ10cm程の浅い窪み状を呈する土壤があり、この土壤を中心に焼土および炭化材が認められる。埋土は上層に褐色土が、下層に暗灰黄色粘質微砂が埋積している。

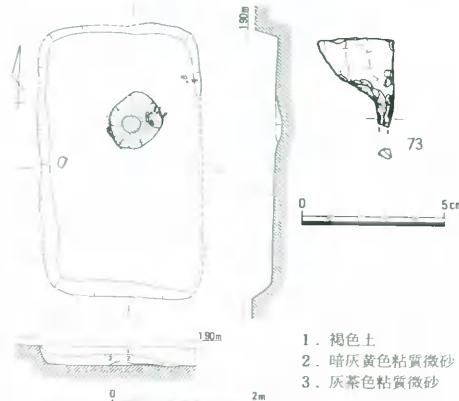
遺物としては、床面から甕形土器の細片などの土器が出土しているが、図示できるものはなかった。

73は覆土中から出土しているサヌカイト製の石錐である。先端部を欠いているが、残存長32.0mm・最大幅26.5mm・重さ3.8gをはかる。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

#### 堅穴遺構-3（第21図、図版2-2）

11-M区南東部において検出された遺構で、ほぼ南北方向に長軸をもつ、隅丸長方形の平面形



第20図 堅穴遺構-2 (1/80)・出土遺物 (1/2)



第21図 堅穴遺構-3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

を呈している。北西の一部を欠くが、規模は、南北4m・東西2.8mで、検出面から深さ45cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、南端部中央に東西60cm・南北50cm程の高まりが認められる。また、南端近くに2本柱穴状の掘込みが検出されている。床面の東部や中央部付近を中心に、焼土が広がり、炭化した柱材が検出されている。主要な炭化材はいずれも南北方向のものである。これらの状況から、この遺構は焼失した遺構であることが推定される。

出土遺物としては、図示したもののほかに甕などの細片が認められる。54は口径20.0cm・高さ22.0cmを測る甕形土器で、口縁端部を僅かに上方につまみ、端面に凹線が1条巡る。55はいわゆる回転台形土器とみられる土器で、細片ではあるが上端部径約16cmを測る。外面はヘラミガキされている。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

#### 竪穴遺構-4（第22図）

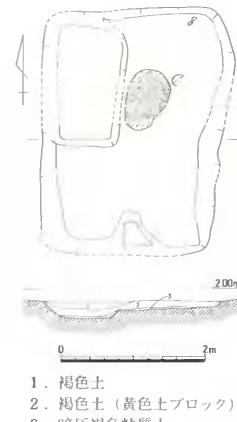
11-M区から11-L区にかけて検出された遺構で、Lライン上のほぼ中央に位置している。南北方向に長軸をもち、隅丸長方形の平面形を呈している。規模は、南北3.4m・東西2.6m前後で、検出面からの深さは、10cm程を測る。北西隅の1.8×1.0m程は、長方形に一段低くなっている。この部分は検出面から30cm程の深さがある。床面はいずれも平坦である。床面の中央やや北寄りの85×50cm程の範囲には、楕円形状に焼土の広がる火所が検出されたが、窪みなどは設けられていない。なお、南辺の中央部は、幅45cmほどが床面より一段（約5cm）高くなっている。埋土は褐色土が一層であるが、床面直上には、暗灰褐色土が堆積している。

遺物は土器の細片が出土しているものの、図示できるものはなかった。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

#### 竪穴遺構-5（第23図）

11-L区の北東部において検出された遺構で、竪穴遺構-4から2.5m南西の下がりの肩部付近に位置している。ほぼ東西南北に長軸をもち、隅丸長方形の平面形を呈している。規模は東西3.5m・南北2.7m程で、検出面から30cm前後の深さを測る。床面はほぼ平坦で東辺の中央部に、幅34cmほど一段（約5cm）高いところがある。床面の中央部やや西寄りに、楕円形状（40×30）の火所が確認されたが、窪みなどはない。なお、この火所の周辺部および、東辺の高まりの周辺部には、焼土や炭などの広がりが確認されてい



第22図 竪穴遺構-4 (1/80)



第23図 竪穴遺構-5 (1/80)

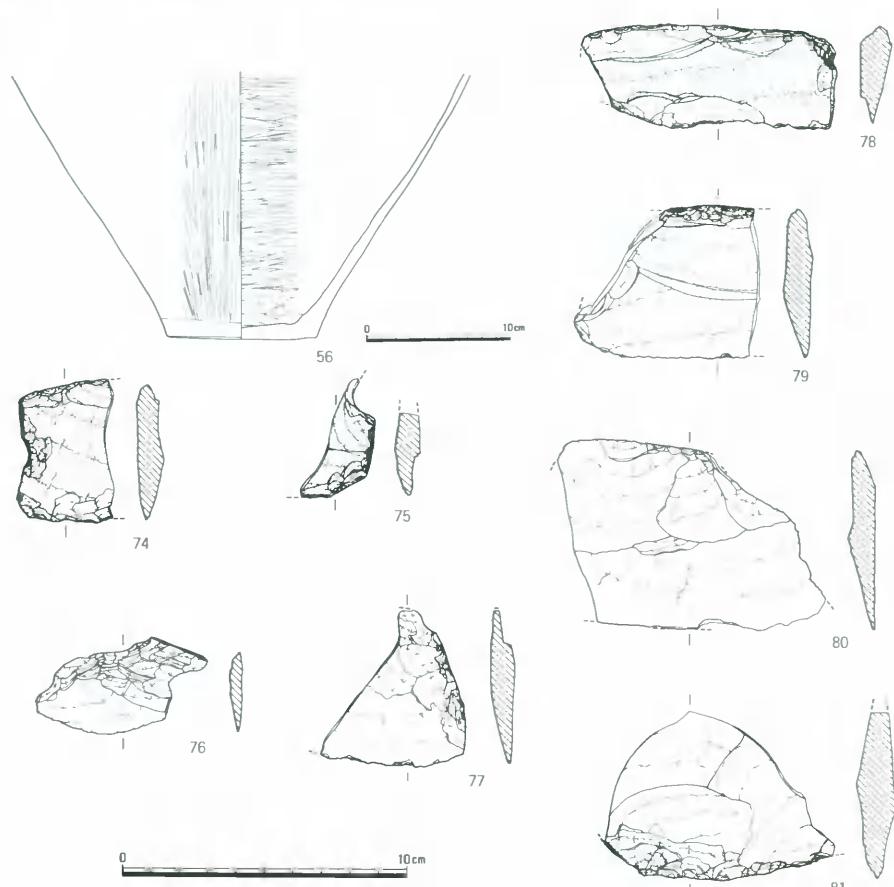
る。埋土は上層に灰黄色粘質土が、下層に暗灰黄色粘質土が堆積している。

遺物は、北東部の床面を中心に土器片が出土しているがいずれも細片で図示できるものはなかった。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

#### 竪穴遺構-6 (第24図)

11-L区のほぼ中央において検出された遺構で、竪穴遺構-5の南東2.8m、竪穴住居-4の北東3.2mに位置する。西北西-東南東に長軸をもち、隅丸長方形の平面形を呈する。規模は、長軸4m・短軸2.75mで、検出面から床面



第24図 竪穴遺構-6 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2)

までは約40cmを測る。床面はほぼ平坦で東南東辺の中央部に、幅40cmほど一段（約5cm）高いところがある。床面の中央部や西北寄りに、長楕円形状（85×40）の火所が確認されたが、窪みはないが、周辺に炭化材などの広がりが確認されている。

埋土は上層に茶灰色粘質土と淡茶灰色粘質土が、下層に灰黄色粘質土が、間に黄灰色粘質土が堆積している。

遺物はいずれも床面付近で出土したもので、56は甕形上器の底部片である。上器はこの他にも若干出土しているが、細片で図示できるものはなかった。石器は、いづれもサヌカイト製で、74・75・78・79は石包丁およびその破片で、重さはそれぞれ21.9g・7.0g・41.1g・44.8gを量る。76・77・80・81はスクリペイバーで、重さは7.6g・20.0g・56.9g・7.6gを量る。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

#### 竪穴遺構—7（第25図）

11-L区の南西部において検出された遺構で、竪穴遺構—6の南西3.5m、下がりの肩部に位置する。南北方向に長軸をもち、隅丸長方形の平面形を呈する。規模は、長軸3.2m・短軸2.4mで、検出面から床面までは32cmを測り、床面は平坦である。床面中央部や北寄りに火所（32×26cm）が確認されたが、窪みなどはなかった。埋土は上層に灰褐色粘質土が、下層に灰黄褐色粘質土が堆積している。

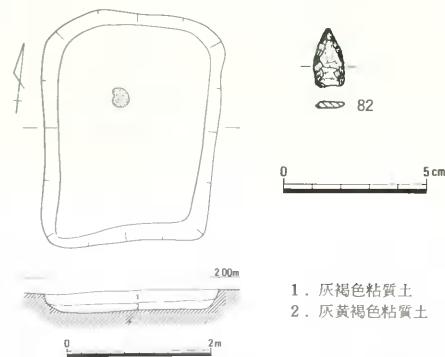
遺物はほとんどみられなかつたが、遺構上面から82のサヌカイト製石鎌が1点出土している。ほぼ完存品で、重さは0.5gを量る。

時期は弥生時代中期後半である。

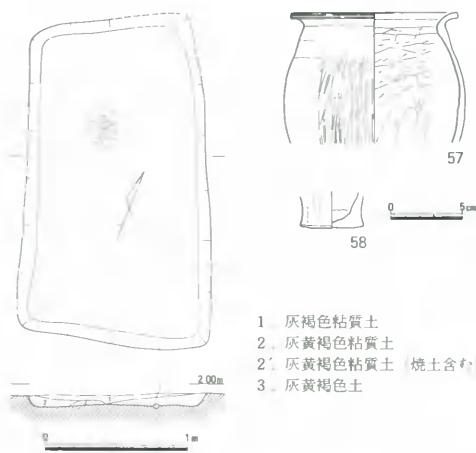
#### 竪穴遺構—8（第26図）

11-K区の北端中央部において検出された遺構で、竪穴遺構—7の南東4mに位置する。北北西-南南東に長軸をもち、隅丸長方形の平面形を呈している。規模は、長軸4.6m・短軸2.6mで、検出面から床面まで20cmを測る。床面は平坦で、中央部や北西寄りに火所（60×50）が楕円形状に確認されたが、窪みなどは設けられていない。埋土は、上層に灰褐色粘質土が、下層に灰黄褐色粘質土が堆積している。

遺物としては、埋土中から弥生土器が若干出土している。57・58は甕形土



第25図 竪穴遺構—7 (1/80)・出土遺物 (1/2)



第26図 竪穴遺構—8 (1/80)・出土遺物 (1/4)

器片で、胎土に砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈する。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半と考えられる。

#### 竪穴遺構-9（第27図、図版2-1）

12-L区の東部中央付近において検出された遺構で、竪穴住居-3により南西側の3分の1程は削平されている。東-西方向に長軸をもち、隅丸長方形の平面形を呈している。規模は、長軸4.3m・短軸約3.0m程で、検出面から床面まで30cmを測る。床面は平坦で、削平を受けているためか火所は遺存していないが、長軸方向に横たわる柱材とみられるもののはじめ多くの炭・炭化材が検出されている。東辺の中央部に幅40cm・高さ5cm程の高まりが確認されている。埋土は、上層に褐色土が、下層に灰褐色粘質土が堆積している。

遺物としては、埋土中から弥生土器が若干出土しているほか、床面から83のサヌカイト製石槍が出土している。長さ12.5cm・幅2.6cm・厚さ1.2cmを測り、重さは46.7gを量る。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半と考えられる。

#### 竪穴遺構-10（第28図）

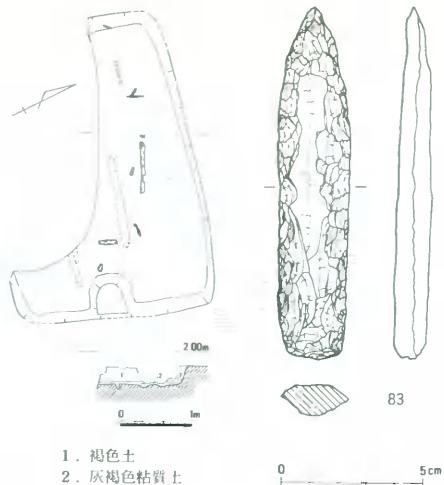
12-L区の南端の中央付近で検出された、小さな竪穴住居状の遺構である。平面形は隅丸長方形というよりも橢円形に近い。北北東-南南西方向に長軸をもち、規模は長径3.7m・短径約2.4m程で、検出面から床面までは42cmを測る。周囲に壁体溝状の溝が巡っている。床面はほぼ平坦で、中央やや東寄りに焼土や炭が検出されている。柱穴・土壤などはない。埋土は上層に褐黄色土が、下層に暗褐黄色粘質土が、壁体溝に暗褐黄色土が埋積している。

遺物は床面などから、弥生土器が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

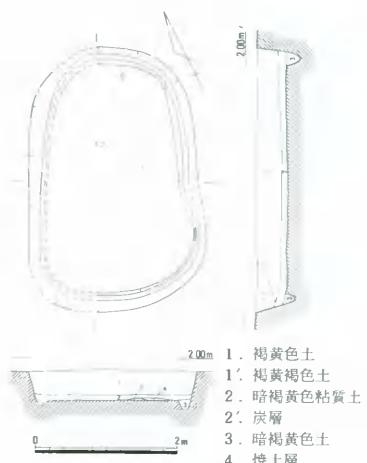
時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半と考えられる。

#### 竪穴遺構-11（第29図）

12-L区の南西端において検出された遺構である。竪穴遺構というよりも、少し大き目な土壙とみられるもので、北東-南西方向に長軸をもち、隅丸長方形を呈する。検出面からほぼ平坦な床面までの深さは50cmを測る。床面に焼土などは検出されていない。また、柱穴・土壤などもなく、性格等は全く不明な遺構である。



第27図 竪穴遺構-9 (1/80)・出土遺物 (1/2)



第28図 竪穴遺構-10 (1/80)

遺物としては埋土中から土器が若干出土しているが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半と考えられる。

#### 堅穴遺構-12（第29図）

12-K区の中央やや西寄りで検出された遺構である。南東側2分の1は用地外に及んでいる。北東—南西に長軸をもち、隅丸長方形を呈する。検出面から床面までの深さは30cmを測る。床面はほぼ平坦である。東端部用地境の床面に焼つ地が二部確認された。埋土は、褐黄色土が一層が堆積している。検出状況が良好でない為、判然としないが、堅穴遺構と考えられるものである。

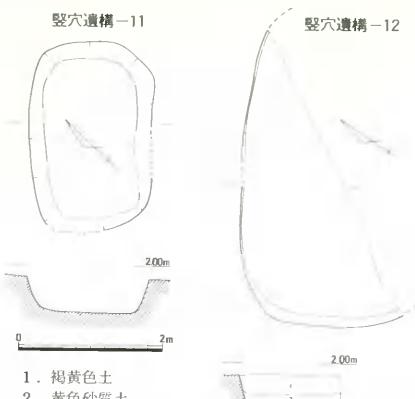
遺物としては埋土中から土器が若干出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

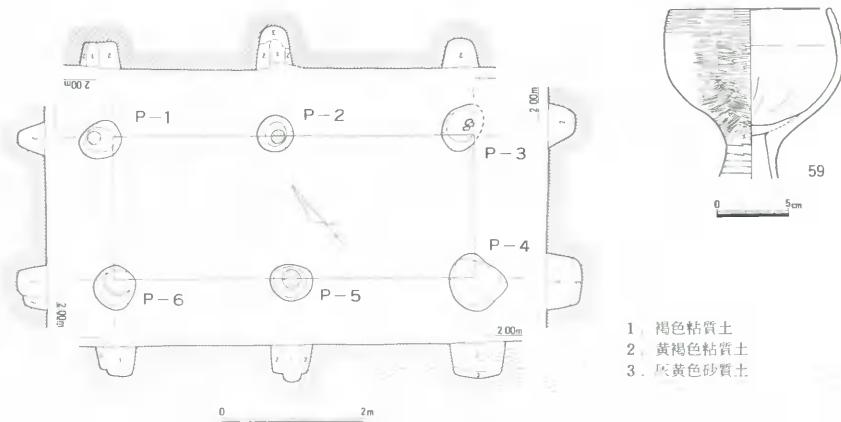
### 3. 建物

#### 建物-1（第30図、図版2-3）

11-L区の北部中央において検出された遺構で、堅穴遺構-4を切っている。6本柱で構成されている2間×1間の掘立柱建物で、桁行5.0m・梁間2.0mを測る。柱穴の規模は、径約60cm・深さ40～60cmである。P-3・4の柱は抜き取られているが、P-1・2は柱根が認められ、P-5・6は柱痕が確認された。建物の軸線は北西—南東に向いている。P-3の埋土中から59の高杯形土器が出上



第29図 堅穴遺構-11・12 (1/80)



第30図 建物-1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

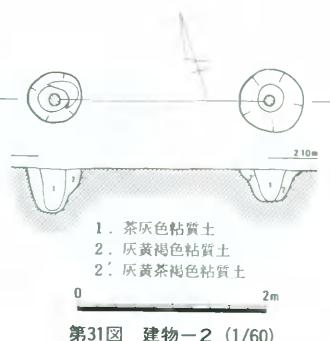
している。時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

**建物－2（第31図）**

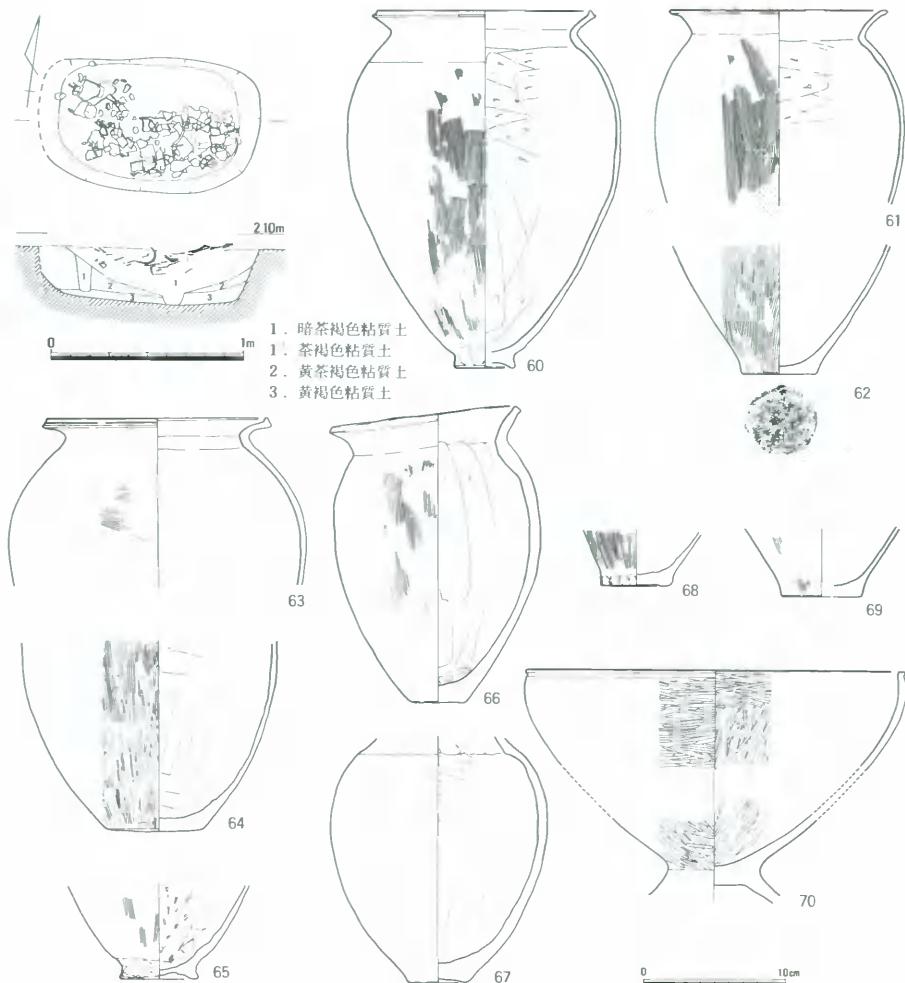
11-M区東部において、柱が2本のみ検出された建物で、北側は現代の用水路により削平されている。全体の規模は不明であるが、2.6mを測る。建物の軸線は北北東—南南西を向いている。時期は、検出状況などから弥生時代中期後半である。

**4. 土 壤**

**土壤－1（第32図、図版3-2）**



第31図 建物-2 (1/60)



第32図 土壌-1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

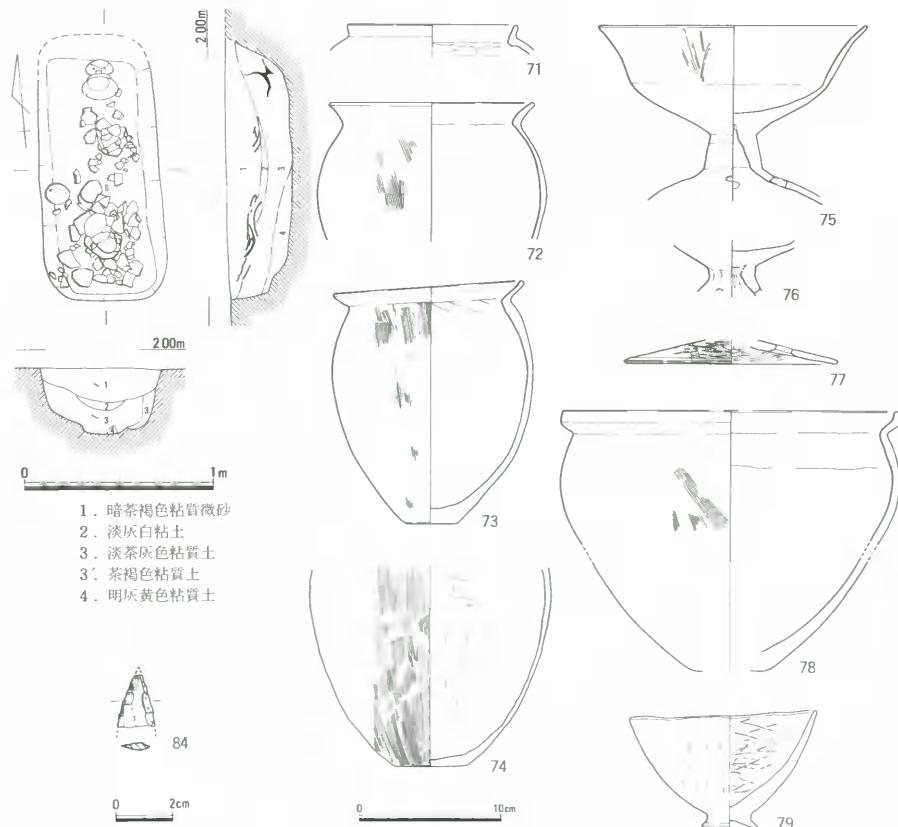
12—M区の中央部の南寄りで検出された遺構で、東—西方向に長軸をもつ、検出平面が隅丸長方形の土壌である。規模は長軸115cm・短軸72cmで、検出面からの深さは30cmを測る。埋土は、上層に暗茶褐色粘質土が、下層に黄茶褐色粘質土が堆積し、最下層には、黄褐色粘質土が埋積している。

図示した土器は、いずれも上層から出土したものである。60～69は甕形土器で、外面は概ねハケメ調整されている。内面は肩部までヘラケズリされている。61と62は暗茶褐色を呈し、胎土などからも同一個体の可能性がある。底部外面にもハケメが認められる。70は台付鉢形土器で、内外面ともヘラミガキされている。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期後半である。

#### 土壤—2（第33図、図版3—3）

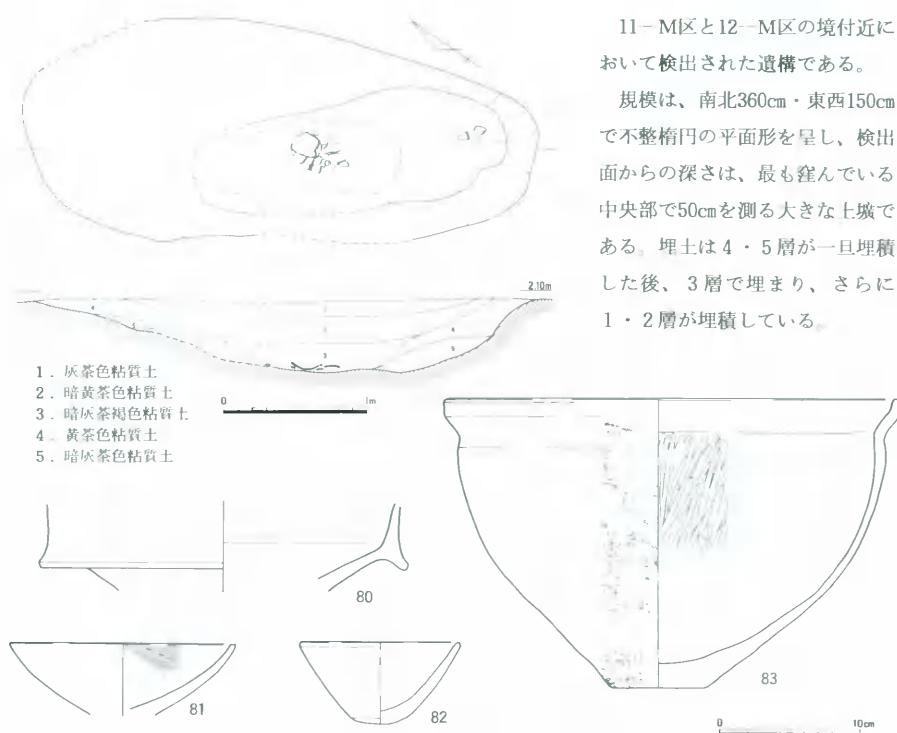
12—M区の中央部の南寄り、土壤—1の東1mで検出された遺構である。南—北方向に長軸をもつ検出平面が隅丸長方形の土壌である。規模は長軸140cm・短軸63cmで、検出面からの深さは34cmを測る。埋土は、1層に暗茶褐色粘質微砂が、3層に淡茶灰色粘質土・黄褐色混じりの茶褐色粘質土が埋積し、間に淡灰白色粘土が埋積している。



第33図 土壌—2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

遺物は、概ね1層と3層との間を中心に出土している。72～74は壺形土器で、外面はハケメで調整され、内面は肩部までヘラケズリされている。75は3層から出土した高杯形土器で、杯部の内外面はヘラミカキされている。脚裾部には4個の円孔が穿たれている。非常に精製された粘土で、明黄灰色を呈する。78は鉢形土器、79は台付鉢形土器である。84はサヌカイト製の石鎌で、下部が欠損しているが、重さ0.6gを量る。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期後半である。



第34図 土壌-3 (1/40)・出土遺物 (1/4)

遺物は、3層を中心に土器が出土している。80は二重口縁をもつ壺形土器の口縁部片、81は台付鉢形土器、82はほぼ完形の鉢形土器である。83は口縁端部が上方に立ち上がる大型の鉢形土器で、外面はハケ目により調整されている。

遺構の性格等は不明なものであるが、時期は、出土遺物などから弥生時代末とみられる。

#### 土壌-4 (第35図)

12-L区北西部において検出された遺構で、堅穴住居-2すぐ西に位置している。平面形は不整橢円形を呈し、規模は長径130cm・短径100cm・深さ25cmを測る。埋土は、暗茶褐色粘質微砂が一層である。遺物は、土器の細片のほかサヌカイトの石器などがある。85はスクレイパーで、片面のみに刃がつけられている。重さは、36.5gを測る。

時期は出土遺物などから弥生時代後期とみられる。

#### 土壌-3 (第34図)

11-M区と12-M区の境付近において検出された遺構である。

規模は、南北360cm・東西150cmで不整橢円の平面形を呈し、検出面からの深さは、最も窪んでいる中央部で50cmを測る大きな土壌である。埋土は4・5層が一旦埋積した後、3層で埋まり、さらに1・2層が埋積している。

**土壌—5（第35図）**

12-M区南東部において検出された遺構で、竪穴住居—6の0.5m北に位置している。平面形は、不整橢円を呈し、規模は長径32cm・短径20cm・深さ45cmを測る。埋土は、暗茶褐色粘質微砂が一層である。遺物としては、86のサヌカイト製のスクレイパーが出土している。ほぼ完存しているもので最大長74.0mm・最大幅35.0mmを測り、重さは31.0gを量る。

時期は出土遺物などから弥生時代後期とみられる。

**土壌—6（第35図）**

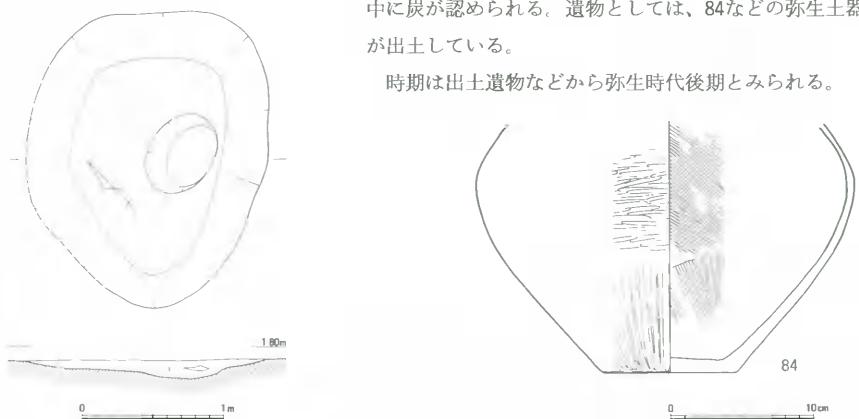
11-M区北東部において検出された遺構で、竪穴住居—7の東0.6mに位置している。橢円形を呈する土壌で、長径83cm・短径58cm・深さ10cm程を測る。埋土は、灰色粘質微砂が一層である。遺物としては土器の細片のほか、サヌカイト製の石鏃が2点出土している。87は下端の一部を僅かに欠いているが、2.0gを、88は0.7gを量る。

時期は出土遺物などから弥生時代後期以降とみられる。

**土壌—8（第36図）**

11-L区西側中央部において検出された遺構である。斜面の肩部付近に位置し、不整形を呈する窪み状の土壌である。規模は、長径205cm・短径170cmを測る大きな土壌であるが、深さは最も深いところでも15cm程である。埋土は灰褐色粘質土が一層で、埋土中に炭が認められる。遺物としては、84などの弥生土器片が出土している。

時期は出土遺物などから弥生時代後期とみられる。



## 5. 炉状遺構

### 炉状遺構-1（第73図）

12-L区中央部南寄りにおいて検出された遺構で、炉状遺構-2の北東約1.5mに位置している。ほぼ南北方向に細長く、焼上に覆われた溝状の土壤が延びている。規模は、長さ305cm・幅は、概ね22cm程であるが、南端部では50cmを測る。焼土は南端部分を中心に覆っており、北部はやや薄い。埋土は、暗赤褐色焼土の下に灰褐色土が、その下に焼土塊を含んだ褐灰色土が埋積している。土器の細片が出土しているものの、容滓などは認められず、遺構の性格は判然としない。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

### 炉状遺構-2（第73図）

12-L区中央部南端において検出された遺構で、炉状遺構-1の南西約1.5mに位置し、ほぼ南北方向に細長く延びている溝状の土壤である。規模は、長さ290cm・幅45cm程を測る。

断面が幅広のU字形を呈する床面は、暗赤褐色の焼土に覆われ、その上に炭・焼土塊を含む褐灰色が埋積している。

出土遺物としては、土器の細片が認められたが、図示できるものはなかった。遺構の性格については、埋土中に容滓などがなく判然とはしないが、焼土の状況から土壤内で燃焼が行なわれたことは明らかである。また、近接している炉状遺構-1と、方向をほぼ一にしており、両者が、密接に関連した遺構であると考えられる。

時期は、出土遺物などから弥生時代中期後半である。

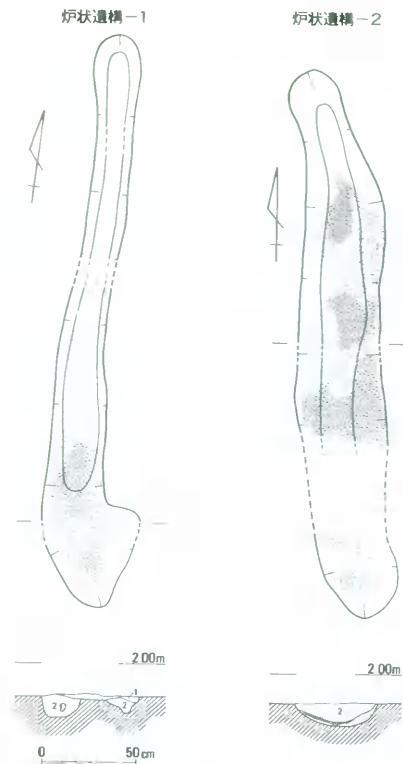
### 炉状遺構-3（第74図）

11-J区の北端中央部において検出された遺構である。平面形は南北に長軸をもつほぼ楕円形を呈する。規模は、長径83cm、短径64cm程で、検出面からの深さは15cmで、底面は平坦である。

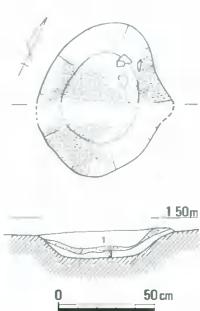
埋土は、このあたりの基盤層がグライ化しているため、暗緑灰褐色を呈する上に埋積し、間に暗赤褐色の焼土層が挟まれている。

埋土中に石および土器が含まれていたが、細片で図示できるものはない。また、容滓などは、認められていないが、炉として使用された土壤ではないかと考えられる。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期後半である。



第37図 炉状遺構-1・2 (1/30)



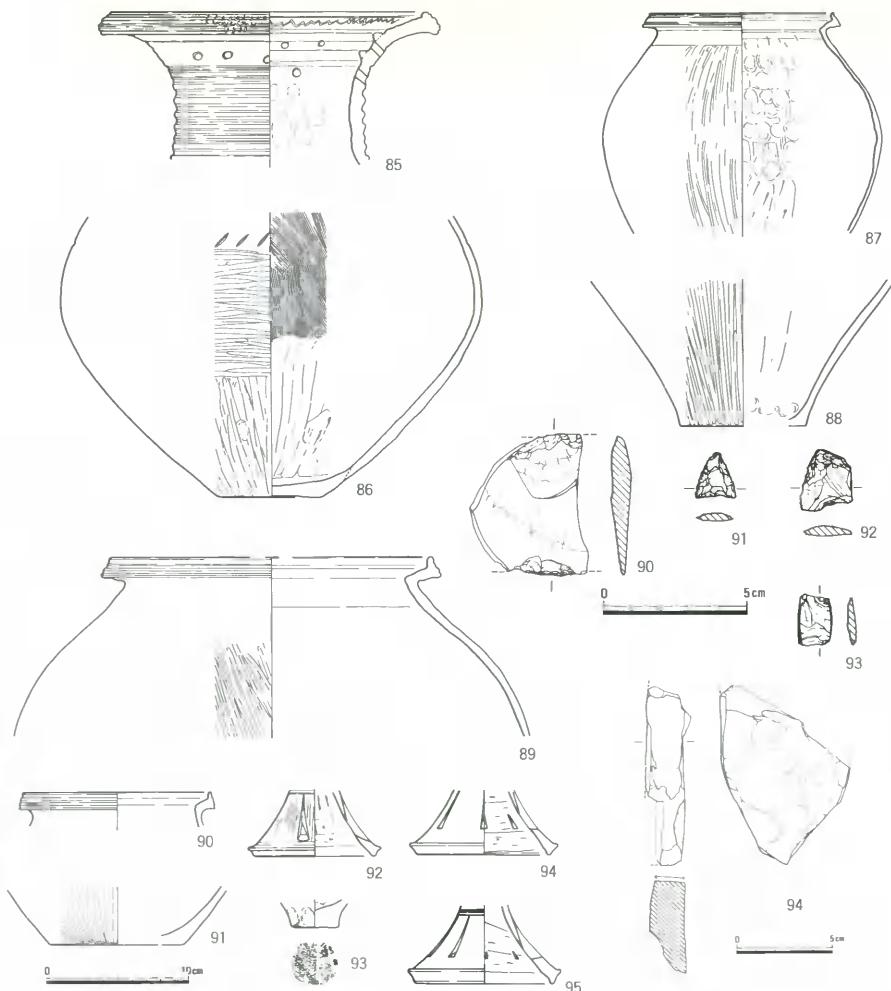
第38図 炉状遺構-3 (1/30)

## 6. 柱 穴

11-L区から12-M区にかけては、建物などとしてまとめることはできなかったが、多くの柱穴が検出され、弥生土器などの遺物が出土している。

P-1は、12-M区の南部に位置し、径60cm・深さ25cmを測り、85などの土器片が出土している。

P-2は、12-L区の北部に位置し、径25cm・深さ18cmを測り、埋土は淡茶灰色粘質微砂が一層である。90の甕形土器片などが出土している。P-3は11-L区の北端部に位置し、径55cm・深さ35cmを測る。91の底部片などが出土している。P-4は11-M区の南部にあり、径65cm・深さ56cmを測る。埋土は暗褐色土で焼土を含んでいる。88・89など甕形土器片が出土している。



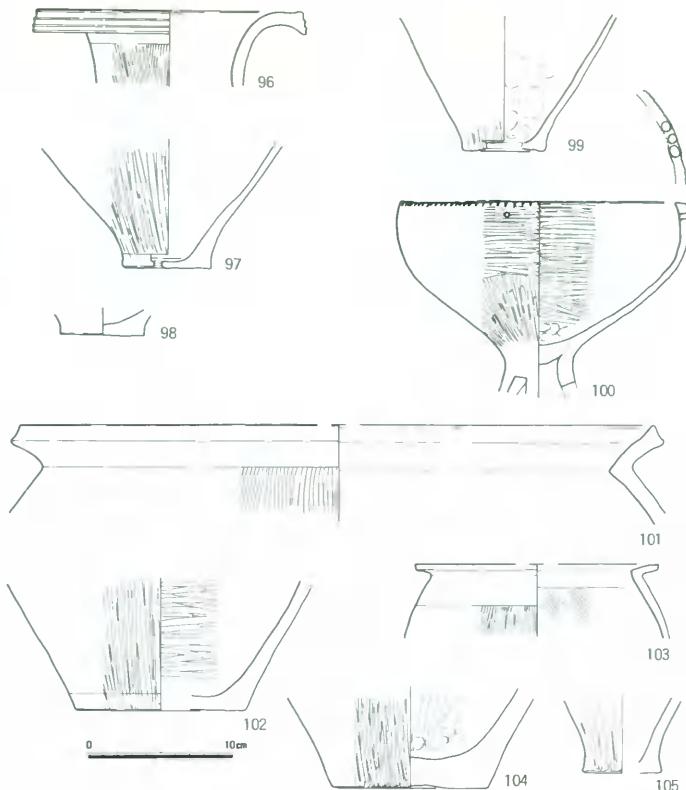
第39図 柱穴内出土遺物（1）(1/4・1/2・1/3)

P-5は、12-M区の南東部に位置し、径45cm・深さ25cmを測る。出土遺物としては、土器の細片のほか91のサヌカイト製石鏃がある。重さ0.5gを量る。P-6は、12-M区の南東部に位置し、径35cm・深さ20cmを測る。遺物として土器の細片のほか92のサヌカイト製石鏃の未製品が出土している。重さは、1.8gを量る。

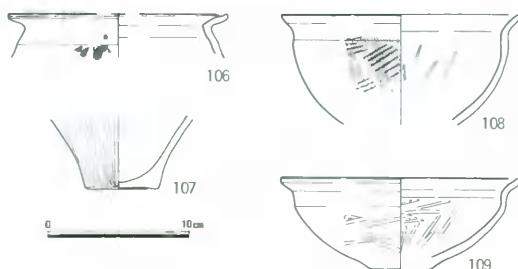
P-7は、11-L区の北部で建物-1のすぐ南側で検出されたもの

で、径48cm・深さ28cmを測る柱穴である。遺物としては86の壺形土器などが出土している。P-8は、11-L区の北部において検出された遺構で、径15cm・深さ12cmを測る。遺物は上器の細片のほか90のサヌカイト製のスクレイパー片が出上している。P-9は、11-L区の北部において検出された遺構で、径40cm・深さ5cmを測る。遺物は土器の細片のほか94の流紋岩（溶岩）製の砥石が出土している。P-10は、12-L区の北西部において検出された遺構で、長径110cm・短径70cm・深さ20cmを測る。遺物は土器の細片のほか93のサ

ヌカイトの楔形石器が出土している。重さは0.9gを量る。P-11は、11-M区の南東部において検出された遺構で、径20cm・深さ26cmを測る。遺物としては、87の壺形土器などが出土している。P-12は、11-M区の南西部において検出された遺構で、径52cm・深さ24cmを測る。遺物としては92の高杯形土器片が出土



第40図 柱穴内出土遺物（2）(1/4)



第41図 柱穴内出土遺物（3）(1/4)

している。P-13は、12-L区の中央部において検出された遺構で、径45cm・深さ40cmを測る。遺物としては僅かに93の甕形土器の底部片が出土しているのみである。底部に木の葉の圧痕がついている。P-14は、12-L区の南西部において検出された遺構で、径52cm・深さ15cmを測る。遺物としては94・95の高杯形土器片が出土している。P-15は、11-L区の南西部において検出された遺構で、径45cm・深さ13cmを測る。遺物としては僅かに96の壺形土器の口縁片が出土しているのみである。P-16は、11-L区の東部において検出された遺構で、径30cm・深さ49cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、遺物としては97・98の甕形土器の底部片が出土している。97は焼成後に穿孔されている。P-17は11-L区の中央部において検出された遺構で、径30cm・深さ11cmを測る。埋土は茶褐色粘質土である。遺物としては99の底部穿孔された甕形土器の底部と高杯形土器100が出土している。P-18は11-L区の中央やや東において検出された遺構で、径38cm・深さ47cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、埋土中から101~105の土器が出土している。P-19・20は、12-L区の南西部において検出され、それぞれ108・109の鉢形土器が出土している。P-21は11-L区の中央部、P-22は11-L区の北東部において検出された遺構で、P-21は106、P-22は107の甕形土器が出土している。P-23は、11-J区の北西部において検出された、径28cm・深さ16cmを測る遺構で、110の壺形土器が出土している。

## 7. 土器溜り

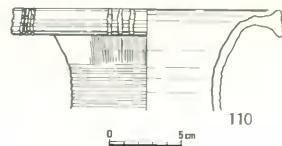
### 土器溜り-1 (第41図)

12-L区の中央より南西寄りで検出された土器溜りで、東西4m・南北2mほどの範囲からまとまって遺物が出土している。118は、製塩土器の台部片である。1は土錘で64.5gを量る。95はサヌカイト製の石鏃で1.8gを量る。

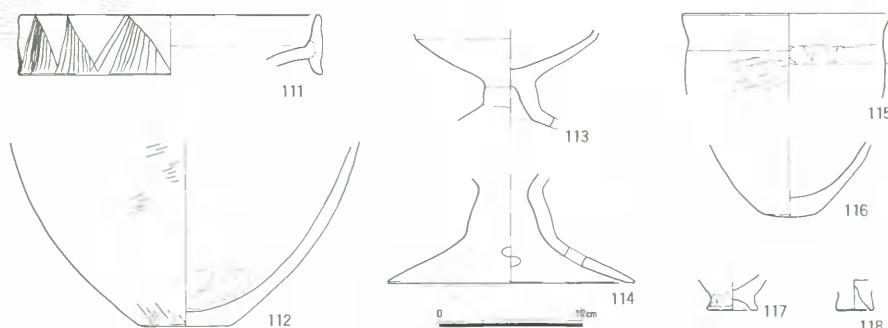
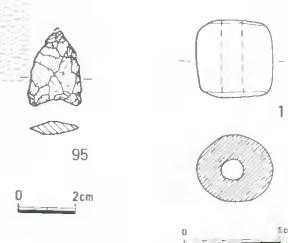
時期は、弥生時代の終末である。

### 土器溜り-2 (第42図)

12-L区の中央やや南寄りで検出された土壌状の土器溜



第42図 P-23出土遺物 (1/4)



第43図 土器溜り-1 出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

りで、竪穴遺構—10のすぐ北東に位置している。規模は60×50cm程の範囲から土器が出土している。119は、壺形土器で外面はハケメ内面は肩部までヘラケズリされている。120は高杯形土器で脚裾部に4個の円孔が穿たれている。121・122は鉢形土器である。

時期は、弥生時代後期後半である。

#### 土器溜りー3（第43図）

12-L区のほぼ中央部において検出された土器溜りで、3×1.5m程の範囲から土錘・石鎌などが出土している。

96・97はいずれもサスカイト製で、それぞれ1.4g・0.5gを量る。

時期は、弥生時代の終末である。

### 8. 遺構に伴わない遺物

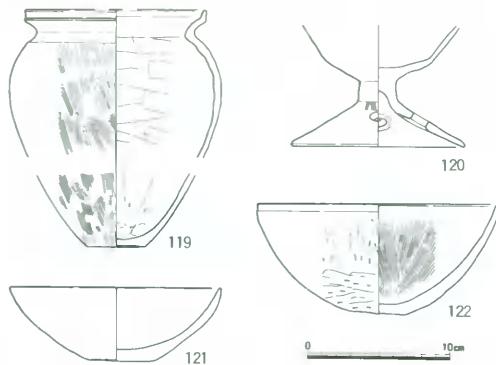
この他にも、11・12-M区から11・12-K区にかけての弥生時代の包含層から、遺構に伴わない遺物が多く出土している。

第44図は、12-M区から出土している土器で、124・125の壺形土器は、外面をタタキでの成形後ハケメ調整している。126は高杯形土器の杯部片127は製塩土器の台部片である。

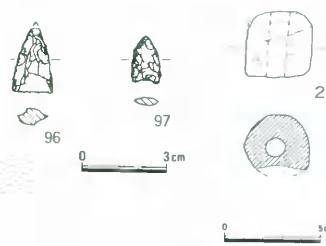
第45図は、11-L区などから出土している、弥生時代中期後半を中心とした土器である。

128・129は壺形土器で、128は拡張した口縁端面に4条の凹線が巡る。体部外面は上部がハケメで、中部以下はハケメ後ヘラミガキされている。130は壺形土器の底部片、131・132は壺形土器の底部片である。135・136は高杯形土器の杯部片で、立ち上がった口縁端部の外面に多条の凹線が巡る。137は台付鉢形土器で、鉢部は内外面ともヘラミガキされている。

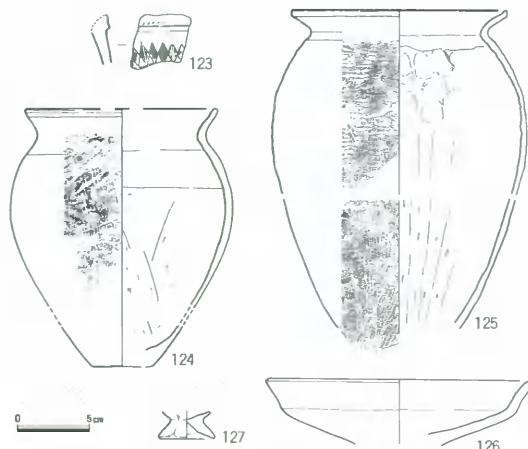
第46図は、12-L区などから出土した飾り高杯の上器片である。138



第44図 土器溜りー2出土遺物 (1/4)



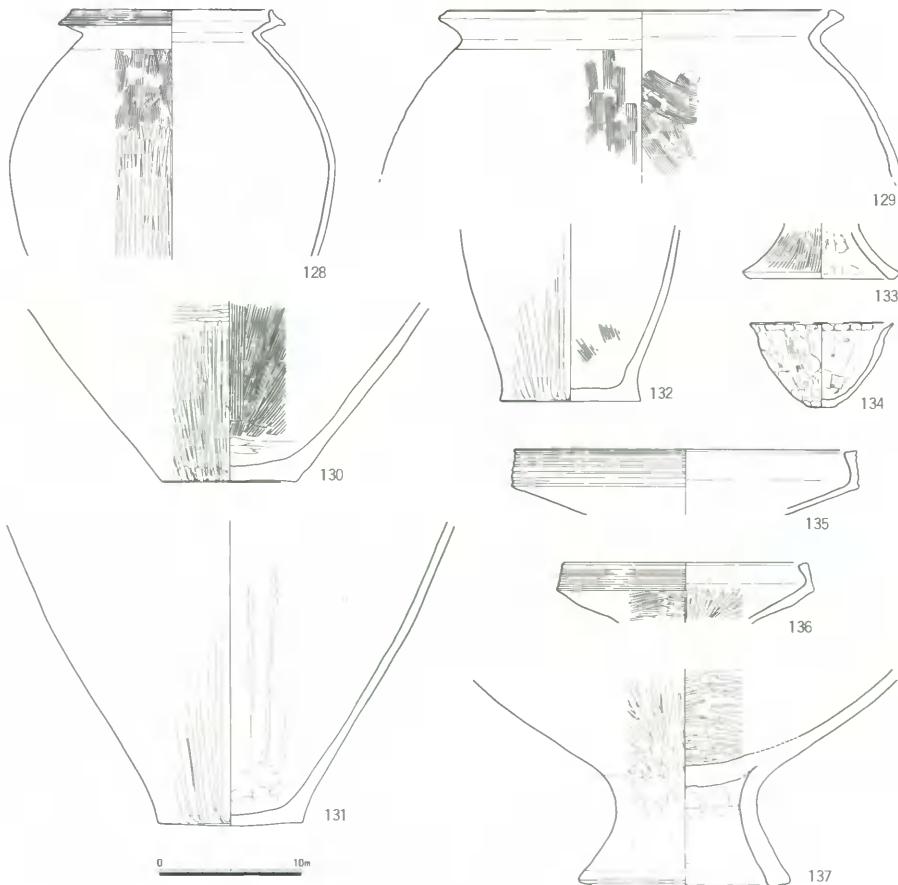
第45図 土器溜りー3出土遺物 (1/2・1/3)



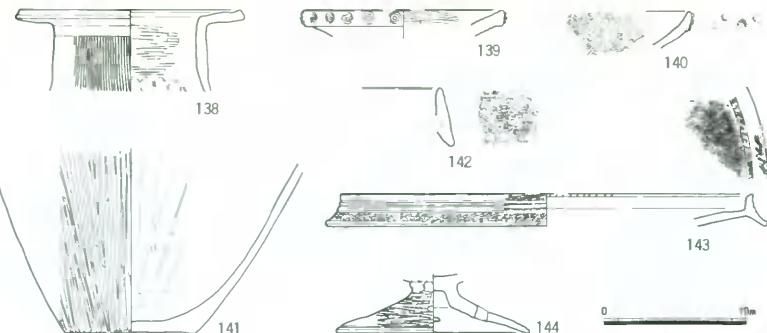
第46図 遺構に伴わない遺物 (1) (1/4)

は壺形上器の口縁部から頸部にかけての破片で、頸部外面は縦方向のハケメである。139・140も壺形土器の口縁部の細片で、口縁端面に円形の浮紋が貼り付けられている。142・143は飾り高杯の口縁端部とみられ、142は端面に143は上面にヘラ描きの鋸歯紋が描かれている。144は高杯形土器の脚部片で、裾部に4個の円孔が穿たれている。

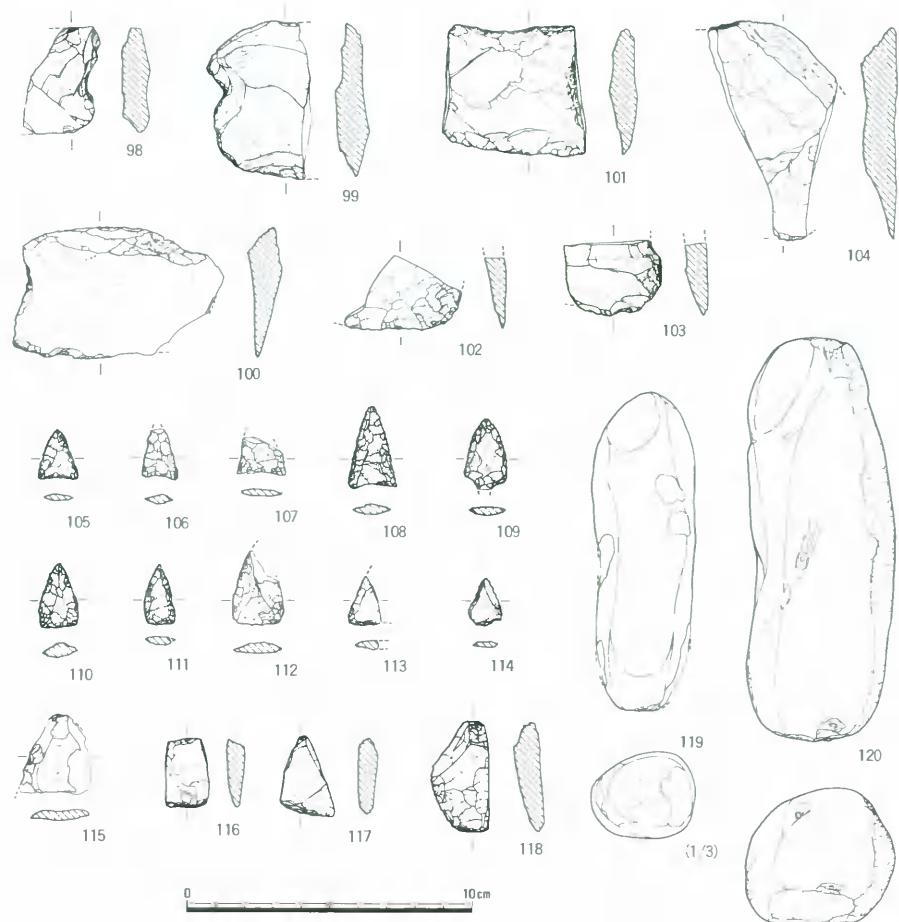
第47図は、11・12-M区から11・12-K区にかけて、弥生時代の包含層から出土している石器である。98～118は、いずれもサヌカイト製の石器である。98・99は石包丁片、100～103はスクレイパー、104はエンドスクレイパーである。105～114は石鎌で、106は先端部を107は上半部をまた、109は基部を欠いている。112は上端部を欠き、113は大半を欠いている。ほぼ完全な石鎌は、105・108・110・111・114で重さは、それぞれ0.4g・1.3g・1.2g・0.7g・0.5gである。115は石鎌未製品で、3.0gを量る。116・117・118は楔形石器で重さは、それぞれ3.1g・4.0g・9.3gを量る。119・120は敲石である。119は花崗斑岩製で200.7g、120は流紋岩製で411.2gを量る。



第47図 遺構に伴わない遺物（2）(1/4)

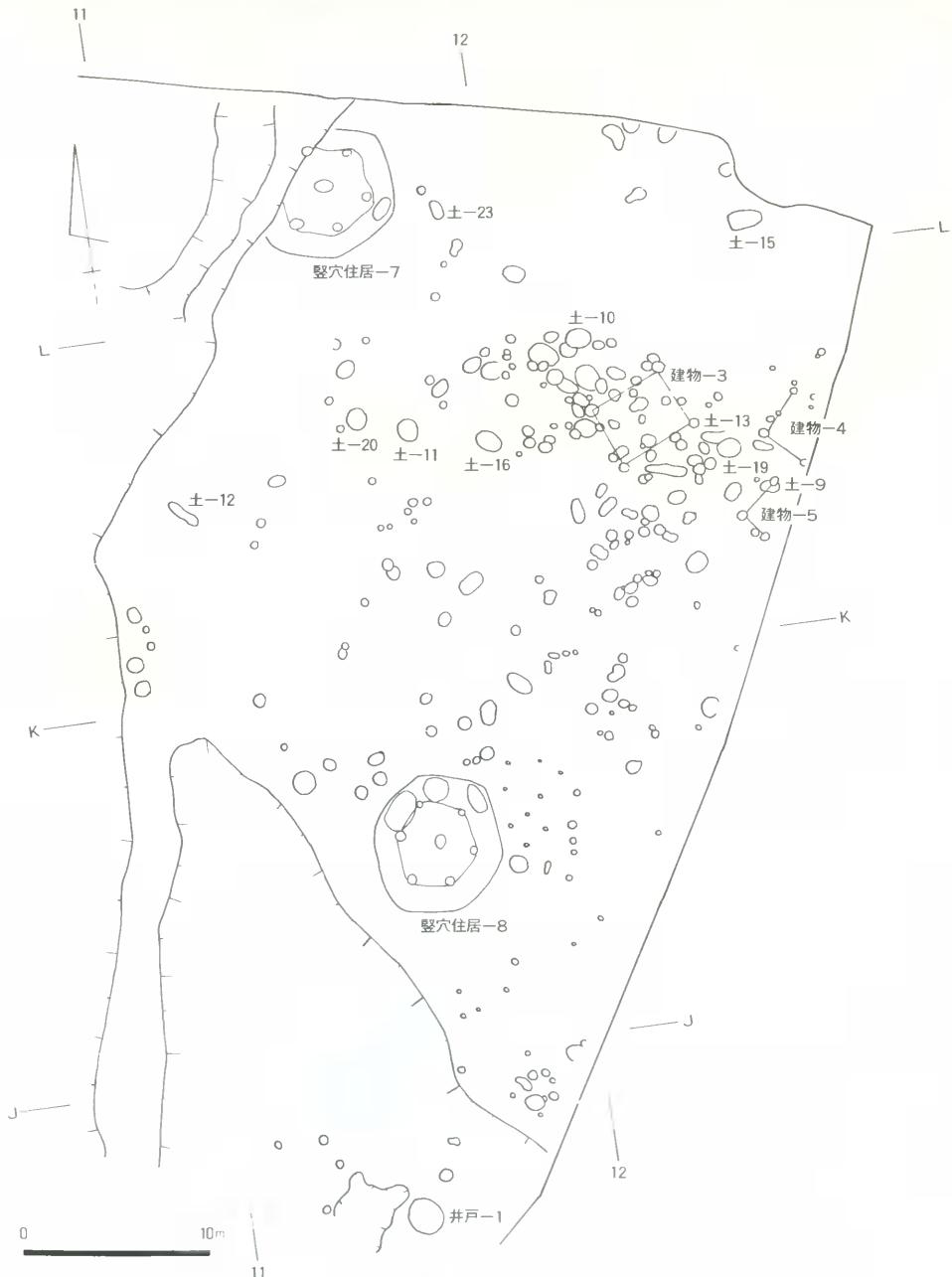


第48図 遺構に伴わない遺物（3）(1/4)



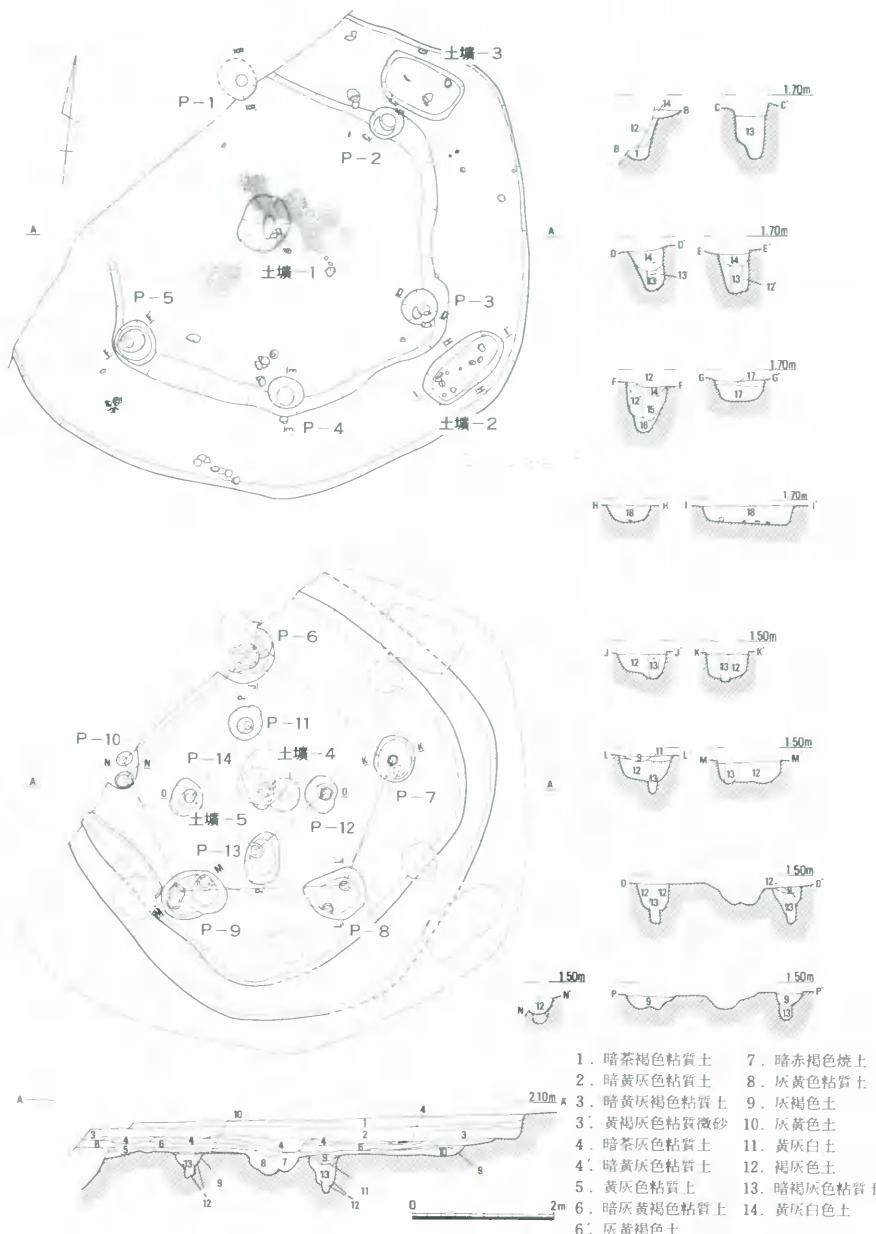
第49図 遺構に伴わない遺物（4）(1/2・1/3)

## (2) 古墳時代の遺構・遺物

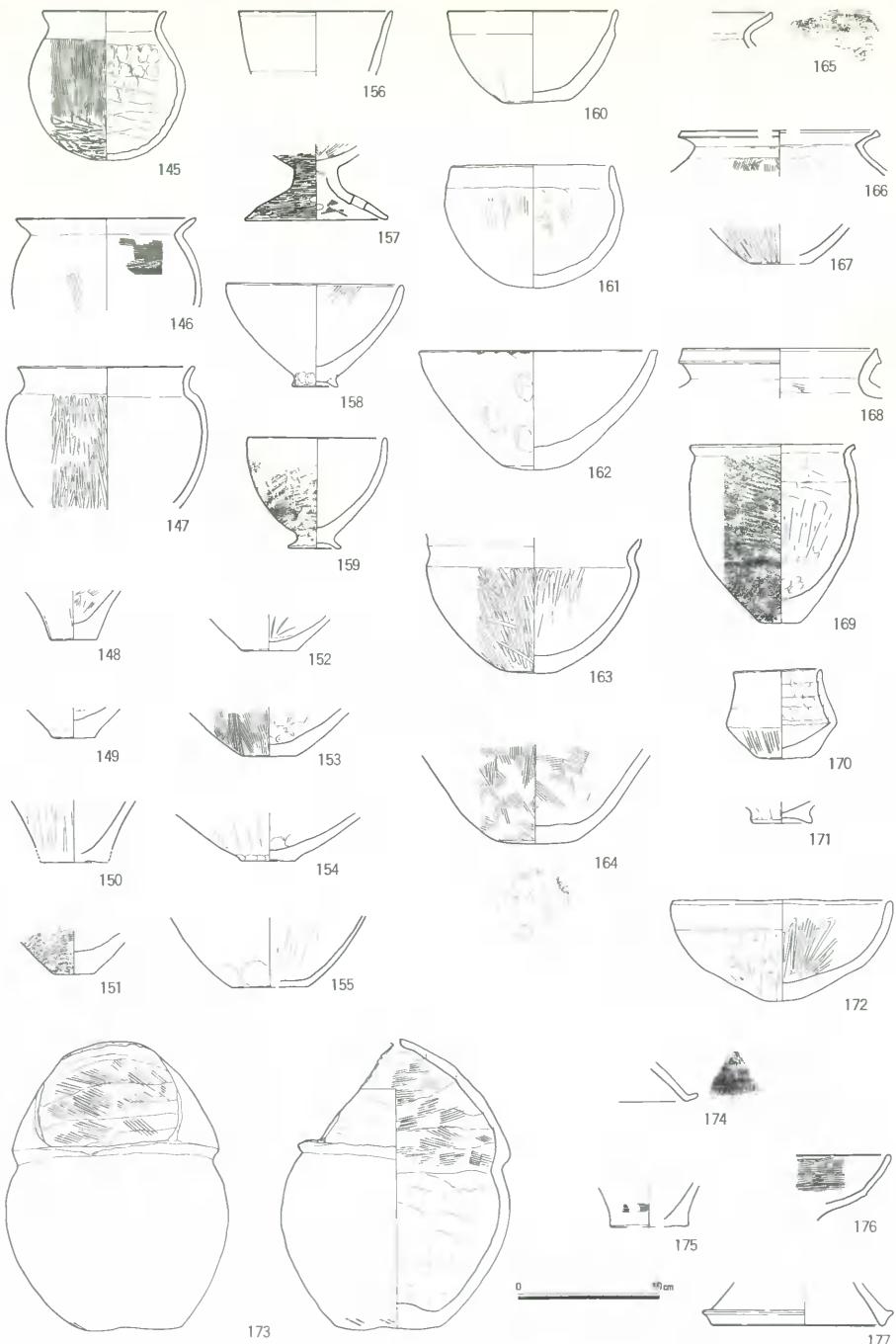


第50図 古墳時代遺構配置図 (1/300)

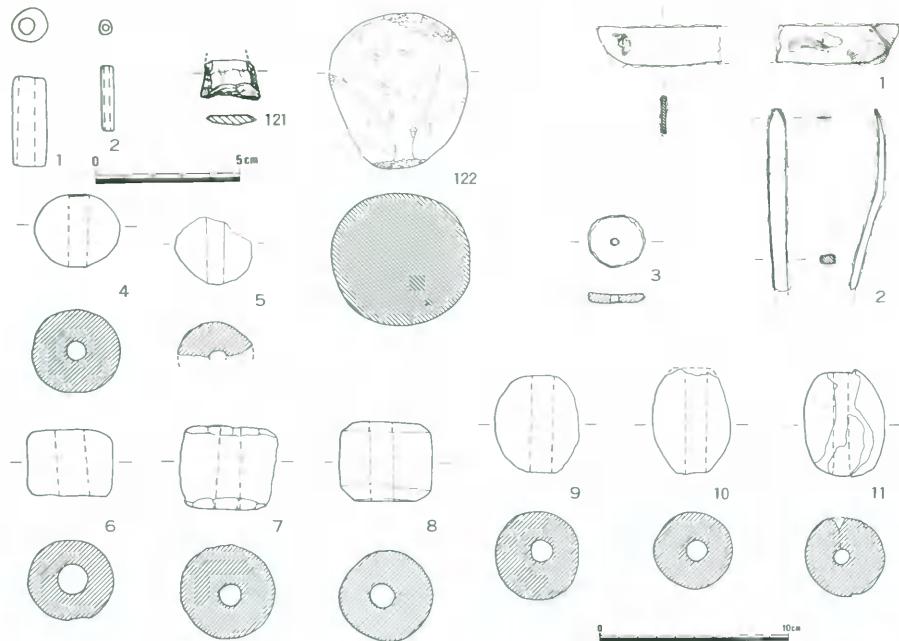
## 1. 壁穴住居-7 (第51~53図、図版4-1)



第51図 壁穴住居-7 (1/80)



第52図 積穴住居-7 出土遺物 (1) (1/4)



第53図 積穴住居-7出土遺物(2)(1/2・1/3)

11-M区のほぼ中央において検出された遺構である。北東側は古墳時代初頭の下がりにより削平されている。削平されている部分を含めた規模は、最も長い北西—南東方向が約8m、それに直行する北東—南西方向が7mの隅丸六角形の平面形を呈すると推定される積穴住居（積穴住居-7a）である。検出面から床面までの深さは40cmを測る。壁体溝はなく、壁から約1.5mは20cm程高くなっている。柱穴は、5本（P-1～5）検出されたが、削平された部分に1本推定され、6本柱と考えられる。また、中央には炭・焼土の混じった不整楕円形の中央穴（土壙-1a）があり周辺の床面にも炭・焼土が広がっている。中央穴の規模は、長径80cm・短径70cm・深さ40cmを測る。なお、壁際の一段高いベット部分には、北東（土壙-2）と南西（土壙-3）の2か所に長方形の土壙がある。規模は、土壙-2が110×70cm・深さ40cm、土壙-3が130×60・深さ50cmである。

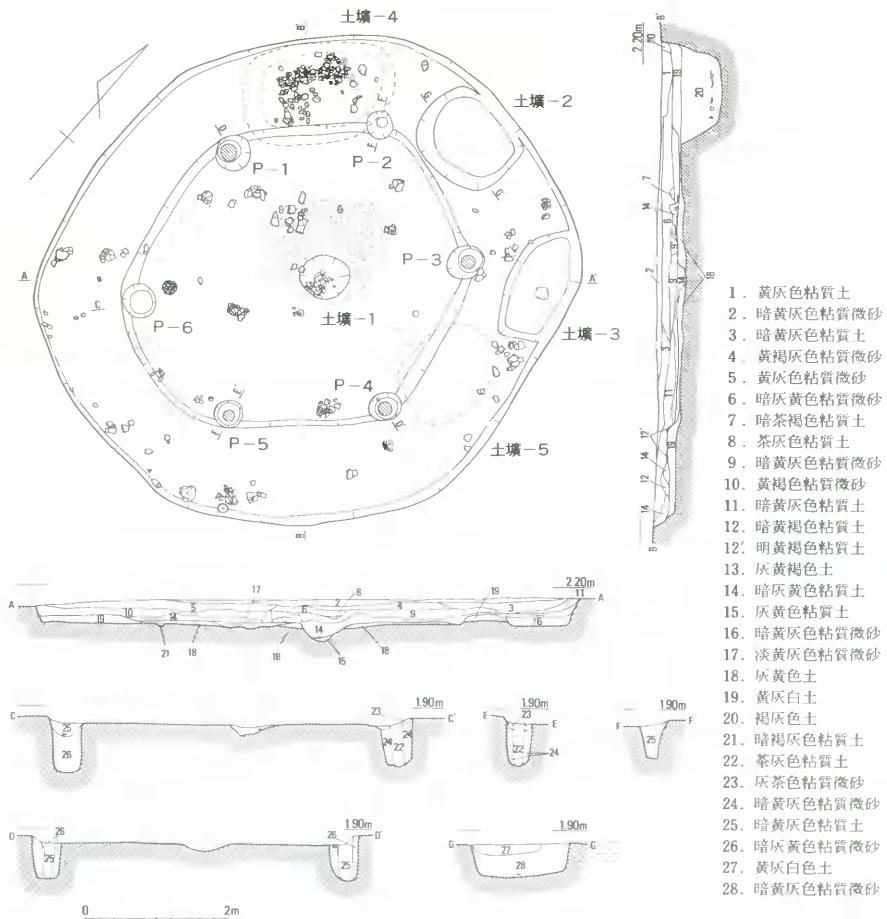
この積穴住居は、建て替えが行なわれている。積穴住居-7aの下から径5.8m程で、五角形の平面形を呈すると推定される積穴住居（積穴住居-7b）が検出された。検出面から床面までは10cmほどで、5本（P-6～10）の柱穴と中央穴（土壙-1b）が検出された。この積穴住居-7bは、柱穴などをほぼ再利用した建て替え（積穴住居-7b'）が行なわれている。さらに積穴住居-7bの下から一辺5m程の隅丸方形を呈すると推定される積穴住居（積穴住居-7c）が検出された。検出面から床面までは10cmほどで、4本（P-11～14）の柱穴と中央穴（土壙-1c）が検出された。

積穴住居-7は、3回の建て替え（2回の建て増し）が行なわれ、大きな積穴住居になっている。遺物のうち土器は、173の手焙り形土器が完形でP-2の西側のベット上から出土しているほかは細片が多い。土壙-1・2からは完形の甕形土器・鉢形土器などが出土している。また、覆土から管玉が2点、1は碧石製で0.9gを、2はG.T製で0.1gを量る。土壙-3から二枚貝の付着した刀子(1)

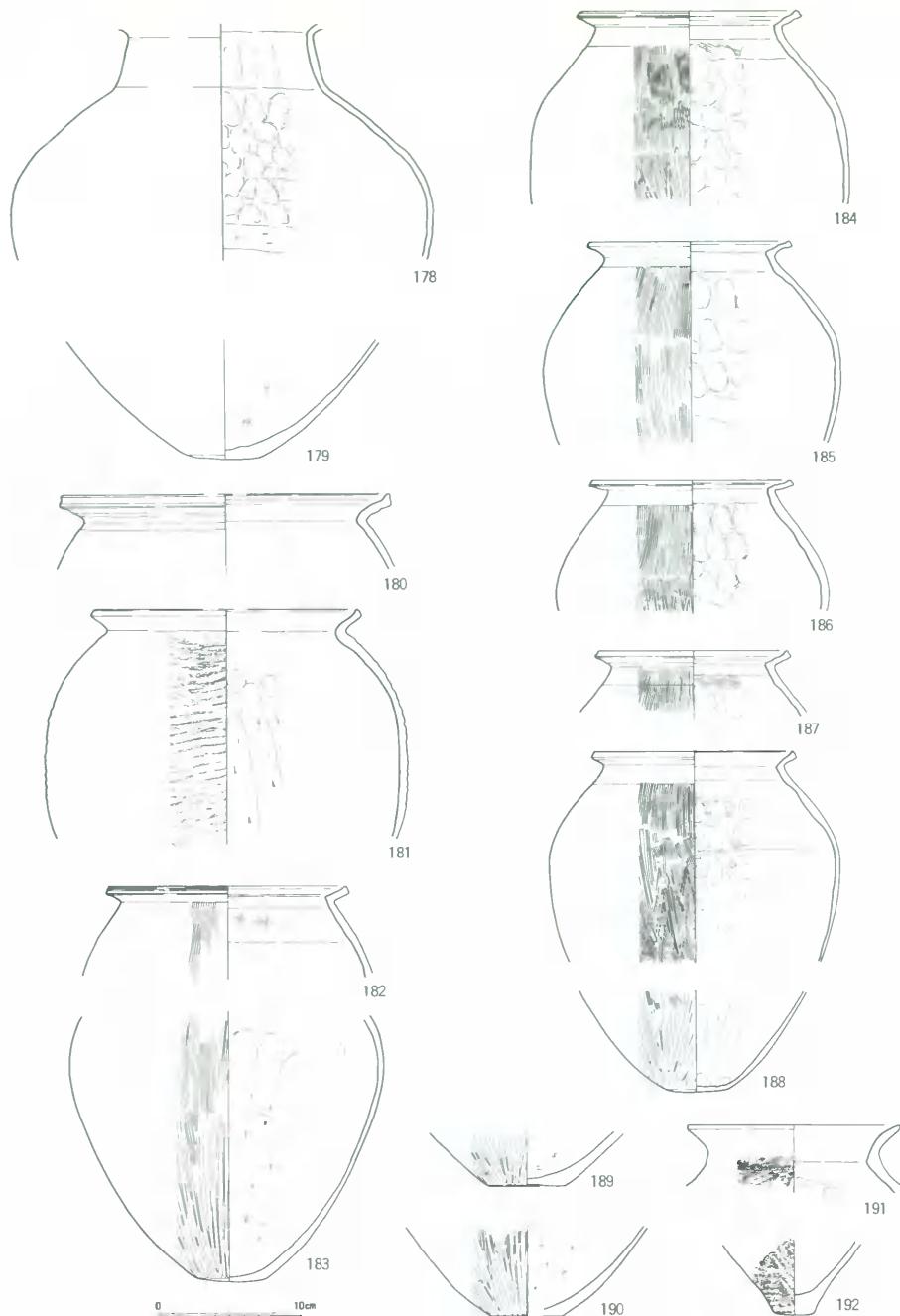
と鏃(2)が出土しているほか、石鎌・敲石・紡錘車・土鐘などが床面から出土している。122は花崗斑岩製の敲石で、588.9gを量る。3は土器片転用の紡錘車で6.3gを量る。土錐(4~11)は竪穴住居の南端部などから多く出土している。時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 竪穴住居-8 (第54~57図、図版4-2)

11-K区の中央やや東よりにおいて検出された遺構である。北東-南西方向が最も長く、7.8mをり、これと直行方向は6.8mを測る隅丸六角形の平面形を呈する竪穴住居である。検出面から床面までの深さは40cmを測り、竪穴住居-7より僅かに規模が小さい。壁体溝はなく、壁から約1.2mは10cm程高くなっている。柱穴は、6本(P-1~6)が検出され、P-1・3~5の4本には、柱根が認められた。柱穴の規模は、直径55cm程で、深さは60cm前後を測る。柱の直径は15~20cm程である。中央には炭・焼土の混じった不整梢円形の中央穴が確認され、中央穴から北西側に炭や焼土が広がっている。中央穴の規模は、長径65cm・短径58cm・深さ20cmを測る。なお、壁際の一段高いベット部分の

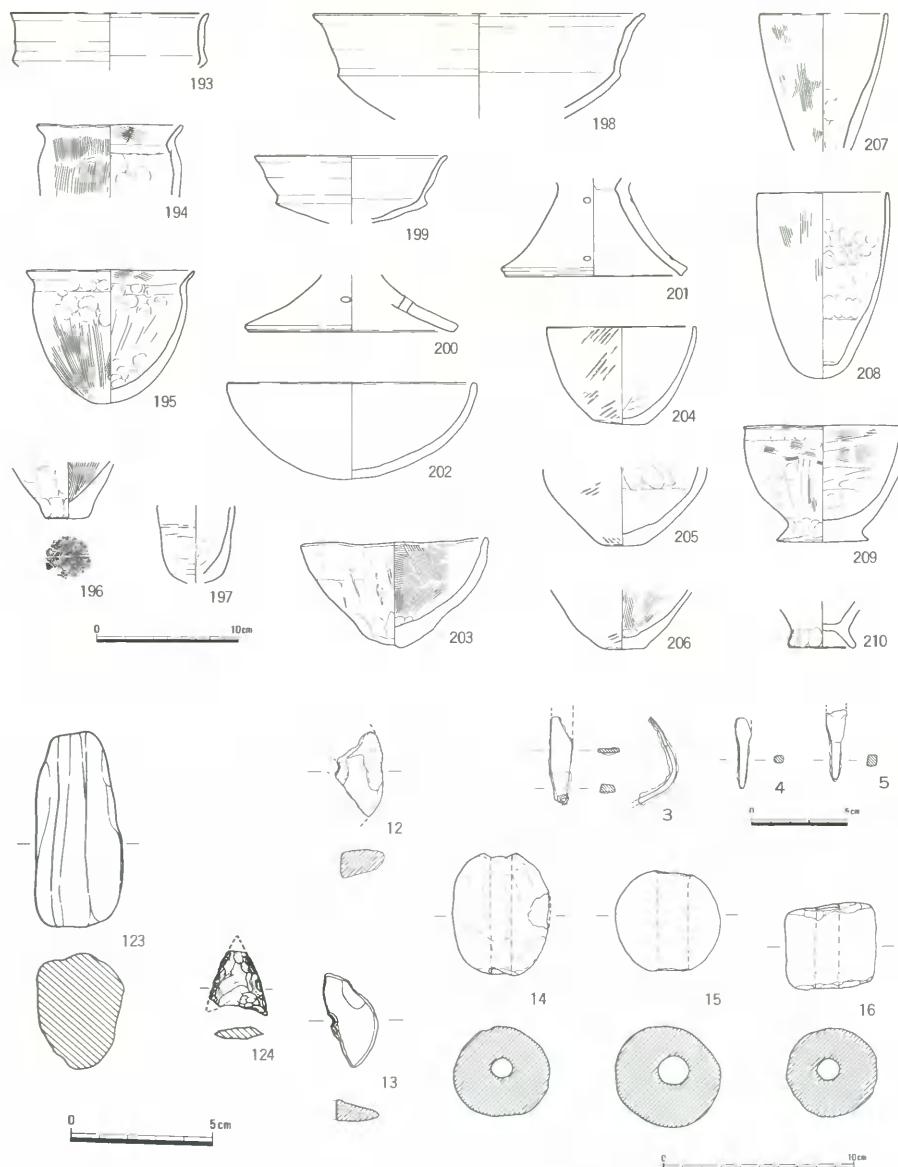


第54図 竪穴住居-8 (1/80)

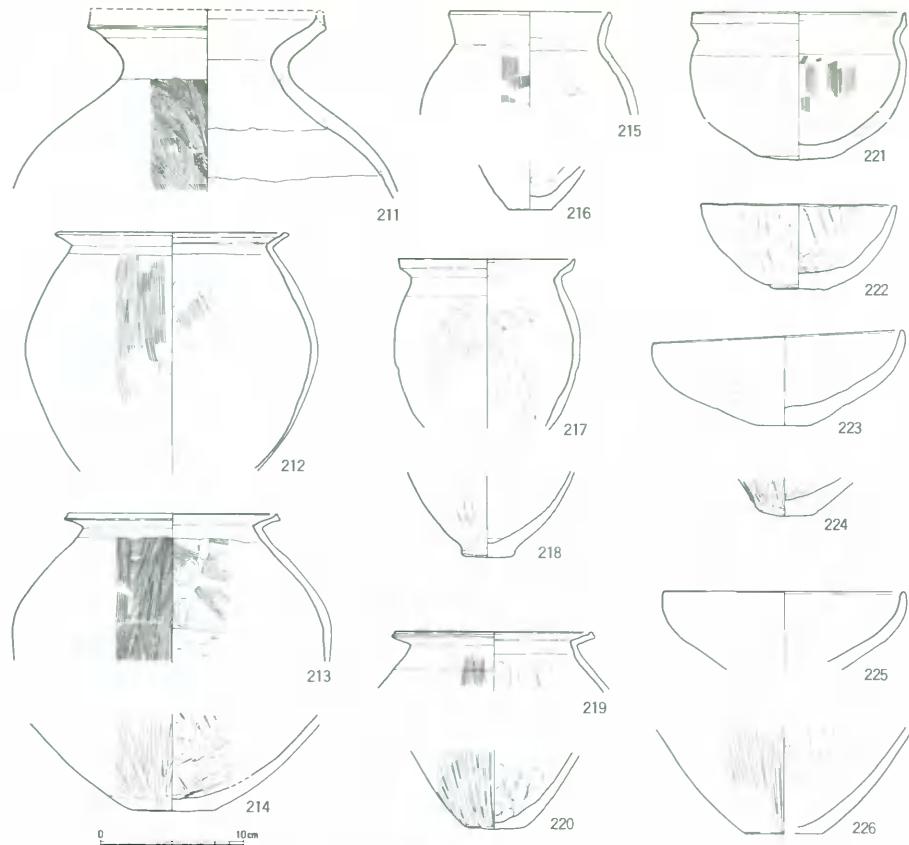


第55図 積穴住居-8 出土遺物 (1) (1/4)

北側に2か所長方形の土壌がある。規模は、土壌-2が $130 \times 110$ ・深さ45cm、土壌-3が $160 \times 85$ cm・深さ20cmを測る。また、ベットから床面にかけて土壌-2の西側（土壌-4）と、土壌-3の南側（土壌-5）に長方形の土壌がある。規模は、土壌-4が $220 \times 140$ ・深さ60cm、土壌-5が $140 \times 105$ cm・深さ30cmを測る。



第56図 竪穴住居-8 出土遺物 (2) (1/4・1/2・1/3)



第57図 穫穴住居-8 土壙-2・3・4 出土遺物 (1/4)

遺物は、床面などを中心に多く出土している。178・179は同一個体の可能性がある壺形土器、180～192は甕形土器である。甕形土器には体部外面をハケメとヘラミガキで調整しているものと、181・191・192のようにタタキで調整している二種類がみられる。204～208は鉢形土器であるが、207・208は長胴で外面ハケメ、内面は指ナデしている。196は小形の甕形土器の底部であるが、外面に木の葉の圧痕が認められる。

鉄器は3点出土している。4・5はいずれも上部を欠いているが鉄鏃である。

123は珪質ヘン岩（変成岩）で、石錘として使われたもので128.7gを量る。124はサスカイト製の石鏃である。上端および下端部を欠いているが、1.6gを量る。

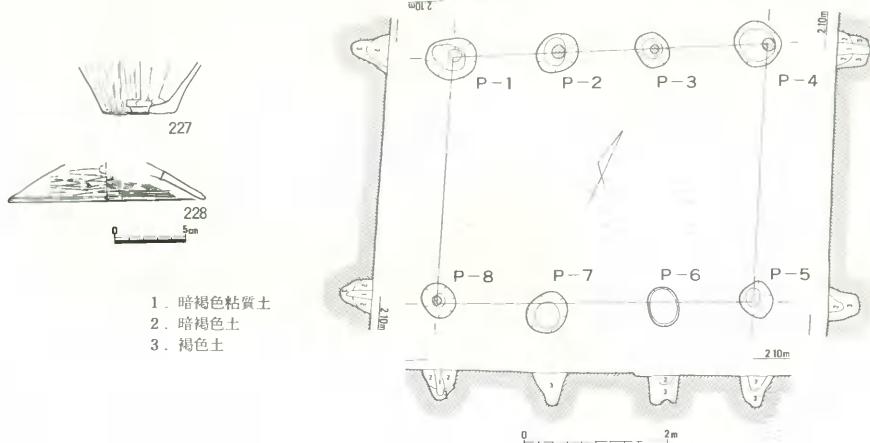
土製品としては、12・13の紡錘車片および14～16の土錘が出土している。

また、第55図の211～218は土壙-4から、219・220は土壙-2から、225・226は土壙-3から出土した土器である。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

## 2. 建物

建物-3 (第58図、図版5-1)



第58図 建物-3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

12-L区の中央やや西寄りにおいて検出された遺構である。8本柱で構成されている3間×1間の掘立柱建物で、桁行4.4m・梁間3.6mを測る。柱穴の規模は、径約60cm・深さ50~70cmである。P-1は柱が抜き取られているが、P-2~4・8の4本は、柱痕が遺存している。柱は径20cm前後と考えられる。建物の軸線は、東北東一西南西を向いている。

図示した遺物は、いずれもP-3埋土中から出土したもので、227は焼成後に底部穿孔した甕形土器の底部片である。228は高杯形土器の脚部片で、4個の円孔が穿たれている。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭と考えられる。

建物-4 (第59図)

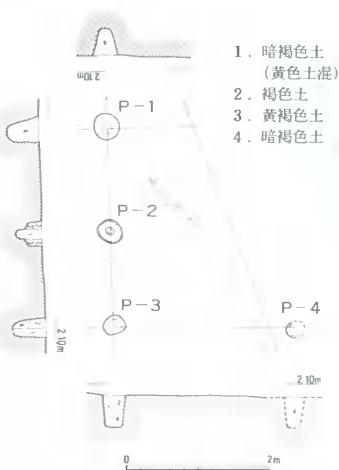
12-L区の東部において検出された遺構である。建物-5のすぐ北東に位置している。東側が用地外におよんでいるため、建物の全容は不明である。検出されたのは、北西側の柱穴3本と南東側の柱穴1本の計4本である。P-1とP-3の距離は2.8m、P-3とP-4の距離は2.5mを測る。柱穴の規模は、いずれも径約40cm・深さ35~40cm程度を測り、P-2およびP-3には柱痕が遺存している。柱は径20cm前後と考えられる。建物の軸線は北東一南西を向いている。

柱穴内などからの遺物は、認められない。

時期は検出状況などから、古墳時代初頭と考えられる。

建物-5 (第60図)

12-L区の南東部において検出された遺構である。建



第59図 建物-4 (1/80)

物-4の南西に位置している。東側が用地外におよんでいいため、建物の全容は不明である。検出されたのは、南西側の柱穴2本と北東側の柱穴1本の計3本のみである。P-1とP-2の距離は2.6m、P-2とP-3の距離は1.6mを測る。柱穴の規模は、径約50cm・深さ50~60cmで、いずれも柱痕が遺存している。柱は径20cm前後と考えられる。建物の軸線は、北東-南西を向いている。

時期は検出状況などから、古墳時代初頭と考えられる

### 3. 井 戸

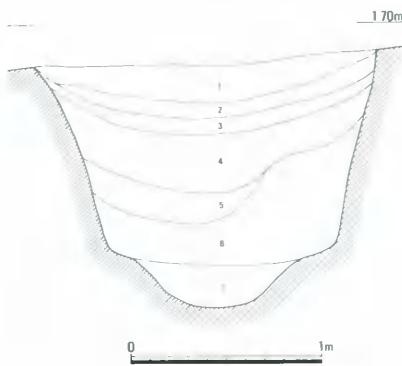
井戸-1（第61図、図版5-2）

11-J区のほぼ中央、用地境において検出された遺構である。検出された平面形は、北東-南西方向が僅かに長い楕円形を呈している。規模は、長径190cm・短径165cmで、検出面からの深さは130cmを測る。底の高さは、海拔0.2mである。底は、中央部が20cm程一段低くなっている。

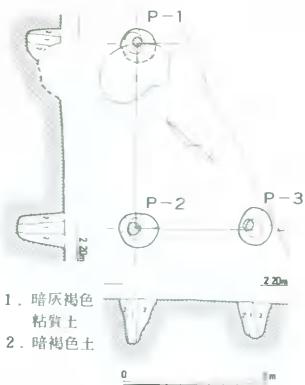
埋土は、上層の1~3層は粘質微砂がレンズ状に堆積し、4層の暗茶褐色粘質土を間に挟み、下層の茶褐色粘質微砂が埋積している。最下層は、地山混じりの淡黄灰色粘質微砂である。

遺物は、それほど多くなく、図示したもの以外は細片である。229は口縁端部が上方に立ち上がった甕形土器で、体部外面はハケメ調整し、下半はヘラミガキされている。内面は肩部までヘラケズリされている。

時期は、出土遺物から古墳時代前半である。

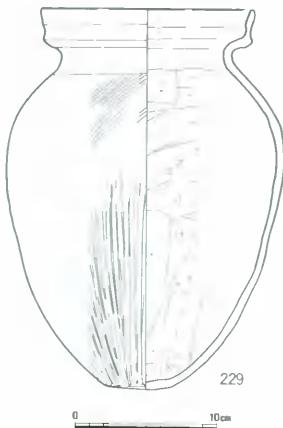


第61図 井戸-1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第60図 建物-5 (1/80)

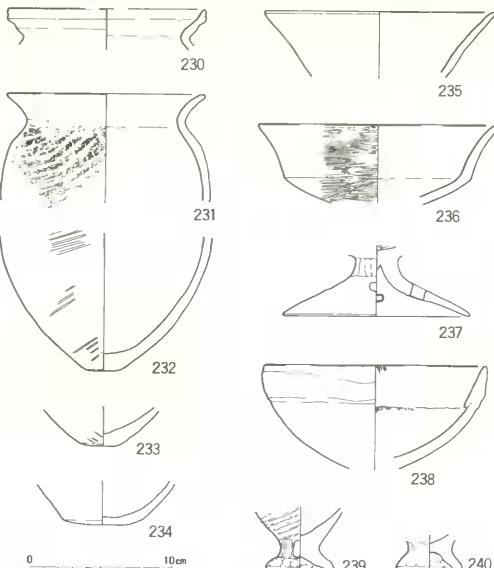
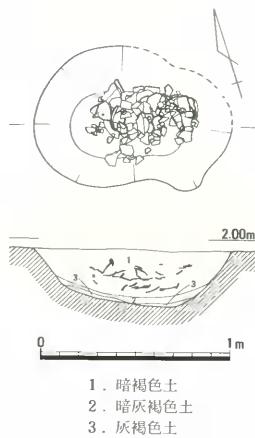
1. 暗灰褐色  
粘質土
2. 暗褐色土



229

## 4. 土 壤

土壤-9 (第62図)



第62図 土壌-9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

12-L区の南東部において検出された遺構で、建物-5の柱穴に切られている。検出平面は、東西方向がやや長い不整楕円形を呈する土壙である。規模は、長径100cm・短径75cmを測る。深さは、最も深い中央部で、30cmある。埋土は、上層が暗褐色土で、多くの炭・焼土が含まれている。下層の2・3層は、底部に貼りついている暗灰褐色土と、灰褐色土が堆積している。

図示した土器は、いずれも1層から出土している。230～234は、甕形土器で、体部外面はタタキで調整されている。235～237は高杯形土器で杯部は、内外面とも細かくヘラミガキされている。脚裾部には、4個の円孔が穿たれている。238は鉢形土器、239・240は製塩土器の台部片である。

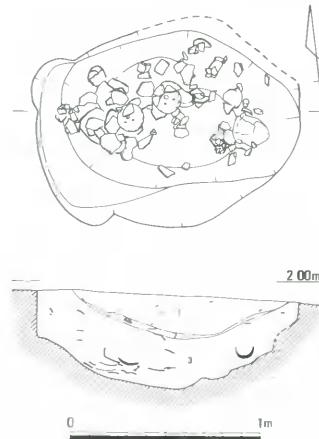
時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

土壤-10 (第63・64図、図版5-3)

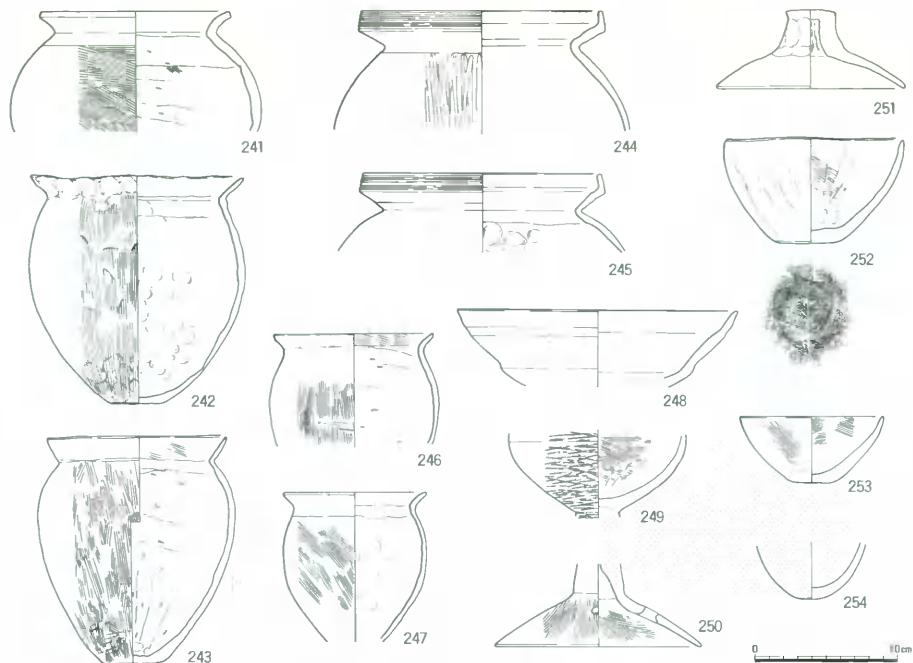
12-L区の北西部において検出された遺構で、建物-3の北3m程に位置している。平面形は、東一西方向に長い不整楕円形を呈する土壙である。規模は、長径140cm・短径110cmを測る。深さは、最も深い中央部で、50cmある。

埋土は、1層が暗灰褐色土、2層が灰褐色土で炭を多く含んでいる。3層は暗茶褐色粘質が埋積している。

遺物は各層から出土しているが、3層中に完形の土器が多く含まれている。241～245はいずれも甕形土器である。このうち241～243・246・247は、口縁部が「く」の字状に外反するもので、体部外面はハケメにより調整されている土器である。一方244・245は、外反した口縁端部が上方に立ち上がり、端部外面に8～9条の櫛描き沈線が巡る、い



第63図 土壌-10 (1/30)



第64図 土壌-10出土遺物 (1/4)

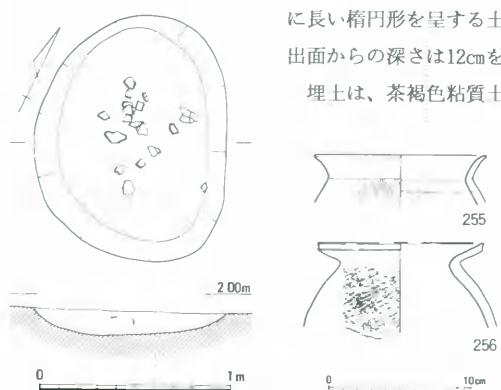
わゆる「吉備甕」と言われているものである。今回の高下遺跡の発掘調査では、ほとんど出土していない甕形土器であり、土壌-10はこの甕を伴う唯一の遺構である。

248～250は高杯形土器、251は蓋形土器、252～254は鉢形土器である。なお、252の底部外面には、木の葉の圧痕がついている。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土壌-11（第65図）

11-L区の北東部において検出された遺構である。平面形は南-北に長い楕円形を呈する土壌である。規模は長径130cm・短径100cm、検出面からの深さは12cmを測る。底面は、皿状を呈している。埋土は、茶褐色粘質土が一層である。

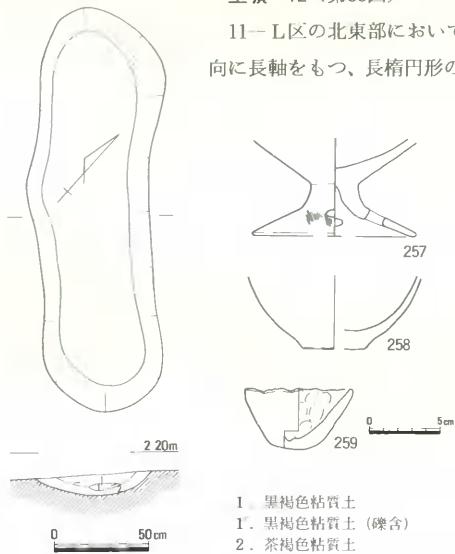


第65図 土壌-11 (1/30)・出土遺物 (1/4)

遺物は、土器片が若干出土しているが、いずれも細片である。図示できたのは、いずれも口縁部が「く」の字状に外反している甕形土器で、255は体部外面は、ハケメ調整されている。一方256はタタキによる調整がなされ体部の器壁はやや厚い。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭と考えられる。

## 土壤-12 (第66図)



第66図 土壌-12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

さ125cm以上・幅60cmを測り、検出面からの深さは34cmを測る。埋土は地山混りの暗褐色土が一層である。出土遺物としては、土器のほかに碧玉製の管玉の破片や土錘がある。260は「く」の字状に外反

面からの深さは11cmを測る。底面は、皿状を呈している。埋土は、上層の黒褐色粘質土と、下層の茶褐色粘質土がレンズ状に堆積している。

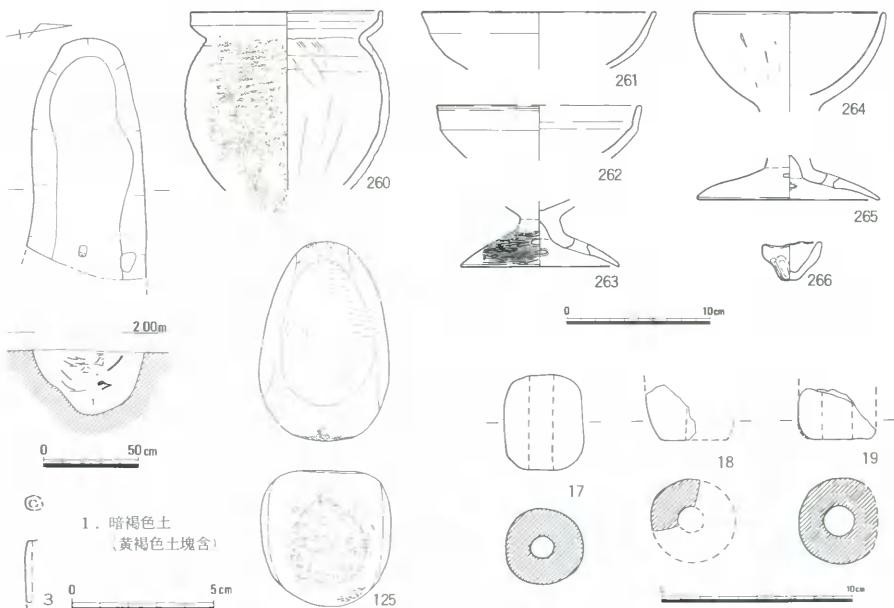
出土遺物として、図示した土器などがある。257は高杯形上器、258は鉢形土器である。259は手捏ねの鉢形土器土器である。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

## 土壤-13 (第67図)

12-L区の中央部において検出された遺構で、建物-3のすぐ東に位置している。平面形は東一西方向に長い土壌であるが、

東端部は、側溝にあたり判然としないが長



第67図 土壌-13 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

した口縁端部が上方に立ち上がる甕形土器で、体部外面はタタキである。261～265は高杯形土器、266は手捏ね土器である。125は角閃玢岩製の敲石である。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土壤-14（第68図）

12-Mの南部において検出された遺構で、不整形な平面形を呈する土壤である。規模は、140×105cm程で、検出面からの深さは最も深いところで35cmを測る。埋土は三層あり、1層の暗茶色粘質土から土器などが出土しているが、いずれも細片である。267は甕形土器、268～270は鉢形土器である。

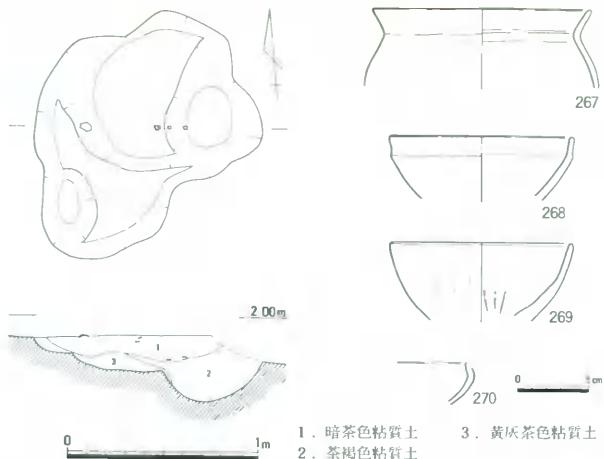
時期は、出土遺物などから古墳時代初頭と考えられる。

#### 土壤-15（第69図）

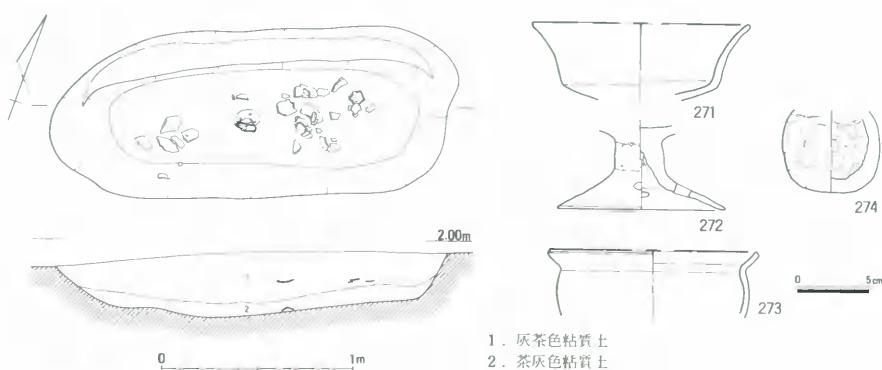
12-Mの南部において検出された遺構で、東一西方向に長い舟形の土壤である。規模は、長軸207cm・短軸90cmを測り、検出面からの深さは34cmをある。底面は概ねなだらかで、北側に段をもつ。埋土は二層あり、上層は灰茶色粘質土が下層に茶灰色粘質土が堆積している。

土器はいずれも細片が多く、図示できたのは僅かである。271・272は高杯形土器で、淡黄褐色を呈する色調で砂粒を多く含む。同一個体の可能性がある。273は鉢形土器の口縁部である。274は手捏ね土器で、黒灰褐色を呈する色調で石英などを多く含む。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。



第68図 土壌-14 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第69図 土壌-15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壤-16(第70図)

11-Lの東部において検出された遺構で、南-北方向に長軸をもち橢円の平面形を呈する土壤である。規模は、長径133cm・短径88cmで、検出面からの深さは、最も低い中央部で40cmを測る。埋土は、概ね二層であるが、2層の茶褐色粘質土には、炭・焼土などが多く含まれている。

土器は細片が多く、図示できたものは僅かである。275~278はいずれも高杯形土器で、杯部は内・外面とも丁寧にヘラミガキされている。

275・276はともに精製された粘土でつくられた淡黄桃色を呈するもので同一個体の可能性がある。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

## 土壤-17(第71図)

10-K区の北東部において検出された遺構で、円形に近い平面形を呈する土壤である。規模は、径55cm程で、深さ約20cmを測る。淡灰茶色粘質微砂の埋土中に279の壺形土器がすっぽりと埋まっている。段をもった肩部から「く」の字状に外反した口縁部がそのまま横に端面をもっている。胴部の最大径は、中央より少し上にある。体部外面は、ヘラミガキされている。内面は肩部が指ナデ後ハケメ、胴中央から肩部は

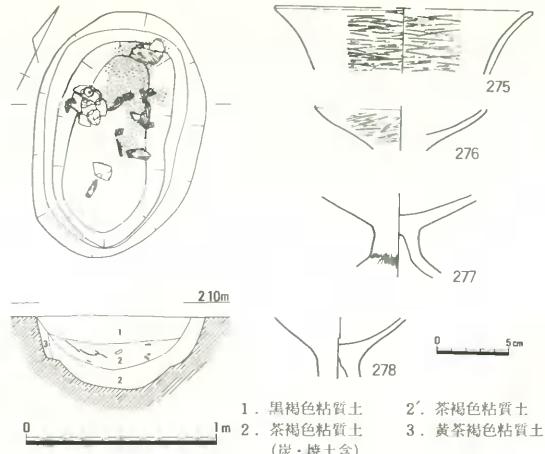
指ナデ、胴下半はヘラケズリされている。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

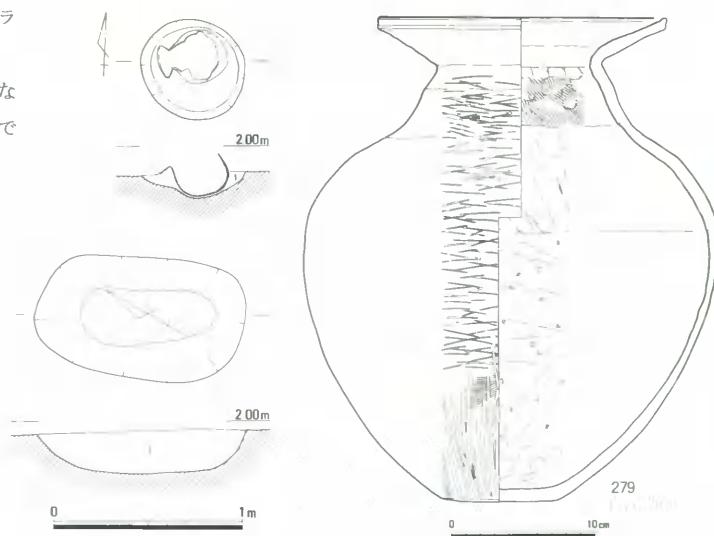
## 土壤-18

(第71図)

11-Mの南東部、竪穴住居-7の東側において検出された遺構である。南-北方向に長軸をもち、長椭円形の平面形を



第70図 土壤-16(1/30)・出土遺物(1/4)



第71図 土壤-17・18(1/30)・土壤-17出土遺物(1/4)

呈する土壙である。規模は、長径110cm・短径65cmを測り、検出面からの深さは15cmである。底面は平坦で、埋土は茶灰色粘質土が一層である。

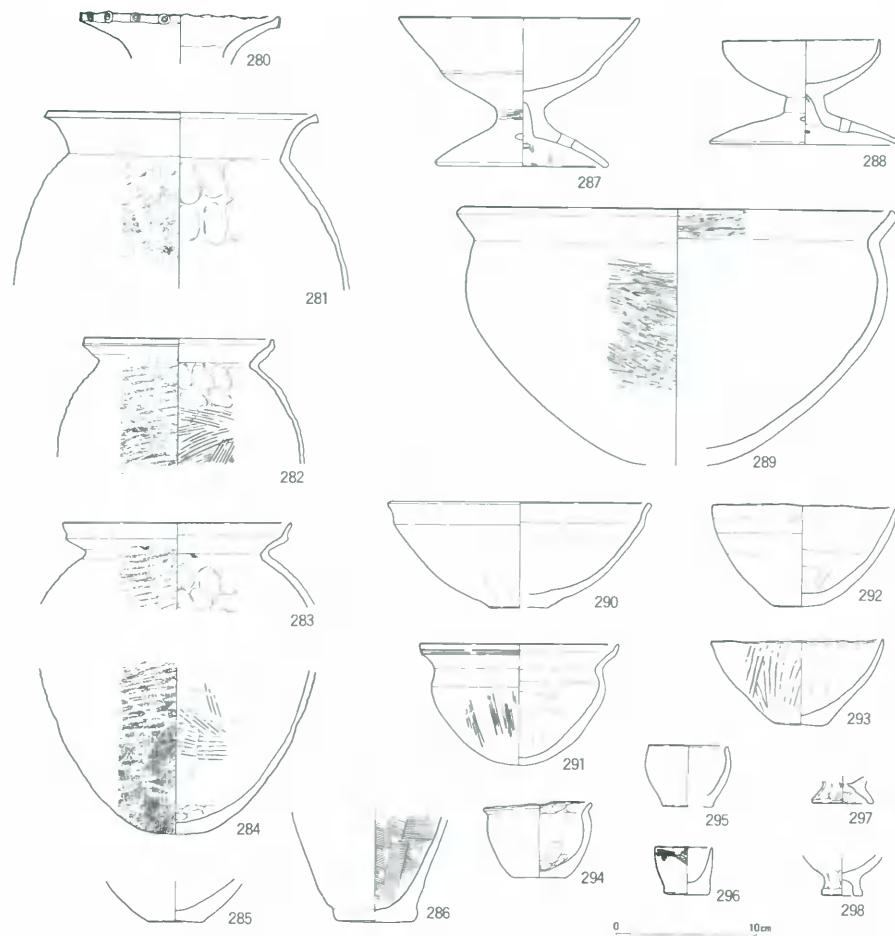
遺物は、土器片が出土しているものの細片で図示できるものはなかった。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土壙-19（第72図）

12-L区のほぼ中央部、建物-4の西隣において検出された遺構である。北東-南西方向に長軸をもち、橢円形の平面形を呈する土壙である。規模は、長径130cm・短径110cmを測り、検出面からの深さは約33cmである。底面は中央部がやや窪んでいる。埋土は暗褐色粘質土が一層である。

埋土中から多くの土器が出土している。280は壺形土器の口縁部で、やや立ち上がり気味に拡張した端部外面に、円形浮文を貼り付けている。281～284は甕形土器で、外面はタタキにより調整されている。287・288は高杯形土器で、外面などは丁寧にヘラミガキされている。脚裾部に円孔が4個穿



第72図 土壙-19出土遺物 (1/4)

たれている。289～293は鉢形土器で、289はヘラミガキされている。294～296はミニチュア土器297・298は製塩土器の脚部片である。時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土壤-20（第73図）

11-L区の中央部や北

寄りにおいて検出された遺構で、土壤-11の西2mほどにある。南北に長軸をもつ橢円形を呈し、規模は、長径125cm・短径90cm・深さ28cmを測る。埋土は、黒褐色粘質土が一層である。

出土遺物として、229・300の土器がある。299は壺形土器で肩部外面はハケメ調整されている。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土壤-21（第73図）

11-J区の北部の用地境において検出された遺構で、平面形はほぼ円形を呈する。規模は、直径70cm・深さ18cmを測る。埋土は、焼土を含む茶褐色粘質微砂が一層である。出土遺物として、301の壺形土器などが出土している。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土壤-22（第73図）

11-M区の南東部において検出された遺構で、堅穴住居-7の2.5m東に位置している。南北にやや長い不整橢円の平面形を呈し、規模は、長径57cm・短径48cm・深さ15cmを測る。埋土は、淡茶灰色粘質土が一層である。出土遺物として、302の高杯形土器などが出土している。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土壤-23（第74図）

8-L区の北東部、用地境付近において検出された遺構で、平面形はほぼ円形を呈する。規模は、直径32cm・深さ25cmほどの柱穴状の土壤である。埋土は、上層が暗灰黒色微砂で土器を含んでいる。下層は暗灰褐色砂質土である。303・304の須恵器が出土している。

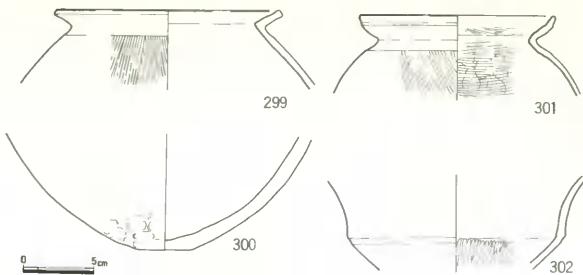
時期は、出土遺物などから古墳時代後半である。

#### 土壤-24（第74図）

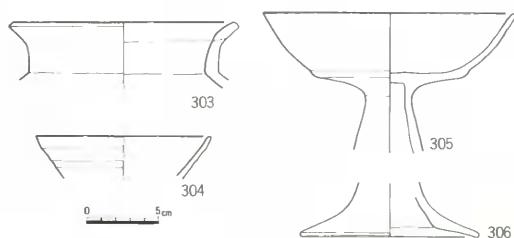
9-K区の中央部やや西において検出された遺構で、不整形の土壤である。規模は、240×100cm・深さ16cm程度で、床面は凹凸がある。埋土は、炭を含む暗茶灰褐色粘質微砂が一層である。

出土遺物としては、305・306の高杯形土器が出土している。

時期は、出土遺物などから古墳時代後半である。



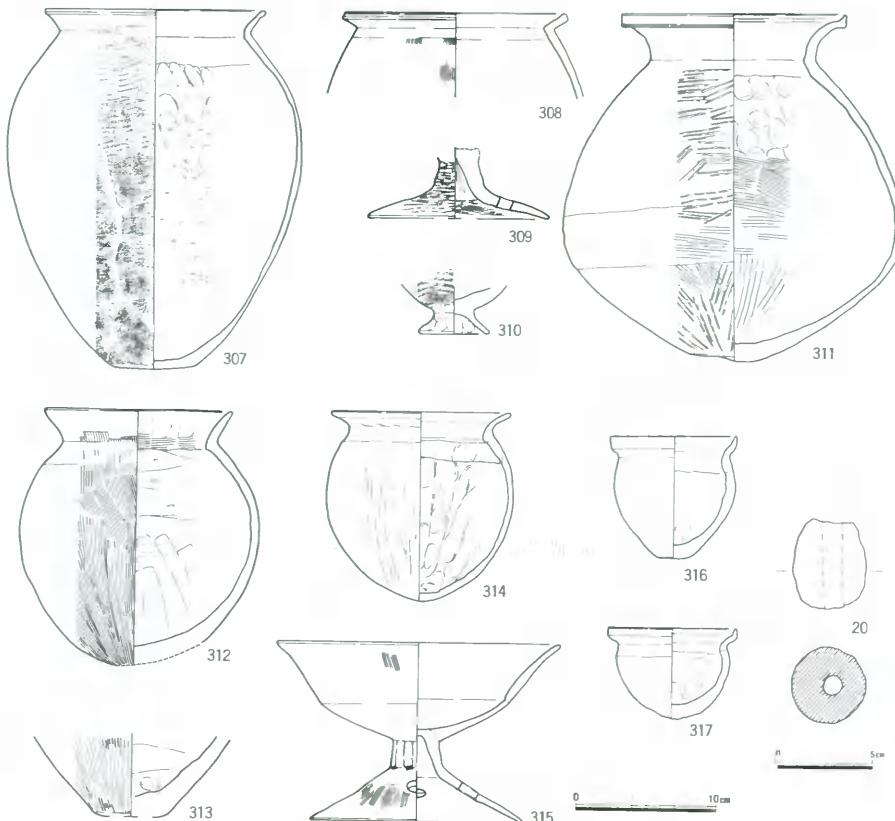
第73図 土壤-20・21・22出土遺物 (1/4)



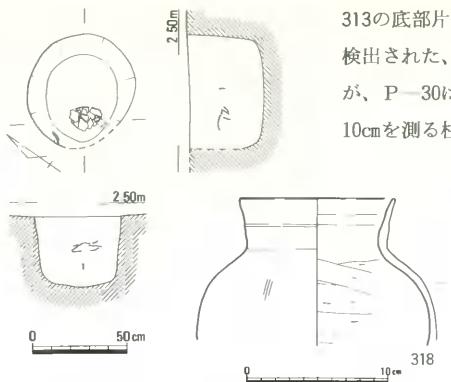
第74図 土壤-23・24出土遺物 (1/4)

## 6. 柱 穴

11-L区から12-M区および、8・9-M区から10-K区においては、古墳時代の土器を含む柱穴や土壙状の遺構が検出されている。307・308は、12-L区の北東部で検出された長方形の土壙状遺構から出土した土器である。この遺構の性格などは判然としない。P-24は、12-M区の南西部で検出された、径65cm・深さ36cmを測る柱穴である。遺物としては309の高杯形土器の脚部が出土している。P-25・26は、12-L区の西端中央部において検出された柱穴で、P-25は径60cm・深さ26cmを測り、埋土中から310の製塙土器の脚部および316・317の小形甕形土器が出土している。また、P-26は径55cm・深さ35cmを測り、311の壺形土器が出土している。P-27は、10-L区の東端中央部で検出された、径120cm・深さ45cmを測る柱穴で、312の甕形土器が出土している。ほぼ完形の土器で、外面はハケメ、内面体部上半はヨコ方向のヘラケズリ、下半は上方にヘラケズリされている。赤色砂粒を含む胎土である。P-28は、12-L区の西部において検出された遺構で、90×60の梢円形を呈し、深さ25cmを測る。



第75図 柱穴内出土遺物 (1) (1/4 · 1/3)



第76図 P-32 (1/30)・出土遺物 (1/4)

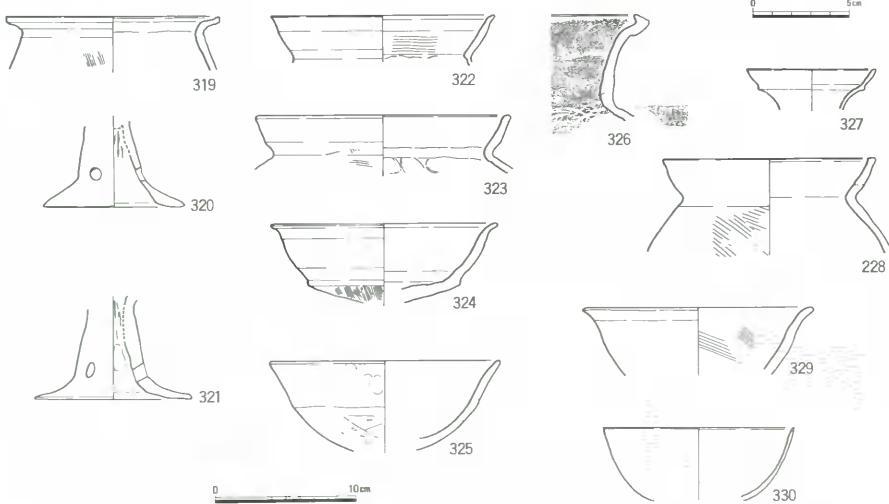
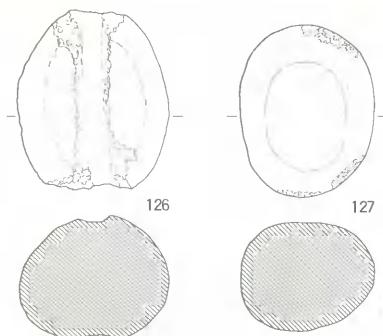
P-33は9-L区の北部で、P-34は、南部中程で検出された遺構である。P-33は、径30cm・深さ47cmを測り、埋土上部から重さ663.0gの石錘126が出土している。また、P-34は径58cm・深さ25cmを測り、埋土から重さ525.6gの敲石127が出土している。材質はいずれも粗粒花崗岩である。

P-35は、9-L区の北西部で検出された、径40cm・深さ27cmを測る柱穴で、319・320の土器片が出土している。P-36は、8-M区の東端部で検出された遺構で、径140cm・深さ14cmを測る。321の高杯形土器が出土している。

313の底部片が出土している。P-29、は11-L区の南東部で検出された、径68cm・深さ10cmを測る柱穴で、314の甕形土器が、P-30は、12-L区の中央部で検出された、径30cm・深さ10cmを測る柱穴で、315の高杯形土器が出土している。P-31は、12-M区の南東部において検出された、径38cm・深さ32cmを測る柱穴で、ほぼ完存で重さ60.1gを量る土錘20が出土している。

これらの遺構の時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

P-32は、9-L区の北部で検出された、径58cm・深さ37cmを測る柱穴で、埋土の中程から318の壺形土器が出土している。



第77図 柱穴内出土遺物 (2) (1/3・1/4)

P-37・38は9-L区の北東部においてP-39は南西部において検出された、径50cm・深さ40cm程を測る柱穴状の遺構である。P-37からは322の、P-38からは323の甕形土器と、324の高杯形土器が、P-39から325の鉢形土器が出土している。

これらP-33～39の遺構の時期は、いずれも古墳時代前期である。

P-40は、9-M区の南西部で検出された、径49cm・深さ24cmを測る柱穴で326の須恵器の甕片が出土している。P-41は9-L区の南西部において検出された土壤状の柱穴で、327須恵器や328の甕形土器片が出土している。P-42は、9-M区の北部において検出された、径58cm・深さ18cmを測る柱穴で、埋土は灰茶色粘質砂である。329の鉢形土器が出土している。

P-43は、9-M区の西端部で検出された、径70cm・深さ14cmを測る柱穴で、330の鉢形土器が出土している。いずれも古墳時代中期以降の遺構である。

## 6. 土器溜り

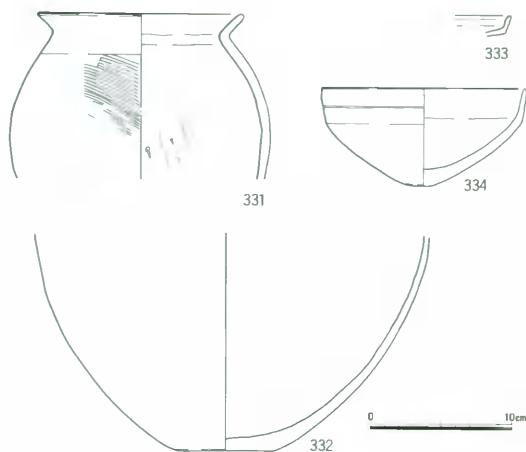
### 土器溜り-4 (第78図)

12-L区の北東部において検出された土器溜りで、東西2m・南北1.5m程の範囲からまとまって上器が出土している。331～333はいずれも甕形土器で、331は体部外面をハケメ調整している。333は口縁端面を上方に折り曲げ、外面に櫛描沈線を巡らせるいわゆる「吉備甕」の口縁部の細片である。

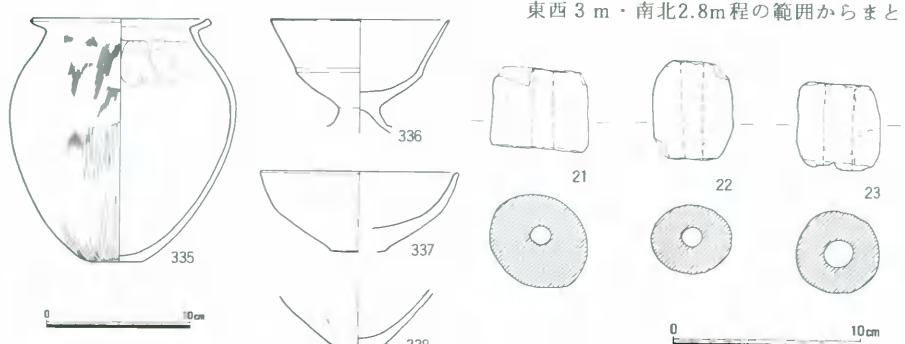
時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

### 土器溜り-5 (第79・80図)

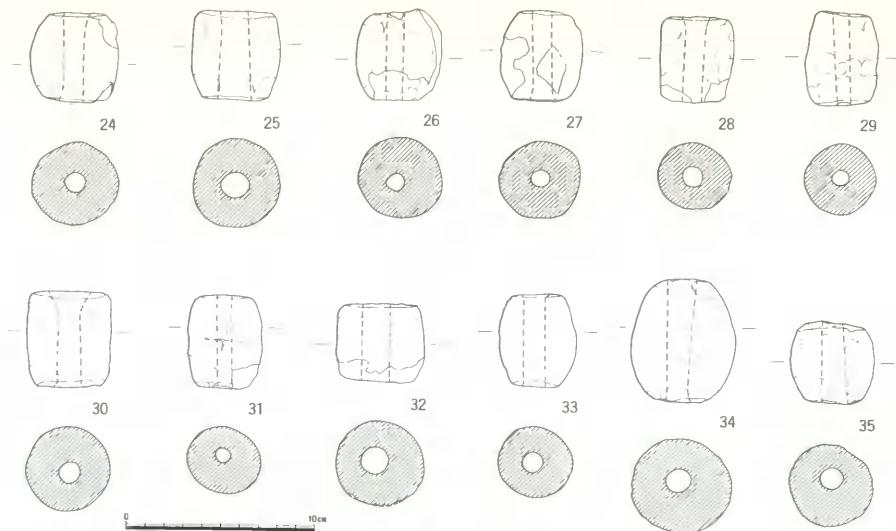
12-L区の北東部において、多量の土錐とともに土器の出土している土壤状の溜りである。遺物は東西3m・南北2.8m程の範囲からまと



第78図 土器溜り-4 出土遺物 (1/4)

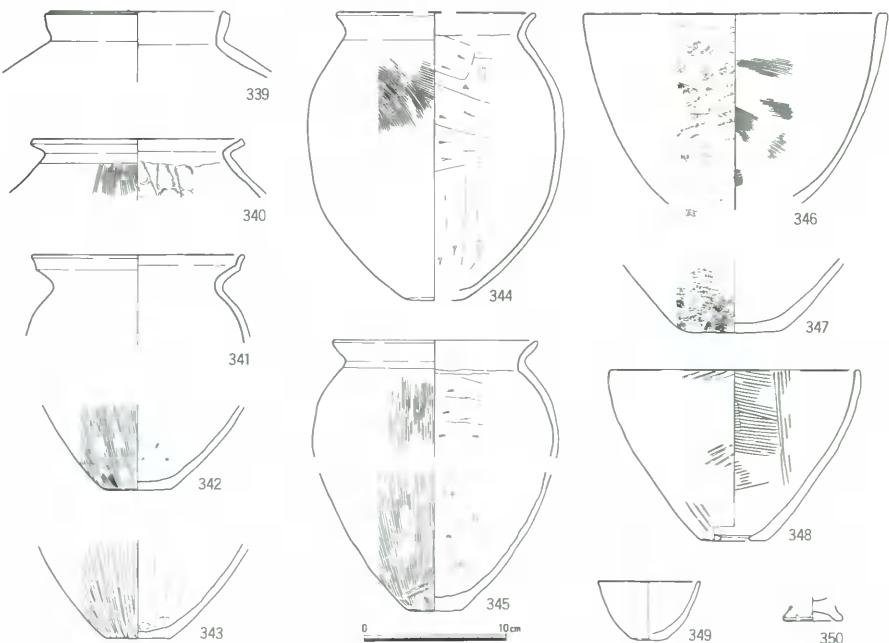


第79図 土器溜り-5 出土遺物 (1) (1/4・1/3)



第80図 土器溜りー5出土遺物（2）(1/3)

まつて出土している。土錘は、ほぼ完存のものだけで15個が出土しており、貯蔵用土壙の可能性が考えられる。時期は、出土している土器などから、古墳時代初頭である。



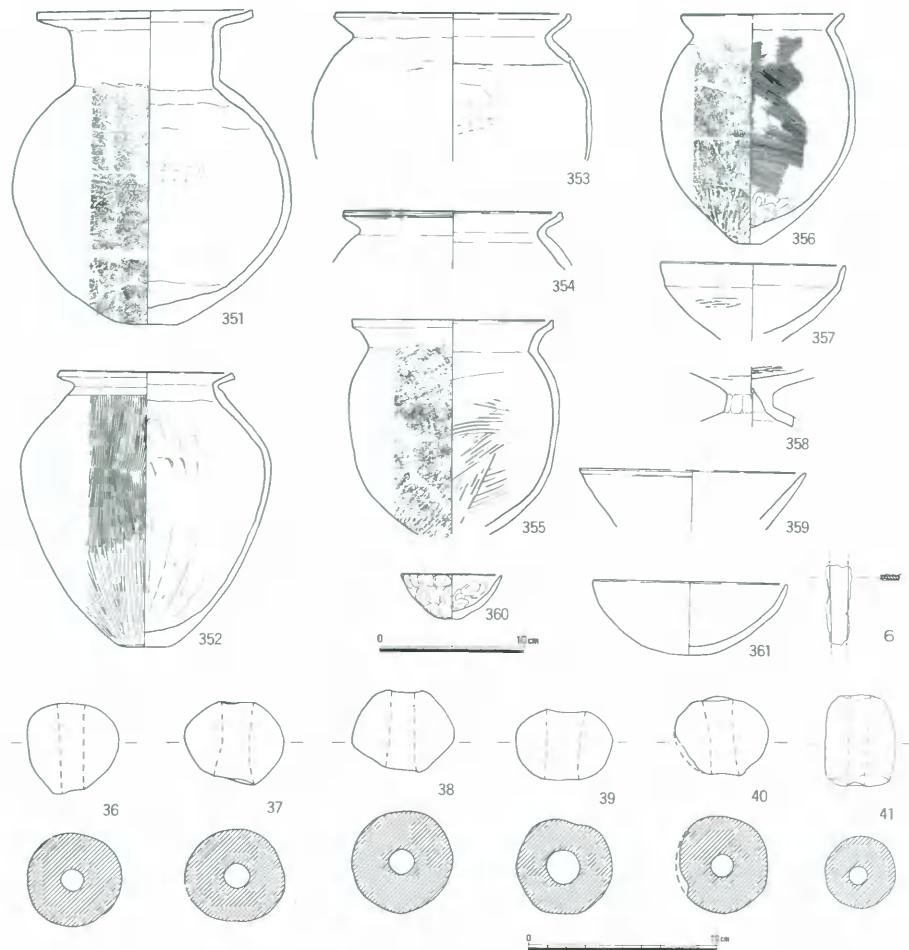
第81図 土器溜りー6出土遺物（1/4）

## 土器溜りー6（第81図）

12-L区の北東部において、検出された土器溜りで、東西2.8m・南北2.3m程の範囲からまとめて土器が出土している。340～345はいずれも甕形土器、346～348は深目の鉢形土器である。346・347は、外面をタタキにより調整しているもので、同一個体の可能性がある。350は製塩土器の脚部片である。時期は、出土遺物などから古墳時代初頭と考えられる。

## 土器溜りー7（第82図）

12-L区の北端部において、東西3.8m・南北3.4m程のやや広い範囲から、完形の土器も含む土器溜りである。351は体部外面をタタキにより調整している壺形土器である。352は体部外面の上半をハケメ、下半をヘラミガキした甕形土器である。353～356は、体部外面をタタキにより調整した甕形土器、357・358は高杯形土器、359～361は鉢形土器である。土器のほかに36～41の土錘が出土している



第82図 土器溜りー7出土遺物 (1/4・1/3)

が、41は他とタイプの異なるものである。また、6は、鉄鎌の基部の一部と見られ、長さ42.4mmが残存し、重さは、3.2gを量る。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土器溜りー8（第83図）

11-L区の南西部において、検出された土器溜りで、 $2.6 \times 1.8\text{m}$ 程の範囲から甕形上器が出土している。

362・364・365は、体部外面をタタキで調整している。365の底部には、

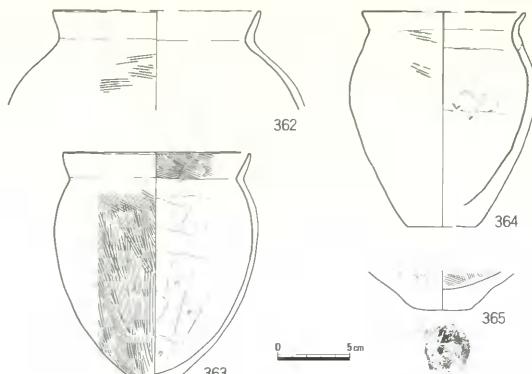
木の葉の圧痕が認められる。363は、体部外面および口縁内面はハケメ調整され、体部内面はヘラケズリされている。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

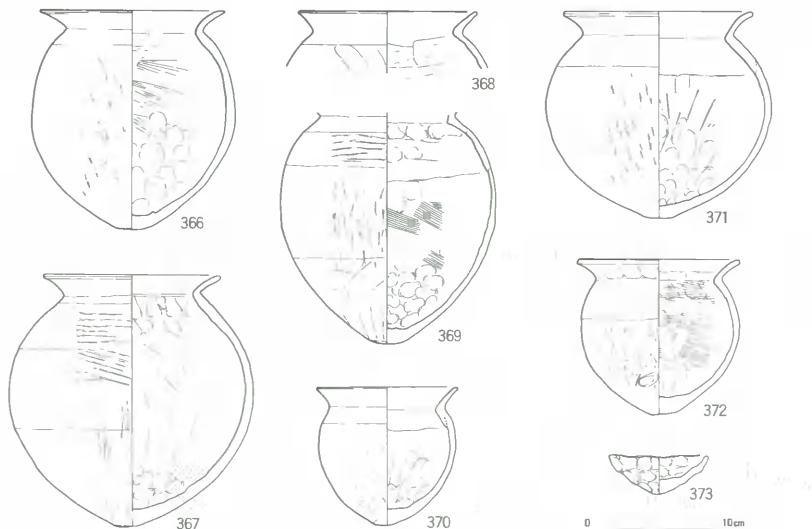
#### 土器溜りー9（第84図、図版6-3）

11-L区の北西部の下がり付近において、完形の土器がまとめて出土していた、溜り状の遺構である。366～372は、体部外面をタタキで調整している甕形土器で、底部は僅かに平底の痕跡を残している。内面は、指ナデされ、一部にハケメが施されている。なお、368の体部内面はヘラケズリされている。373は手捏ねの鉢形土器である。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。



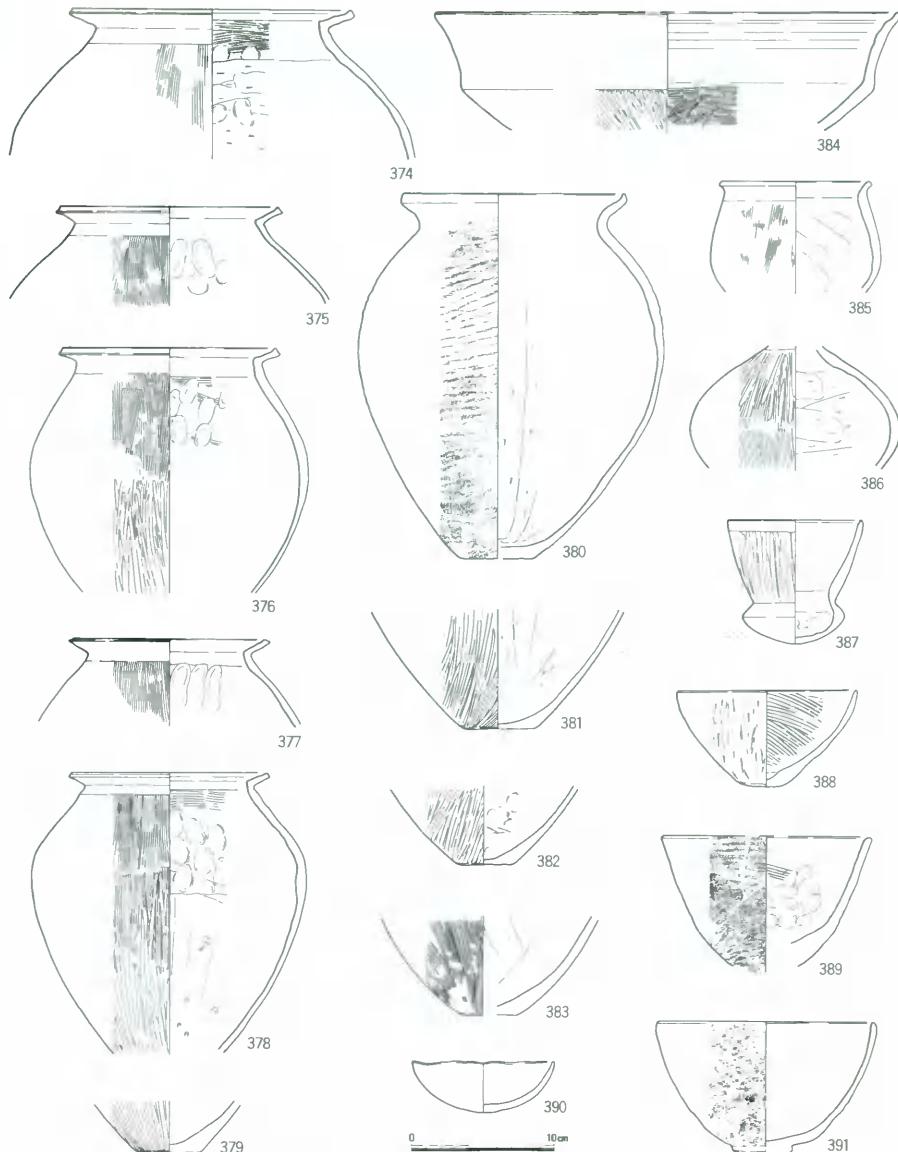
第83図 土器溜りー8 出土遺物 (1/4)



第84図 土器溜りー9 出土遺物 (1/4)

## 土器溜りー10（第85図）

11-J区の中央部の、4×3m程の溜り状の部分から、土器がまとまって出土している。374～383は壺形土器で、380以外は体部外面をハケメおよびヘラケズリで調整し、内面は肩部を指ナデおよびハケメ、下半をヘラケズリしている。380は外面タタキの上器である。384は体部内外面を丁寧にヘラ



第85図 土器溜りー10出土遺物 (1/4)

ミガキした鉢形土器である。

時期は、出土遺物などから古墳時代初頭である。

#### 土器溜り—11～13（第86図）

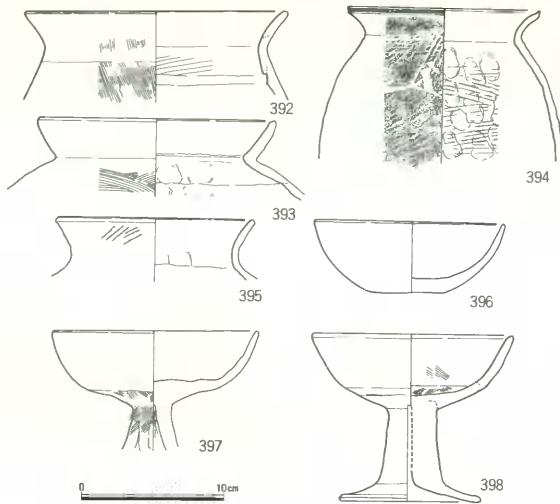
土器溜り—11は、8-L区の北東部で、392・393などの甕形土器が出土している溜りである。土器溜り—12は、11-J区の北西部、土器溜り—10の北側で、394の甕形土器などが出土している溜りである。時期は、いずれも古墳時代初頭である。

土器溜り—13は、10-J区の南西部で検出された溜りで、395～398の土器などが出土している。

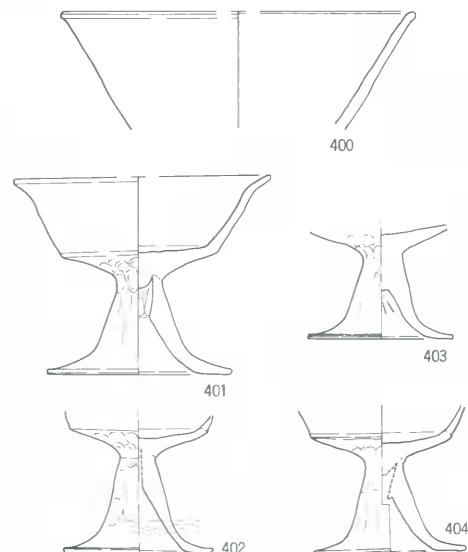
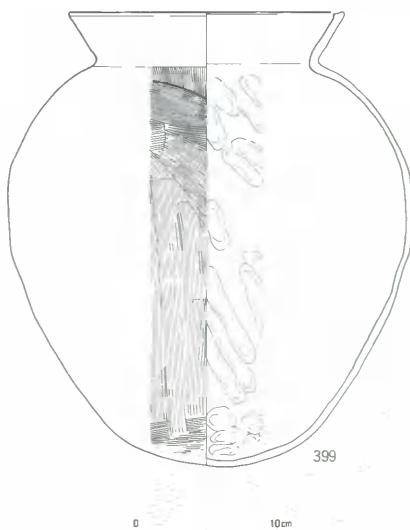
時期は、出土遺物などから古墳時代前期である。

#### 土器溜り—14（第87図）

9-K区の西端部において、検出された土壤状の遺構である。直径1.8m程の範囲から399～404などの土器が出土している。399は外面ハケメ、内面指ナデによる甕形土器である。401～404はいずれも高杯形土器である。時期は、出土遺物などから古墳時代前期である。



第86図 土器溜り—11～13出土遺物 (1/4)

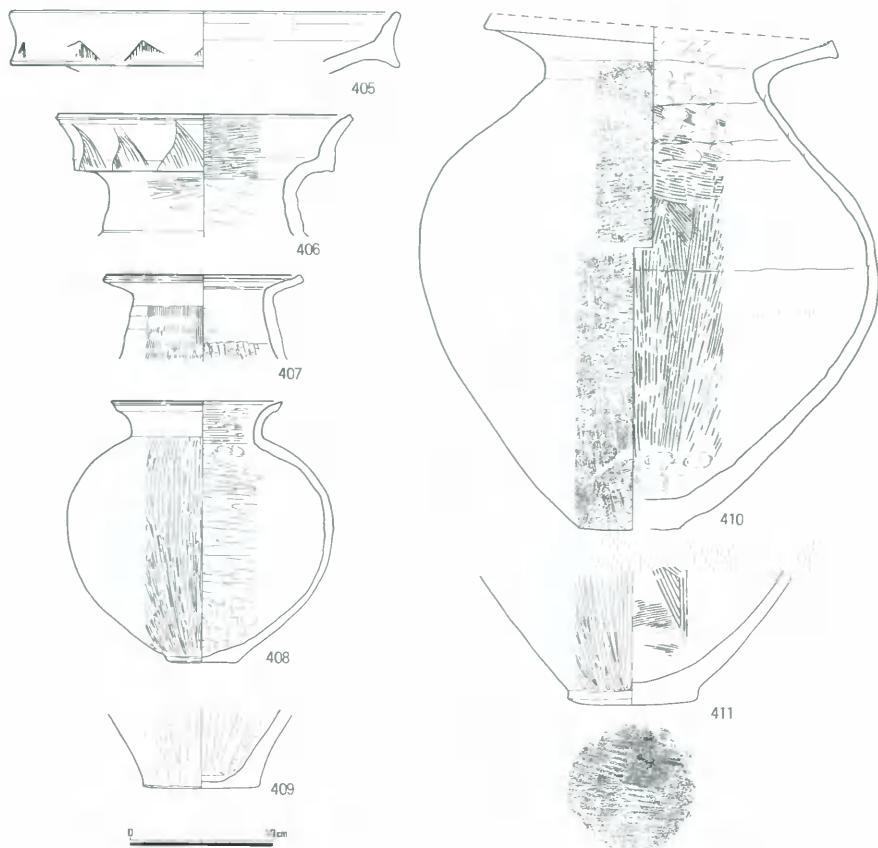


第87図 土器溜り—14出土遺物 (1/4)

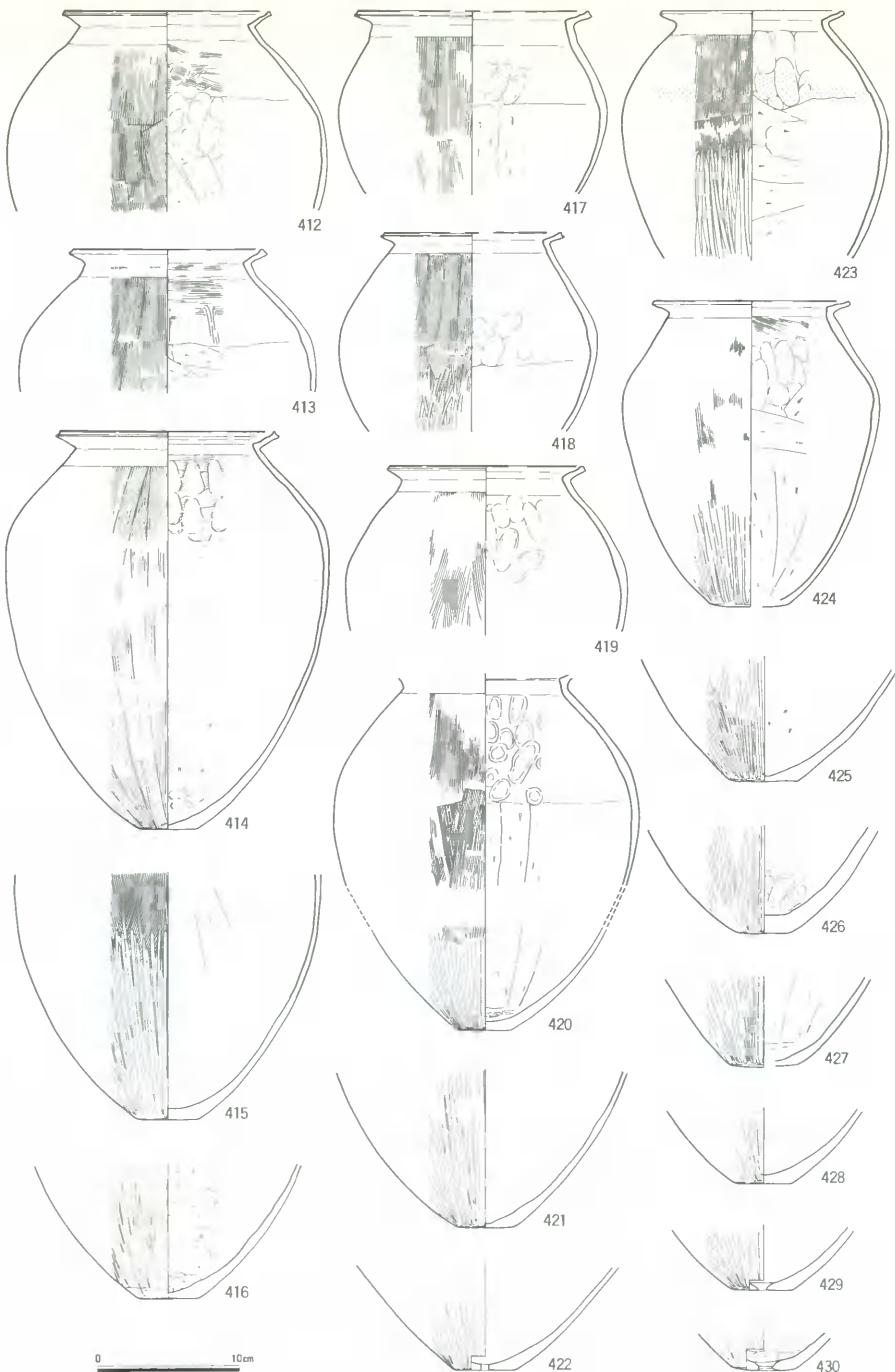
## 7. 斜面堆積

11-M区の中央部から、10-L区の東部を経て10-J区の中央部にかけてのラインを肩部として、古墳時代初頭の遺構が検出される基盤層は、北西ないし西側に向かい、次第に下がっている。この基盤層の「下がり」に堆積している、暗灰茶色粘質土および茶灰褐色粘質微砂中には、完形の上器をはじめとする大量の遺物が含まれており、斜面堆積を形成している。また、11-K区の北西隅を起点に、11-J区の北東部にかけてと、10-J区の中央部東寄りにかけてのラインを肩部に、前者は南西方向へ、後者は東方向へも古墳時代初頭の基盤層は緩やかに下がっている。この「下がり」部分においても、多くの土器などの堆積層が認められる。

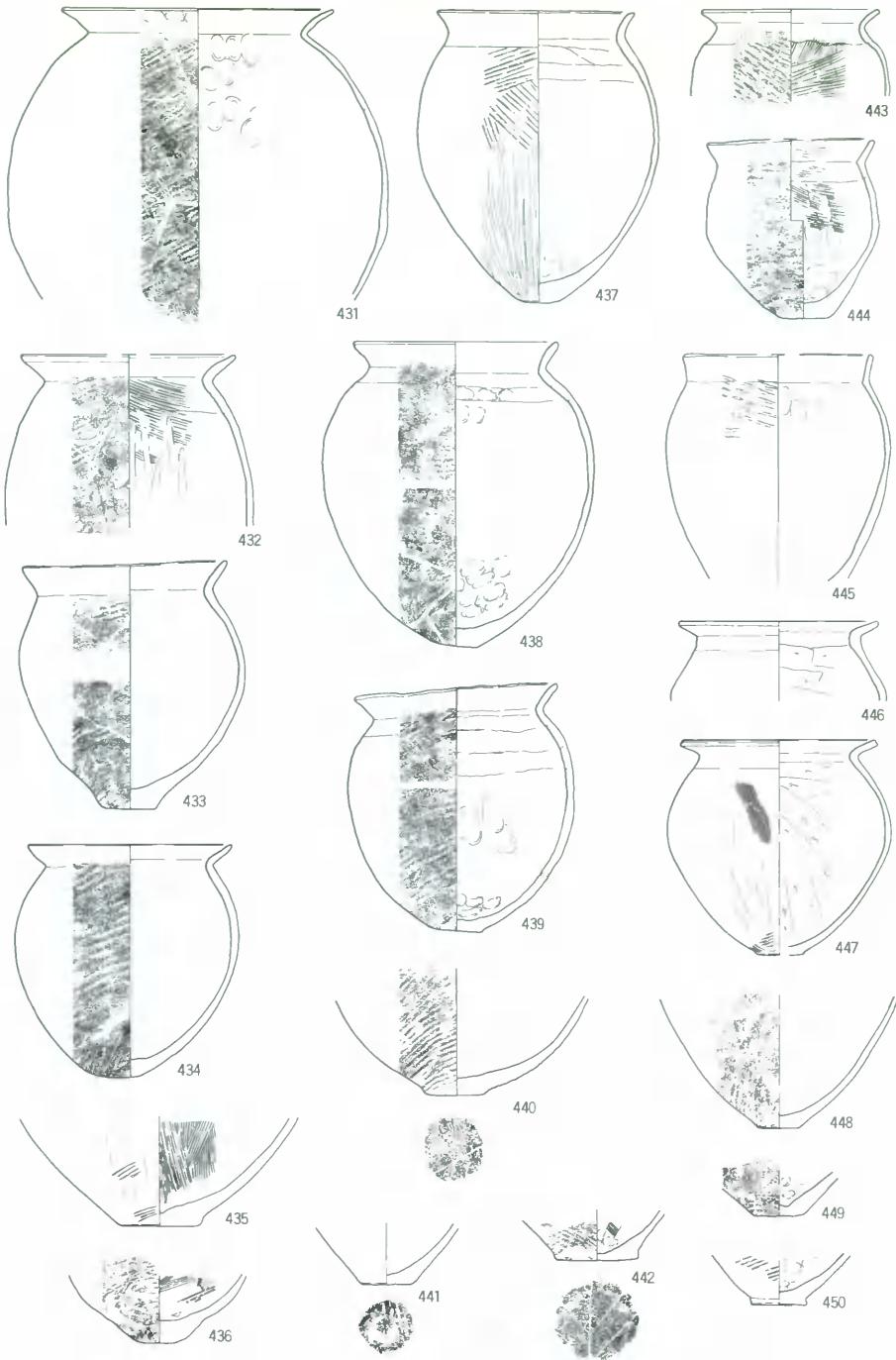
出土遺物としては、大量の壺・甕・高杯・鉢などのほか、器台形土器(474)や手焙り形土器(477)、製塩土器(494~498)、ミニチュア土器(499~506)などの土器がある。このほかに、土錘(42~45)や土器片から転用した紡錘車(46)がある。なお、第89~93図は、11-M区から10-L区にかけての斜面から、第94図は10-K区から10-J区かけての下がりから出土しているものである。



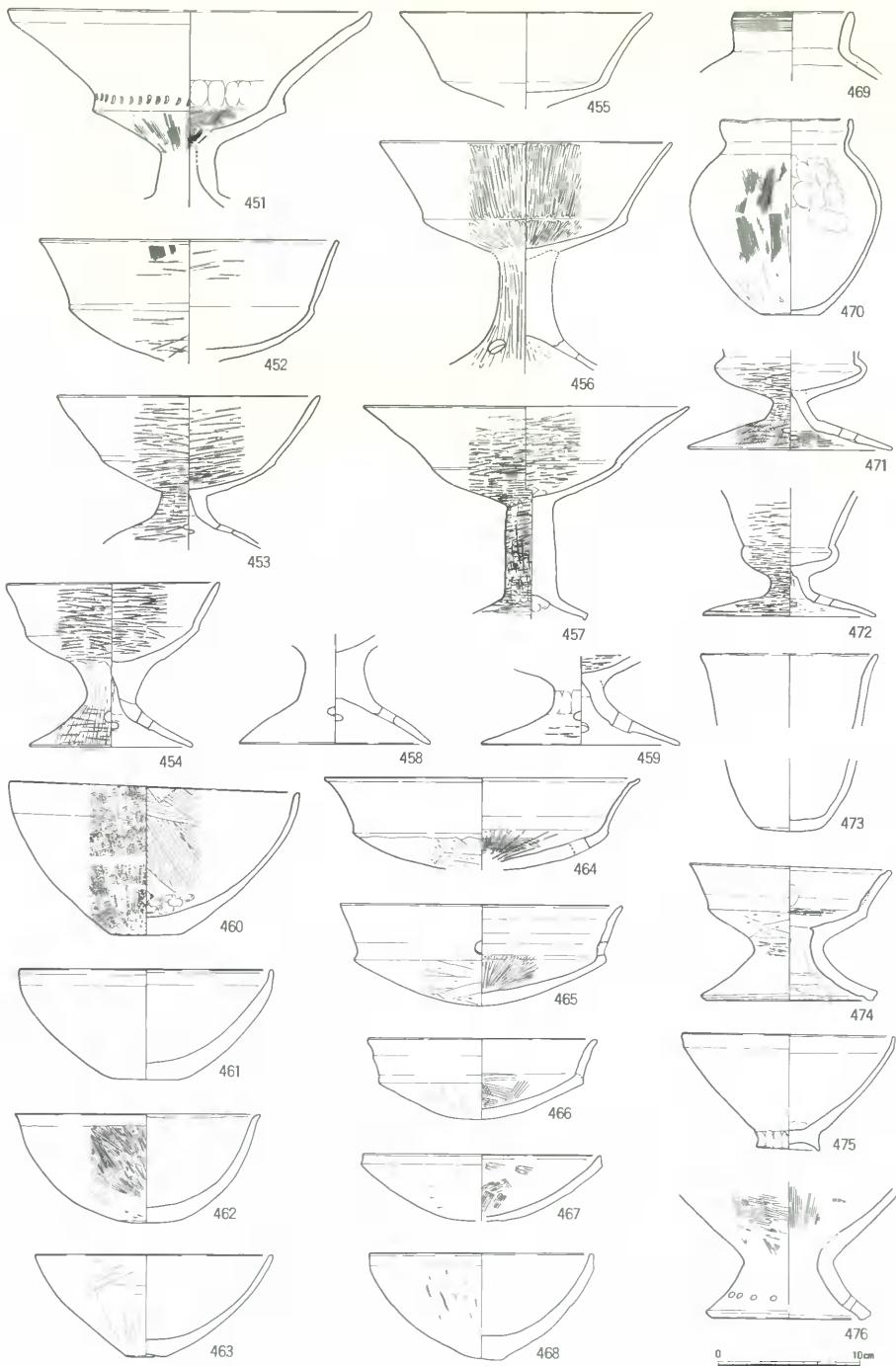
第88図 斜面出土遺物（1）(1/4)



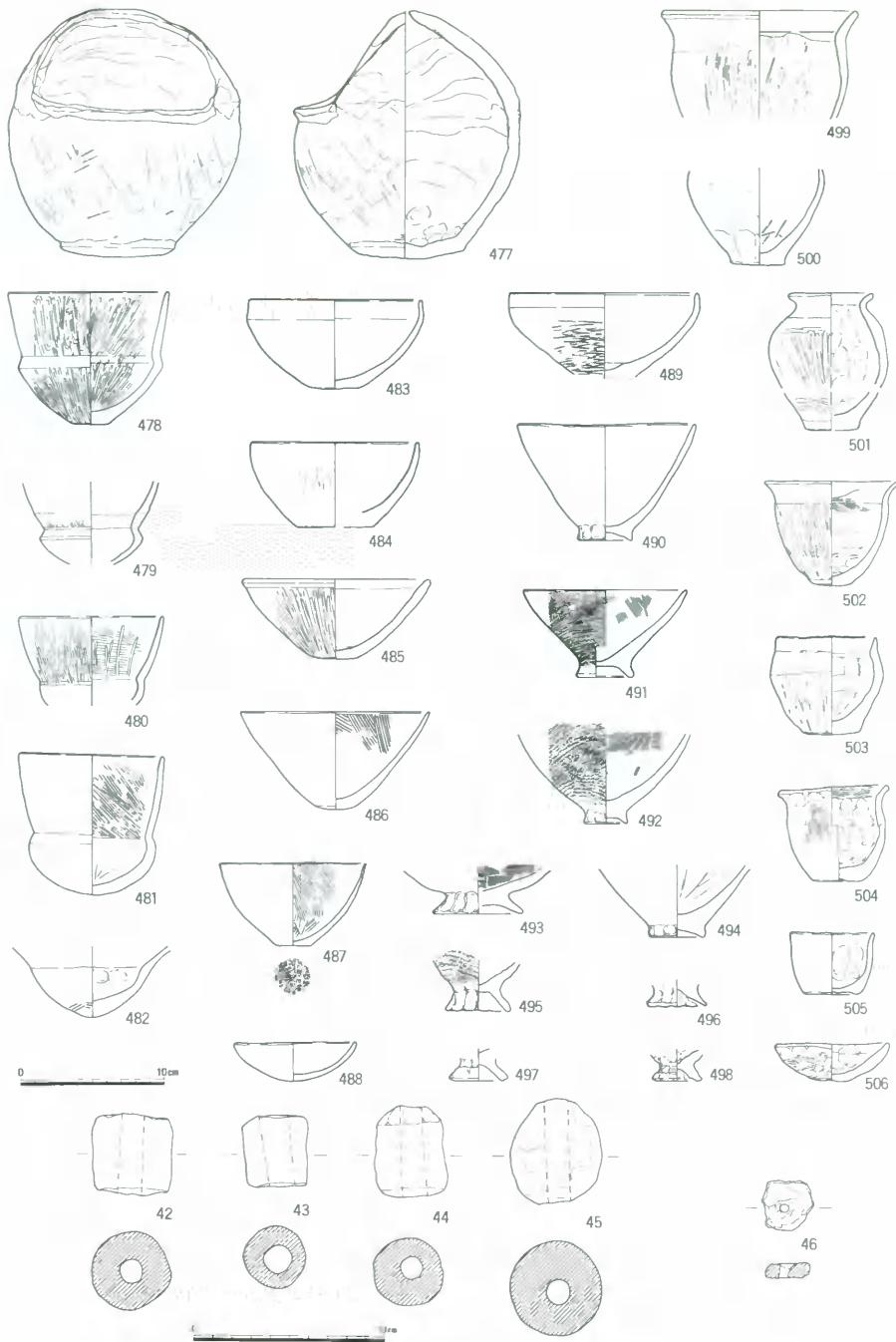
第89図 斜面出土遺物（2）(1/4)



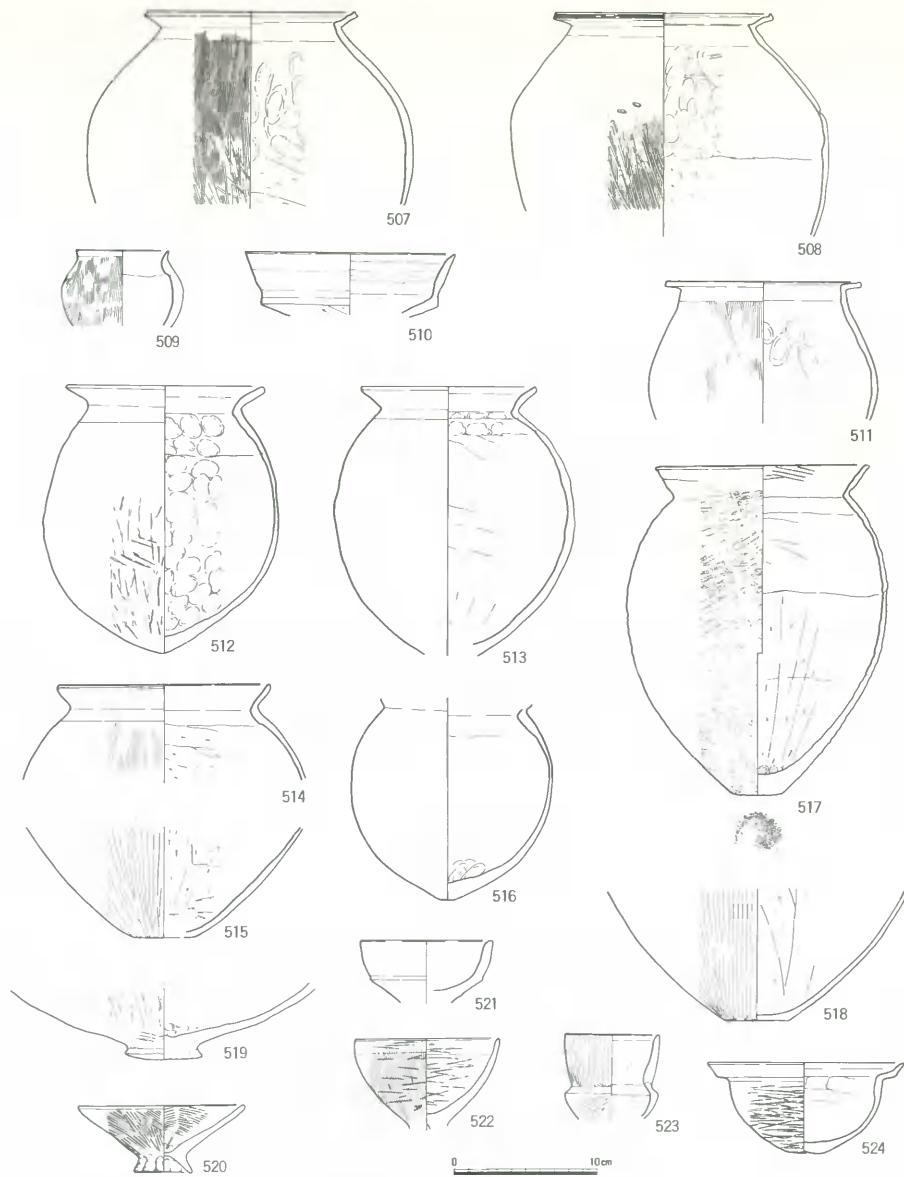
第90図 斜面出土遺物（3）(1/4)



第91図 斜面出土遺物（4）(1/4)

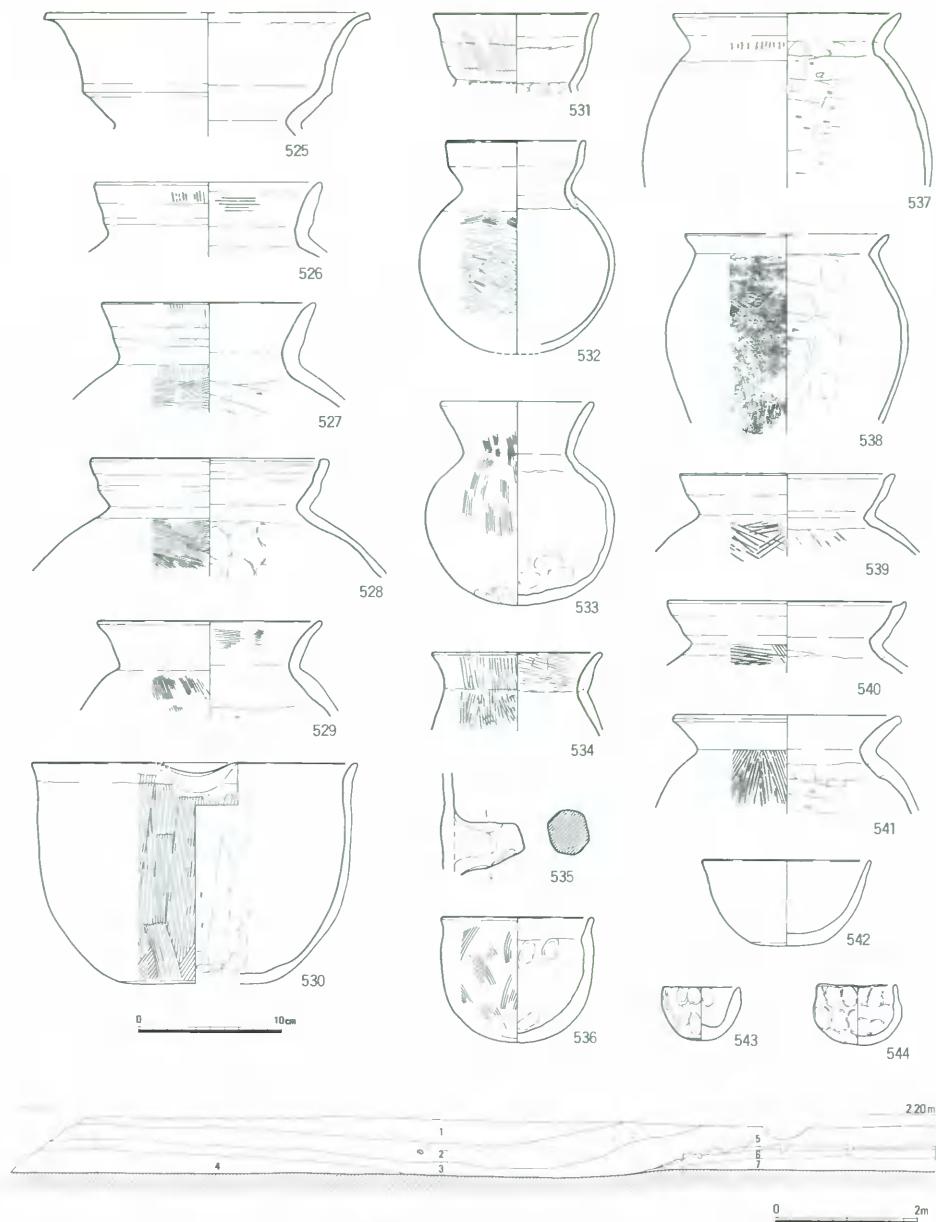


第92図 斜面出土遺物（5）（1/4・1/3）



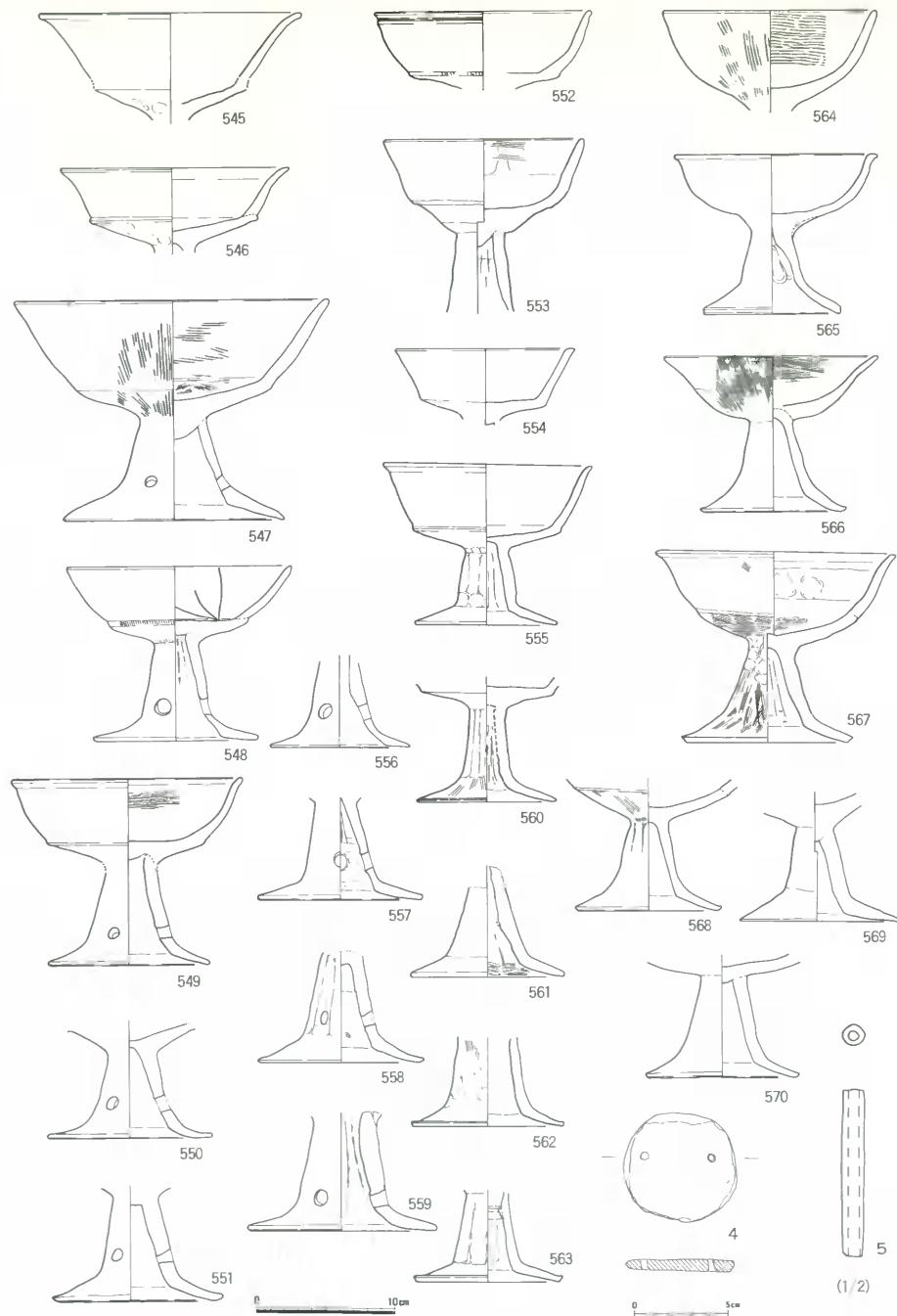
第93図 斜面出土遺物（6）(1/4)

11-M区から10-L区にかけては、斜面堆積土の上面に暗灰褐色土の溜りが形成されている。この溜りからは、壺・甕・高杯・鉢などいずれも古墳時代前期の土器が出土している。このほかに、有孔円板（4）と管玉（5）が出土している。有孔円板は、直径29.5mm・厚さ3.6mm・重さ6.3gの滑石製である。管玉は、長さ30.0mm・直径4.0mm・重さ0.72gを測る。材質は、グリーン・タフである。

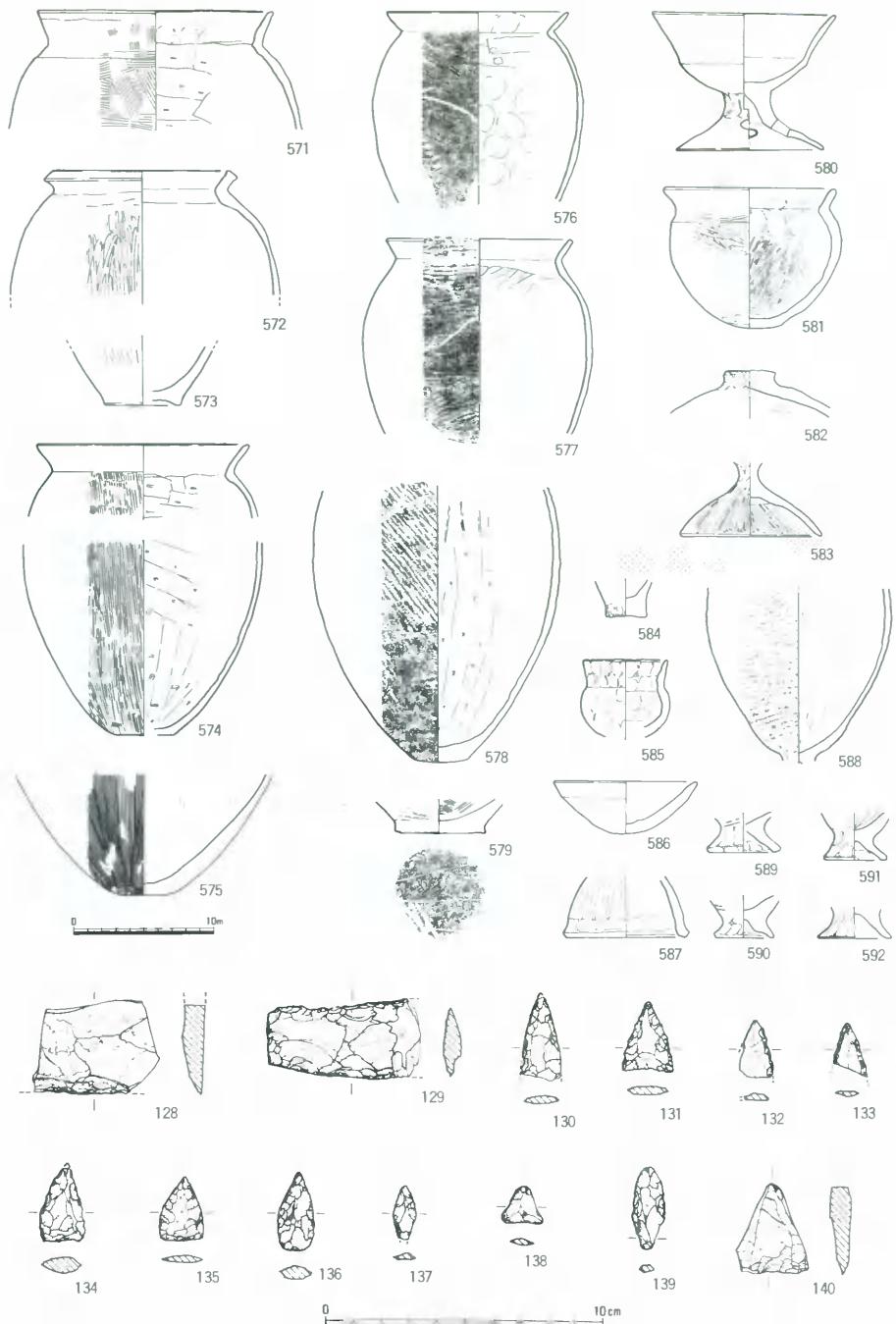


- 1. 淡黃褐色微砂
- 2. 暗灰褐色土
- 3. 明黃褐色沙質土
- 4. 黃灰色粘土混微砂

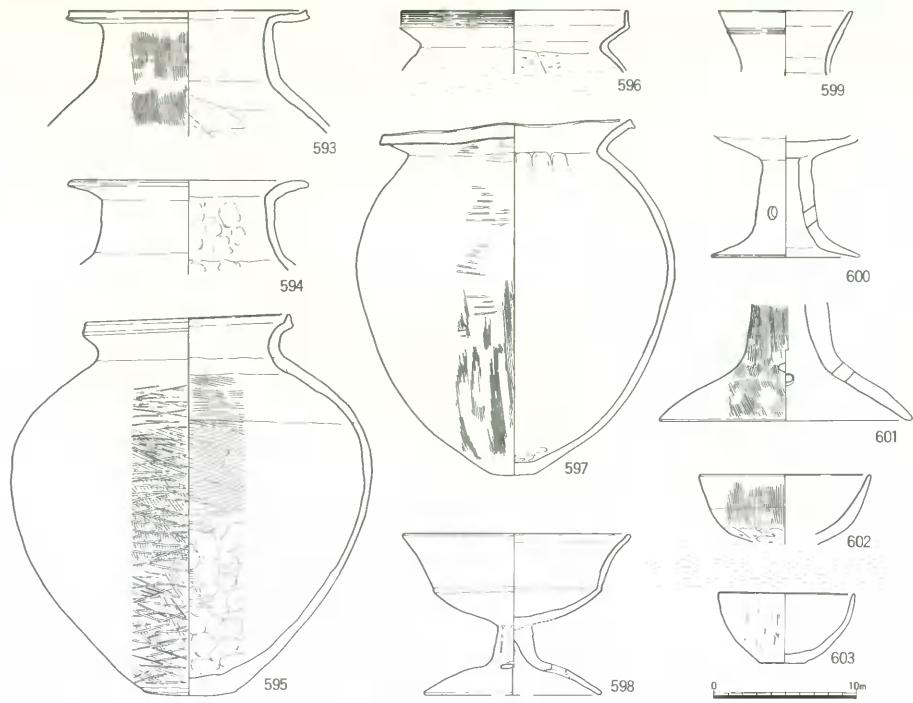
第94図 斜面上部溜り土層断面 (1/30)・出土遺物 (1) (1/4)



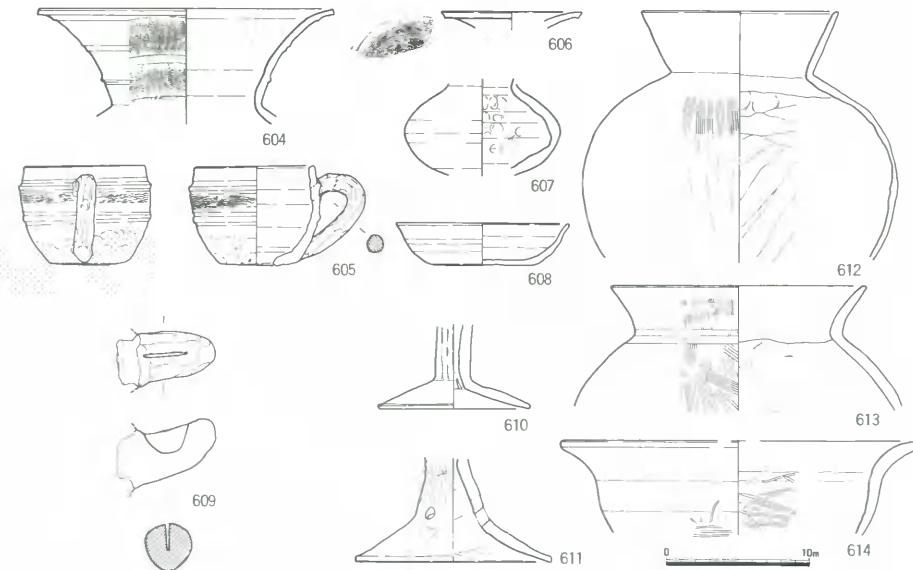
第95図 斜面上部溜り出土遺物（2）(1/4・1/3・1/2)



第96図 遺構に伴わない遺物（1）(1/4・1/2)



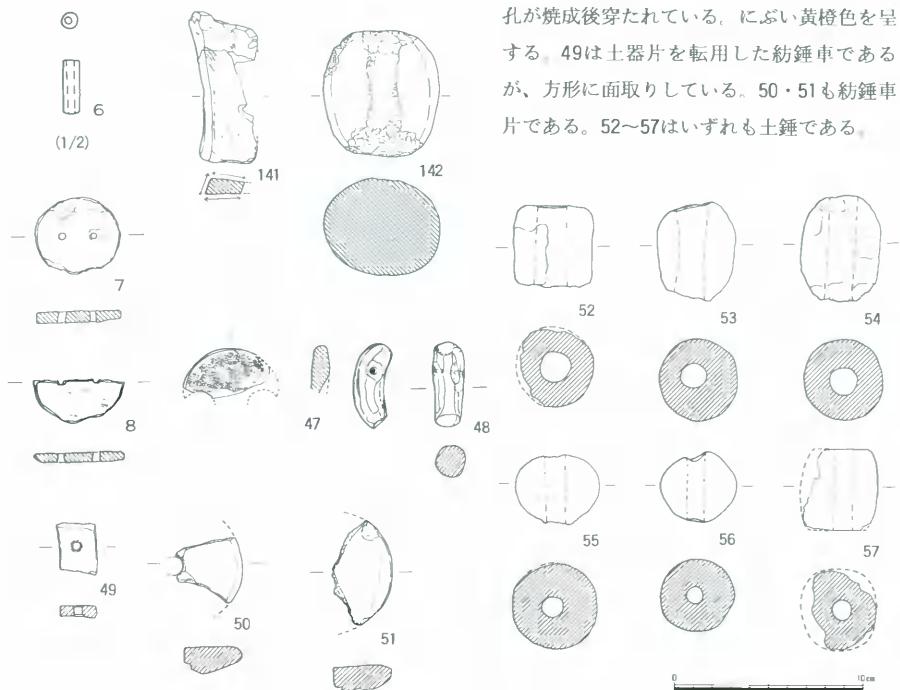
第97図 遺構に伴わない遺物（2）(1/4)



第98図 遺構に伴わない遺物（3）(1/4)

## 8. 遺構に伴わない遺物

包含層からは、I区において古墳時代初頭および前期の、II区において古墳時代中・後期の土器を中心に、多種・多様な遺物が出土している。第97図は、I区の中央以北から出土した土器および、サヌカイト製の石器である。571～579は甕形土器で、579の底部には、木の葉の圧痕が認められる。588～592は製塩土器である。128・129は一部が欠損しているスクレイパー、130～138は石鏃である。このうち完存しているものの重さは、131が1.2g・134が2.3g・135が1.2g・136が1.5gを量る。139は石錐・140は楔形石器である。第98図は、I区の南部から出土した土器である。596は古墳時代初頭の甕形土器であるが、立ち上げた口縁端部外面に櫛描き沈線を巡らせる、いわゆる「吉備甕」である。第99図は、II区から出土している土器で、603～607は須恵器・608～613は土師器である。このうち603～605は、断面がセピア色を呈する初期段階の須恵器である。604は把手付椀であるが、底部は、焼成前に穿孔されている。第100図は、I・II区から出土した土製品や玉類などである。141は頁岩製の砥石で、一部が欠損しているが、長さ70.9mm・幅35.1mm・重さ37.1gを測る。142は重さ310.9gを量るほぼ完存の石錐で、材質は花崗斑岩である。6は碧玉製の管玉で、長さ9.7mm・直径3.0mm・重さ0.14gをはかる。いずれもI区から出土している。7・8はII区から出土している滑石製の有孔円板である。7は一部欠損しているが、直径22.0mm・重さ2.7gを、8は半分欠損しているが、直径24.0mm・重さ1.5gをはかる。48はI区から出土した土製の勾玉である。下部を欠損しているもので、残存長45.0mm・最大幅16.1mmを測り、4.0mmの円孔が焼成後穿たれている。にぶい黄橙色を呈する。49は土器片を転用した紡錘車であるが、方形に面取りしている。50・51も紡錘車片である。52～57はいずれも土錐である。



第99図 遺構に伴わない遺物（4）(1/2・1/3)

## (3) 古代以降の遺構・遺物

## 1. 建物

## 建物-6（第100図）

9-M区の南東部において検出された遺構である。4本柱で構成されている1×1間の掘立柱建物で、桁行2.7m・梁間2.2mを測る。柱穴の規模は、径60cm前後を測るが、深さは15~20cmを残すのみである。埋土は、淡灰茶色粘質砂で、いずれも淡茶灰色粘質砂の柱痕跡が確認された。なお、P-4は柱穴-69により切られている。建物の軸線は、東一西方向から僅かに北へ振っている。

上面が削平され、柱穴の底部のみが遺存している状況であり、柱穴内に遺物もなく、時期の決定は困難であるが、柱穴の埋土の状況などから、奈良時代後半頃と推定される。

## 建物-7（第101図）

9-L区の中央やや南東寄りで検出された遺構である。4本柱で構成されている1×1間の掘立柱建物で、桁行2.3m・梁間2.2mを測る。柱穴の規模は、径40cm前後・深さ40~50cmを測る。埋土は灰茶色粘質砂で、いずれも茶灰色粘質土の柱痕跡が確認された。

建物の軸線は、東一西方向から僅かに南へ振っている。

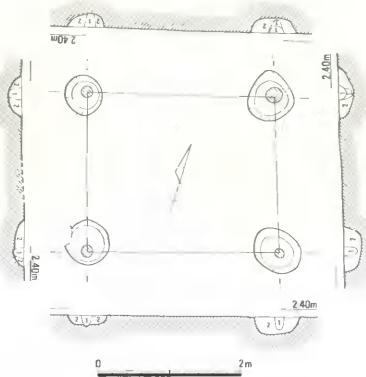
柱穴内に出土遺物はないが、柱穴の埋土の状況などから、奈良時代後半頃と推定される。

## 建物-8

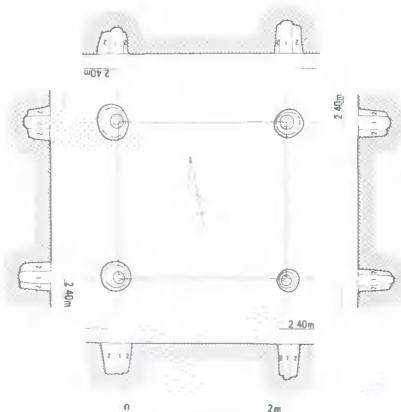
9-M区の中央部において、柱が2本のみ検出された建物で、北側は削平されている。全体の規模は不明であるが、柱間2.65mを測る。柱穴の規模は、径60cm前後・深さ45~50cmである。埋土は灰茶色粘質砂で、いずれも暗茶灰色粘質土の柱痕が確認され、柱根とみられる炭化木が僅かに遺存している。

軸線は、東一西方向から僅かに南へ振っている。

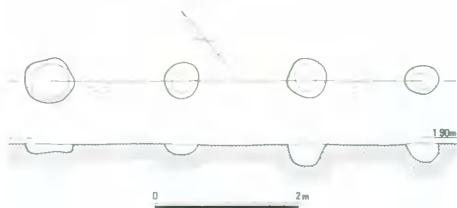
時期は、柱穴内に土器などは出土していないが、埋土の状況などから奈良時代後期頃と考えられる。



第100図 建物-6 (1/80)



第101図 建物-7 (1/80)



第102図 建物-9 (1/80)

はできない。柱間はそれぞれ1.7m程で、P-1からP-4まで5.3mを測る。軸線は、北西—南東方向である。柱穴の規模は、直径50~70cm程で、検出面からの深さは10~30cmを測る。埋土は、暗灰茶色粘質砂で柱痕は確認されていない。

時期は、柱穴からの出土遺物はないが、埋土の状況などから古代末から中世初頭と考えられる。

## 2. 井 戸

井戸-2 (第103・104図、図版7-2)

12-L区の北東部において検出された石組みの遺構である。掘り形は、直径170cm程のはぼ円形を呈し、検出面からの深さは約140cmを測る。石組みはその底面の中央部をさらに、直径70cm・深さ約20cm程掘り窪め、その底の直径約50cmの範囲に、厚さ5cm程の平らな礫を敷いている。側面には板状の礫を縦長に貼り付けて30cm程立ち上げ、その上からは、人頭大の角礫を小口積みで立ち上げている。裏込めには、10~20cm角の小角礫用い、基盤層の黄色土を含む明黄褐色土で埋められている。

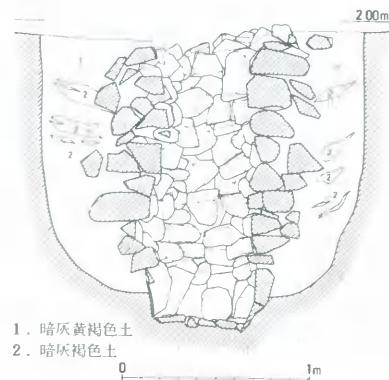
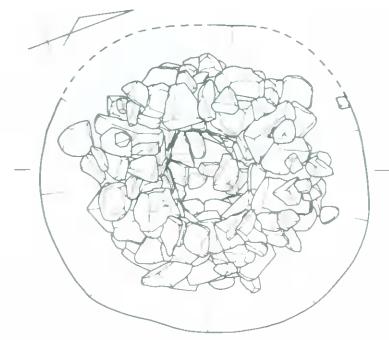
構築された石組みは、内径約50cm・深さ160cm程の井戸枠と考えられる。埋土は、四層が確認され、1層には、古墳時代初頭の包含層直上の堆積土と同様の黄色土が埋積している。3層の灰色粘質土中には、石組みに使われていたと思われる角礫が落ち込んでいる。最下層の4層は、暗灰色土を含む灰色粘土である。

土器などの遺物は、転落石と4層との境から多く出土している。615は壺形土器の口縁部片で、凹線の巡る端面に円形浮文が貼り付けられている。

617は甕形上器、618~620は底部片である。620の

建物-9 (第102図)

10-L区の中央やや西寄りにおいて、4本の柱が直線的に並んで検出された遺構である。対応する柱列が検出されず、建物と断定すること



第103図 井戸-2 (1/30)

底面には木の葉の圧痕が認められる。621は立ち上がった口縁端部外面に櫛描き沈線が巡る「吉備甕」で肩部に米粒の圧痕がある。

623～626はいずれも裏込めの埋土中から出土している上器で、623は壺形土器の、624は高杯形土器の口縁部、625はミニチュア土器626は製塩土器の脚部片である。

この遺構の時期については、出土

遺物には新しい時期のものは含まれない。また、上面が削平されているが、検出において後世の切り込みと考えられる状況はないなど、古墳時代より時代を下げる根拠は見出だせない。

### 3. 土 壤

#### 土壤-25（第105図）

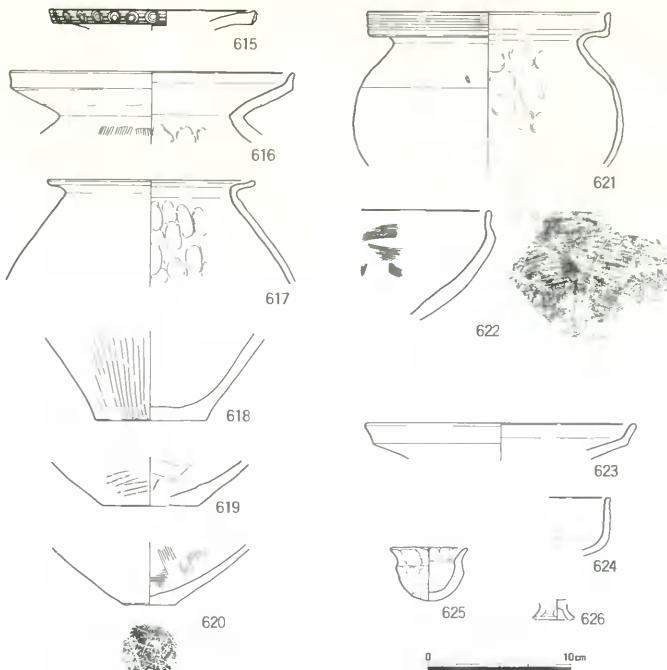
9—M区の北西部において検出された遺構で、南北方向に長軸をもつ、検出平面形が橢円の土壤である。規模は、長軸80cm・短軸45cmで、検出面からの深さは、11cmを測る。断面は緩やかに下がり、底面はほぼ平坦である。埋土は、暗茶黄色砂質土が一層で、焼土粒・木炭片を含んでいる。

埋土中から、若干の土器片が出土している。627は須恵器の杯蓋である。628は、土師器の甕形土器であるが、細片のため口径は推定である。体部外面は、ハケ目調整されている。

時期は、出土遺物などから、8世紀中頃である。

#### 土壤-26（第106図）

9—M区の北西部において検出された遺構である、北東—南西方向に長軸をもち、検出平面は、途中にやや括れをもつ長楕円形を呈する土壤である。規模は、長軸95cm・短軸39cmで、検出面からの深さは、一段低



第104図 井戸-2 出土遺物 (1/4)



第105図 土壤-25 (1/30)・出土遺物 (1/4)

い北側が22cm、南側が15cmを測る。断面は北側は比較的急に下がるが、南側はやや緩やかに下がり、底面は途中に段をもつ。埋土は、淡灰黄色粘質微砂が一層である。

埋土中からは、土師器の甕形土器などが出土しているが、いずれも細片で図示できるものはなかった。

時期は、出土遺物などから、8世紀の中頃である。

#### 土壤-27（第106図）

8-L区の北東部において検出された遺構である。検出平面は、ほぼ円形を呈する柱穴状の土壤である。規模は、直径30cm程で、検出面からの深さは、40cmを測る。埋土は、上半に炭を含む暗灰茶色粘質微砂が、下半に暗茶灰色粘質微砂が埋積している。出土遺物は、いずれも上層から629の須恵器の杯身などの土器のほかに、7の蛇尾がある。欠損しているが幅3.1cm・厚さ0.2cmを測り、重さ4.6gを量る。時期は、出土遺物などから、8世紀の中頃である。

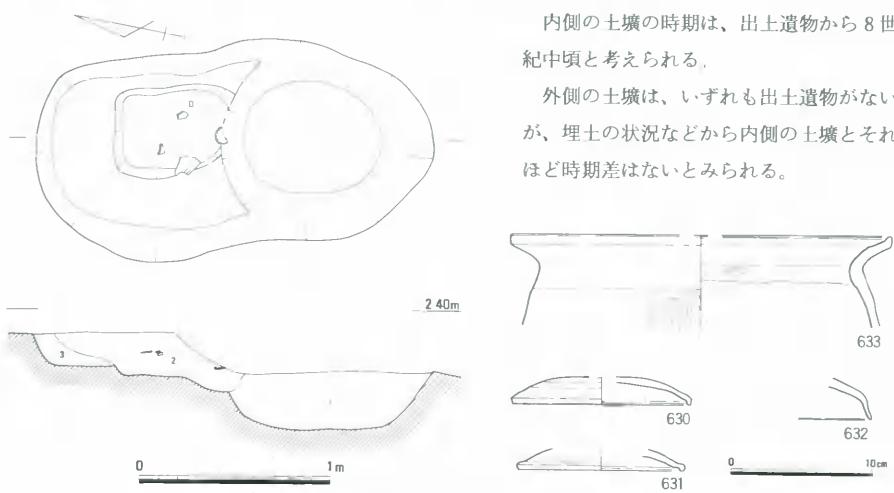
#### 土壤-28（第107図）

8-L区の北東部において検出された遺構である。上面が削平されているが、複数の土壤が切り合っている。外側の土壤は、二つの土壤が重なっているとみられるが、それぞれの規模は不明であり、全体で長径210cm・短径110cm程の不正橢円形を呈する。深さは北側が16cm、南側が30cm以上を測る。底面は、平坦である。内側の土壤は、北側の土壤を中心に切り込んでいる。内側の土壤は長辺98cm・短辺65cm程の隅丸長方形を呈するもので、深さは20cm以上を測る。底面は南側がやや窪んでいる。埋土は、内側が黒茶褐色粘質砂、外側はいずれも茶灰色粘質砂である。

遺物はいずれも内側の土壤から出土している。630～632は須恵器の杯蓋である。633は土師器の甕形土器であるが細片で、口径は推定である。

内側の土壤の時期は、出土遺物から8世紀中頃と考えられる。

外側の土壤は、いずれも出土遺物がないが、埋土の状況などから内側の土壤とそれほど時期差はないとみられる。

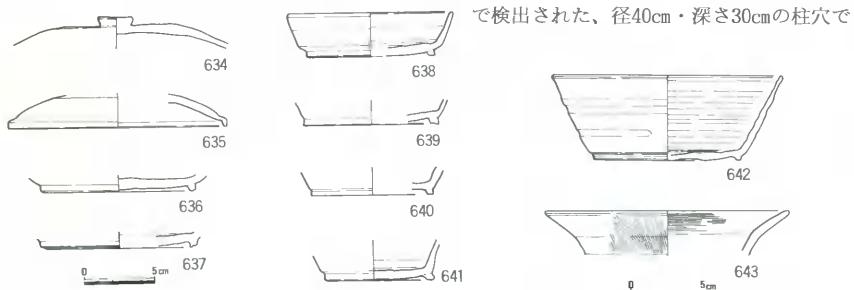


第106図 土壤-26 (1/30)・土壤-27出土遺物 (1/3・1/4)

#### 4. 柱 穴

Ⅱ区においては、対応している柱穴がなく、建物としてまとめることはできなかったが、古代から中世にかけての柱穴や柱穴状の遺構が検出された。第109図の8は、8-Mの南東端において検出された、径27cm・深さ17cm程の柱穴状の遺構（P-44）から出土した鉄製の火打鎌である。端部に欠損がみられるが、重さ31.2gを量る。柱穴の埋土は暗黄褐色粘質微砂が一層である。時期は、奈良時代頃と考えられる。

P-45は8-L区中央部の東寄りで検出された、径45cm・深さ15cm程の深い柱穴である。埋土は、上層に炭を含む暗灰黄色微砂が、下層に淡黄褐色微砂が埋積し、634の須恵器の杯蓋などが出土している。P-46は8-Mの南東端部、P-44の北西側で検出された、径38cm・深さ31cmを測る柱穴である。埋土は、上層に暗黄褐色粘質土が、下層に暗茶褐色粘質微砂が埋積し、635の須恵器の杯蓋などが出土している。P-47は8-L区の北東部で検出された、径26cm・深さ14cm程の深い柱穴である。埋土は暗灰黒色微砂が一層で、636の須恵器の杯身などが出土している。P-48は、8-K区の中央部で検出された、径30cm・深さ20cm程の柱穴である。埋土は暗黄褐色微砂が一層で、637の須恵器の杯身などが出土している。P-49は10-M区の南西部で検出された、径30cm・深さ20cmを測る柱穴である。埋土は暗灰黒色微砂が一層で、638の須恵器の杯身などが出土している。P-50は9-L区の北東部で検出された、径40cm・深さ30cmの柱穴である。



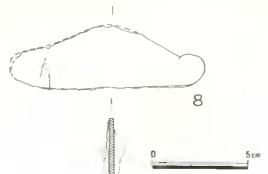
第109図 柱穴内出土遺物 (1) (1/4)

ある。埋土は暗茶褐色粘質土が一層で、639の須恵器の杯身などが出土している。P-51は、9-L区の南西部で検出された、径80×50cm・深さ30cm程を測る土壌状の柱穴である。埋土は、上層に暗茶褐色粘質土が、下層に暗黄褐色粘質微砂が埋積し、640・641の須恵器の杯身が出土している。

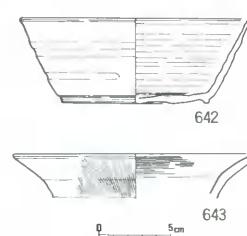
P-52は、9-M区の南西端で検出された、径47cm・深さ13cm程の深い柱穴である。埋土は、暗茶灰色粘質微砂で、642の須恵器の杯身や643の土師器の甕形土器が出土している。

これらP-45～52の時期は、いずれも奈良時代である。

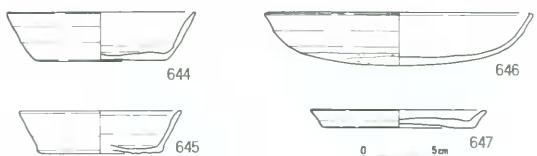
P-53は、9-M区の中央部南西で検出された、径50cm・深さ40



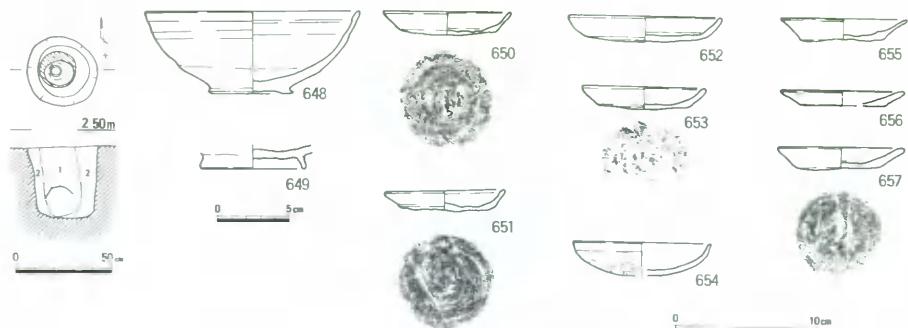
第108図 P-44出土遺物 (1/3)



第110図 P-52 出土遺物 (1/4)



第111図 柱穴内出土遺物 (2) (1/4)

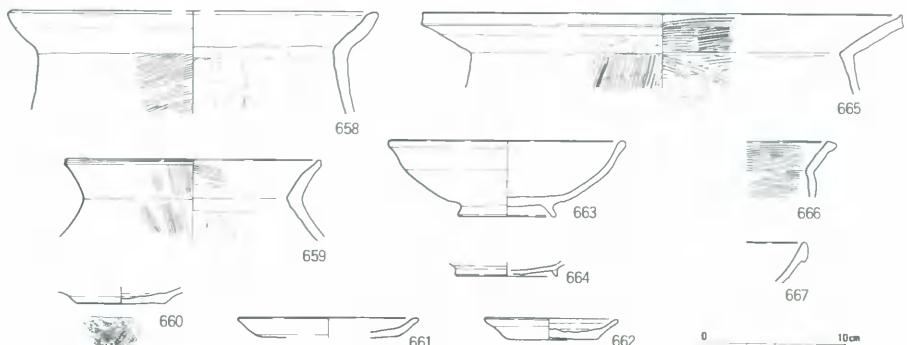


第112図 P-57 (1/30)・P-57・58出土遺物 (1/4)

cm程の柱穴である。埋土は暗茶褐色粘質土で、644の須恵器の杯身などが出土している。P-54は9-M区の南西端、P-52の東隣で検出された、径45cm・深さ20cmを測る柱穴である。埋土は暗灰黄色微砂で、645の須恵器の杯身などが出土した。P-55は9-M区の北西端で検出された、径90・深さ30cm程の柱穴である。埋土は暗茶褐色粘質微砂で、646の土師皿が出土している。P-56は10-区の中央西寄りで検出された、径30cm・深さ20cmを測る柱穴である。埋土は暗茶褐色粘質微砂で、647の土師皿が出土している。P-57は9-M区の北西部で検出された、径37cm・深さ38cmを測る柱穴である。埋土は暗黄褐色粘質微砂で、柱痕跡に黒褐色粘質土が埋積し、648・649の土師碗などが出土している。P-58も9-M区の北西部で検出された、径60cm・深さ40cmを測る柱穴である。埋土は黒褐色粘質微砂で、650~657の土師皿などが出土している。

このほかにもⅡ区においては、平安時代末から鎌倉時代初頭頃の上器が出土している柱穴が多く検出されている。第144図の658・659は、それぞれ8-L区の中央部東寄りで検出されたP-59・60から出土した土師器の口縁部である。660は10-M区南西部のP-61から、661は9-M区中央部のP-62から、662は9-M区南東部のP-63から出土した土師皿である。663は10-M区北東部のP-64から、664は8-M区東端部のP-65から出土したいわゆる「早島上器」の碗である。

また、9-M区北西のP-66から665の、8-K区南西のP-67から666の土鍋の口縁が、10-M区南西のP-68からは白磁碗の口縁部片667が出土するなど中世の柱穴も僅かに検出されている。

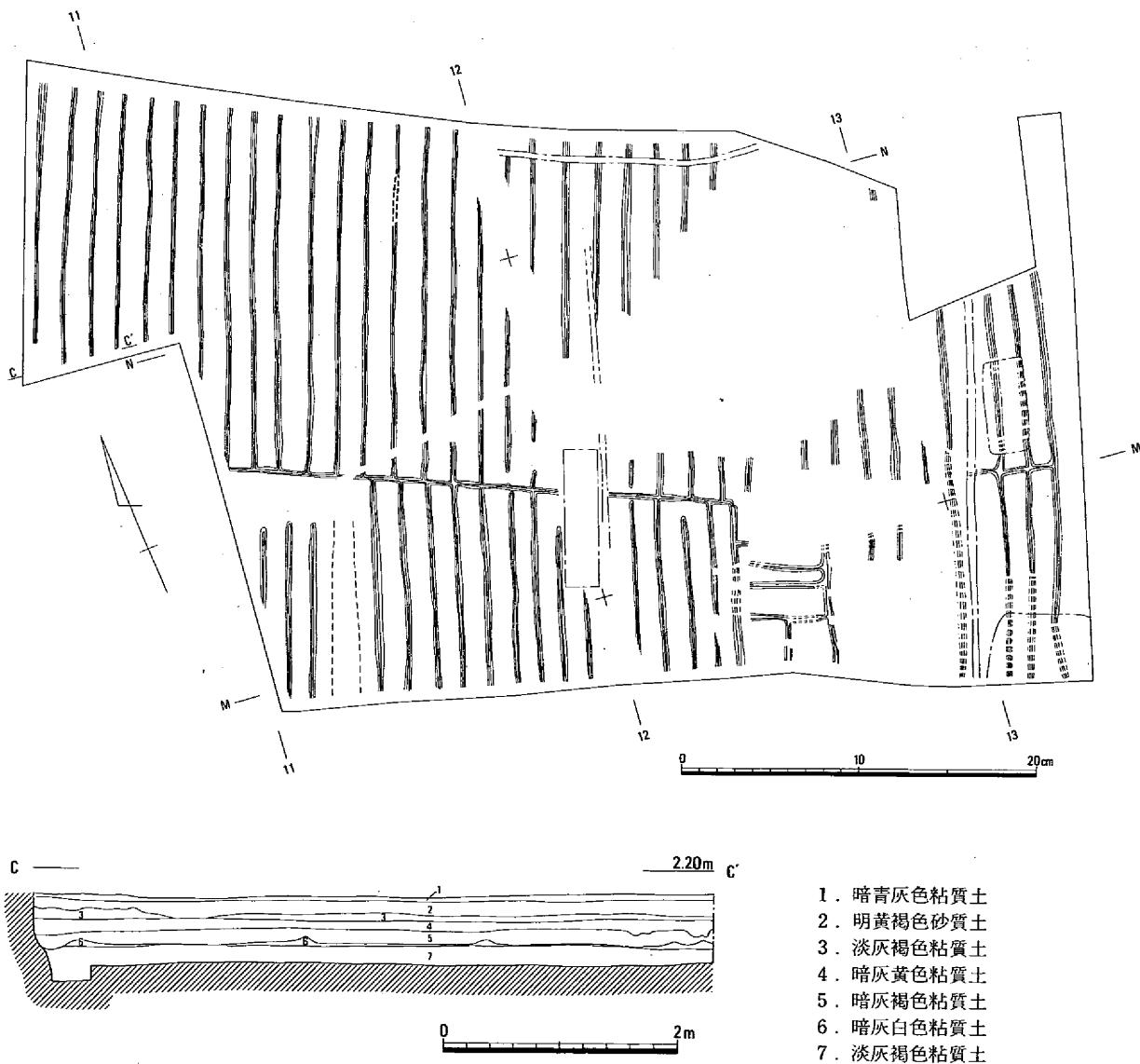


第113図 柱穴内出土遺物 (3) (1/4)

## 5. 水田

Ⅲ区では、1・2層に現代の耕作土と床土が堆積し、その下の3・4は近世以降の水田層とみられる。中世水田の畦畔は、6層の淡灰黄色粘質土上面の一部が5cm程盛り上がって検出されている。7層は淡灰黄色微砂になる。6層の上面からいわゆる「早島土器」の細片が出土し、検出された遺構面は、中世初め頃と考えられる。水田面はほぼ全面で確認されたものの、水田に伴う溝などは検出されなかった。畦畔は、北東一南西方向にほぼ等間隔に並んでいるが、僅か1m前後と非常に狭い。直行している畔はⅢ区の中央部以西では、一本のみで水田の区画は長細い、不自然な形態である。

水田層およびその上下の土層について、自然科学分析を行なった。その結果、中世水田層の6層から、栽培植物とされるイネ属の機動細胞珪酸体が30%以上検出され、稻作が行なわれていたことが示唆された。また、鉄・マンガンの沈着状態から乾田型水田であったと推測されている。なお、上位の5層も鉄・マンガンの沈着状態は、稻作に良好な条件下であったと推定され。一方、下位の7層も植物珪酸体分析の結果は、6層に類似し、周辺で稻作が行なわれた可能性がある。



第114図 水田畦畔 (1/400)・土層断面 (1/60)

## 6. 溝

## 溝-1

2-B区～4-D区で北東から南西に流走する溝で、幅60cm・深さ15cm程を測る。断面は緩やかに下がり、埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物としていわゆる「早島土器」の細片が出土している。時期は、中世初頭頃と考えられる。

## 溝-2（第116図）

7-J区～9-K区にかけて検出された溝で、北東から南西へ流走する。幅120cm・深さ20～50cmを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土で、668の備前焼の摺り鉢や669の甕の底部片が出土している。

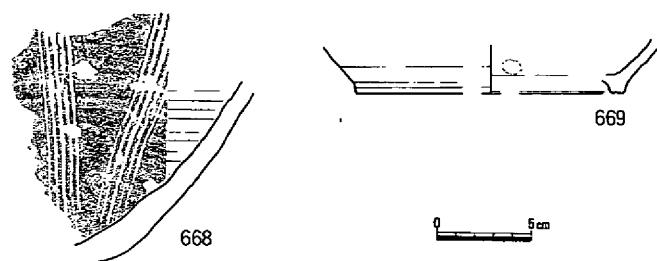
時期は、出土遺物などから13世紀中頃と考えられる。

## 7. 遺構に伴わない遺物

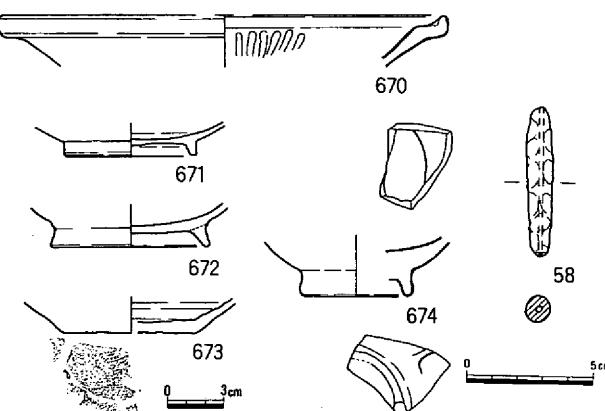
高下遺跡において検出された、古代以降の遺構としては、建物および柱穴・土壙・水田・溝などであるが、あまり多くない。

包含層からも土器などの遺物が若干出土している。そのうち第117図は、I区の南半などから出土したものである。670は光沢のある淡青灰色を呈する青磁碗の口縁部の細片で、口径は推定である。671・674は青磁碗の底部片である。671は暗緑灰色を、674濃青緑灰色を呈する。672は土師椀の、673は土師皿の底部片である。56はほぼ完存の土錘で、長さ5.9cm・幅1.1cm・重さ8.8gをはかる。

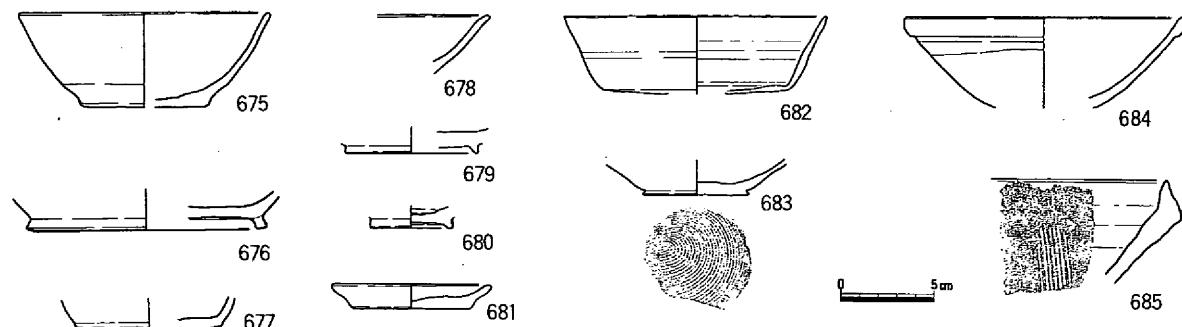
第118図は、II区から出土したもので、675・676は須恵器である。678は口縁部の細片であるが、表面が薄く施釉され、緑釉土器とみられる。679は土師椀の底部片、680は底部の小片であるが、内面にもオリーブ色などの釉薬が施され、二彩もしくは三彩の小壺とみられるものである。682・683は須恵器の杯身である。684は白磁碗、685は備前焼の摺り鉢の口縁片である。



第115図 中世遺構出土遺物 (1/4)



第116図 遺構に伴わない遺物 (1) (1/4・1/3)



第117図 遺構に伴わない遺物 (2) (1/4)

## 第3節 小 結

### 1. 高下遺跡における集落について

高下遺跡においては弥生時代中期から中・近世にいたる遺構・遺物が確認されたが、後世の削平を受けている部分も多く、最も良好な状況で遺構が遺存していたのは、I区における弥生時代中期後半と古墳時代初頭の集落遺跡である。

今回の調査で、微高地すべての調査が行なわれているわけではないが、弥生時代中期後半の遺構として、竪穴住居4・建物1・竪穴遺構8などがある。しかし、これらすべての同時存在は不可能で、半分くらいが一時期に存在していたと推定される。そして、遺構の配置としては、微高地の中心部に竪穴住居が設けられ、縁辺側に竪穴遺構が立地している。この竪穴遺構の性格については、規模などから独立した住居などとは考えられない。竪穴住居とセットされる小屋的なものと推定される。同様の遺構は、これまでにも津山市や久米町・山陽町などでも検出されているが、高下遺跡ではいささか数が多く、1棟の竪穴住居に対し、2棟の竪穴遺構が考えられる。

竪穴遺構は、いずれも2m×3~4m程の長方形のプランで、床面の中央付近に火所がある。出入口に関わるものか、短辺側の1方中央部に15~20cm程の高まりがみられる。床面から壁体溝・柱穴などは検出されず、遺構周辺からも柱穴などは認められない。焼失遺構である竪穴遺構—3・9で、主たる柱材は長辺方向に平行している。同じ焼失遺構である竪穴住居—3に遺存している柱材が放射状に認められるのと異なる。このことは、竪穴遺構の覆屋部分の構造が、片流れ屋根を推測させる。

高下遺跡における弥生時代中期後半の遺構および包含層からは、サヌカイト製の石器などが非常に多く出土している。また、竪穴住居—4の床面ではサヌカイトの剝片やチップが大量に認められるだけでなく、多くの楔形石器や石器片・石器の未製品などや、大型蛤刃石斧を転用した敲石も出土している。このほか、やや量は少ないものの、竪穴住居—1や竪穴住居—2でも同様の傾向が認められ、竪穴遺構—2・6などでも火所周辺の床面などを中心にサヌカイトの小チップが出土している。これら、住居などの床面におけるサヌカイトチップの散乱は、この場所で煩瑣にサヌカイトを打ち欠く作業が行われたと考えられ、石器や木器などの加工が集中的に行なわれていたのではないかと推測させる。なお、中部瀬戸内地域においてはこの時期、サヌカイト製の打製石庖丁が一般的であり、高下遺跡にいても、完存品や欠損品を含め出土例の大半はサヌカイト製であるが、竪穴住居—2の中央付近から一括出土した中に1点磨製石庖丁があったことは、両者が併用される磨製から打製への移行期の最終段階であることを窺わせる資料である。

一方、古墳時代初頭の遺構としては、竪穴住居2・建物3のほか井戸・土壙などが検出されているのみであるが、微高地の下がりに堆積している大量の土器群は、さらに大きな集落遺跡であることを推測させる。この古墳時代初頭の集落遺跡からは、今回2棟の竪穴住居が検出されたが、いずれも微高地の縁辺部に建てられた、六角形の特異な大形住居である。この竪穴住居や土壙などからは、壺・甕などの土器や紡錘車などの土製品だけでなく、土器製塩に使われた製塩土器や漁網の錘として使用される土錘・石錘などが多く出土している。なお、出土している土器の多くは、旭川東岸に所在する岡山市の百間川遺跡群や雄町遺跡また、吉井川東岸に所在する邑久町の尾張助三畠遺跡など比較的近

くの遺跡から一般的に出土している土器とは様相が異なっている。

この頃の高下遺跡は比較的海岸線近くに立地していたと推定され、今回の調査において直接塩つくりに関係する遺構は検出されていないが、土器製塩による塩つくりや漁網による漁が盛んに行われるなど、先の弥生時代中期の集落とは性格の異なる海浜集落の様相を呈している。また、出土する土器の様相は、海を介して交流していた地域とより深い繋がりをもっていたと推測させるなど、近隣の集落とは異なる集団が形成していた可能性がある。

その後も高下遺跡では、遺物の出土状況から引き続き集落が営まれているが、遺構の遺存状況が良好でないため、遺跡の性格などは判然としない。

## 2. 高下遺跡出土の土器について

高下遺跡では、遺構および包含層において弥生時代中期中葉から中・近世まで、弥生土器をはじめ古墳時代の土師器・初期須恵器や古代の土師器・須恵器・二彩（三彩）土器など多種多様な土器が出土している。この内、古墳時代初頭の土器は、斜面堆積や遺構などから完形のものを含め大量に出土している。しかし、これらの土器の中には、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて、吉備地方において一般的ないわゆる「吉備甕」などの土器がほとんど出土していない。そこで、高下遺跡から出土した古墳時代初頭の土器について器種ごとに特に多いものの特徴を述べることにする。

壺 1 内傾する頸部から「く」の字状に屈曲し真直ぐに開く口縁部をもつ（279・410）

壺 2 やや内傾気味の頸部から折れて外反気味に立ち上がる二重口縁をもつ（405・406）

甕 1 口縁部を強く折り曲げ、端部はそのままかやや肥厚気味につまみ上げる。体部は肩が張り、底部は平底を残す。外面上半部は縦刷毛、下半部は縦刷毛および縦方向のヘラミガキ、内面下半はヘラケズリ、肩部内面は指オサエされている。（184～188・352・374～378・412～430）

甕 2 「く」の字状に外反し短く開く口縁部で、胴部はあまり張りをもたず、底部は僅かに痕跡をとどめる。体部外面は斜め方向の平行タタキ、内面はヘラケズリで肩部をナデまたは指オサエしている。（231～233・353～356・366～372・431～440）

甕 3 外反し短く開く口縁端部を僅かに上方に立ち上げる、胴部は張りをもたず、底部は丸底に近い。体部外面は斜め方向の平行タタキ、内面はケズリで肩部を指オサエしている。（260・282～284）

なお、甕 2 の口縁部をもち、甕 1 の体部形態を有する甕も認められる。

高杯 1 杯部は深く、中位で屈曲し外反気味に開く。脚部は外反気味に開く（198～200・275～278）

高杯 2 杯部中位の屈曲が痕跡的になり、内面は次第に椀形になる。（261～263・452・453）

高杯 3 杯部は椀形を呈する。（264・265・288・357）

鉢 1 高杯 1 の杯部を呈し、ほぼ丸底の底部はヘラケズリされている。（464～466）

鉢 2 やや深めの椀状の形態で口縁部は上方のつまみ上げている。（160・161・292・460～463）

鉢 3 やや浅目の形態で、ほぼ丸底を呈し、調整などは粗雑である。（172・222・223・467）

これら高下遺跡から出土した古墳時代初頭の土器は、その類例を吉備地方南部に求めるよりも、海を隔てた讃岐地方や児島南部の遺跡などに多く認められる。

## 第4章 浅川古墳群ほか

### 第1節 調査の経過

岡山市東部の吉井川右岸に所在する大日幡山には、茶ノ子古墳をはじめ多くの前期古墳が知られている。この大日幡山から北に延びる丘陵で、岡山市浅川と樺原の境界をなす尾根上には、浅川古墳群が所在している。一般国道2号改築工事（岡山バイパス）に伴い、古墳群の一部が削平されるため、発掘調査を実施することになった。

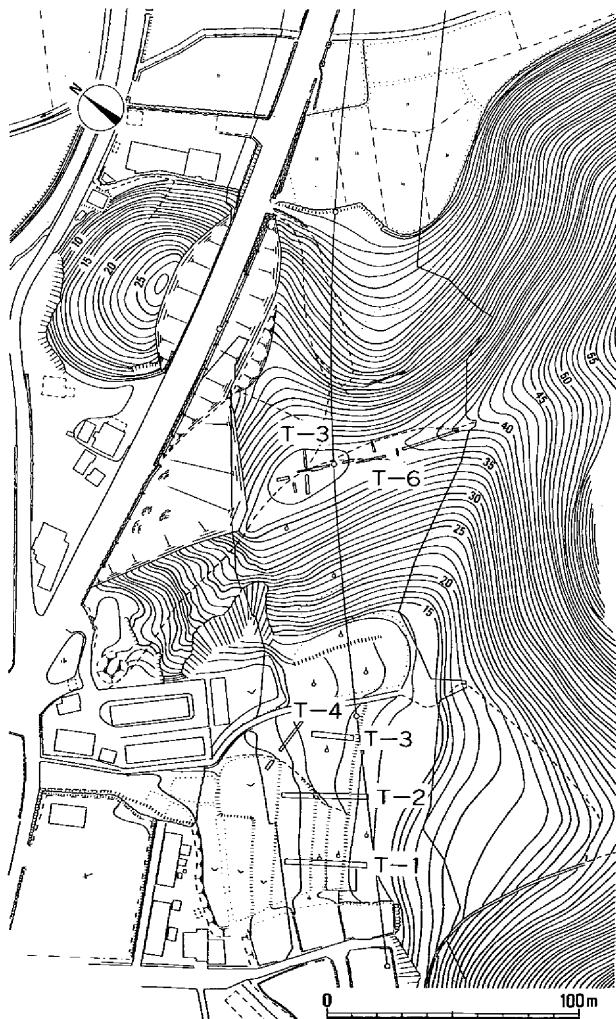
バイパス工事にかかる用地内には、古墳群のうち2号墳が所在しているとみられるものの、その位置が明らかでなく、そのほかにも尾根上には古墳の存在している可能性が窺われた。また、この尾根の南西側に位置している岡山市樺原字山田の北西緩斜面においても遺物の散布が認められ、遺跡の所在していることが予想された。そのため、立ち木の伐開の終了した平成2年4月にトレントによる一次調査を実施した。

丘陵上には、尾根筋を中心に、大小12本のトレントを設定した。

調査の結果、北西に延びてきた尾根の先端部が、北に派生する部分に設定したT-3において浅川2号墳の主体部である箱式石棺の一部が確認され、さらに周溝とみられる浅い溝を検出した。また、その手前の少し瘦尾根気味の鞍部に設定したT-6から新たに箱式石棺が確認され、浅川3号墳と称することになった。この浅川3号墳は僅かな盛り上がりをみせているが、墳丘はほとんど確認できない。周溝はいずれのトレントからも検出されなかった。そのほかのトレントでは、表土直下で地山となり、遺物も出土していない。

一方、北西緩斜面では、4本のトレントを設定して調査を行なったが、T-1において僅かに包含層が確認され、火葬墓1基が検出されたのみである。このため、火葬墓の調査を実施し、この地区の調査を終えた。

丘陵上においては確認された2基の古墳を調査することとなり、発掘調査を平成2年7月から9月まで実施した。



第1図 一次調査トレント配置図 (1/3,000)

## 第2節 調査の概要

浅川古墳群は、大日幡山から北へ延びる丘陵の先端付近に所在する古墳群である。丘陵は途中から北東に延びる尾根と北西に延びる尾根に分かれている。1号墳は北東側の尾根上に、2号墳は北西の尾根上に所在し、2基の古墳は150m以上離れている。このうち2号墳側の丘陵が建設用地に含まれることになり、用地内で新たに発見された3号墳とともに発掘調査を行なうことになった。

浅川古墳群から北へ約600mのところには、浦間茶臼山古墳が所在している。また、北西部や北東部を望めば、岡山平野の北東端部（旧上道郡平島村・御休村）一帯を見わたすことができる。

なお、浅川古墳群は、新たな3号墳を加え3基の存在が明らかになった。かつて現在の国道2号線の工事で、丘陵の先端部を切り通しにした時、人骨が出土したとの話もあり、北に延びる尾根上の先端部には、このほかにも古墳が存在していた可能性がある。

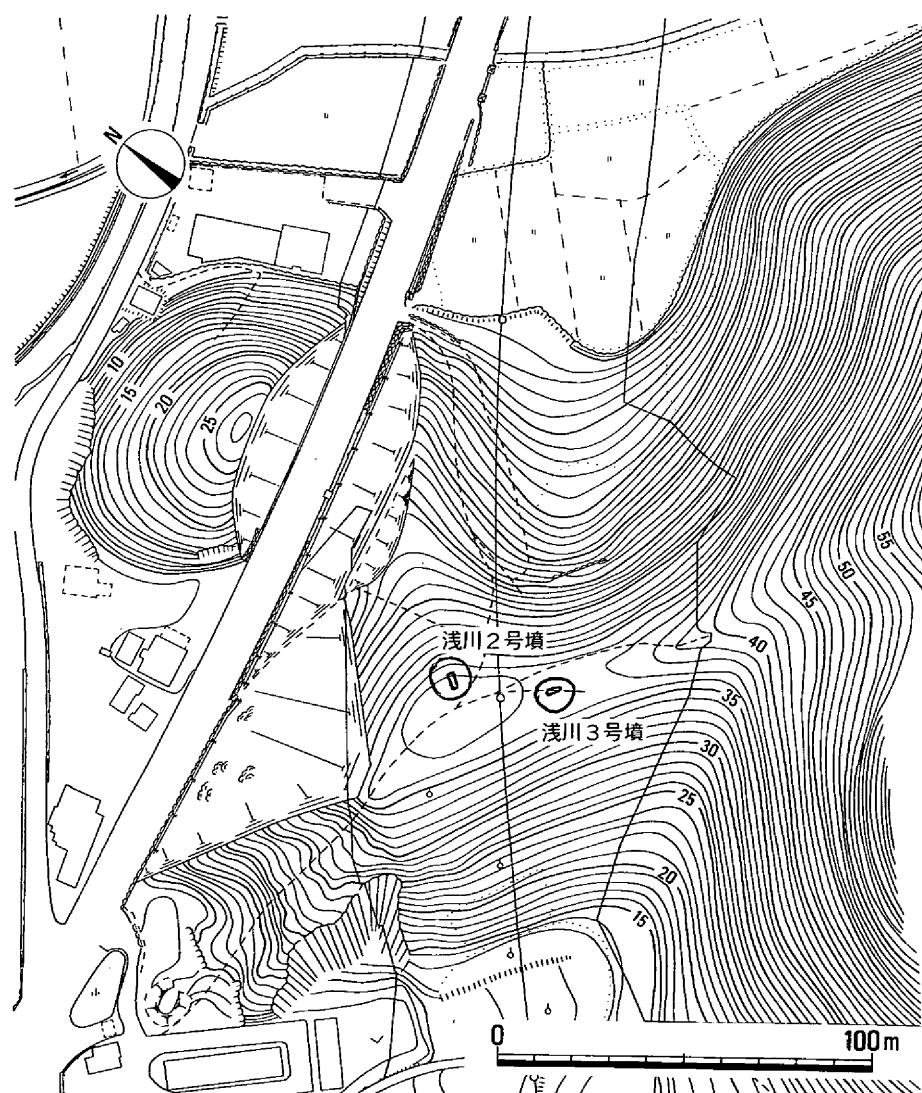
### (1) 2号墳の概要

2号墳は、大日幡山から北へ延びる尾根の先端付近に所在している古墳で、3号墳から25m程北側にある。3号墳の所在する尾根から少し北へ派生気味に脹らんだところに位置している。

### 1. 墳丘

古墳上面の盛土が失われており、マウンドはほとんど残っていないが、箱式石棺を構築している墓壙の外側で盛土の堆積が若干確認される。古墳時代の表土（第13層）の上に堆積している第6層から第10層である。

主体部の箱式石棺は墳丘成形後に、盛土の上から墓壙を切り込ん



第2図 浅川2・3号墳位置図 (1/2,000)

で構築している。

墳丘の南西側、尾根の高い側では、長さ5mにわたり幅120cm・深さ約35cmを測る溝が弧状に検出された。埋土は、上層に淡灰黒色土が、下層に淡黄褐色土が埋積している。このほかに、周溝が確認されたところはないが、主体部との位置関係などから、直径7m程の円墳と推定される。

なお、周溝内と盛土裾部から土器の細片が、主体部上部の攪乱層から鉄斧および管玉各1が出土している。

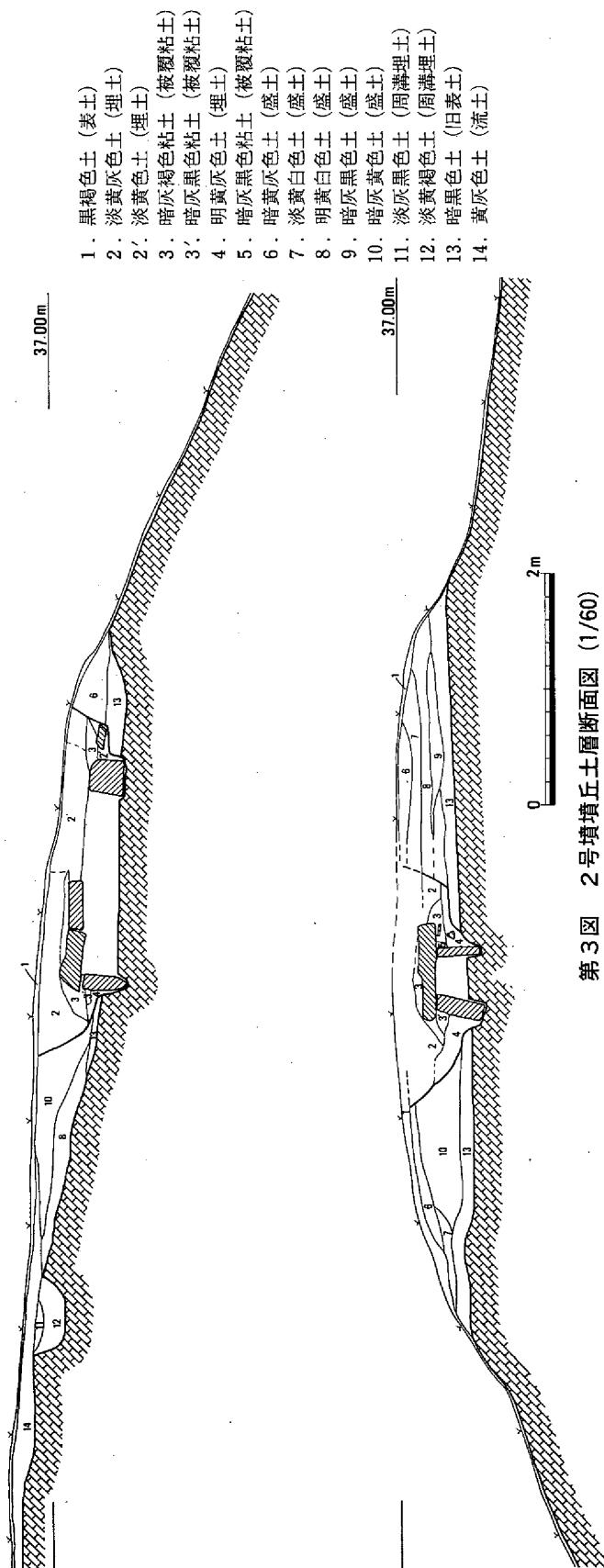
## 2. 主体部

派生気味の尾根筋に沿った北東—南西方向を長軸とし、長辺2.8m・短辺1.9mの長方形形状の墓壙を掘り、板状の角礫を用い箱式石棺1基を構築している。

箱式石棺は、尾根上方にあたる南西側2枚の蓋石は遺存していたものの、北東側5分の3程はすでに蓋石が失われ、攪乱を受けている。蓋石の遺存している南西側は厚く粘土で被覆されており、当初は全体がカマボコ型を呈していたと推定される。

石棺内部の大きさは、全長1.84m・幅0.37~0.43m・高さ0.3m程を測るが、北東側の蓋石が失われているため南東側の側石がかなり内傾している。石棺内は、流入した土砂で埋まっていたが、蓋石など石棺の内面や床面に、赤色顔料がかなり鮮やかに認められる。

棺内の北東端・南西端には、それ



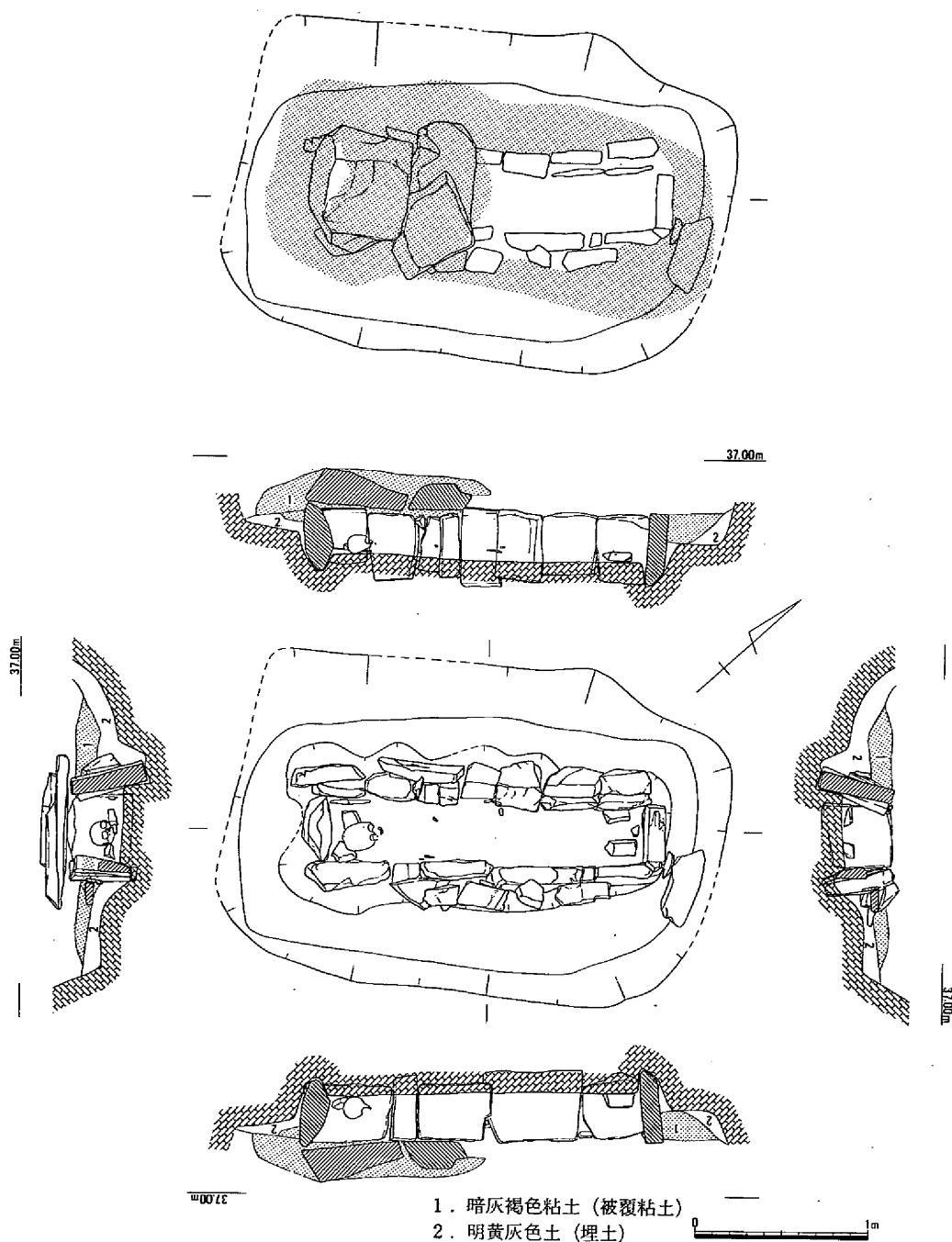
第3図 2号墳丘土層断面図 (1/60)

それ2個一対の枕石が、北東側は少し北西に南西側は少し南東に寄せて置かれ、それぞれ人骨が埋葬されている。

副葬品は、南西側の頭骨の横に鉄剣が1本出土したのみである。なお、人骨は棺内に土砂が流入していた為、遺存状態は非常に悪い。

蓋石の遺存していた南西側では、頭骨の形状を確認することができたが、北東側では枕石の間に後頭部の一部と歯を少し検出できたにすぎない。

なお、石棺に付着している赤色顔料は鑑定の結果、ベンガラと確認されている。また、二体の埋葬人骨については、いずれも熟年の男性骨と鑑定されている。



第4図 2号墳埋葬主体部 (1/40)

## 3. 出土遺物（第6図）

2号墳からは、箱式石棺の内部から副葬品の鉄剣(5)が出土しているのみであるが、石棺外の攪乱土から鉄斧(3)と管玉(4)が出土している。また、周溝の埋土中から土師器の細片が、周溝横の盛土中から弥生土器の底部細片が出土している。

**鉄剣** 箱式石棺の北東部側石に平行して、南西側の枕石との間に、剣先を南西に向けて置かれていた。身の途中で折れ、一部が欠損しているが、残存長24.2

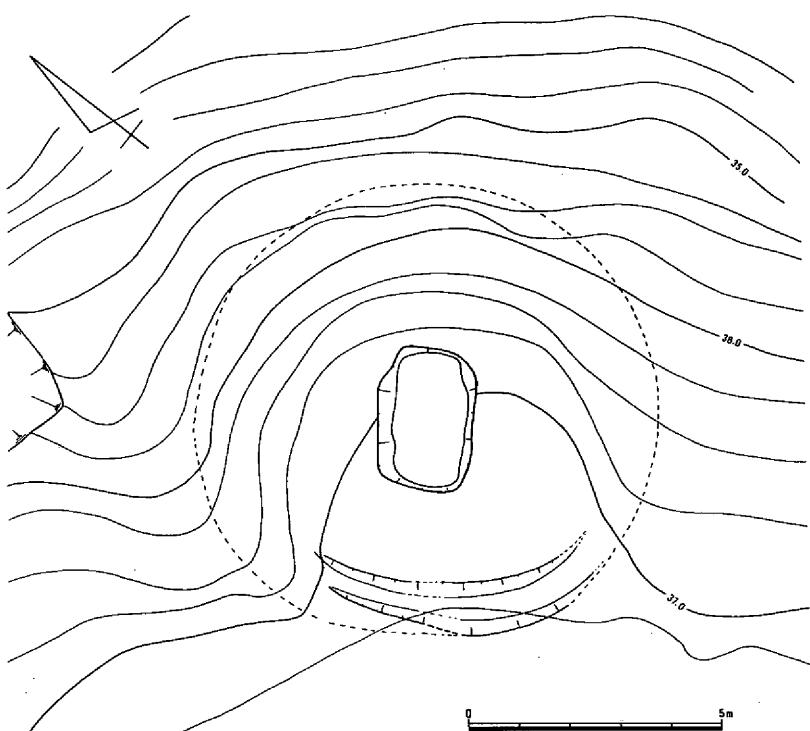
cm・身は18.4cmを測る。最大幅

2.55cm・最大厚0.35cmを測り、目釘穴を有する。また先端近くに一部木質が残存している。

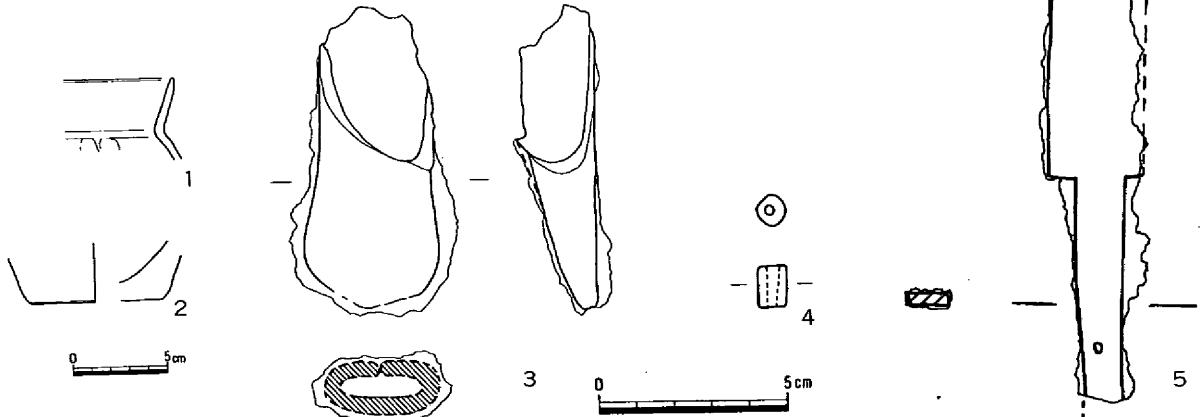
**鉄斧** 箱式石棺南西上部の攪乱層から出土したものである。基部側を少し欠いているが、残存長8.0cm・刃部幅3.6cm・重さ99.0gをはかる。

**管玉** 箱式石棺上部の攪乱層から出土した、碧玉製の管玉である。長さ11.0mm・幅7.5mm・重さ1.2gをはかる。

**土器** 1は周溝の埋土中から出土した、小形丸底壺の口縁部片である。2は周溝近くの盛土から出土した、弥生土器の底部片である。いずれもごく細片で、器面も荒れている。特に2はよく摩滅している土器片である。



第5図 2号墳墳丘測量図 (1/300)



第6図 2号墳出土遺物 (1/4 · 1/2)

## (2) 3号墳の概要

3号墳は、大日幡山から北へのびる尾根から北西に派生して緩やかな斜面に変わったやせ尾根上に位置している古墳で、2号墳から25m程南に位置している。

### 1. 墳丘

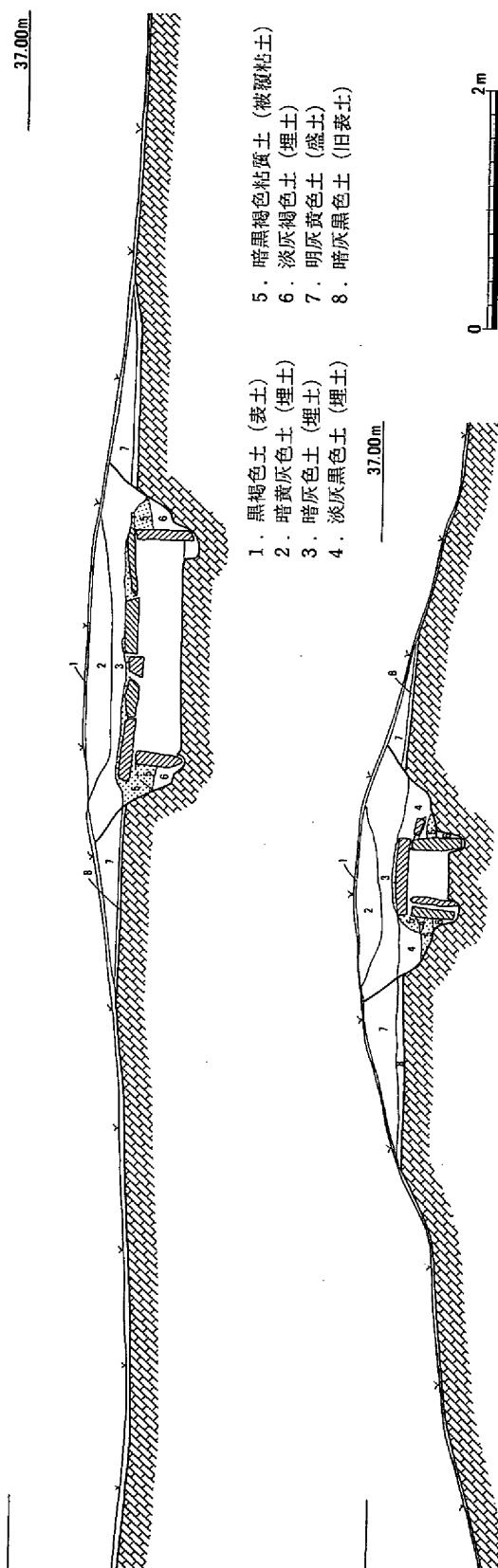
古墳の盛土は、所在している丘陵が葡萄畠などで開墾され、著しい削平を受けている。現状では、尾根筋方向の北西—南東が6m、北東—南西が5mで、高さ0.4m程の高まりが認められるにすぎない。なお、周溝が認められなかったため、古墳の規模は不明である。

主体部の箱式石棺は、2号墳と同様墳丘成形後に盛土の上から墓壙を切り込み、その中に構築している。箱式石棺の蓋石の上面は、20~30cmの埋土が覆っている。

墳丘からは、その周辺も含め遺物は全く出土していない。

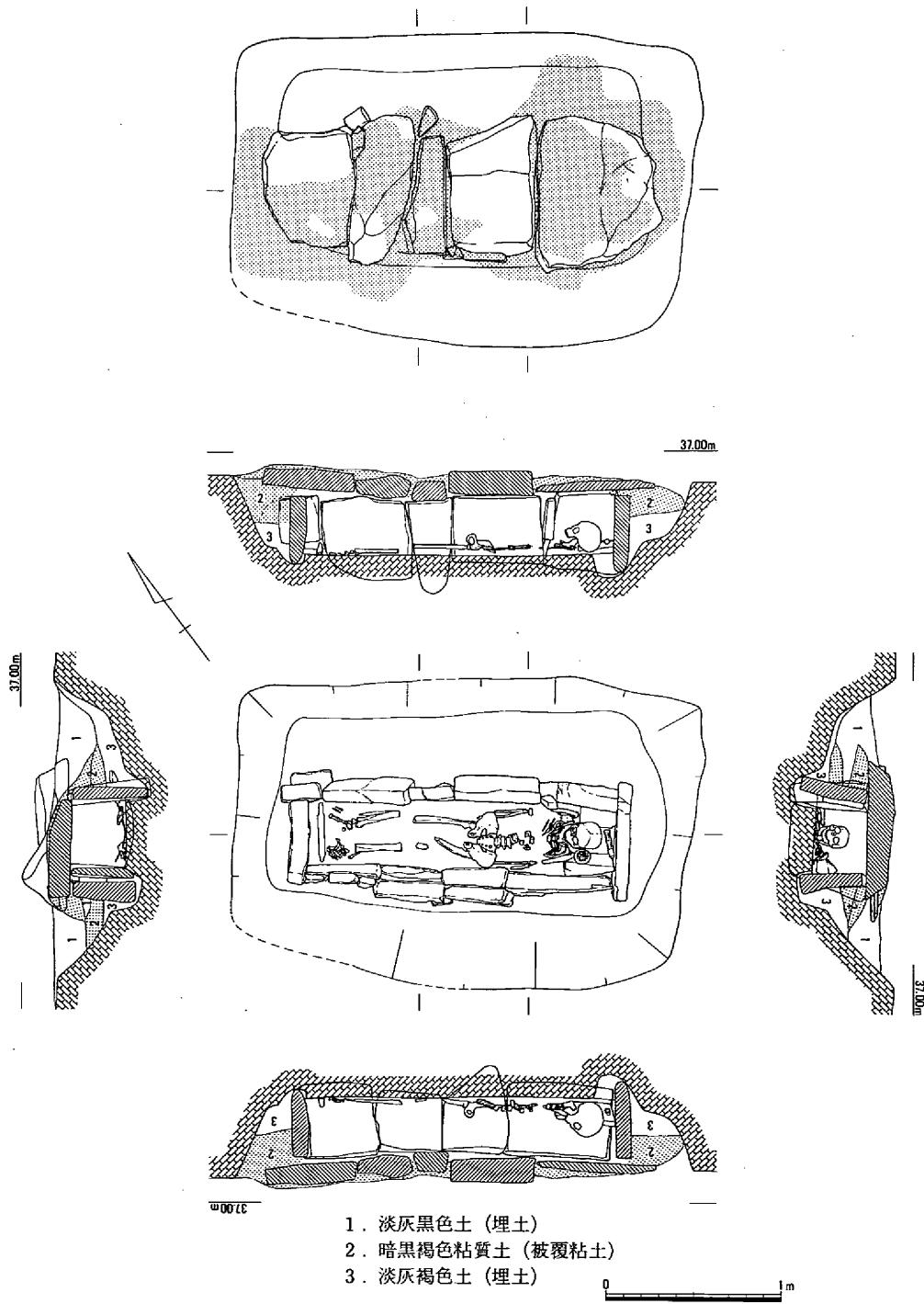
### 2. 主体部

主体部は1基である。墓壙は、現存している盛土のほぼ中央に尾根筋に沿った北西—南東方向を長軸として、長辺2.6m・短辺2mの長方形状の墓壙を切り込み、地山を約25cm掘り下げている。その中をさらに約10cm掘り下げて、板状の角礫を長方形に組み合わせた箱式石棺を構築している。蓋石は5枚ある。石材は、側石および蓋石のうち4枚は流紋岩であるが、頭骨の上にのみサヌカイトの蓋石1枚が置かれている。



第7図 3号墳墳丘土層断面図 (1/60)

構築している石と石のすき間は、厚く粘土で覆われ、内部がほぼ密封された状態で検出されている。石棺内部の大きさは、全長1.7m・幅0.37~0.4m・高さ0.35~0.38mである。石棺内からは、尾根上方の南西側に頭位をおく、1体の埋葬人骨がほぼ完全な状態で検出された。人骨は、2個置かれた枕石の間の鮮やかな朱色に染まった頭骨をはじめ、全身がほの赤く染まっている。赤色顔料は、構築している石棺の内面や床面にも認められ、特に頭部近くの蓋石等は鮮やかである。埋葬人骨は、壮年前半の男性である所見を得ている。また、埋葬人骨を赤く染めている赤色顔料は分析の結果、水銀朱と確認されている。



第8図 3号墳埋葬主体部 (1/40)

### 3. 出土遺物（第9図）

3号墳からは、いずれも箱式石棺内から副葬品として、銅鏡(8)・筒形銅器(7)・鉄剣(6)各1が出土しているのみである。

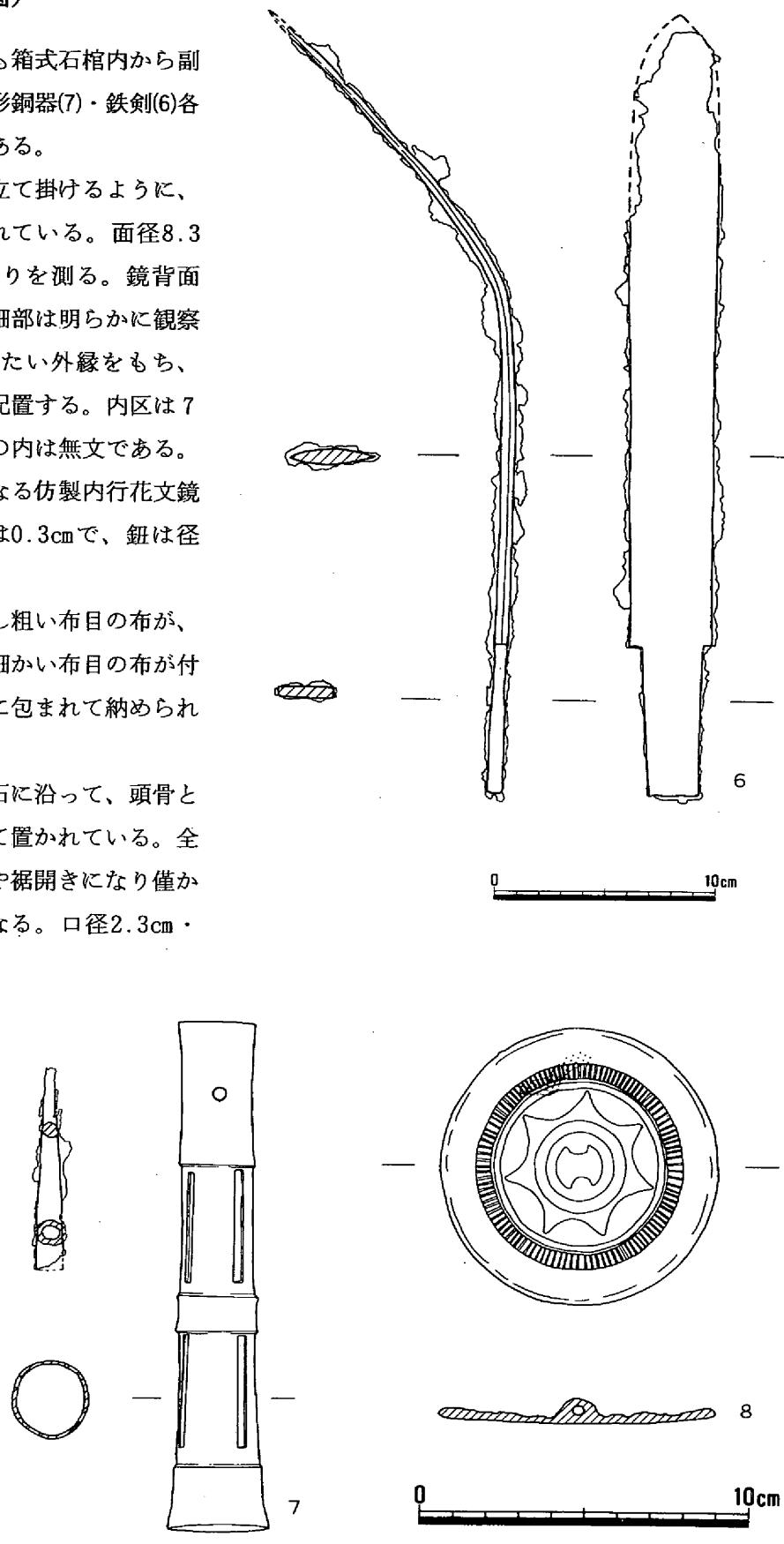
**銅鏡** 頭骨左側の枕石に立て掛けるように、鏡背面を上に向けて置かれている。面径8.3cmの小型鏡で、0.2cmの反りを測る。鏡背面は、磨耗や鋸び等により細部は明らかに観察できないが、幅1.1cmの平たい外縁をもち、外帶は櫛齒文を放射状に配置する。内区は7弧の内行花文を配し、弧の内は無文である。内側に円圏が巡り円鉢となる仿製内行花文鏡である。外縁部の最大厚は0.3cmで、鉢は径1.4cm・高さ0.5cmを測る。

鏡背面側の一部には少し粗い布目の布が、また、鏡面側の一部には細かい布目の布が付着している。鏡は当初布に包まれて納められていたものと考えられる。

**筒形銅器** 頭位側の小口石に沿って、頭骨との間に口縁を南西に向けて置かれている。全長15.3cmの円筒形で、やや裾開きになり僅かに脹らみをもった底部となる。口径2.3cm・底径3.05cmを測り、

中間にも突帯を有する中間有帯式である。上・下段とも長方形の細長い透し窓が4方向に開く。口縁側の突帯のほぼ中央に孔径0.4cmの目釘穴が一対穿たれている。内部には全長6.1cm・最大幅0.9cmを測る鉄製の小棒が1本納まっている。

**鉄剣** 足元の小口石に平行し、剣先を南



第9図 3号墳出土遺物 (1/3・1/2)

西に向けて置かれていた。保存状態はかなり悪く、先端部分は欠損している。無理に小口側に副葬するためにか、身の中央で150度程の角度に折り曲げられている。残存全長約37.4cm・最大幅3.75cm・最大厚0.65cmを測る。

### (3) 楠原遺跡出土の火葬墓

浅川2・3号墳が所在する尾根の南側裾部で、岡山市楠原字山田の北西緩斜面において、検出された火葬墓である。この北西緩斜面は、これまで畑地として使用されているが、ほとんどのところは、耕作土下ですぐ地山が検出され、遺構は認められなかった。しかし、南東部のT-1付近でのみ、僅かに包含層が確認されたが、この火葬墓以外に遺構・遺物とも認められない。

火葬墓は、畑の段の先端部に遺存していたものである。墓壙は、一辺65cm程のやや丸みを帯びた方形を呈し、検出面からの深さは30cm程である。

この墓壙の底に10cm前後の角礫を敷き、東・南・西の側面には10~20cm程の角礫を立て並べて、蔵骨器を安置する場所を設けている。

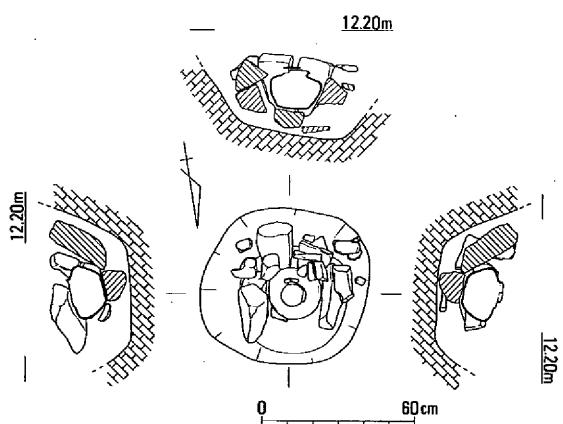
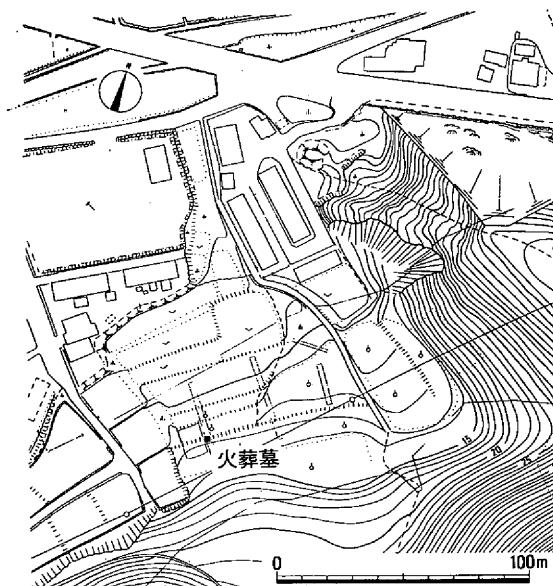
蔵骨器は側面の石に接する様に置かれている。墓壙の上面は削平されており、蓋石は残されていない。また、蔵骨器の蓋もはずれて、中は土で満たされている。北側にも側石などは残っていない。

蔵骨器の中に骨などは残っておらず、副葬品も認められなかった。

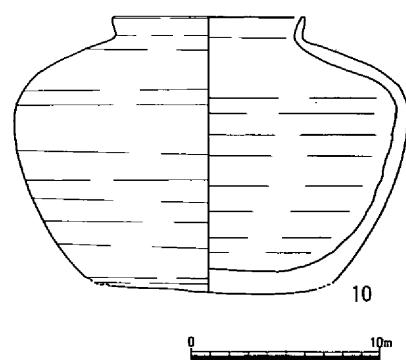
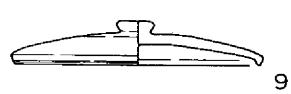
## 2. 骨蔵器（第11図）

蔵骨器には、須恵器の壺と蓋が使用されている。9は骨蔵器の蓋で、口径13.0cm・器高2.35cmを測り、扁平なつまみがついている。外面灰白色・内面灰色を呈する。調整は、ロクロによる指ナデで、焼成は良好である。10は骨蔵器の壺で、口縁端部が少し開き気味で僅かに立ち上がり、肩部で最大径となり、口径10.0cm・底径12.7cm・器高14.7cmを測る。底部の外周部に高台の剝がれた痕跡が認められる。ロクロによる指ナデで調整され、底部外面はケズリ出されている。外面灰黄色・内面灰白色を呈し、焼成は良好である。

時期は、奈良時代後半と考えられる。



第10図 楠原火葬墓位置図(1/300)・火葬墓(1/30)



第11図 楠原火葬墓骨蔵器(1/4)

### 第3節 小 結

#### 1. 浅川2・3号墳について

浅川古墳群は、吉井川右岸の大日幡多山や妙見山から派生している丘陵上に多くみられる、箱式石棺を主体部とし、低いマウンドをもった前期の小古墳で構成される古墳群の一つである。これらの古墳の多くは、すでに主体部が破壊されていたり、畠の開墾中に発見され、主体部が荒らされた後に記録されたものである。

今回発掘調査を行なった2号墳は、蓋石の5分の3が失われて内部の攪乱を受けているものであったが、新たに発見され調査を行なった3号墳は墳丘こそ後世の改変を受けていたものの、主体部はほぼ完全な状態で残されており、埋葬状況を明らかにすることことができた。しかし、2基の古墳とも埴輪をもたず、2号墳の周溝から出土した小形丸底壺以外には土器もなく、古墳の時期を確定することはできない。2号墳・3号墳とも埋葬形態等にそれ程の差は認められない。箱式石棺を構築している石材の一部に、近くには産しないが、浦間茶臼山古墳の竪穴式石室に使われているのと同じサヌキトイドが使用されていること等からも、両古墳の築造に大きな時期差はないものと見られる。特に、3号墳に副葬されていた筒形銅器は、これまでの出土例からも、4世紀中葉以降5世紀前半頃までの古墳と考えて大過ないものとみられ、両古墳の築造年代については、4世紀後半あるいは5世紀初頃と推定される。なお、3号墳については、当地域における前期古墳の多くに、小墳丘内に複数の主体部を有するものや、一つの箱式石棺内に複数の埋葬が行なわれる等の特徴が見られるのに対し、小規模古墳と見られるものの、墳丘内に主体部は一つのみで、石棺内も一体のみの埋葬である。さらに副葬品として、銅鏡・鉄剣の他に、箱式石棺内の遺物としては、あまり例を見ない筒形銅器があること、さらに頭部を覆う蓋石のみに、象徴的に使用したのではないかと思われるよう、浦間茶臼山との関連を推定させるサヌキトイドを使用していることなど、首長墓とは考えられないもののやや特異な被葬者が祀られていたのではないかとおもわれる。

#### 2. 浅川3号墳出土の筒形銅器について

筒形銅器は、その用途がいまだ不明なこともあります、古墳の副葬品としては特殊なものとみられている。かつてはその出土状況から、日本固有の青銅器であり畿内の前期古墳に特徴的な遺物と考えられていたこともあった。しかし、近年韓国では大成洞遺跡の木槨墓から16点、東萊福泉洞の木槨墓から10点が出土するなど、加耶地域だけですでに40点を越えている。一方日本国内では、60点を越える出土が知られているが、その分布は依然として畿内を中心としているものである。しかもその副葬時期は、古墳時代前期半ばから中期前半に限定され、竪穴式石室や粘土槨をもった比較的大形の古墳からの出土が一般的である。

岡山県内からは、これまで浅川3号墳のほかに岡山市の金蔵山古墳で2点、勝央町の岡高塚古墳および八束村蒜山原四つ塚1号墳で各1点の、4遺跡から5点の存在が知られ、畿内以外としては多く見受けられている。しかし、この内蒜山原四つ塚1号墳の例は、後期横穴式石室からの出土であり、伝世品を副葬したものと考えられる。また、岡高塚古墳は全長約52mの前方後方墳であるが、大規

模な盗掘を受けている古墳で、筒形銅器はここから出土したと言い伝えられているが、出土品と断定されているものではない。古墳の副葬品として良好な状況で出土しているものとしては、金藏山古墳および今回の浅川3号墳に限られる。このほかにも近隣の出土例として、広島県神辺町の亀山第1号古墳や同東城町の大迫山第1号古墳、同吉舎町の三玉大塚古墳が知られ、また、海を隔てた香川県でも高松市の石清尾山猫塚古墳や丸龜市の吉岡神社古墳から出土しているなど、かなりまとまった出土例となり、県内で特に多く出土しているとはいえない。

しかし、筒形銅器が出土しているのは、金藏山古墳（後円部の中央石室の主室と副室の盒内から各1点出土）が全長165mの前方後円墳であるのをはじめ、大迫山第1号古墳・吉岡神社古墳も前方後円墳である。また、石清尾山猫塚古墳は双方中円墳、三玉大塚古墳は帆立貝であるなど、いずれも地域を代表する古墳の堅穴式石室の主体部からである。

これに対し、浅川3号墳の場合は、主体部が箱式石棺の小円墳と見られる古墳であり、副葬においてもことさらに小口に平行して置かれているなど、特異な出土例であるとも考えられる。

#### 〈参考文献〉

- |              |  |
|--------------|--|
| 清野謙次         | 「備前國赤磐郡平島村大字浦間古墳」『日本原人の研究』 1925年                       |
| 浦間茶臼山古墳発掘調査団 | 『岡山市浦間茶臼山古墳』 1991年                                     |
| 宇垣匡雅         | 「堅穴式石室の研究—使用石材の分析を中心にして—」(上) (下)『考古学研究』第34巻第1・2号 1987年 |
| 白石 純         | 「吉備地方の堅穴式石室石材の原産地推定」『古文化談叢』第24集 1991年                  |
| 山田良三         | 「筒形銅器考」『古代学研究』 第55号                                    |
| 申 敬澈         | 「加耶成立前後の諸問題」『加耶と古代東アジア』 1993年                          |
| 近藤義郎         | 『蒜山原四つ塚古墳群』 1992年                                      |
| 西谷眞治         | 鎌木義昌 「金藏山古墳」『倉敷考古館研究報告』第1冊 1959年                       |
| 近藤義郎         | 『岡山県の考古学』 1987年  |

## 筒形銅器の鉛同位体比の測定

財元興寺文化財研究所 保存科学センター  
東京国立文化財研究所保存科学部 平尾良光・鈴木浩子

### 1. 試料および分析法

試料は①筒形銅器本体（目釘穴のある端部内壁）より採取したもの②採取箇所不明の鏡である。

分析法は参考文献(1)を参照。

### 2. 結果と考察

測定値は表1に示し、これらの平均値を今までに得られている資料と比較した（第12図）。

縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値とした図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で、鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした<sup>2~6)</sup>。東アジア地域においてAは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南山の鉛である。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域、Dは朝鮮半島産の多鋸細文鏡と細形銅劍が分布するラインとして示されることが判っている。また、aは弥生時代の後期銅鐸が示した特別な鉛を意味する領域である。

縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値とした図をB式図と呼ぶこととする。

この図の中で、A' B' C' D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。

これらの図の中に、測定値を●で示した。

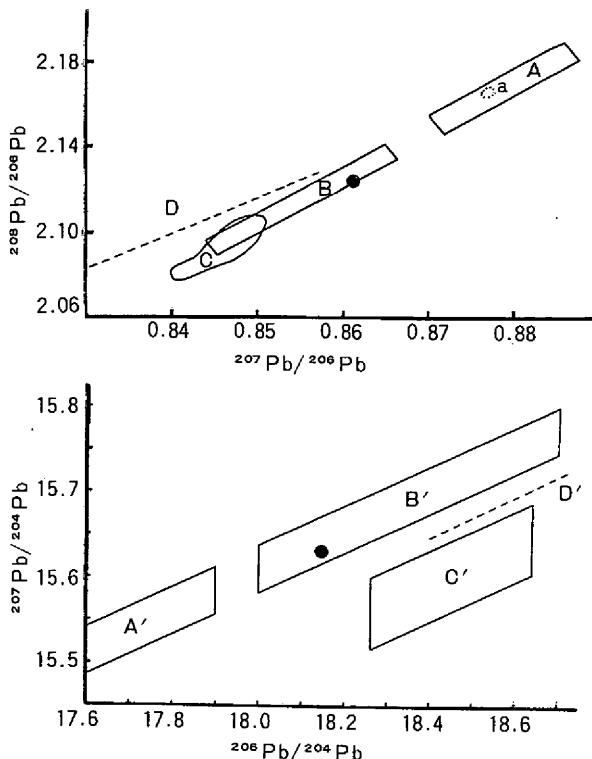
筒形銅器は第12図のA式図においてB領域に位置した。B式図においてもB'領域に位置していることが示される。これまでの研究で古墳時代の遺物の大部分はB領域に位置していることが多く、他の古墳時代の遺物と同じと考えられる。

### 3. 参考文献

- (1) 平尾良光、馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について；保存科学28、17-24 (1989)
- (2) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比による漢式鏡の研究；MUSEUM №370、4-10 (1982 a)
- (3) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌68、42-62 (1982 b)
- (4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比による漢式鏡の研究（二）；MUSEUM №382、16-26 (1983)
- (5) 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比—青銅器との関連を中心一；考古学雑誌73、199-210 (1987)
- (6) 馬淵久夫、平尾良光：福岡県出土青銅器の鉛同位体比；考古学雑誌75、385-404 (1990)

表1 測定した資料の詳細と鉛同位体比

測定番号	出土地	遺物名	採取箇所	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
H.S.300	浅川古墳	筒形銅器	①	18.146	0.8613	2.1243
H.S.301	"	"	②	18.150	0.8613	2.1239
平均値				18.148	0.8613	2.1241
誤差範囲				±0.010	±0.0003	±0.0006



第12図 浅川古墳出土筒形銅器の鉛同位対比

## 第5章 檜原古墳群

### 第1節 位置および調査の経過

#### 古墳群の位置（第1図）

楓原古墳群は岡山市楓原1031に所在する。

砂川と吉井川の間に所在する大日幡山からは四方に大小の尾根が張り出しているが、それらのうち、西の砂川にむかって下降する尾根は先端に小丘陵が接続したような形状となる。発掘調査を実施した1・7号墳はこの丘陵の頂部に築かれている。丘陵頂部の標高は73m、水田面からの比高約70mを測る。東側を除く3方向への眺望は良好で、砂川中流域に形成された平野を一望することができる。

頂部の北側は急な斜面となって下降するが、南側は長さ15mほどの小規模な緩斜面となっており、さらにその南東下方の尾根線上も比較的なだらかな斜面が続いてのち急斜面となる。

#### 調査の経過

楓原1号墳は遺跡地図に円墳として記載されていたが、現地踏査の段階で南西側に前方部状の張り出しが所在することが確認されていたため、調査対象古墳は小墳2基ないし小形の前方後円墳となる可能性を考えつつ調査に着手した。樹木伐開後の状況では小墳2基とも前方後円墳とも見える形状であったが、調査の進行に伴い円墳と方墳が近接して所在していることが判明したため、円墳・1号墳の南西に所在する方墳を7号墳とした。なお、楓原古墳群は楓原地区に所在する7基の古墳の総称であるが、2～6号墳は山麓に所在する後期古墳で、1・7号墳とは直接の関係をもたない。

調査は平成6年4月6日に着手し、7月31日に終了した。

墳丘測量の後、1号墳の表土除去を開始し、近世の石積み遺構の調査の後、主体部の調査に着手した。主体部は予想以上に盗掘・攪乱が著しく、また、盗掘壙埋土と墳丘盛土に大きな差がなかったため、主体部構造の把握にかなりの時間を要することとなった。主体部は東西主軸の竪穴式石室であるが、石材の大部分が抜き取られており、床面が破壊を受けながらもかろうじて遺存した状態であった。

一方、7号墳は1号墳に面する側に葺石列が所在しており、1号墳とは別の古墳であることが判明した。墳丘の南北両側にも直線をなす葺石列がハ字形に遺存しており、斜面下方側が広くなる方墳と判断した。この古墳も盗掘を受けており、盗掘壙の掘り下げにかかったところ粘土の小塊が出土しあじめたため、主体部は粘土槨ないし粘土床と推定できた。盗掘壙下部からはまとまった粘土の広がりが認められたため主体部の一部が遺存している可能性を考えて掘り下げを進めたが、最終的に主体部はすべて掘り取られており、埋葬施設に使用されていた粘土が再堆積したものであることが判明した。

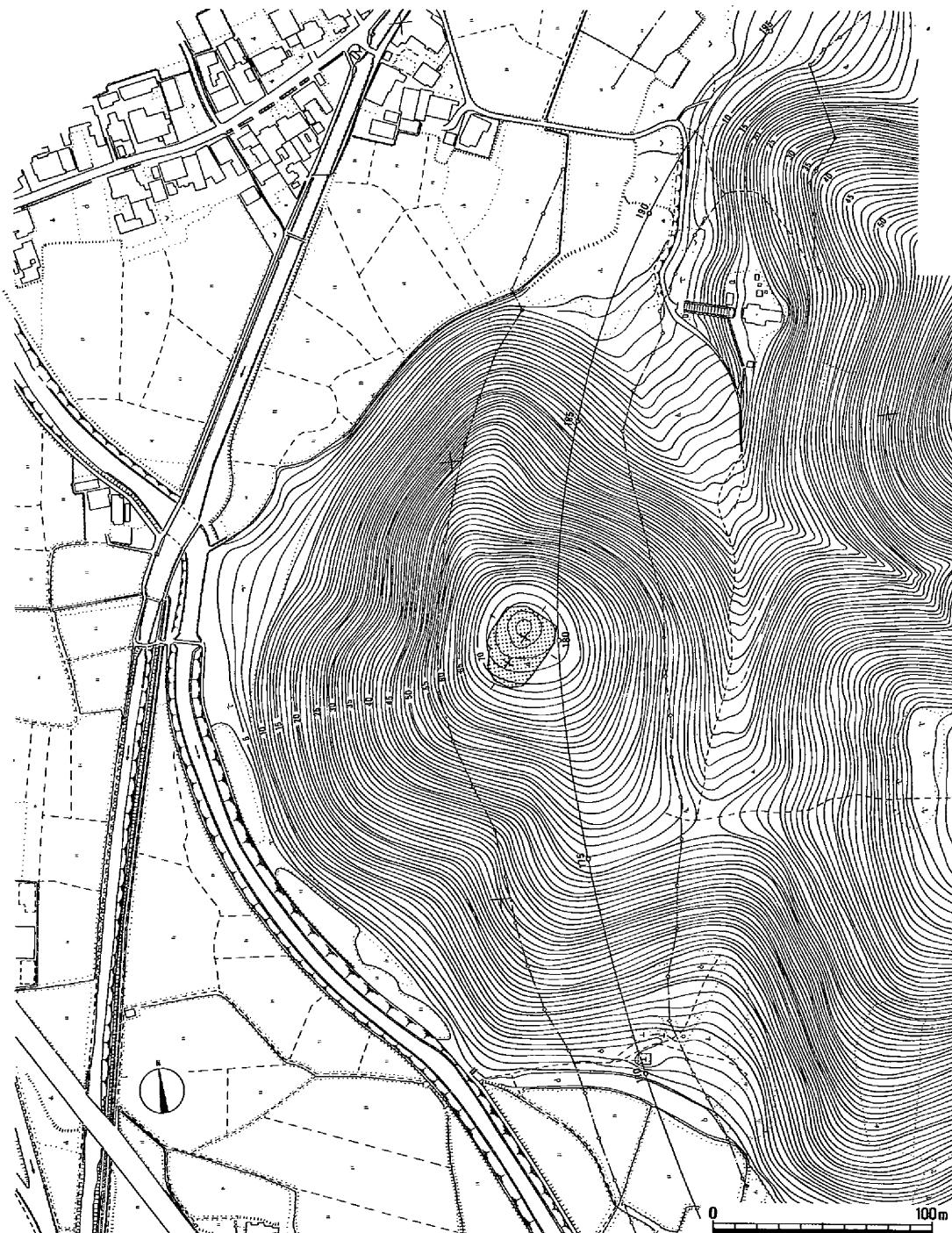
両古墳の主体部の調査の後、墳丘の調査にかかった。流土中に弥生土器破片が含まれることは確認していたが、盛土中にも弥生土器が含まれており、墳丘下に古墳築造以前の遺構が所在している可能性が考えられたため、墳丘築成状況の調査の過程で盛土を除去し、墳丘下遺構の調査を進めた。墳丘下では土器棺・土壙各1基を検出したが、土壙墓等は認められず古墳の築造やその後の表土の流出によって弥生時代の埋葬遺構はほぼ消滅していることが判明した。このほかに、古墳周辺の流土中から

ナイフ形石器、中・近世の土器片等が出土した。

## 第2節 調査の概要

### (1) 調査前の状況（第2図、図版14）

1号墳は径16m、高さ1.6m前後の円墳と推定できる形状を示しており、墳頂部は広い。墳頂肩口の



第1図 椎原古墳群周辺地形図 (1/3,000)

一部は西側からの山道によって少し掘り込まれている。西～北側の墳端付近から下方には岩が多数露出しており、表土がかなり流出しているとみてよい状況であった。墳頂部には角礫数点が認められたほか、大形の瓦質の亀が置かれており、かつてこの墳丘が信仰の対象となっていたと考えられた。

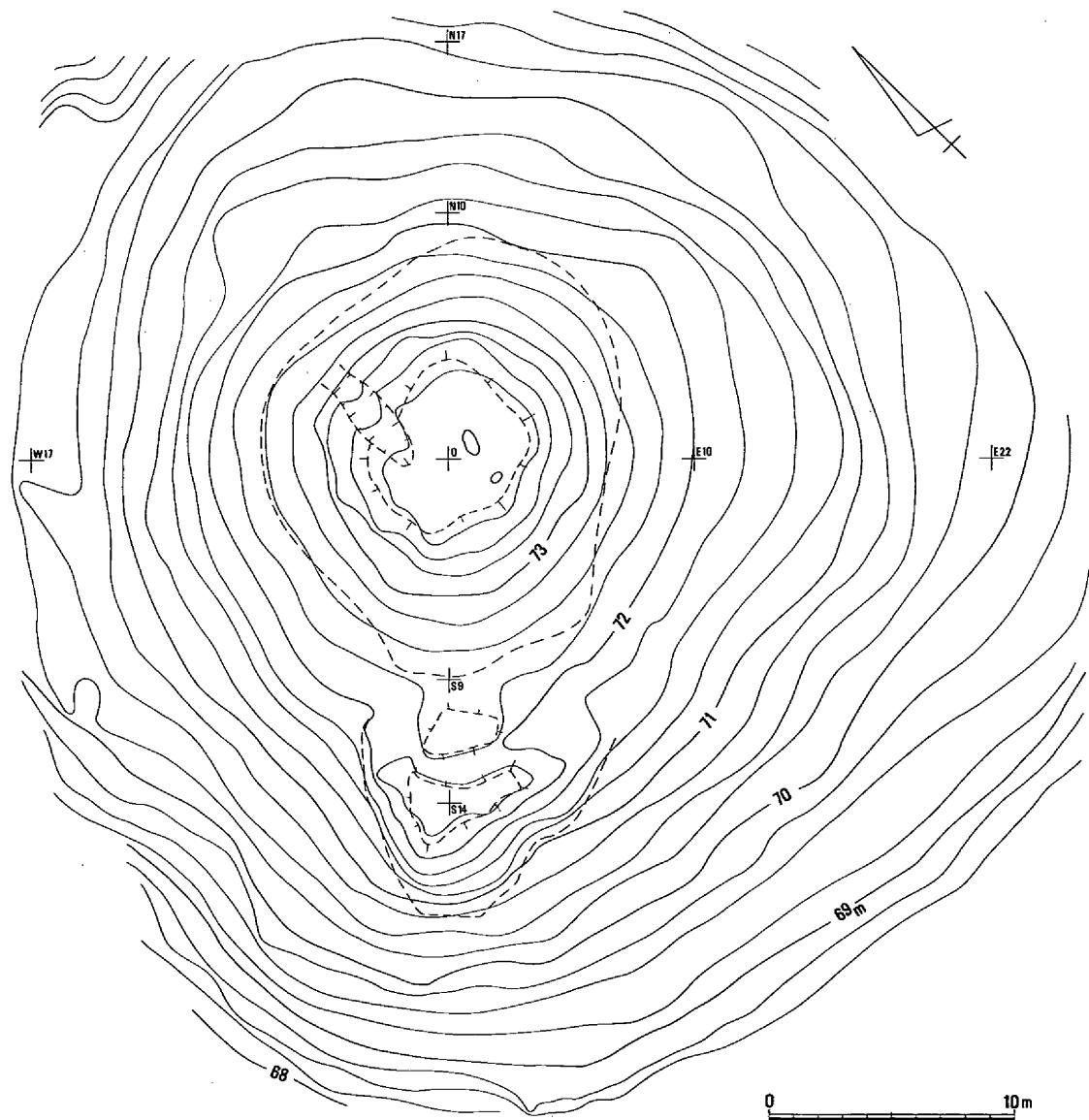
7号墳は1号墳の南西側に所在する微弱な高まりとして認められた。墳丘の下側、南西側は大きくえぐられており、墳頂部も山道によって切断されているため墳形が明確でない状態であった。

古墳下方の山頂部肩付近には小規模な平坦面があり（第2図 70～71m）、畑の跡とみられる。南東側斜面以外の部分に連続して設けられており、7号墳南西側の掘削もこれに伴うものとみてよい。

## (2) 1号 墳

### 墳丘（第3～5図、図版14・15）

丘陵の頂部に築かれた円墳で、径15.9m、高さ1.8mを測る。墳丘はかなり流出しているとみられ、本来の径はこれよりも若干大きかったと推定される。現況で径6mの墳頂平坦面が見られるが、埋葬



第2図 発掘調査前地形測量図（1/300）

施設床面が墳頂下約35cmに位置していることから、この平坦面は後世の削平によって形成されたものと判断でき、墳丘の高さも相当減じているとみてよい。本来の墳丘は径17m、高さ2.4m程度であったと推定される。

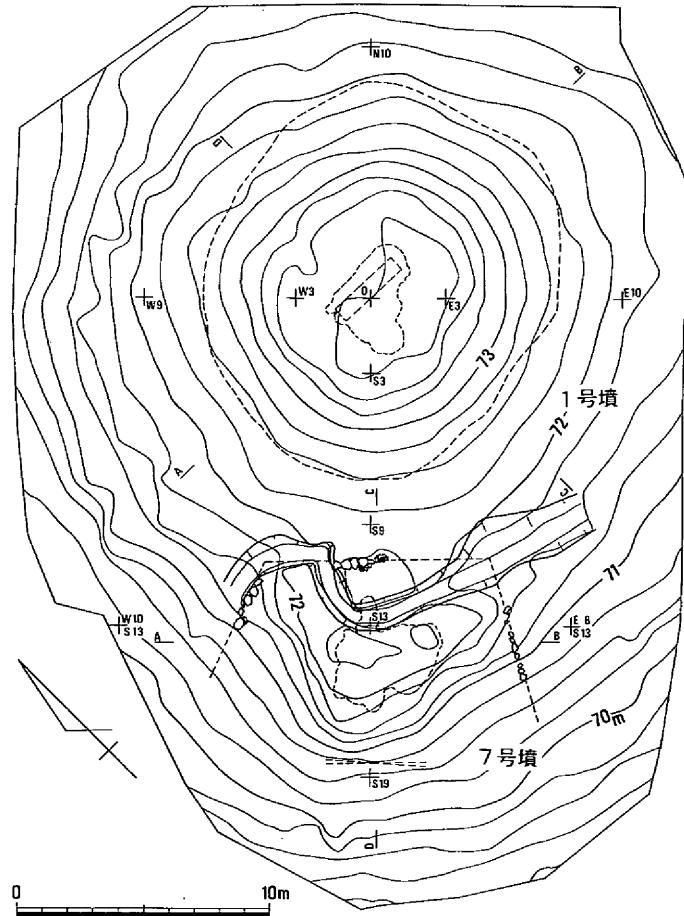
外表施設に関しては、崩落・堆積した石材が全く見られないため、葺石は無かったと推定するが、崩落したものを含めて葺石が完全に流出している可能性も否定できない。

#### 主体部（第6図、図版16）

墳頂部の中央、表土直下で東西方向の堅穴式石室を検出した。乱掘場の形状や土層からみて繰り返し乱掘を被っているようで、石室石材もほとんどが掘り取られ、かろうじて石室の形状をとどめる状態であったが、床面東半部は比較的良好に遺存していた。

石室の壁体のうち遺存しているのは北側壁中央付近の2石と南側壁の東端付近、東小口部の一部のみであるが、東小口側および北側壁部分では石材の抜き取り穴が連続して検出できたため石室の幅は東側で70cmであることがかろうじて確認できた。西小口部分から南側壁の西側にかけては大きくえぐられているため西小口の位置を確認することはできなかった。粘土床の残存長さは東小口から307cmであり、石室の長さはそれ以上とせざるをえないが墳頂平坦部との関係などから西に大きく延びるとは考えにくく、長さ3.2m程度と推定する。壁面のうち最も残存状態の良いのは南側壁の東部で石材が2段残っており、粘土床からの高さは15cmである。なお、この南側壁東部は上方に江戸時代と推定される集石遺構2が所在していたため破壊を免れたものと思われるが、集石遺構2が設けられた時点では石室の上部は失われていたと考えられる。集石遺構2の構築が石室の開口を契機とするものであったとするなら、開口は江戸時代、石材が抜き取られたのはそれ以降となろう。

床面には灰白色の粘土を用いた粘土床が設けられており、東小口から80cm付近で最も厚く7cm、西側で4cmを測る。東小口から70cmの位置には長さ14cm前後の小角礫3点が三角形に置かれている。東端の礫を中心に赤色顔料の散布が見られることからこれらの礫は枕石と考えられる。通常の前期古墳においては頭側が高くなることが多いが、この石室の場合は枕石付近が最も低くなってしまい、床面東端がそれよりも12cm、西端が7cm高くなっている。したがって、本石室は2体の埋葬がなされており、枕石は第2被葬者に伴うものである可能性も考えられるが、枕石が石室の中央に位置することや、保



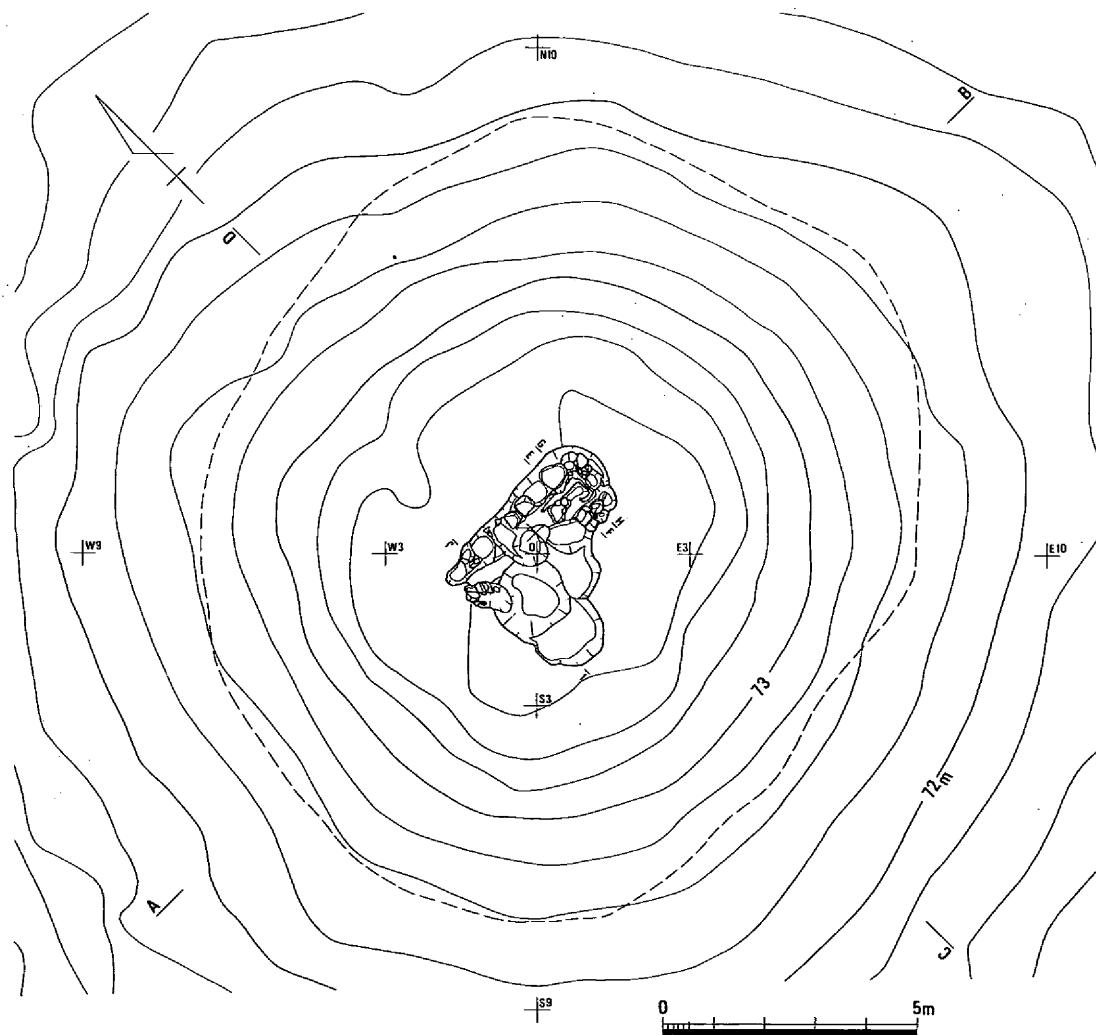
第3図 墳丘測量図 (1/300)

存状態が良くないとはいへ西側に赤色顔料が全く見られないことから、これが本来の被葬者のものであり、頭位は東になると考へた。この場合、石室軸線は磁北に対してN $89^{\circ}$  Eとなる。

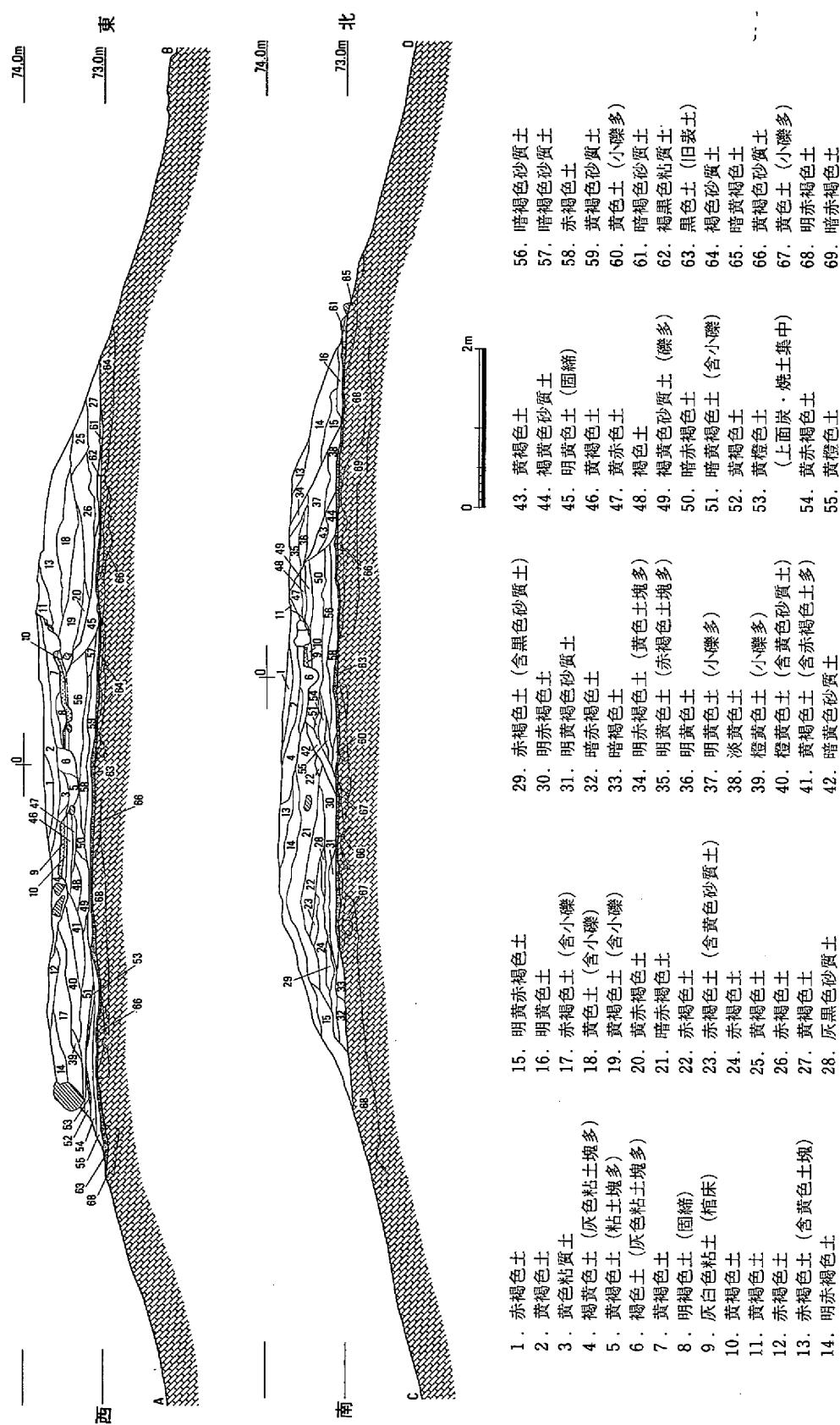
粘土床は枕石付近が南北両側よりも8~5cm低くなり、浅いU字形の断面をなす。西側の粘土床は残存範囲が狭いため明確ではないが、U字形のくぼみはきわめて浅くなる可能性がある。床面がこうした曲面を呈する場合には刳抜式の木棺を想定することが多いが、本墳の場合、枕石のうち南側のものは床面上に置かれているが、北西側のものは粘土床中に6cm、中央のものは2cm埋め込まれて上端の高さをそろえてあり、木棺の存在は考えにくい。粘土床上に被葬者を安置したものと考えられ、中小規模の堅穴式石室の場合には必ずしもすべての場合に木棺が用いられていなかつことを示す例と言えよう。

#### 盛土（第5図）

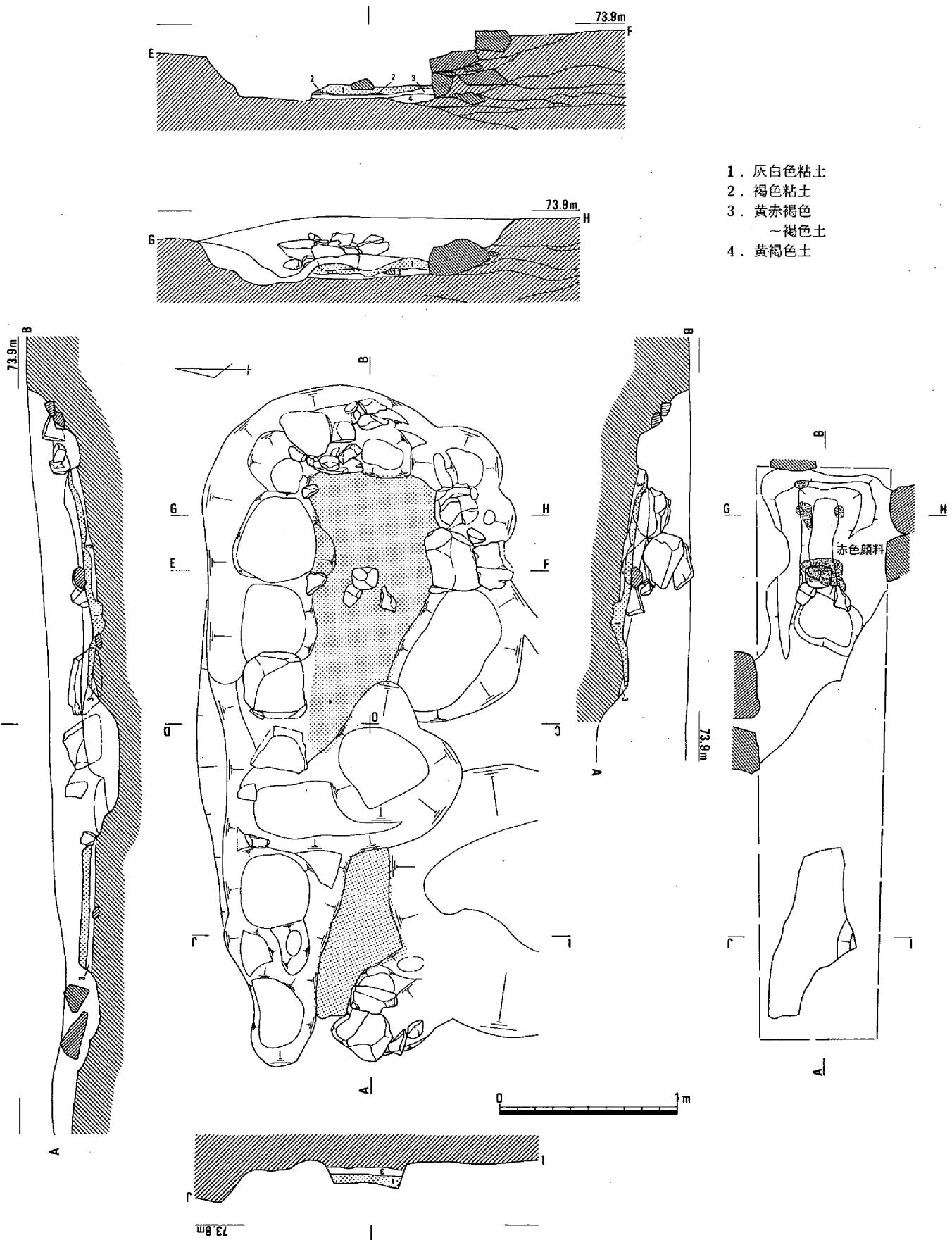
墳丘は上部が盛土、下半が地山の削り出しによって形成されており、残存する盛土の厚さは70cmである。墳丘の築成は特徴的で、中央から墳丘が形成されている。最初に47~60層が積まれ、その斜面に42~45層が貼り付けるように積まれる（盛土Ⅰ）。A B断面西半では盛土Ⅰと後述の盛土Ⅱとの区分が明瞭でないが、48層以下が盛土Ⅰと判断した。盛土Ⅰによって形成された高まりは長方形台状をなし、東西両側は裾が長く延びた形になる。高まりの大きさは上面で東西2.4m、南北1.6mを測る。



第4図 1号墳墳丘測量図 (1/150)



第5図 1号墳丘断面土層図 (1/80)



第6図 1号墳主体部 (1/30)

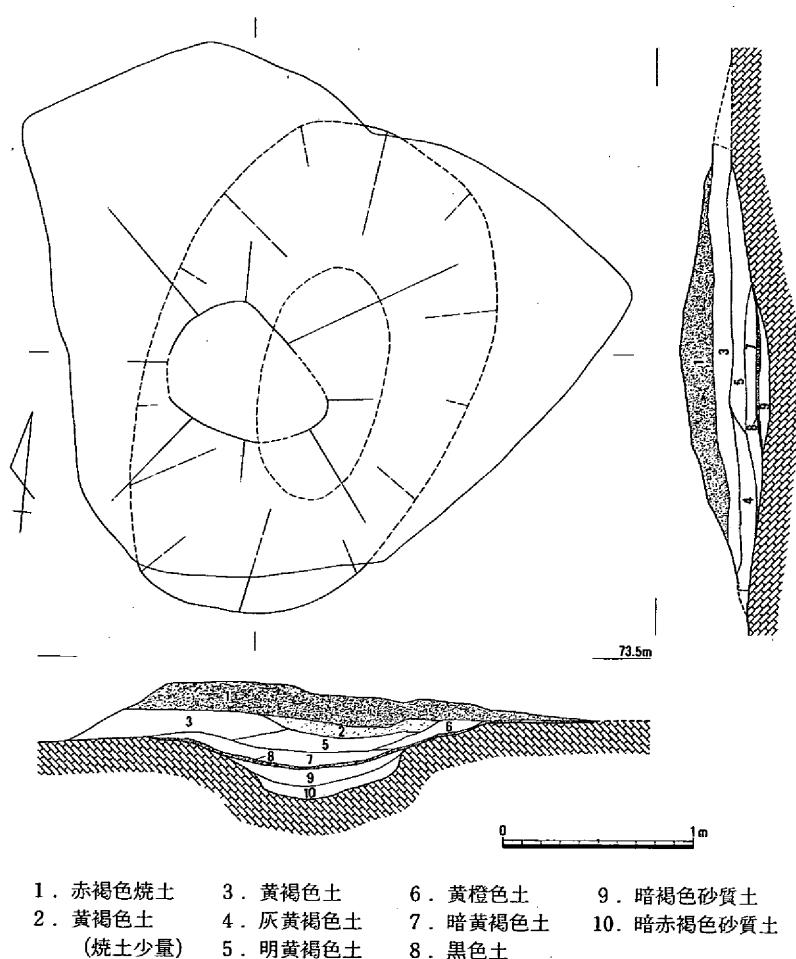
この高まりは石室の軸線とほぼ一致し、石室よりも一回り小さいことからみて、最初に石室基底部分の構築を行っていると考えられる。

続いて盛られたと見られるのはAB断面東半13~27層、西半39~41層（盛土Ⅱa）とCD断面北半34~38層（盛土Ⅱb）で、さらに同北半13~16層（盛土Ⅱc）が積まれる。盛土ⅡaとⅡbの先後関係は明確でないが、Ⅱaに続いてⅡbが積まれた可能性を考えておく。この場合、まず東西の長軸方向に高まりが拡張され、続いて墳丘北側が2回にわたって拡張したような形で形成されたことになる。

この後CD断面南半13~33層等（盛土Ⅲ）が積まれて墳丘が完成する。盛土Ⅰ・Ⅱが明黄色土～黄褐色土で堅く締まっているのに対し、盛土Ⅲには主に赤褐色土が用いられている。付近の地山層は部分によって差はあるが、おおむね現地表下20cm前後までが赤褐色土、それ以下が明黄色土となっており、墳丘の下部に地山下部の土を、上部に地表近くの土を選択して使用したと考えられる。

#### 焼土層（第7・14図）

墳丘西側の盛土下部において焼土層を検出した。焼土は厚さ17cmで東西3.0m、南北2.8mの不整三角の平面形をなす。焼土層の下方には長径270cm、深さ41cmの土壌状のくぼみがあり、その埋土の中ほどに黒色土が認められる。土壌が半ば埋められるか埋まったかの後に黒色土で覆われ、さらにそれが埋められた上に焼土層が盛られていることになる。盛土の下部にまとめて焼土が積まれているわけであるが、その意味や下側の土壌状のくぼみの性格については不明であり、類例を待ちたい。



第7図 焼土盛土および下部の土壌 (1/40)

#### 黒色土（第5・14図）

盛土の下面はほぼ水平で、その下面には厚さ3~5cmの黒色土が認められる。墳丘の北側および西側では盛土範囲のいっぱいまで認められるのに対し、南側および東側では盛土端よりも最大2m内側からはじまっている。

この種の黒色土については旧表土と判断できる例が多いが、本墳の場合、山頂でありながらほぼ水平に形成されていることや黒色土下に弥生時代の遺構が遺存していないことなどから、山頂を削平して平坦面が形成された可能性が考えられ、黒色土は人為的に形成されたものと考えられる。

#### 墓壙（第6図）

東小口部と北側壁部では石材の大半が抜かれ、裏込めの

土もほとんど失われているため、石室と墳丘の関係を観察できる断面は南側壁の一部に限られる。また、この部分の盛土Ⅲはきわめて分層しにくいものであったため、判断の材料が十分とは言いがたいが、この断面の観察による限り墓壙は認められず、墳丘の築成と平行して石室の構築がなされたと判断される。盛土Ⅰによって石室の基底となる部分が形成され、Ⅱ・Ⅲの積み上げと平行して石室の構築がなされたと考えられる。

なお、石室北側壁では遺存した石材の裏側に掘り方状の断面がわずかに認められた。遺存部分が少なく明確でないが、墓壙というよりは掘り方が北側壁部分のみに設けられる程度と思われる。

#### 出土遺物（第8・9図、図版17）

石室は前記のような状態であったため副葬品の量は僅少で、鏡片、管玉各1点が出土したにすぎない。鏡片M1は墳丘西肩部の流土中から、管玉J1は石室攪乱土中からの出土であり、盗掘の際に床面から遊離したものとみてよい。

鏡M1は鏡縁部の小片で、残存長さは1.4cmである。銅質は比較的良く、鏡面・背面とも緑色を呈する。小片のため鏡径の推定は困難であるが、径10cm前後の小形鏡とみられる。鏡縁は丸みを帯びて蒲鉾形に近い断面をなす。内側には鋸歯文帯がめぐるが鋳上がりは不良で、鋸歯文の先端が鏡縁に連続している。舶載の方画規矩鏡や内行花文鏡の鏡縁は基本的に方形の断面で、こうした丸みをもつ鏡縁は一般的でない。鋳上がりや鏡縁の形状からは弥生時代末～古墳時代前期の倣製鏡の可能性を考えられ<sup>1)</sup>、この地域の類例としては山陽町さくら山方形台状墓、同便木山遺跡出土の内行花文鏡などがある。

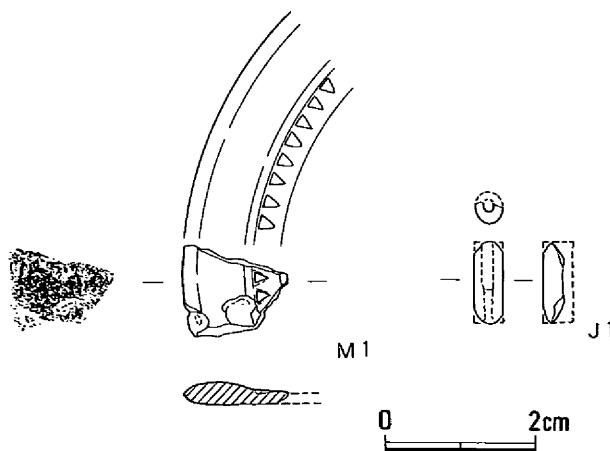
管玉2は緑白色軟質の管玉で、緑色凝灰岩製と思われる。長さ11mm、径4mmを測り、穿孔は両面からなされている。

後述のように弥生時代後期の土器類が墳丘中からかなりの量が出土したが、1号墳に伴うと考えられるものは盗掘壙埋土から出土した1のみで、小形の壺の口縁部と思われる。砂粒の少ない精良な胎土で、内面には横方向のヘラミガキが認められる。

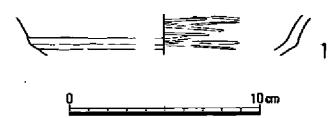
#### (3) 7号墳

##### 墳丘（第10図、図版14・15）

1号墳の南西側、地山の傾斜がかなり強くなる部分に築かれた方墳で、長辺を等高線と平行に置いている。地山の傾斜の点では1号墳南東の斜面が古墳の築造に適当かと思われるが、あえてこの位置に築かれているのは下方からの景観が重視されたためであろう。南西下方側が畠の造成による削平と流出のため失われており、東側は山道によって深くえ



第8図 1号墳出土鏡・管玉 (1/1)



第9図 1号墳出土土器 (1/4)

ぐられている。

南西側を除く3辺で葺石列を検出した。このうち南東と北西の2辺は北東の辺に対して大きく開いており、墳形は斜面下方側の辺が長くなる台形になるとみてよい。南西の墳端を現状での傾斜変換部とした場合、墳丘の大きさは北東一南西方向8m、南西辺の長さ15mとなるが、北東一南西方向の長さはこれよりも若干長くなる可能性がある。北東辺の長さは推定9mである。

墳丘の高さは南西側からが約1.8m、北東側で10数cmとなり、下方からの高さが顕著である。墳丘はかなり流出しているとみられるが、北東辺の葺石は平たい石材を30°弱の低い角度で設置したものであり、これが北東辺側の墳丘角度を示すとするならば、本来の墳丘もあまり高くなく、現状よりも40cm高い程度ではなかったかと思われる。

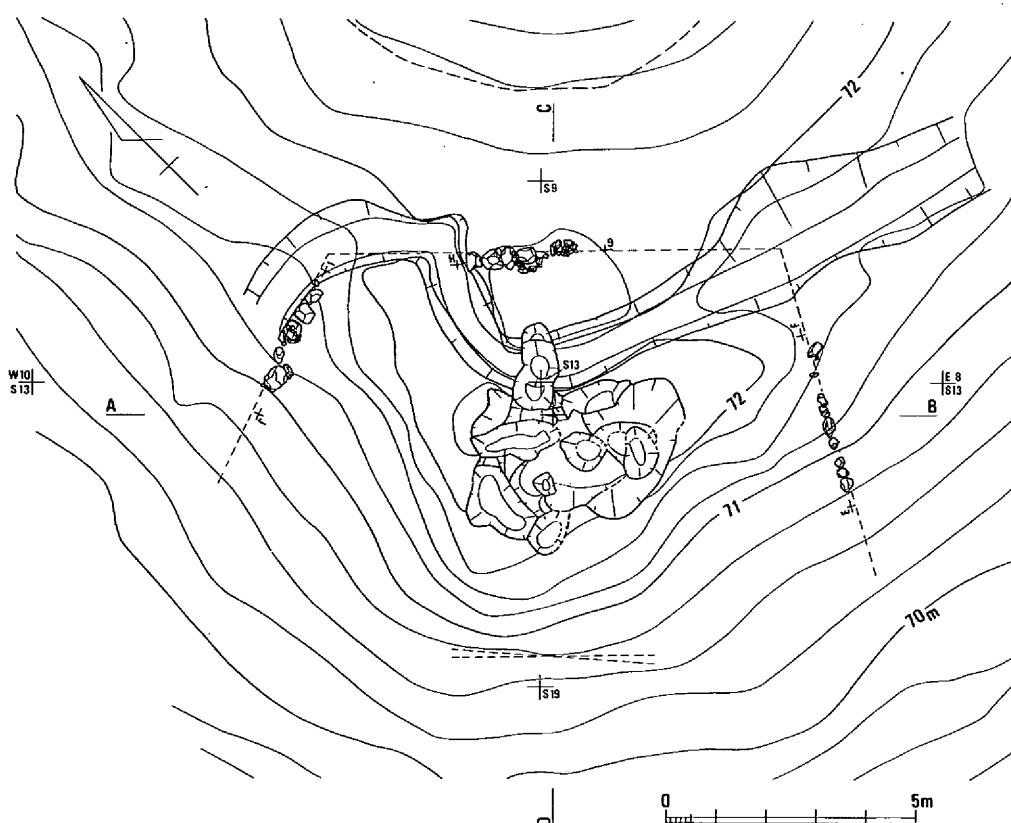
#### 葺石（第11図、図版15）

上記のように墳丘の3辺には葺石が遺存していた。使用されている石材は基盤と同じ流紋岩類の角礫である。e f断面の状況などからみて、浅い掘り方が伴うと思われるが、多くが表土直下、部分によつては石材が完全に露呈した状態であったため設置の状態については明確にできなかった。

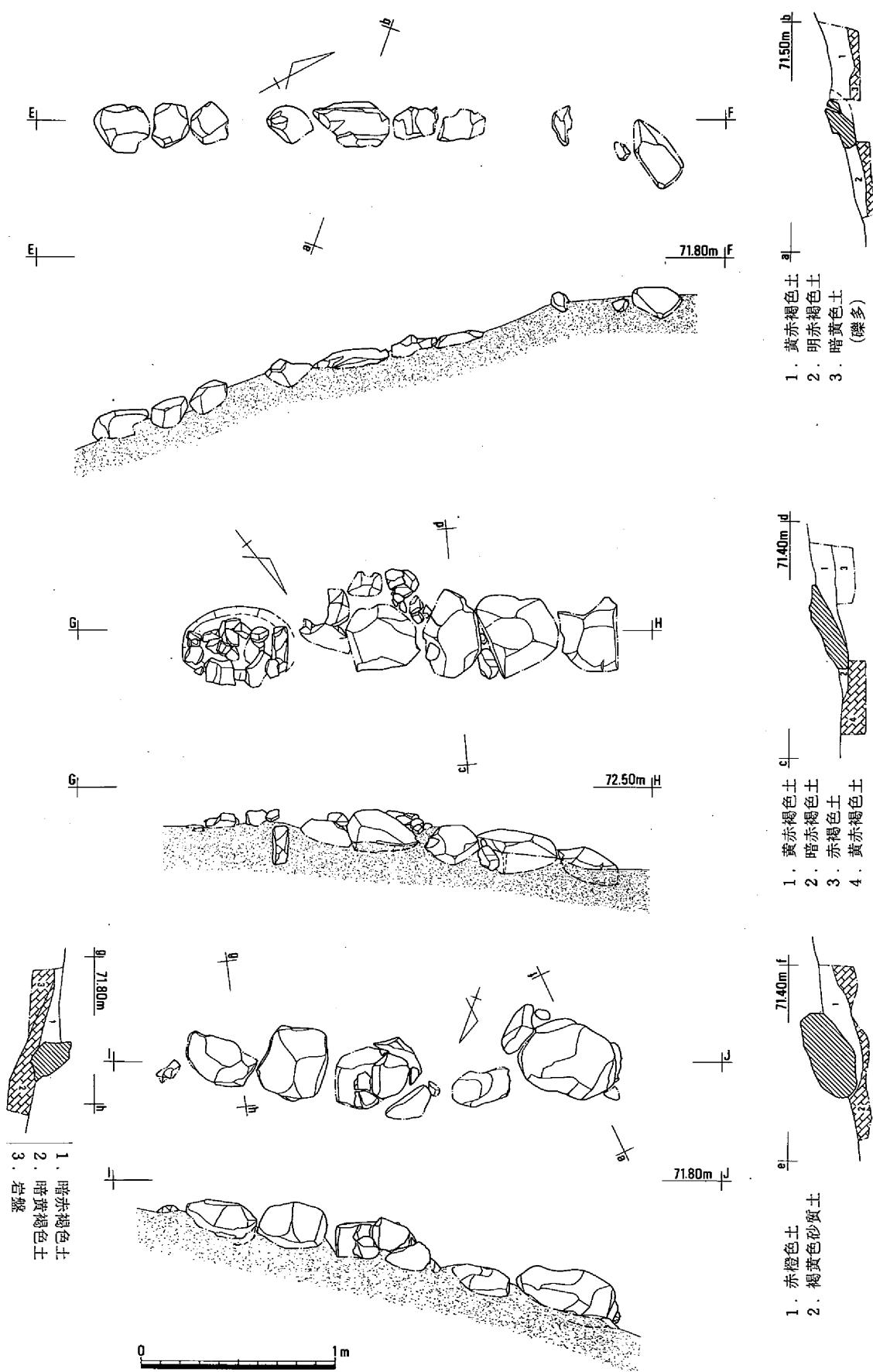
**南東部** 長さ3mにわたって遺存していた。石材は比較的小さく長さ20cm前後のものが主体を占める。両端の間の比高は63cmである。

**北東部** 長さ1.6mで4石が遺存していた。東端は石材が抜かれ、抜き跡に小さな角礫が落ち込んでいる。遺存する石材は長さ35cm前後と比較的大きいが、厚さは10cm前後の偏平なものが選択されており、それらの間に小さな石材を配している。先にも記したが、石材上面の傾斜は30°弱と緩やかである。

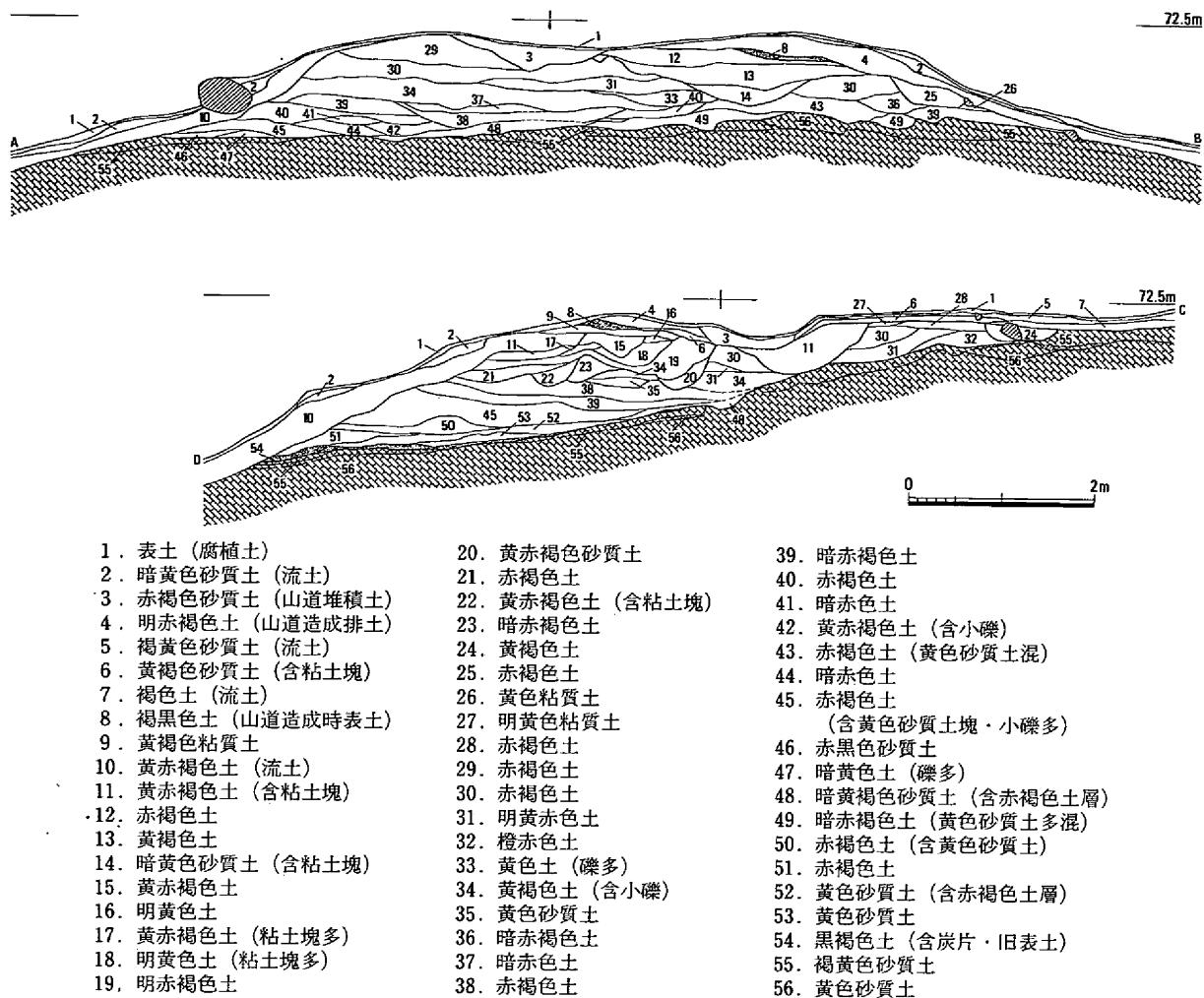
**北西部** 長さ2.2mにわたって石材5点が遺存していた。この付近では墳丘の流出が著しく、石材はほ



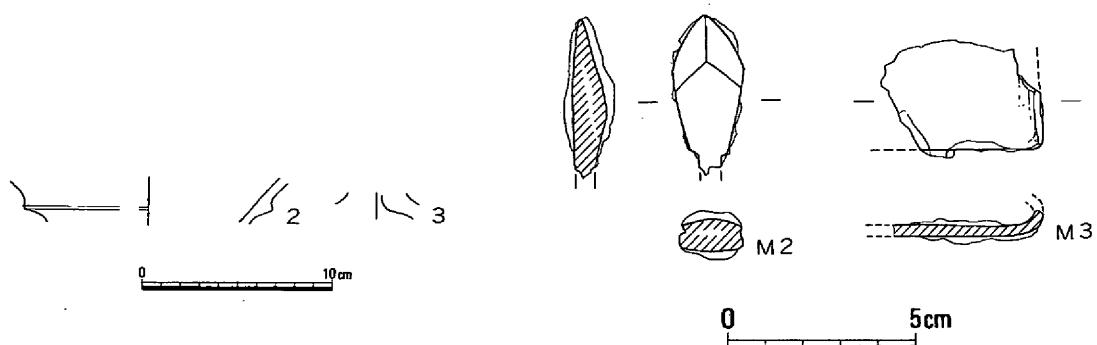
第10図 7号墳墳丘測量図 (1/150)



第11図 7号墳葺石 (1/30)



第12図 7号墳墳丘断面土層図 (1/80)



第13図 7号墳出土土器・鉄器 (1/4・1/2)

とんど露呈した状態であった。長さ35cm前後の塊状の石材が使用されている。

#### 盛土（第12図）

盛土は最大110cmと比較的厚い。1号墳の場合と異なり、下側から順次墳丘を積み上げている。斜面下方がやや高くなるように積まれており、用いられている土はおもに赤褐色土である。

盛土下面のうち墳丘の下方側にのみ黒褐色土が広がる。この層は地山にそって緩やかに下降しており、下方側が最も厚くなり3cmを測る。下部の地山は褐黄色土、黄色土と漸移することからみて、この黒褐色土は旧表土と考えられ、上方側では地山の傾斜を緩やかにするため削り取られたものと思われる。

#### 主体部（第10図）

主体部は盜掘によって完全に失われていた。乱掘壙の規模は長さ4.8m、幅2.6m、深さ100~75cmである。乱掘壙の埋土中には白色の粘土塊が多量に含まれており、赤色顔料が付着したものも多く認められた。その一方、石材は全く含まれていないことからみて、主体部は木棺粘土床あるいは粘土櫛であったと考えてよい。乱掘壙は主体部の位置を反映したものと思われるが、墳丘の軸線に斜交して東西主軸となるのか、軸線に平行するのか明確でない。

#### 出土遺物（第13図、図版17）

上記のように主体部が完全に攪乱されていたため、副葬品は原位置をとどめていない。鉄鎌M2、鍬・鋤先M3は墳丘南側の流土から、上器片2・3は盜掘壙埋土からの出土である。

鉄鎌2は定角式の鎌身であるが、錆化のため内部に亀裂が生じてかなりふくらんでいる。鎌身長さ38mm、幅19mm、重さ12.7gを測る。

M3は鍬ないし鋤先の破片で、折り返し部は欠損している。身部の厚さは3mmである。

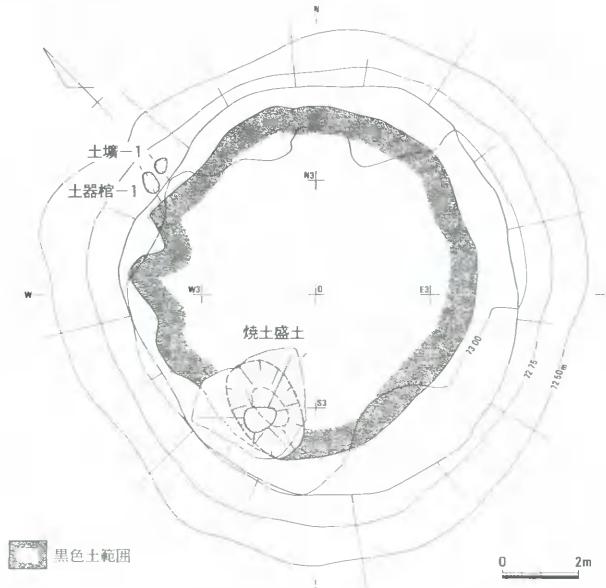
2は壺口縁部の破片、3は高杯脚部の破片である。このほか、盛土中には弥生土器が含まれていた。

#### (4) 古墳築造以前の遺構と遺物（第14図）

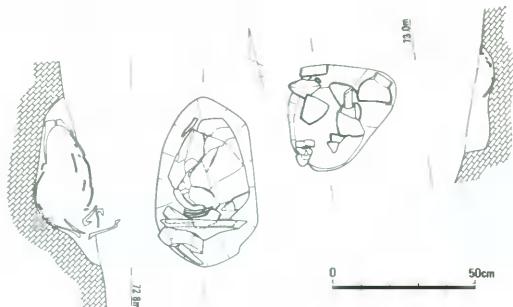
##### 1・7号墳ともに墳丘盛土

中に弥生土器の小片が含まれており、墳丘下ないし周辺に弥生時代の遺構が遺存する可能性が考えられたため、両墳の盛土の除去を行い、遺構検出を行った。

7号墳の墳丘下では遺構は認められなかったが、1号墳墳丘北側で土器棺および土壙各1基を検出した。これらが単独で設けられたとは考えにくく、周辺に木棺墓や土壙墓が所在していたと考えられるが、墳丘北側部分は広く岩盤が露呈した状況となっている。本来所在したであろう弥生時代の墳墓遺跡は墳丘築造時の削平と表土の流出によっ



第14図 1号墳盛土下部および検出遺構 (1/150)



第15図 土器棺-1（左）・土壤-1（右）（1/20）

甕を棺身とし、高杯の杯部を蓋に用いた土器棺である。棺身は口縁部が斜面上方側（南側）に向けられ、口縁側が若干高くなるように置かれている。掘り方の長径は60cm、深さ23cmを測る。角礫を大量に含む地山であるため、埋土には角礫が多く、棺身の上面は礫で覆われた状態であった。

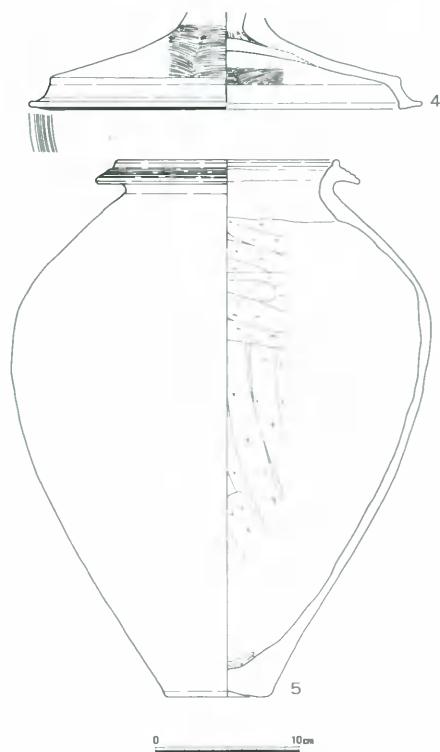
なお、図版17に示すように掘り方の北側35cmの位置に角礫4点が並んだような形で所在しており、

小規模な上盛りがあって下方側の土留めに石が配されたか、上盛り中に含まれていた可能性が考えられる。

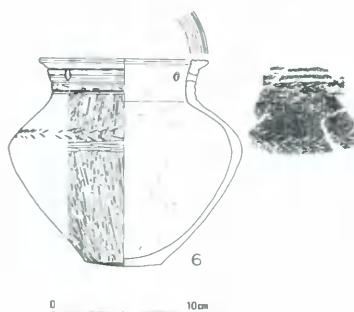
棺身に用いられた甕5は器高37.8cm、口径15.2cmを測る。口縁端部は外方に拡張され、凹線4条が施されている。蓋に用いられた高杯2は脚部が折り取って杯部のみが使用されている。口径27.1cmを測り、端部は拡張されて端面には4条の凹線が施されている。これらは器形の特徴から後期前葉に編年される。

#### 土壤-1（第17図、図版17）

土器棺1の北東側に近接して所在する南北37



第16図 土器棺-1（1/4）



第17図 土壤-1 出土土器（1/4）

てほぼ完全に失われ、それをまぬがれた2基の遺構のみが遺存したものとみてよい。

遺存した2基の遺構の位置や山頂南側斜面に遺構が認められないことから弥生時代の墳墓遺跡は丘陵の頂部から北斜面にかけて広がっていた可能性が考えられ、丘陵北側ないし西側の平野の集団によって形成された可能性が想定される。

#### 土器棺-1（第15図、図版17）

cm、深さ14cmの小規模な土壙で、平面形は隅丸の三角形である。土壙内には壺6の破片が散在した状態であり、小形の壺を破碎供献したか、祭祀に用いた土器を埋納した可能性が考えられる。

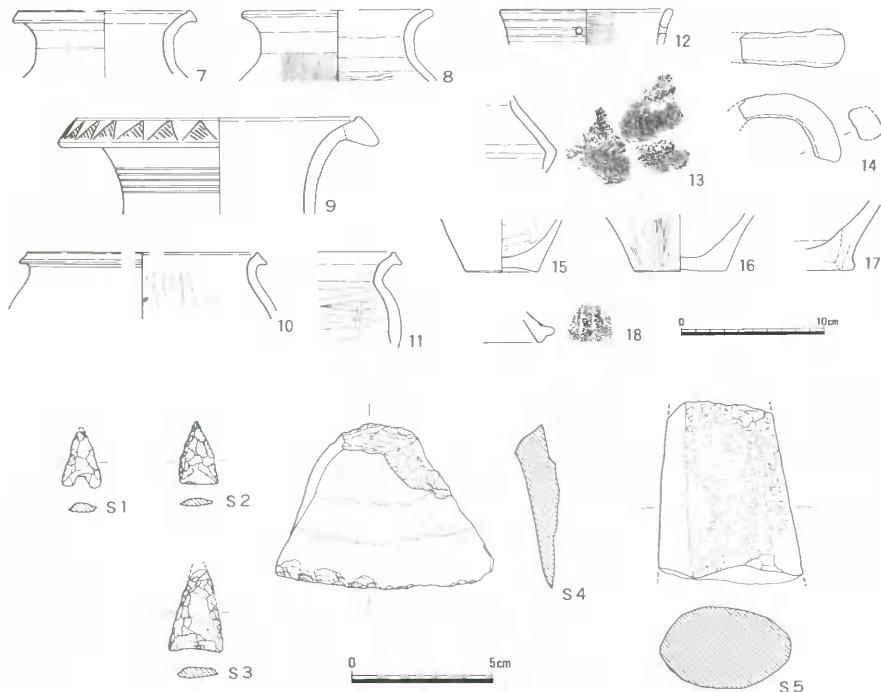
出土の壺6は接合によりほぼ完形に復元できた。器高14.6cm、口径11.8cmの小形の壺である。短い頸部には凹線3条が施され、円孔が2個ずつ2ヶ所に設けられている。口縁端は外方に拡張されて細い凹線3条が施されている。肩部には列点文が羽状に施されている。胴部の外面調整はヘラミガキ、内面調整はヘラケズリである。

出土土器の特徴から土壙1は土器棺1と同時期とみられる。

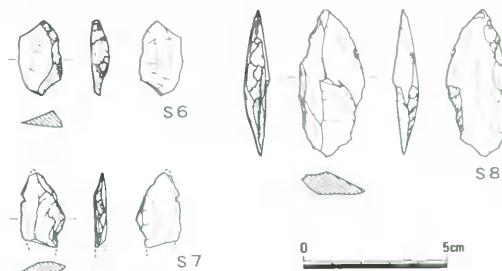
#### 墳丘・流土出土の遺物（第18・19図、図版18）

図示可能な弥生土器は7～18で、他に大小の胴部破片がある。壺7～9・12・13、甕10・11・15・16、高杯18などがある。12と13は同一個体の可能性がある壺の破片で、口縁部12は円孔をもち、13は強く張った肩の上部に羽状の列点文を施しており、土壙-1の壺6と同じ形状を示している。14は水差形土器の把手と考えられる破片、17は鉢の底部と思われる。いずれも土器棺-1、土壙-1と同じ後期前葉に位置づけられるもので、時期が逸脱するものを含んでいない。これらは弥生時代の墳墓に伴うもので、供献土器および土器棺の破片からなると推定される。

弥生時代の遺物としては上記の他に石鎌S2・3、スクレイパー4、石斧5があり、2～4はサヌカイト製である。石鎌2は長さ21.5mm、基部幅13.5mmで0.8g、3は先端を欠損するが長さ29.5mm、基部幅19mmで2.1gを測る。調査時に先端を欠損した。スクレイパー4は横長の剝片を用いたものであ



第18図 植原古墳群出土縄文・弥生時代遺物 (1/4・1/2)



第19図 植原古墳群出土ナイフ形石器 (1/2)

いる。7は下端が欠損する。やはり腹面から粗い調整が施されているが、主剥離面の打点が残っている。8は長さ52mmとやや大きい。背腹両面から粗い調整がなされており、右側縁下端には背面からの粗い調整が入っている。これら以外に剥片・チップ約10点が出土している。風化の色調は5よりも6～8に類似しており、ナイフ形石器に伴う可能性が強い。

以上の資料のうち石鏃2・3は弥生時代後期の墳墓に伴う可能性も否定はできないが、おそらくはS4・5とともに弥生時代中期の遺物と推定され、1は縄文時代とみられる。遺物量の少なさから、狩獵や採集活動を示すものと考えられる。一方、旧石器時代の遺物は資料の点数がまとまっており、いわゆるキャンプ・サイトが営まれていたと考えてよいだろう。下方への眺望が非常に良い山頂であり、大型獣の見張り場等としての利用がなされたと思われる。

### (5) 古墳時代以後の遺構と遺物（第20図）

墳丘の削平によって拡大した墳頂平坦部では2基の石積遺構と焼土壙1基を検出した

#### 石積遺構-1（第21図）

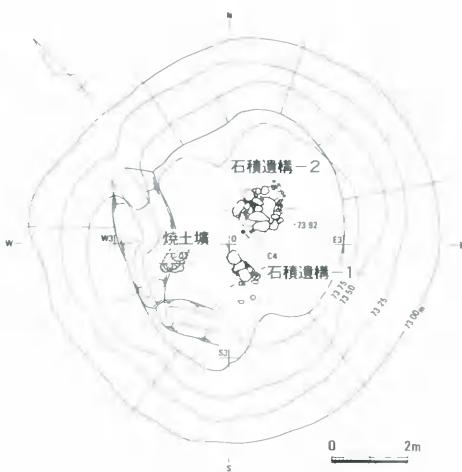
石材3点を並べたもので、長さ90cmを測る。石室石材を転用したものと思われる。

#### 石積遺構-2（第22・23図）

長さ130cm、幅120cmの5角形の平面形をなす石積みで、高さは27cmを測る。遺構の西半は石を主体に積まれており、裾部には大形の石材が配されるのに対し、東半は土が主体で裾には小さな角礫が配されている。石材は石室石材を転用したものと思われる。

遺構の内部からは寛永通宝3点と東播系こね鉢の破片19が出土した。後者は混入と思われ、寛永通宝の示す近世がこの遺構の年代を示すとみてよい。小規模な塚として設けられたものであろう。

#### 焼土壙



第20図 1号墳墳頂部近世以降遺構配置図 (1/150)

る。石斧5は基部の断片で側面には敲打痕が残る。太形蛤刃石斧としては小形の部類である。

S1は小形凹基の石鏃で、白色に風化している。長さ20mm、基部幅14mmで0.6gを測る。形状や風化の強さから縄文時代のものと推定される。

S6～8は小形のナイフ形石器で、いずれも横長の剥片を用いたものである。6は腹面から粗い調整がなされて

1号墳の主体部検出中に確認したもので、幅50cm、深さ5cmを測り、内面全体が焼けている。近世ないし近代のものと思われる。

#### 流土中出土の遺物（第24図、図版17）

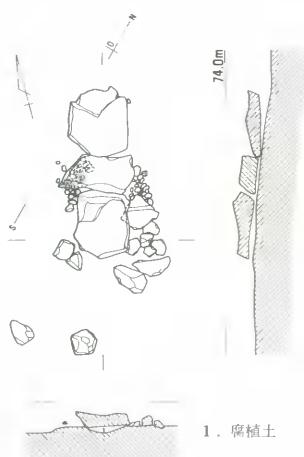
20は瓦質の羽釜、21・22は東播系こね鉢の破片である。M7は鉄寛永、9は鉄釘で、ともに1号墳石室の攪乱土中からの出土である。8は銅薄板の装飾品である。破片であるため意匠が明確でないが複数の曲線が打ち出されており、その間は魚子地となる。用途や年代は明確でない。

S9は長さ79mm、幅38mmを測る砥石で、図左側縁にあたる部分を除く全面が使用されている。

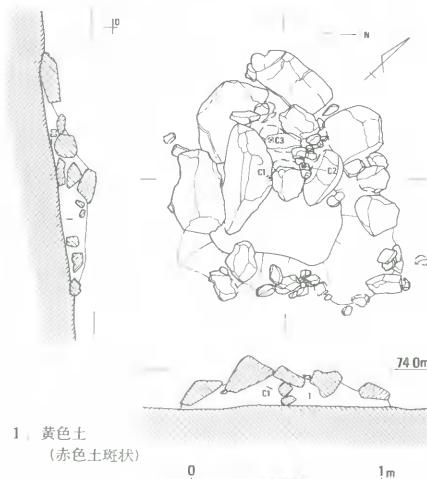
以上の遺物のうちM7・9は近世のものである。一方、中世の遺物としては東播系こね鉢21、須恵質の壺口縁部片22がある。山頂でのこね鉢・壺のみの出土であり経塚等が所在した可能性も考えられる。

### 第3節 まとめ—古墳群の評価—

古墳2基と墳丘下に遺存した弥生時代後期の墳墓の調査を行った。これらのうち古墳は盗掘と流出によって副葬品の多くが失われていたため詳細な時期の把握は困難であるものの、残存した遺物によって前期古墳と判断することが可能であった。また、当初可能性が考えられた小形の前方後円墳で



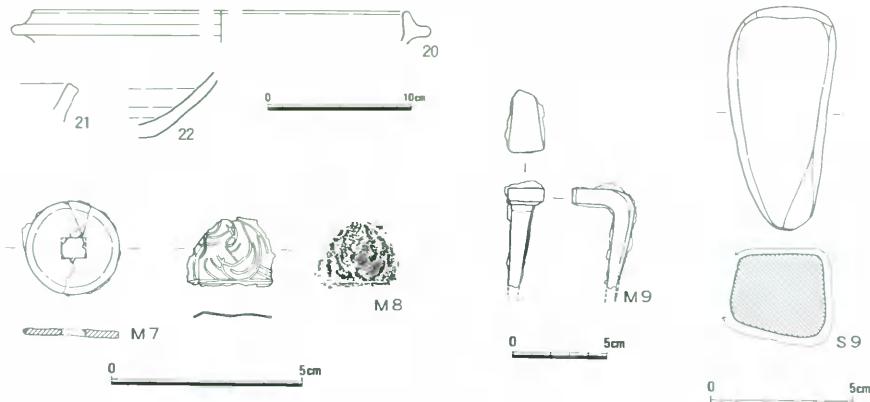
第21図 石積遺構-1 (1/30)



第22図 石積遺構-2 (1/30)



第23図 石積遺構-2 出土遺物 (1/4・2/3)



第24図 植原古墳群出土中世以降遺物 (1/4・2/3・1/3・1/2)

ではなく、近接して築かれた円墳と方墳であることが判明した。

備前南部は首長墳の変遷が注目される地域であり、それらについてもなお多くの研究課題があるが、下位の小古墳についても調査例はそれほど多くない。今回の調査によって古墳時代前期の小墳の検討のための一つの資料が得られたと言えよう。

調査成果の中でも注目されるのは1号墳の主体部である。全長約3.2mの竪穴式石室であるが石枕の状況から木棺は用いられていないと考えられ、竪穴式石室という上位の埋葬施設を採用する一方、その用法は箱式石棺でのあり方を想起させるものと言える。また、主体部の軸線が東西方向で、東枕と考えされることも重要である。吉備の首長墳の場合、主体部は北頭位でまとまることが判明しているが、そのことは吉備が北頭位をとる畿内と葬送の思想を同じくしており、両地域の首長間の親縁関係を表示すると考えられている。この北頭位に対し、吉備の前期古墳で東西頭位をとる例としては植原1号墳の他に岡山市七つ塹5号墳、山陽町用木1号墳がある。前者は全長25mの小規模な前方後方墳、後者は径31mの円墳で、主体部はそれぞれ粘土床、粘土櫛である。墳形や墳丘規模、主体部などからこれらは下位の首長墳と判断できるが、このことから埋葬頭位が首長間の階層に応じて異なる可能性を想定することができる。つまり、上位の首長は北頭位、下位の首長は東頭位という格差が設けられている可能性が考えられる。

この想定の場合、植原1号墳は下位の首長の格付けにあると見ることになるが、径16mの円墳という墳丘規模は7つ塹5号墳などの規模と較べてやや小さい。一方、盛土の量が多いことや立地、主体部構造などからは一般の小墳よりも上位とみることができる。小墳を有力世帯家長の墳墓とするならば、植原1号墳の位置付けは下位の首長ないし上位の有力世帯家長の墳墓ということになり、そのいずれに含めるべきか判断が容易でない。ここでは立地や埋葬施設を重視して前者と考えておくが、今後、この点については吉備の前期小墳の分析を行なうなかで検討ていきたい。

副葬品のうち1号墳の鏡は小形の倣製鏡と考えられるものである。鏡縁付近の小片で、得られる情報が少ないため資料自体の検討は困難であり、前期の小形倣製鏡の一資料という他はないが、岡山県内に類似した鏡縁をもつ資料が分布する点が注目される。

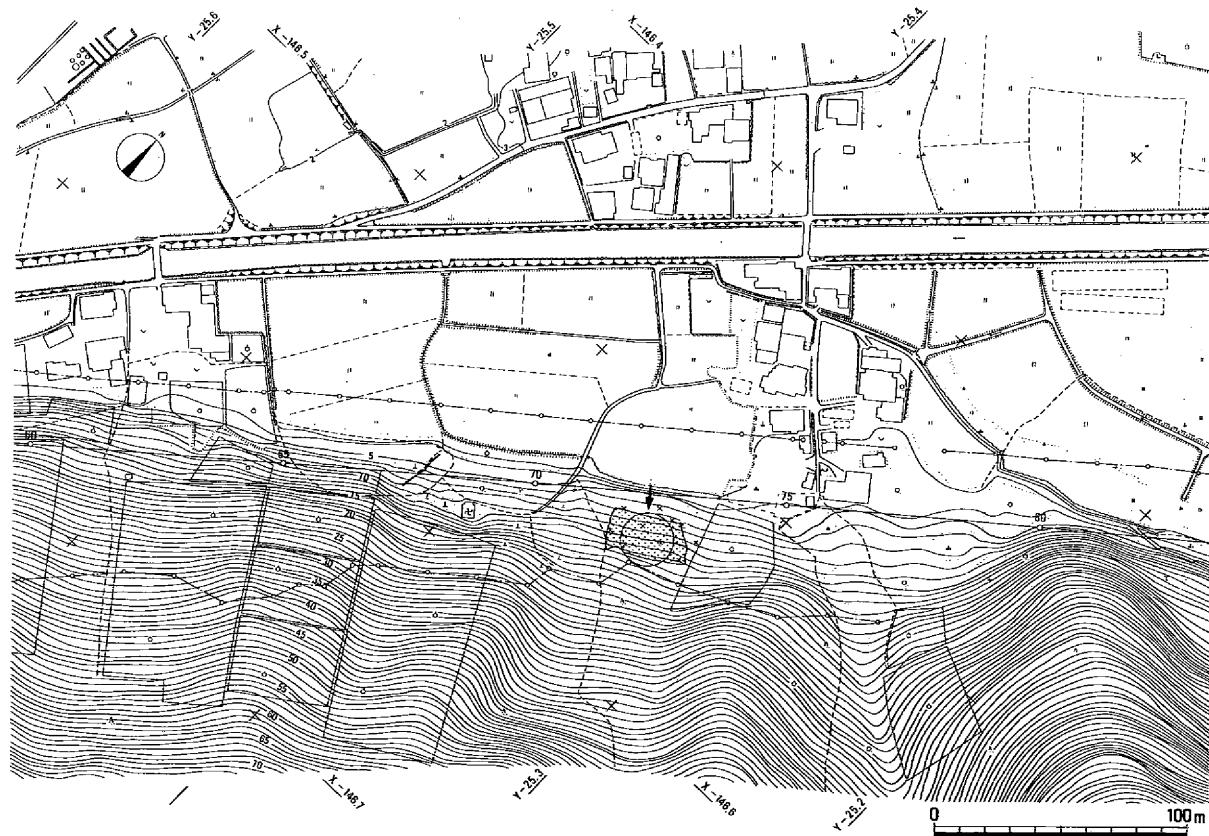
1) 京都大学文学部博物館 森下章二氏の教示による。

## 第6章 根岸古墳

### 第1節 立地及び調査の経過

根岸古墳は丘陵の北西側斜面の裾部に築造されていた。この丘陵の北西には幅500mほどの細長い平地が広がり、平地の北西縁を砂川が北東から南西に流れる。平地を挟んだ対岸には海拔150~200mの山塊が連なり、その南西端には海拔233mの芥子山が「備前富士」と呼ばれる流麗な姿を誇っている。平地の海拔は1.5~3mと低く、根岸古墳が海拔9~10m付近に位置するため、比高は6m前後となる。丘陵は平地から急傾斜で立ち上がるが、根岸古墳は波のように連續する鈍い尾根筋の間にあり、谷が埋没したようなやや傾斜の緩い、いくらか幅の広い場所に造られていた。根岸古墳の所在する丘陵は北東から南西に伸びていて、もっとも高い中央部分の海拔は110m程度を測る。丘陵の南東縁を岡山県三大河川の一つ吉井川が流れるが、丘陵中央部分から尾根筋が南東に張り出している。その南北には入江のような平地部が抱き込まれている。

根岸古墳周辺は調査前には畠地で、墳丘の北半分を地山面を過ぎるまで完全に削平して造られた下段と、南半分を天井石まで削平して山道や周溝を埋めて形成した上段との二段からなっていた。古墳のすぐ南西に接しては根岸集落の墓地が広がっていた。墓碑の年号から江戸時代の前期から形成され



第1図 根岸古墳（矢印）周辺地形図（1/3,000）

たと考えられるが、後述するように、16世紀後葉の土壙墓が古墳周辺から検出されていて、この頃から墓地として意識されていたようである。それはまた古墳の存在とも関連するかもしれない。

発掘調査に入った時点では、畑の耕作はかなり以前から放棄されていたようで、一帯は竹林となっていた。このため、重機によって竹の根を除去することから調査を始めた。重機による表土剥ぎが終わると、墳丘を検出するために土層観察用の土手（K—Iライン）を残して、その北西側から表土剥ぎを開始した。同時に、畑の開墾によって露出した石室の石組みの清掃と、墳頂部にあたる上段の畑地を掘り下げて石室の上面を検出することとした。なお、調査区の南側の丘陵上方ではバイパス道路の建設に伴う移転用の大規模な墓地造成がすでに終了していて、それに携わった重機が墳丘を通ったために石室の奥壁の石材が露出され、そこから東側が溝状に破壊されていた。

K—Iライン北西側の掘り下げによって溝状の遺構が検出されたが、出土遺物や土層の観察から近世の山道であることが判明し、墳丘の一部はすでに破壊されていて、古墳の周溝も消滅していた。石室の開口部付近では山道が広くなり、この部分で蔵骨器と小土壙が4個検出された。土壙の一つからは土師器の皿と銅錢が出土して墓と考えられたため、他の土壙も墓壙である可能性が強く、墓地があったものと思われる。石室の羨道部分の先端が検出されたが、その周辺には灰黒色土の堆積層があり、多くの須恵器片を包含していた。石室内から掻き出された土とみられるが、この層は山道による破壊をあまり受けていないように思われた。

墳頂部の掘り下げによって石室の全容がほぼ明らかとなった。天井石は奥から三枚が架構された状態で残存していたが、他に二枚が崩落した状態で原位置近くにあった。側壁は南側はほぼ残存していたが、北側は天井石の架構部分を除いてほとんどが崩落していた。北壁の石材の一部は下段の畑の掘り下げ時に埋め込まれた状態で出土した。続いて石室内の掘り下げに入ったが、畑の開墾によって生じたと想像される石室の崩落によって南側壁が大きく傾斜していた。そこで、危険を予防するために、南側壁の上端部分が露出した段階でそれを除去し、その後に掘り下げを継続することとした。

古墳の東側部分の掘り下げでも溝状の遺構が検出され、土層観察の結果から古墳の周溝であると断定した。ここによくやく墳丘についての知見を得ることができたが、その検出部分は小範囲で、墓地造成地に多くが入っていた。ただ、そのわずかな部分の形状からも墳形はなんとか判断できた。

石室内には1mを超える埋土の堆積があった。掘り下げていくと、床面からすこし上方でたたきしめたような面にあたり、火を焚いた痕跡もみられた。出土土器から8世紀代に石室を再利用したと考えられた。この面の下からは多量の古墳の副葬品が散乱した状態で出土し、再利用にあたって床面を整地したためとみられた。石室の奥部では礫が散乱し、原位置を保っていると考えられる副葬品もあって、再利用の整地はなされなかったようである。石室の床面には砂利敷や貼り床はなく、地山が床になっていた。石室内では地山まで掘り下げ、検出された排水溝を掘り上げて発掘を終了した。

墳頂部では、調査区の南端において、墳丘の基部を形成している地山まで掘り下げて石室の掘り方を確認した。調査の安全上から、G—Iラインから奥壁側については肩の線を検出するに止め、それ以外の部分については掘り下げを行った。掘り方の埋土がきわめて固くしまっていて、埋蔵文化財保護対策委員からも石灰の包含の可能性が指摘されたため、分析用の土壤サンプルを採集した。

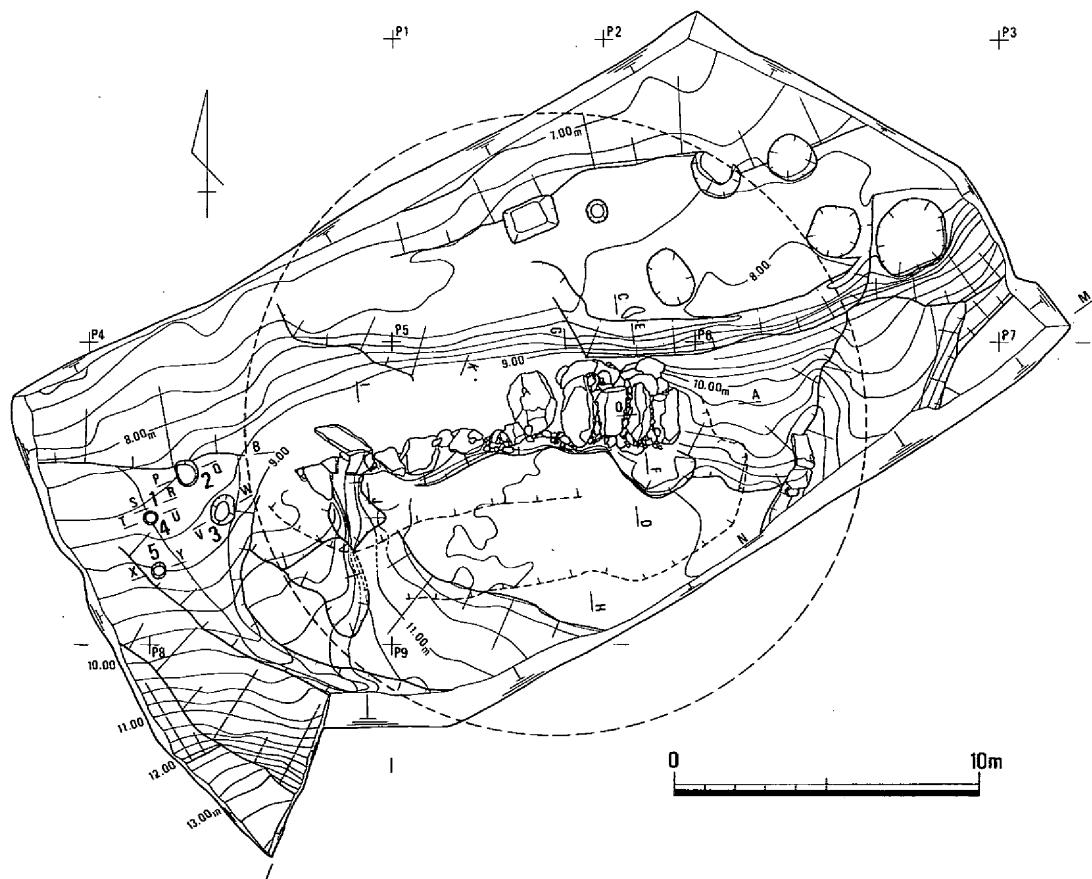
下段の畑地部分についての掘り下げでは、古墳の中央を東西に横切る掘削斜面と畑の平坦面が検出された。とくに、古墳の北東部では斜面の下端に方形に巡る溝があり、一つの区画を示していた。また、貯水のためと思われる大形の土壙もみつかった。地山面まで掘り下げて調査を終了した。

## 第2節 調査の概要

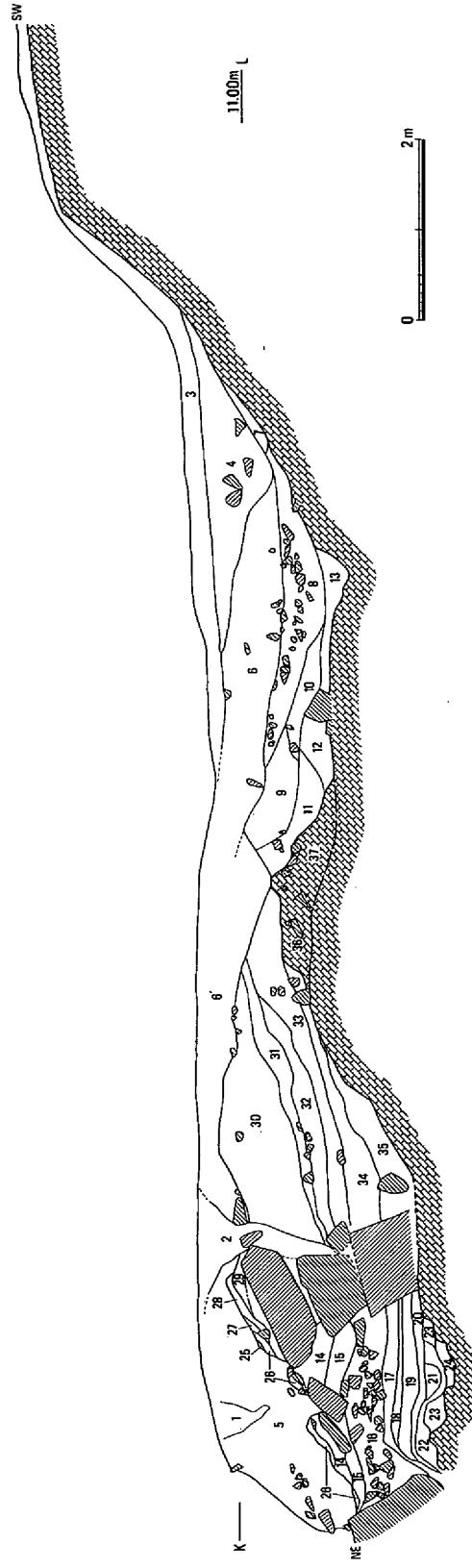
### (1) 根岸古墳の概要

#### 1. 墳丘（第2・3図）

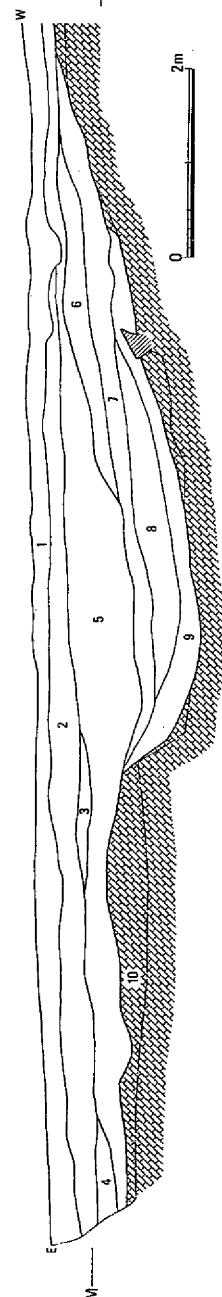
根岸古墳の墳丘は、前述したように耕地造成による地形の改変を大きく受けている。北半分は消滅し、南半分も墳頂部の削平と周辺部の埋め立てによって広い平坦面が形成されていた。このため、調査開始時点では墳丘は視覚的には確認できなかった。調査区の南西隅に周溝の痕跡をおもわせる傾斜面が存在したため、この部分から発掘を開始した。発掘の結果、弧状の幅広い溝が検出され、古墳の周溝かと思われた。しかし、溝の埋土からは多量の碟とともに近世の陶磁器が多数出土し、また、溝の底部にあった一段深い細い溝は歪んだ弧状をなしていたことなど疑問も持たれた。第3図上段はこの部分の土層であるが、溝底の地山に接した第11層の上面で、貝殻の散布が認められた。この貝殻は石室内に堆積していた貝層と同じものと考えられ、後述するように近世のものと判断された。このことから、この幅広い溝は近世以降の遺構であり、山道の跡と思われた。底の細い溝は流水の浸食によって生じたものであろう。ただ、第3図上段の第30層以下は古墳の封土と考えられるため、本来あった古墳の周溝を利用する形で山道が造られた可能性が高く、墳丘の規模を判断する上で参考とはされる。石室の前庭部では近世初頭の土壙墓群がみつかり、すでにこの時点で、石室の開口部付近で



第2図 墳丘測量図 (1/250)



- |               |                    |                     |                            |
|---------------|--------------------|---------------------|----------------------------|
| 1. 暗褐灰色土      | 10. 淡灰褐色土          | 20. 灰黄褐色土。(古墳時代遺物入) | 29. 褐灰色土                   |
| 2. 褐灰色土       | 11. 灰褐色土(上面貝殻散土)   | 21. 灰黄褐色土(柱大隣·炭粒多)  | 30. 灰褐色土                   |
| 3. 暗灰褐色土(麻植土) | 12. 灰黄褐色土(地山碎粒多)   | 22. 灰黄褐色土斑灰黑色土      | 31. 灰褐色土斑灰黑色土              |
| 4. 灰黄色土       | 13. 淡灰黃褐色土(炭化材入)   | 23. 淡灰黃褐色土(炭粒)      | 32. 褐灰色土                   |
| 5. 灰黄褐色土      | 14. 暗灰褐色土          | 24. 灰黃褐色土(炭粒·燒土粒若干) | 33. 灰色土斑黑褐色土(炭粒入)          |
| 6. 灰黄褐色土      | 15. 純貝層            | 25. 黃褐色土塊混入         | 34. 黃褐色土斑黑褐色土<br>(底灰黑色土薄層) |
| 6'. 暗灰黃褐色土    | 16. 混土貝層(時褐灰色土)    | 26. 灰黑色土(灰褐色土薄層挿入)  | 35. 黃褐色土斑褐灰色土(炭粒入)         |
| 7. 灰黄色土       | 17. 淡灰褐色沙礫土        | 27. 淡灰褐色土(14類以)     | 36. 灰黃褐色土(地山風化部分)          |
| 8. 暗褐灰色土(礫多量) | 18. 灰褐色土(炭粒入)      | 28. 灰褐色土(15類似)      | 37. 黃褐色土                   |
| 9. 灰黄褐色土      | 19. 暗灰褐色土(炭粒·土器片多) |                     |                            |
1. 暗灰褐色土·莫妙(表土·造成土)  
2. 黃褐色土  
3. 明黃褐色土(小礫入)  
4. 明黃褐色土(小礫点々)  
5. 暗灰褐色土(小礫入。層下半暗灰褐色土塊多)  
6. 黃褐色土(小礫入。  
7. 黑褐色土(小礫·黃褐色土小塊入。  
8. 暗灰褐色土(小礫·黃褐色土小塊入。  
9. 暗灰褐色~黑褐色土(小礫入)  
10. 灰黃褐色沙礫土(地山)



第3図 墳丘（上）・周溝（下）土層断面図（1/80）

の墳丘の一部破壊のあったことが想定されるが、山道の改削はこの延長として捉えられるかもしれない。

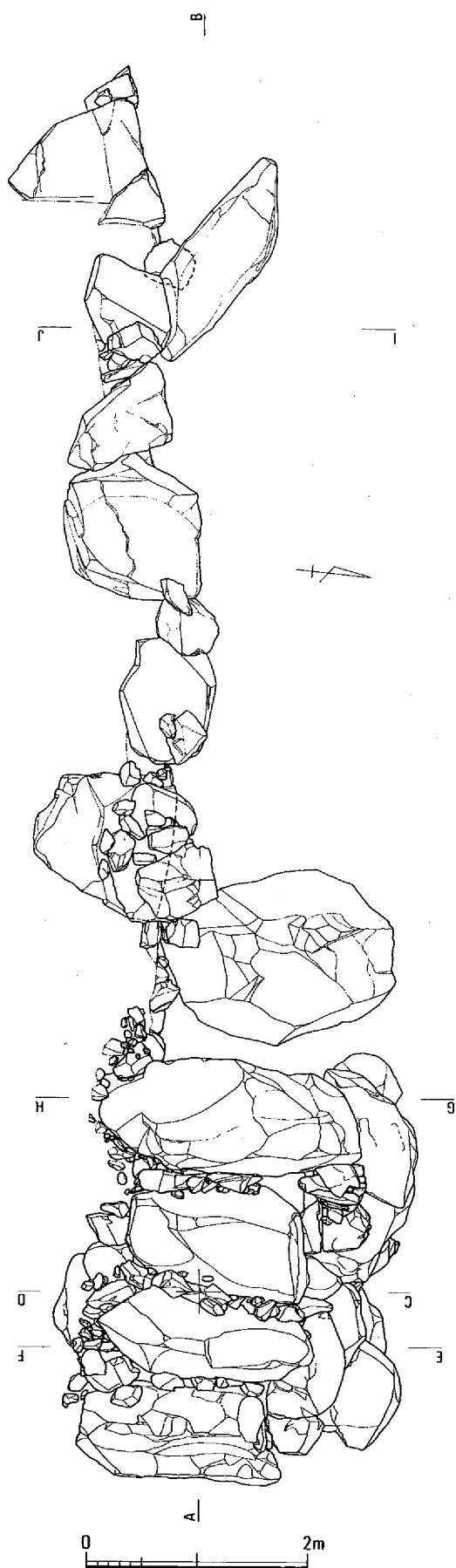
墳丘の西側では封土の確認のみにとどまり、墳丘の形状や規模についての明確な資料を得ることはできなかつたが、東側ではかろうじて周溝を確認することができた。第2図の石室奥壁の東にある大きな抉れは重機による破壊の跡だが、そのさらに東で溝状の遺構を検出した。第3図の下段は調査区南壁の東半部分の土層であるが、第7層以下が溝の埋土である。溝の埋土は黒色系で、上方の層とは色調を異にしていた。第5層は近世の土器片を包含し、墳丘から周辺に向かって厚く堆積していたため、この層が耕地の造成に伴うものである可能性が高い。溝の埋没はそれ以前に終了していて、その形態からも古墳の周溝と判断された。わずかな残存ではあったが、周溝は弧状を描いていた。周溝の幅は約4m、第3図下段での深さは東肩で80cmであった。周溝の墳丘側の肩に大石が2個残存していたが、外護列石かどうかは明確ではない。

以上の結果から、古墳の形状が円形であることはかろうじて判明したが、その規模については明確な根拠を得ることができなかつた。しかし、山道が周溝を利用していたとみられることや、近世墓群の位置、さらに、石室の掘り方の形状から、第2図に示したような規模が推定される。図上の直径は20.5mを測る。

## 2. 横穴式石室（第4～6図）

根岸古墳の埋葬施設は横穴式石室であった。石室は前述したようにかなりの破壊を受けていたが、残存した室内部分は全長が12.3m、床面の最大幅が奥壁から3m離れた所で2.2m、床面から天井石までの高さが2.1mを測った。奥壁下端の幅は1.9mと最大幅よりは少し狭まる。石室の両側壁は内側へわずかに傾斜しているため、奥壁の上端での幅は1.3mと縮まり、石室内の横断面形は台形を示す。石室の主軸方向はほぼ東西で、西に向かって開口していた。第5図のA-Bラインの方向はN-84°-Eである。

天井石は、奥壁から3個がほぼ原位置の横架した状態で残存し、それに隣接する一石と、さらに5m離れて羨道部に架かっていたと推測される一石の2個が北



第4図 石室上面 (1/60)

へ下がる形で傾斜して落ち込んでいた。奥壁側の天井石は奥壁から離れるほど大きくなり、三番目の石で長さ240cm、幅105cm、厚さ80cmを測り、落ちた石は幅135cm、厚さ105cmとさらに大きくなっていた。羨道部の天井石は奥壁側の石よりは小さく、長さ215cm、幅70cm、厚さ40cmであった。

奥壁は上下二段の大石を積み上げていた。下段の石は横幅が185cm、高さは100cmで横長に使用され、その高さは側壁の最下段の石のそれより20cm程高いだけであった。上段の石は幅が150cm、高さは140cmと方形に近く、厚さは80cmを測った。上段の石の北下隅と下段の石の北上隅がともに抉れていたため、その空隙には不定型な角礫が4個詰められていた。奥壁の石材はほぼ垂直に近く積まれていたが、石室内の壁面は少し内側へ傾斜していた。

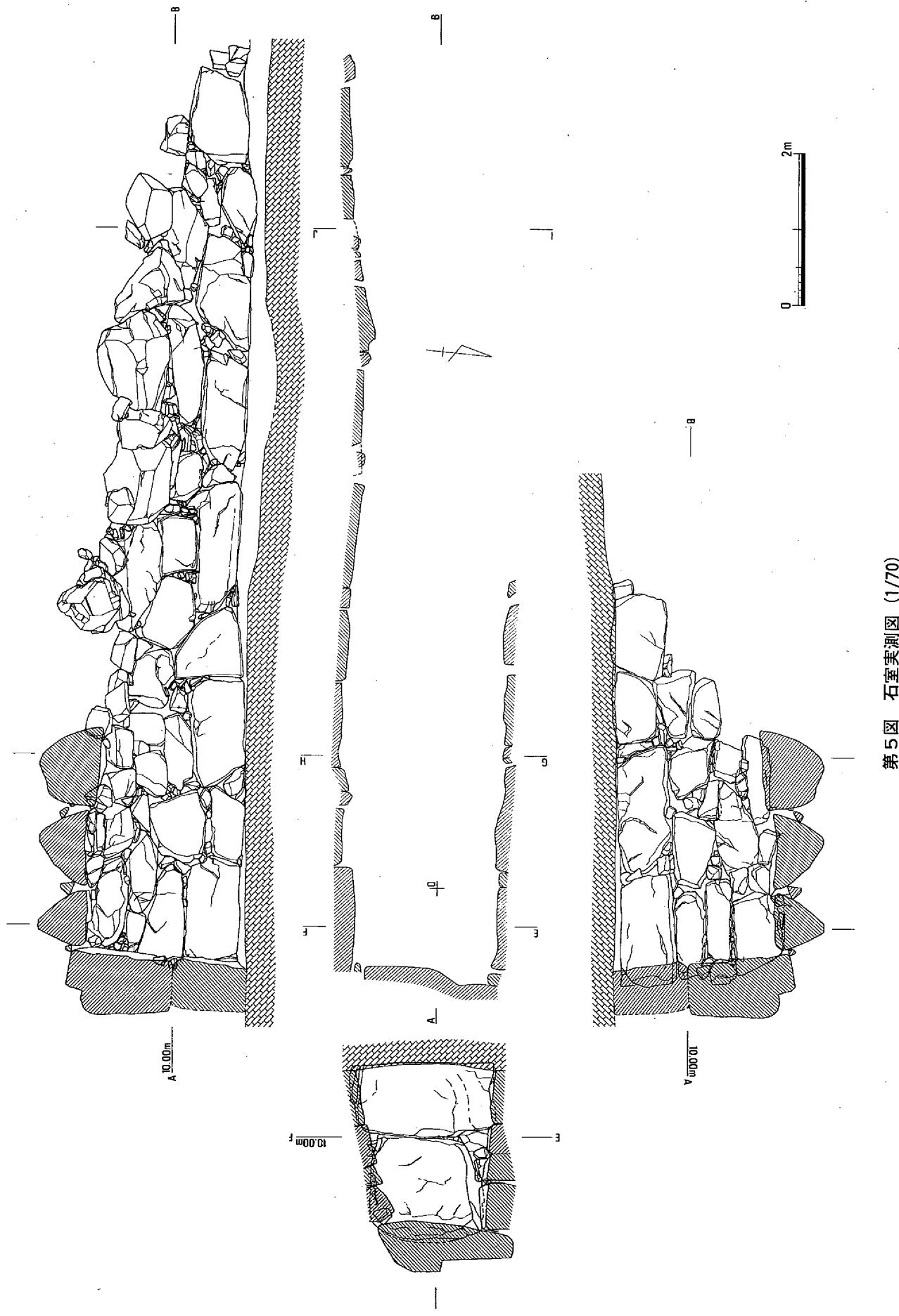
北側壁は後世の破壊を受け、残存していた天井石の乗っていた部分、全体の1／3程度が残っているに過ぎなかった。残存していた部分についてみると、最下段の石はその高さがほぼ揃っているが、二段目から上では石の高さ、形ともに不揃いで、石を渡って横走する線を認めない。このことは、石室を構築するために集めた石材をほとんど加工することなしに、その形を生かして自在に積み上げたことを示している。なお、最下段の石でも、原位置からかなりずり落ちた状態で、玄室と羨道の境あたりに残っていた石は三角形であり、この段についても石材の形についてのこだわりはみられない。

南側壁は北側壁の破壊によって石室内へ大きく傾斜していたものの、残存状態はかなり良好で、石室の上端部と羨道部の前方を一部失っているだけと思われる。石の積み方は北側壁以上に自在で、最下段の石からすでに不揃いである。このため、石の間にはかなり大きな隙間が生じているが、この部分には大小さまざまな角礫を無造作に詰め込んでいた。南側壁の全面にわたって明瞭な断続線は認められず、一気に積み上げられたものと考えられる。石の置き方をみると、最下段の石では、もっとも広い面を石室内に向けて横長に置き、二段目から上では、もっとも広い面は上にして、石の長軸が石室の主軸と直交するように積んでいた。この積み方は北側壁でも共通してみられた。

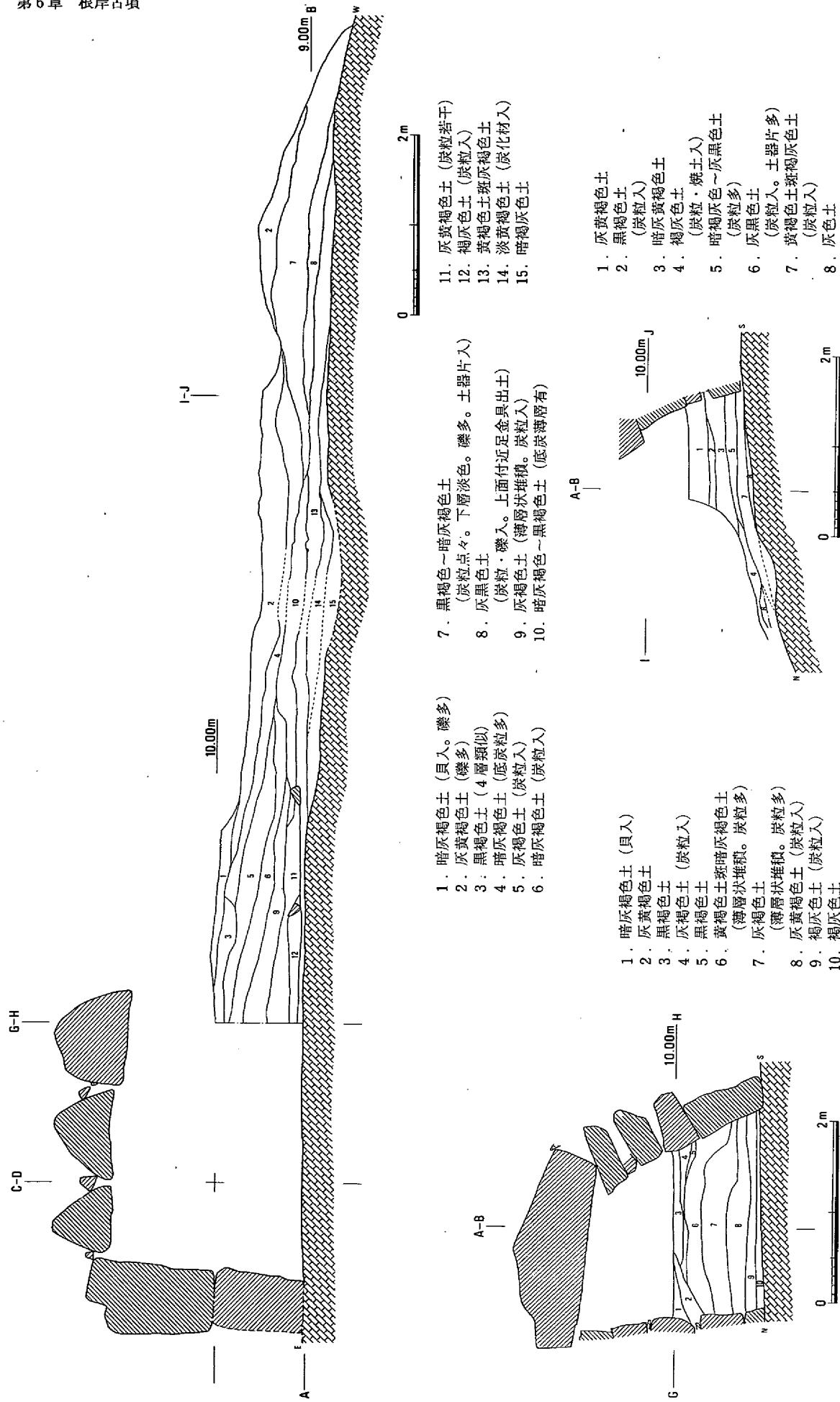
石室の平面形であるが、南側壁では玄室と羨道を明確に分かつ袖は認められないものの、奥壁から8mの所で最下段の石が石室内へ張り出し、それから前方に向かってはしだいに開いている。また、その張り出し部分から内側ではわずかに胴張りの曲線を描くようで、そこが玄室と羨道の境界にあたるようにも思われる。ただ、8mの玄室はあまりにも長く、加工されていない石材の側面での凹凸を誤認していたり、変形を受けた壁面である可能性も多い。天井石の残存から玄室の南側壁が胴張りであることは確かなようで、そうすると、奥壁から6.5mのあたりで屈折があるようにも見うけられるが、いずれにせよ、北側壁の多くが失われている現状での袖の有無や、玄室と羨道の区別は困難と言わざるをえない。また、玄室と羨道における天井石の段差の有無についても不明である。

石室内は後世の流入土によって厚く埋没していた。とくにその上半は第3図の上段にみられるように貝殻を多量に含んだ礫混じりの土で、たくさんの動物の骨を出土した。このことからすれば、最終的にはゴミの廃棄場所として利用されたものと考えられる。ただ、骨の一部について行った同定では人の各部位の骨も認められ、煙管や火打金の出土があったことから判断すると、それ以前に墓として、遺体の埋葬があった可能性が高い。この貝層からは江戸時代の土器が出土した。貝はタニシとマツカサガイが多くを占めているが、他にカワニナもみられた。いずれも淡水産貝類のみであった。

第6図は貝層を除去した段階での土層図である。上段や下段左の1層として貝層の残りがみられた。上段の土層を中心述べると、第2層は柔らかい土で近世の土器片を包含していた。第3～5層は固くしまった土で、炭粒を多く含んでいた。第4層の羨道側では土が柔らかくなり、中世の土器片



第5図 石室実測図 (1/70)



を多量に出土し、炭粒や焼土も多く含まれていた。第7層は礫を多く包含していた。第8層は炭粒や礫とともに古墳時代の土器片を含み、その上面付近からは金銅装大刀の足金具が出土した。第9層は柔らかい土で、薄層が何枚も重なったような堆積を示していた。第10層は固くしまった土で古代の包含層とみられる。第10層の底では炭と焼土の薄い層があり、第11層との境にあった石の表面は火をうけていた。第11層と第12層は柔らかい土であった。第13層は固くしまった土で塊状の土が混じり合ったような状態を示していた。この層には古墳時代の遺物が多量に包含されていたが、上面から耳環が出土するなど、遺物は層内に散乱した状態であった。第14層には炭化材が含まれ、第15層は柔らかい土で古墳時代の土器片を含んでいた。ともに排水施設に関係した凹部とみられる。

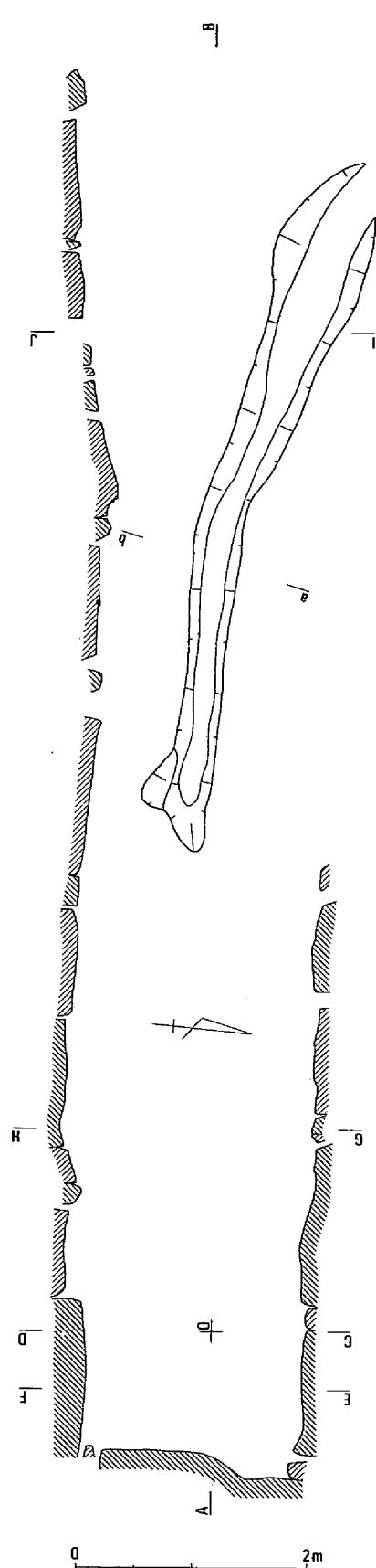
以上のような土層の堆積状況を考えると、もっとも注意されるのが第13層の存在である。この層からは古墳の副葬品が散乱した状態で多量に出土し、その上面では、炭と焼土の薄層がみられたり、火をうけた石のあることなどから、火を焚いたことが推測される。また、この層は踏み固められたようになってしまった土でもあった。このようなことから、第13層は石室内を再使用するために整地した層であり、その時代は第10層の存在や出土遺物から判断して奈良時代とみられる。第8層からも古墳の副葬品が多く出土したが、これも再使用時の搔き出しによる堆積ではないかと考えられる。この再使用は埋葬のような一時的なものではなく、ある期間は継続した生活のためであったと思える。

根岸古墳石室貝層内出土動物骨同定一覧表

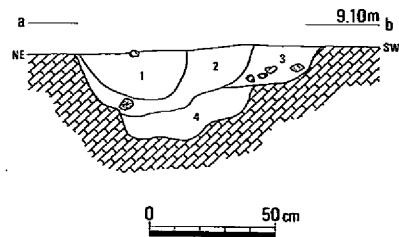
	種別	種名	部位	左右	備考	13	哺乳類	ヒト	上腕骨	右	遠位
1	哺乳類	ウマ	後頭骨		関節頸	14	哺乳類	ヒト	橈骨	左	体部
2	哺乳類	ウマ	上顎骨	左右	老齢(右第3後臼歯欠)	15	哺乳類	ヒト	肋骨	不明	破片
3	哺乳類	ウマ	下顎第3後臼歯	右	成獣	16	哺乳類	ヒト	大腿骨	右	近位 化骨化済み
4	哺乳類	ウシ	肩甲骨	右	体部	17	哺乳類	ヒト	踵骨	右	
5	哺乳類	ウシ	上腕骨	左	遠位端 化骨化済み	18	哺乳類	ヒト	踵骨	左	
6	哺乳類	ウシ	上腕骨	右	体部	19	哺乳類	ヒト	距骨	右	完形
7	哺乳類	ウシ	上腕骨	左	化骨化済み	20	哺乳類	ヒト	後肢第1基節骨	右	完形
8	哺乳類	ウシ	上腕骨			21	哺乳類	ヒト	後肢第3基節骨	右	近位
9	哺乳類	ウシ	大腿骨			22	哺乳類	ヒト	指骨	不明	遠位
10	哺乳類	ウシ	中手／足骨			23	哺乳類	ヒト	指骨	不明	不明
11	哺乳類	オオカミ	尺骨	左	近位 半月状滑車	24	哺乳類	ヒト	指骨	不明	
12	両生類	カエル	四肢骨	不明	完形	25	哺乳類	不明	胸椎	中	棘破片

### 3. 排水溝（第7・8図）

石室内の堆積土をすべて除去し、古墳の本来の床面である地山面まで掘り下げたところ、石室の西半部分で溝状の遺構を検出した。溝は、中央付近で幅が40cm、深さは20cmを測り、西へ向かって広がりながら下がっていた。溝の埋土は灰黄褐色土で、拳大の礫や炭粒を多く含んでいた。礫は多いものの埋土内に散乱した状態で、意識的に並べられたようにはなかった。この溝の性格であるが、その位置や形状から判断すれば、古墳の石室に伴う排水溝と考えるのが妥当と思われる。ただ、排水溝は石室の主軸にそって設けられるのが通有とみられるため、主軸からはずれて側壁の下へ潜る本例は特異といえる。もちろん排水溝は暗渠方式になっていたに違いない。排水溝がこのような特異な方向をとったのは地形の影響と考えたい。古墳は丘陵裾部の鈍い突出部分いっぱいに造られていて、石室の開口部あたりは、近世に山道のあったことからも推測されるように、ゆるやかな谷部にかかっていたと思われる。効率的な排水のためには等高線に直交する方向が望ましく、このために第7図のような



第7図 石室内排水溝平面図 (1/60)



1. 灰黄褐色土（拳大礫・炭粒多）
2. 淡赤褐色土（炭粒・焼土粒多）
3. 暗灰黄褐色土  
(5~10cm大礫・炭粒・焼土粒多)
4. 灰黄褐色土  
(炭粒・焼土粒若干。黄褐色土塊混入)

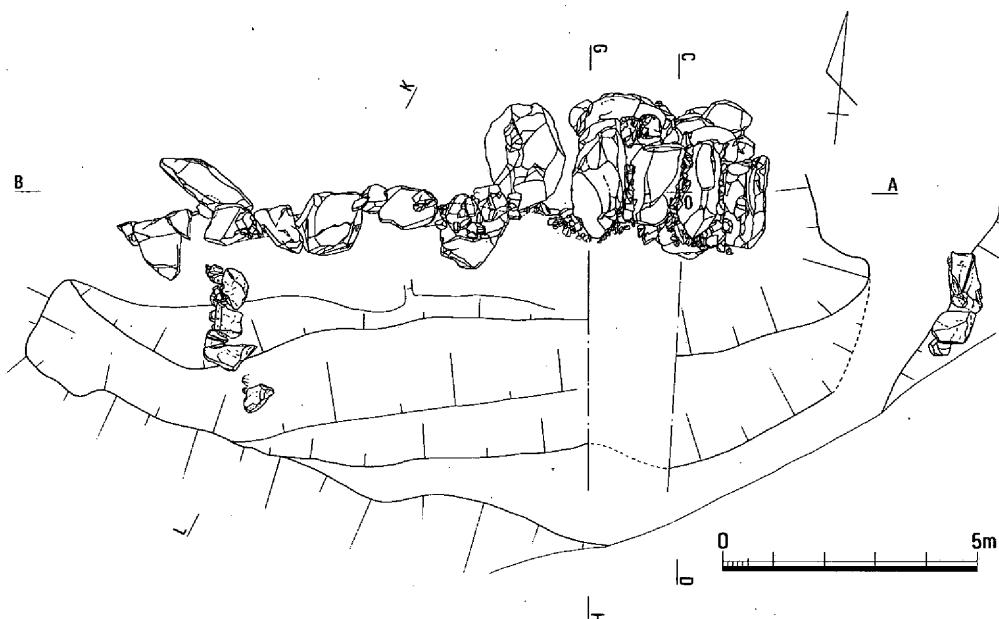
第8図 石室内排水溝土層断面図 (1/30)

方向になったのではないだろうか。省力面からも考えられそうである。石室の主軸を東西方向に合わせようこだわったために生じた結果ではないかと思いたい。

排水溝の中央付近でトレンチ (a—b) を掘ったところ、排水溝の下からさらに溝状の掘り込みを検出した。形状は複雑で、断面の土層も遺構の重複を示しているようにみうけられた。埋土には炭粒や焼土粒が含まれ、とくに第2層では炭化材のかかけらが認められた。平面的には検出は困難で、明瞭な形で捉えることができなかったが、排水溝の始点南側の膨らみと終点南側の膨らみを繋ぐような形でより広い窪みがあったものとみられる。これが最初の排水溝で、その後掘り直した溝が第1・2層ではないかと、土層断面の観察からは判断せざるをえない。したがって、第7図の溝は第2次排水溝の上半を図示したものということになる。炭化材や炭・焼土の生じた原因はわからない。排水溝の掘削作業と関連するのだろうか。第4層からは須恵器片が出土した。

#### 4. 石室掘り方 (第9・10図)

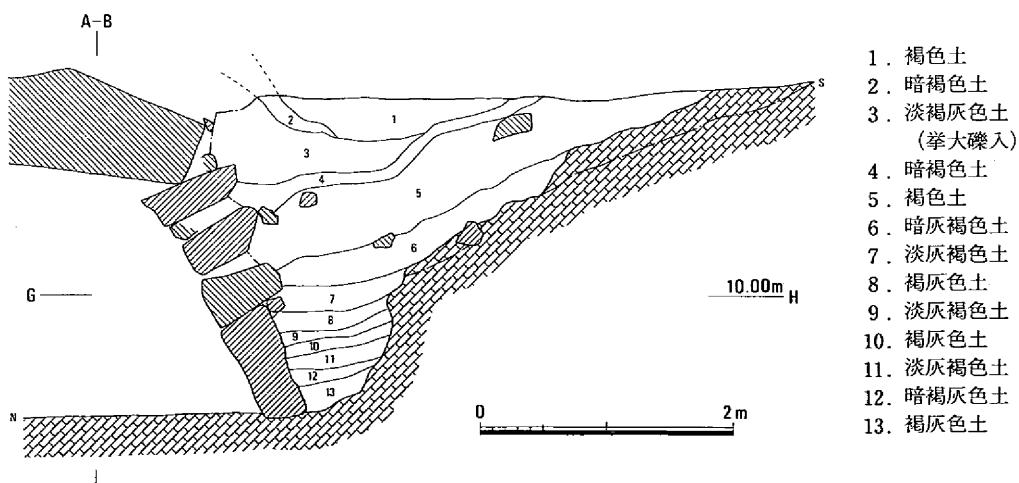
横穴式石室の掘り方は、後世の破壊で山側の南半分のみが残存し、さらに奥壁の周辺は作業の安全上から完掘しなかつたため、全容を把握するまでには至っていない。もっとも、掘り方の北半分については、第3図上段の丘陵の傾斜角度から判断すると、存在したとしても浅いもので、側壁の上端までも達しなかったのではないかと思われる。掘り方の残存長径は、西端は近世の山道で、東端は最近の工事で共に破壊されていたものの16.8mを測り、石室の主軸から掘り方の南端の肩までは5.4mであった。掘り方の南端の線はほぼ石室の主軸と平行していた。掘り方の壁の上半は緩やかに傾斜する



第9図 石室掘り方平面図 (1/150)

が、下半は屈折して急傾斜となり、平坦な底面に至る。底面は平坦であったが、東から西に下がって傾斜し、玄室と羨道との境かと思われるあたりの側壁裏には20cm程の小さな段がみられた。上半の緩斜面の中程には一つ段が認められた。掘り方の深さは最大で260cmあり、上半の段の高さが20cm、下半の深さは120cm前後を測った。掘り方下半の肩部は石室の主軸から3.5~2.5m離れていた。

石室掘り方内の土層の堆積状況を観察すると、石室の構築順序を窺い知ることができる。掘り方の下半には厚さ10~20cmで暗色と淡色の土が交互に積まれ、側壁下端の石の上端まで達していた。先の横穴式石室の項で述べたように、側壁の下端の石は割合に揃い、奥壁の下の石の高さもそれに近いことから、まず、石室の最下段が掘り方内に「コ」の字形に固く組まれたと考えられる。第5層と第6層は30~55cmの厚さがあり、石室の上段を一気に積み上げたことを示している。第4層を積んで石室壁体の構築は終了したとみられる。ついで、天井石の横架にかかり、第3層で石室を密封し、第1・2層の封土を積んで古墳を完成している。掘り方内の羨道部前方で、側壁と直交する方向の列石を検



第10図 石室掘り方内土層断面図 (1/60)

出した。石の大きさは長径が50~80cm前後あり、下半の掘り方の肩部付近から側壁下端の石の上面まで、第3図上段の第34層に一部埋まった形で配置されていた。この列石は、石室構築の第2段階にあたる側壁上段の積み上げ時に、掘り方内の埋土の崩落を防ぐための施設ではないかと考える。なお、掘り方の埋土がきわめて固くしまり、石灰の混入の可能性が対策委員から指摘されたため、岡山理科大学の白石純氏によって土壤分析を実施したが、石灰の混入は認められなかった。

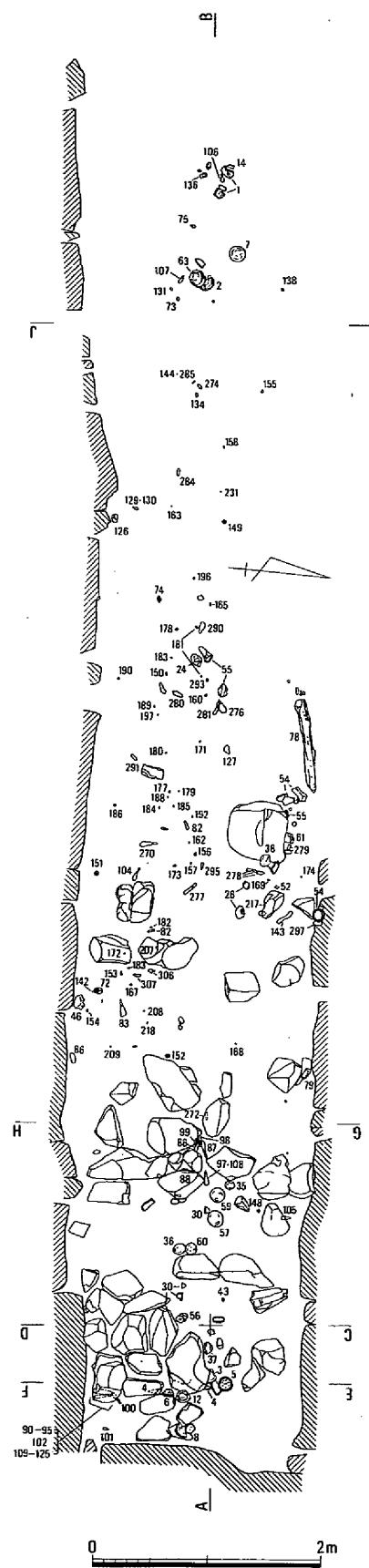
### 5. 遺物出土状態（第11・33図）

発掘調査によって出土した遺物は多量にのぼるが、その多くは前述したように後世の搅乱をうけていて、副葬時の位置を保っていたものは少なかった。ここでは遺物を土器・金属器などの材質別に分けてその分布状況を概観し、必要に応じて器種別の特徴について述べる。なお、石室の奥のほぼ玄室に相当すると思われる部分で、多くの礫の散乱が認められた。とくに奥壁の南隅では礫が密集していて、積み重ねた状態のものもみられた。また、鉄鎌90-95・109-125や破碎された須恵器3・4は礫の下から出土した。これらの礫の多くは古墳への埋葬時に棺台として使用されたものと思われるが、一部には後世の搅乱時に投げ込まれたものもあると考えたい。

土器は玄室の奥半分（G-Hライン以東）に完形品を含めて多くが出土し、羨道の開口部付近においても一群がみられた。その間では散乱した状況で、羨道と玄室の境界付近に位置する大石の付近で破碎された数点が目についた。また、前庭部に堆積した灰黒色土中から多くの須恵器片が出土したが、これは石室内から掻き出されたものとみられる。なお、暗文をもつ土師器が玄室の奥半分に集中していたのが注意される。

金属器はその多くが玄室前半分（G-Hライン以西）から羨道部全体の広い範囲に散らばって出土した。器種による分布の違いはあまり認められないが、鉄鎌のみは玄室の奥半分の二か所から集中して出土し、他に玄室の前半分と羨道の開口部付近でもみられるという大きな相違を示していた。金銅装大刀の金具（72-75）は一振りのものと思われるが、多くの金属器と同様に広い範囲で散っていた。大刀（78）が北側壁に添うような形で出土したが、床面からは浮いていた。耳環は対になると考えられる二組（149-150・151-152）が離れて出土し、その間隔は140cmと170cmであった。

玉類は多くの金属器と重なるような分布をしていたが、種



第11図 遺物出土状態平面図 (1/60)

類によるずれが認められた。碧玉製品とガラス製緑色丸玉は羨道部に広く分布し、ガラス製管玉も、一点が玄室奥半分から出土したものの、ほぼ同様な分布をしていた。水晶製切子玉は羨道と玄室の境界付近から玄室奥半分まであり、小玉・粟玉は羨道の開口部付近を除いて石室内に散在していた。

以上の遺物の中で副葬時の位置を保っている可能性が高いのは、玄室の奥半分から出土したものである。二か所に密集していた鉄鎌と、須恵器と土師器を並べていた例に代表される土器となろう。

## 6. 出土遺物

### a. 土器（第12～14図）

**須恵器蓋杯（1～18）** 蓋は体部がやや屈折し、平坦に近い天井部に続くが、丸い天井部のものもある。体部内面では凹線や軽い段を認めるものが多い。天井部外面はヘラケズリで成形し、それ以外はヨコナデ調整だが、ヘラケズリ部分までナデを施すもの（1・7）がある。また、天井部内面に仕上げナデをするもの（5・7）もある。1は口径134mm、器高42mmを測る。杯は立ち上がる口縁を付けたものである。立ち上がり部は短く、わずかに内傾する。立ち上がり部分が薄くて強く湾曲するものがある。受部の上面は少しづぼむものが多いが、湾曲するものもある。底部外面はヘラケズリで成形し、他の部分はヨコナデ調整をする。底部内面に仕上げナデを施すもの（4）やヘラケズリ部分をナデするもの（6）がある。2の口径は120mm、器高が40mmあり、18は口径102mm、器高34mmを測る。1と2、3と4、5と6はセット関係にあるとみられる。2・4～7・12はほぼ完品である。

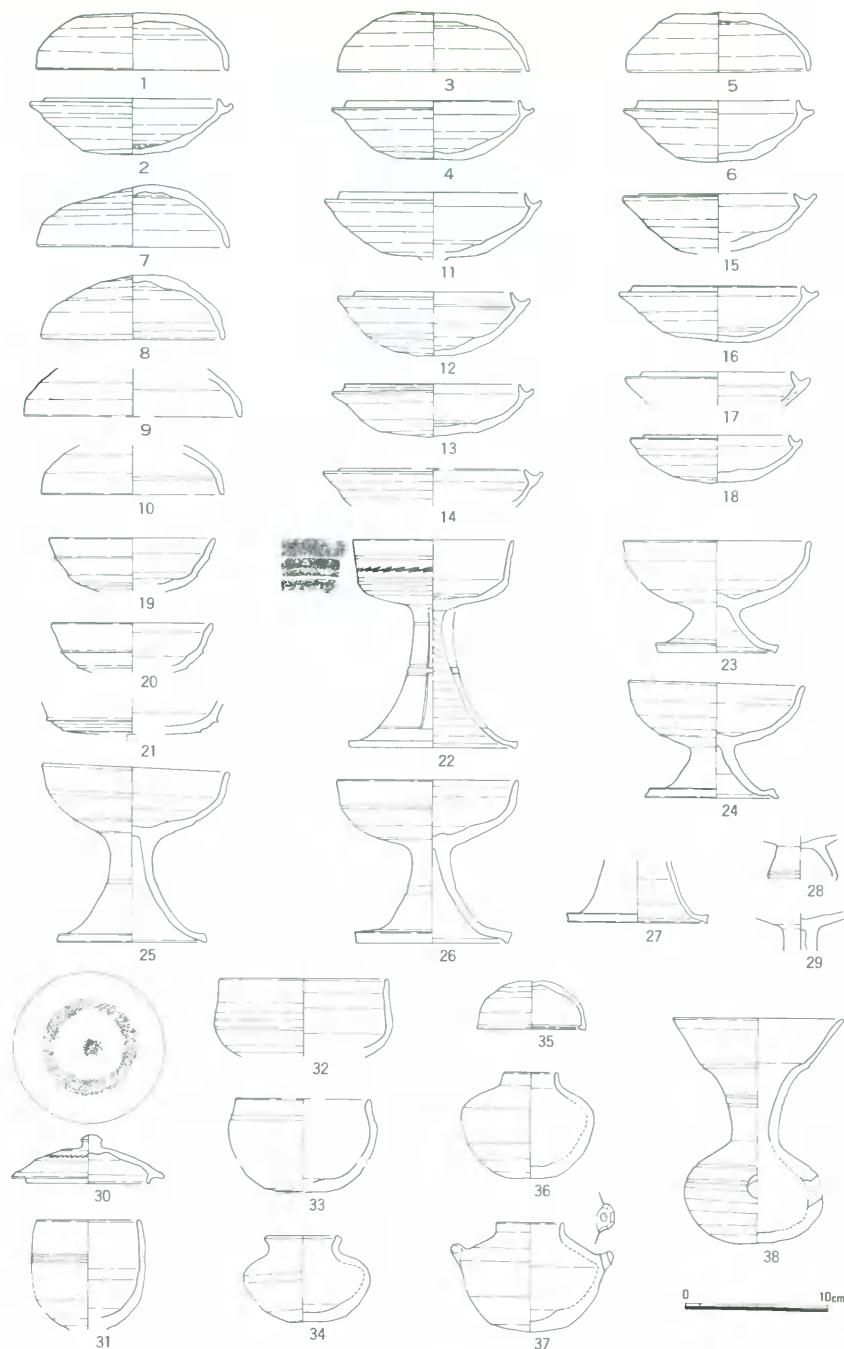
**須恵器高杯（19～29）** 様々な形態がある。19～21の体部には一条の突帯を巡らせ、さらに下にも突帯状の段を作る。21は柱状部に透かし孔をもつ。22は直線的な体部をもつ杯部と二段透かし孔の長脚部からなる。杯にはカキ目状工具による連続刺突文が巡り、それを挟むように上下に凹線を施す。脚部では上下の透かし孔の境に二条の凹線を飾り、下段の孔の下端と上段の孔の上半にも凹線を巡らせる。透かし孔は三方に開ける。口径111mm、脚径115mm、器高146mmを測る。23・24の脚部は短くて装飾をもたず、脚端は拡張させて下につまみ出している。杯の底部はヨコナデ調整の前にヘラケズリで成形している。24で口径が124mm、脚径93mm、器高は82mmである。25・26の杯部は体部と底部の境に凹線を巡らせ、脚部も23・24より長くて中央に凹線を一条施す、脚端は拡張させて下につまみ出す。26は口径126mm、脚径106mm、器高115mmを測る。27は脚端部であろうが、器壁の厚さや柱状部の傾斜から考えると長脚になりそうである。28は脚とみているが、高杯かは疑問である。下端に凹線がある。29の柱状部は細く、小型品かもしれない。26はほぼ完品である。

**須恵器蓋（30・35）** 30は口縁部の内面にかえりを付け、台付直口壺か椀の蓋とみられる。頭部が球面のつまみを付け、かえりの先端は受部より下に突出する。天井部にカキ目状工具による連続刺突文を巡らせ、つまみの頭部にはX印のヘラ記号を刻んでいる。35は短頸壺の蓋であろう。口縁部を内側に拡張する。30は口径85mm、器高34mm。35は口径75mm、器高34mmである。ともに完品。

**須恵器椀（31～33）** どれも凹線による装飾を施す。31は体部中央に二条、32は体部下端に二条、33は上端に一条を巡らせる。31は脚台が付くようだ。32と33の底部はヘラケズリのままである。

**須恵器短頸壺（34・36・37）** 34は口縁端面をもつが、36・37は丸くおさめている。底部はヘラケズリの後をナデしている。34の口縁部から外面肩部にかけて自然釉がかかっている。三点ともほぼ完品で、34は口径が59mm、器高は61mm。36は口径36mm、器高74mm、37で口径46mm、器高77mmを測る。

**須恵器甕（38）** ほぼ完品である。口縁部と頸部の境は段状になり、角に凹線が巡る。頸部の中央にも二条の凹線を施す。胴の肩部に少し間隔をおいて二条の凹線を飾る。底部はヘラケズリで成形する



第12図 出土土器 (1) (1/4)



第13図 出土土器（2）(1/4・1/2)

が、不定方向のケズリも認められる。口径は118mm、器高が158mm、胴部最大径は97mmである。

**須恵器壺（39）** 口縁端面をもち、内側へ少し肥厚させている。頸部中央に凹線を一条飾る。頸部の内面に×印のヘラ記号が刻まれている。胴部の肩に二条の凹線を飾る。底部の内面には指頭圧痕を多くとどめる。口径119mm、器高185mm、胴部最大径は206mm。石室内堆積土からの出土である。

**須恵器装飾壺（40・42・43）** 装飾用の部品のみが出土した。40は子壺で、底はなく、本体の肩に付けられたものであろう。42・43は手握くねの形象品で、やはり壺の肩に並べられたものとみられる。42は尖った口と広げた手が表現され、鳥か人物であろうか。43は蛇が鎌首をもちあげたようにもみえる。42の高さは25mm、43が28mmと小形である。42と43は色調が類似しているが、40とは異なる。

**須恵器脚台（41）** 脚端部は柱状部から内側へ屈折する。屈折部の外面に凹線を施す。柱状部の中央にも凹線が巡り、屈折部と凹線との間に方形の透かし孔を穿つ。脚端には面を作っている。

**須恵器壺（44・45）** 44は直口の壺とみたい。口縁端に内傾面をもち、頸部中央に凹線を一条巡らせる。胴部上端に円形浮文を貼り付けるが、小破片のため一個を確認したのみである。口径等は確実ではない。45も小片である。口縁部は上下に大きく拡張され、直立した曲面を形作る。

**須恵器提瓶（46・47）** 46はほぼ完形に復元された。口縁端部をわずかに内側に曲げる。頸部中央に二条の凹線を飾る。胴部に耳はない。背側の中央にヘラで一本線を引く。口径は60mm、器高が175mm、胴部の最大径は126mmを測る。47は口径が80mmと大きいが、提瓶である可能性が高い。

**須恵器平瓶（48～53）** 50は提瓶の可能性もある。48と51の頸部中央には一条の凹線が巡る。52は全体の2／3が復元できた。頸部の中央に凹線を一条巡らせる。胴部外面はカキ目で調整し、底部は不定方向のヘラケズリで成形する。口径54mm、器高139mm、胴部最大径147mmを測る。53は残存率が低く、器形は確実ではない。胴部外面はヨコナデ調整だが、下半にはカキ目が残る。

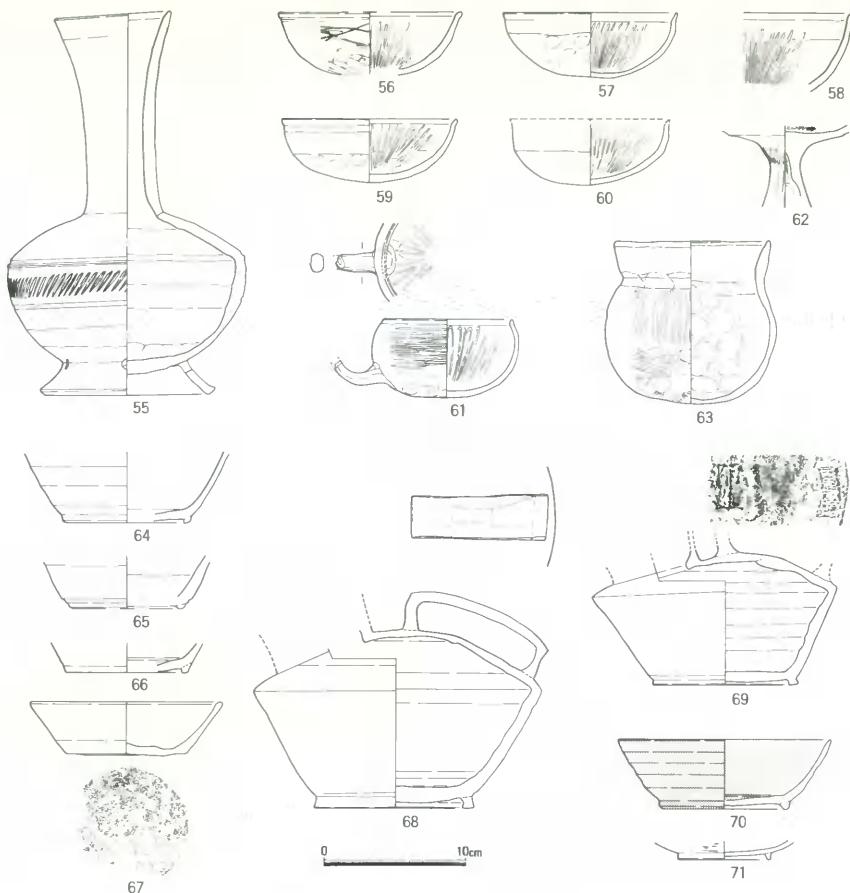
**須恵器横瓶（54）** 胴部の破片が玄室と羨道の境付近にあった大石の周辺から散乱して出土した。胴部はタタキ成形の後にカキ目で調整している。胴部の最大径は238mmを測る。

**須恵器長頸壺（55）** 玄室と羨道の境付近の大石周辺から羨道にかけて散らばっていたが、ほぼ完形に復元できた。頸部内面には絞り痕跡が認められる。胴部は肩が張り、短くて踏ん張った脚を付けている。胴の肩部には凹線を一条巡らせ、その下縁に鈍い突帯を作りだす。胴部中央にはカキ目状工具による連続刺突文を施し、その下にも凹線を一条施す。脚端はわずかに上に拡張させ、端面を作る。脚の上端に直径8mmの円孔を四方向に穿つ。胴部の底部内面は工具によるナデがなされ、外面はヘラケズリの後に全面に及ぶヨコナデがなされる。口径81mm、器高270mm、最大胴径167mmである。

**土師器杯（56～60）** 器形・胎土・調整ともに類似し、玄室の奥半分からまとめて出土した。57・59・60はほぼ完形である。丸底の底部で、口縁部は短く屈折して外反する。どれも口縁部から体部にかけてはヨコナデ調整で、内面に放射状の暗文を施す。56は体部外面に粗いヘラミガキを施し、底部外面は不定方向のヘラケズリを行っている。57～59の外面はナデで調整するが、58の底部はヘラケズリ、57・59の底部には指頭圧痕を残す。胎土は水漉し粘土で、色調は橙色から赤褐色を呈し、丹塗りは認められない。57は口径120mm、器高46mm、59は口径122mm、器高45mmを測る。

**土師器椀（61）** 玄室と羨道の境の大石の下から出土した。底部は丸底で、体部から口縁部にかけては球形を呈す。鉤状の把手をもち、把手は体部に孔をあけて挿入している。体部外面は丁寧なヘラミガキで、底部外面はヘラケズリである。丹塗りは施されていない。口径90mm、器高55mmを測る。

**土師器高杯（62）** 羨道部の堆積土から破片が出土した。杯は底部から屈折して立ち上がる形態のも



第14図 出土土器（3）(1/4)

のである。杯の内面と柱状部の外面はヘラミガキを施し、柱状部内面には絞り痕が認められる。

**土師器甕（63）** 口縁端は尖り気味におさめる。荒い作りで指頭圧痕を内外面にとどめる。頸部と胴部の境には強い圧痕が巡る。外面はハケ調整で、その後に全体をナデている。色調は鈍い橙色で、胎土には砂粒が多く含む。口径は106mm、器高が115mm、最大胴部径は108mmを測る。

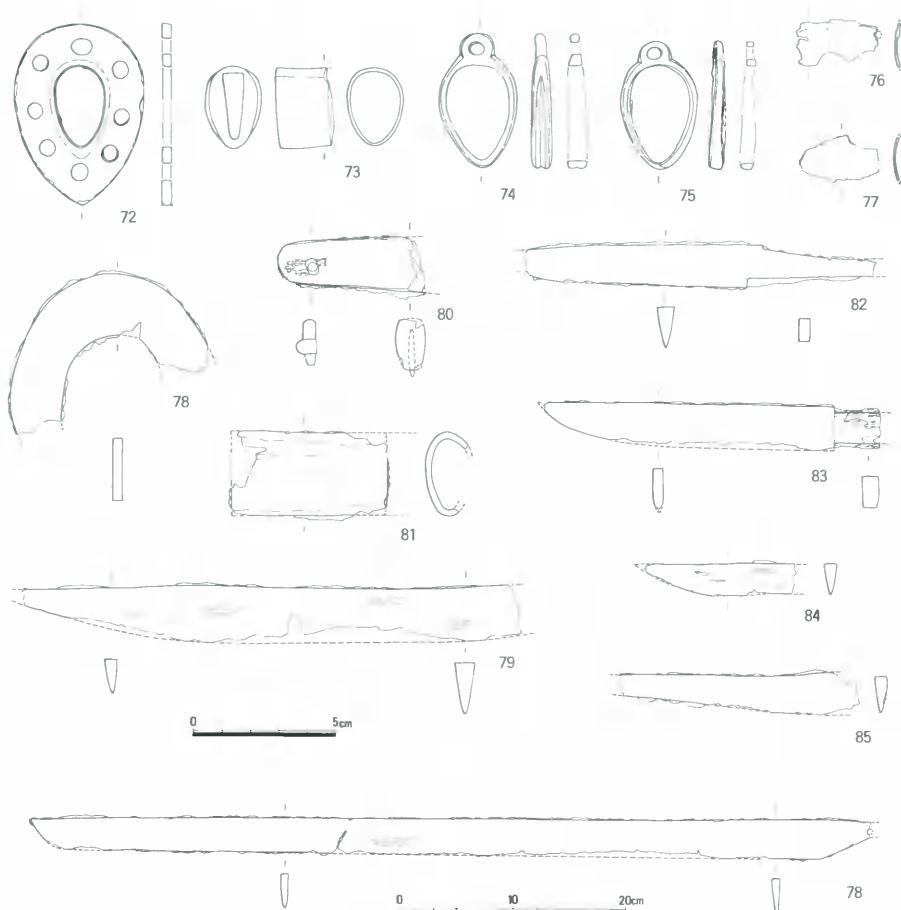
**須恵器杯（64～67）** 64～66では低い高台が底部の縁辺に付けられる。67の底部はヘラ起こしとみられる。66と67は二次的に火を受けていて注意される。67は口径133mm、器高37mmを測る。

**須恵器平瓶（68・69）** ともに玄室の前半分から羨道部にかけての堆積土（第6図上段第10層）から出土した。口頸部や把手は欠くものの、胴部は $3/4 \cdot 2/3$ が復元された。胴部の肩は鋭角的に張り出し、低い高台を底部の縁辺に付けている。把手は板状である。68の胴部最大径は202mmである。

**土師器杯（70・71）** 前者の平瓶と同じ層から出土した。71は小片で、70は $2/3$ の残存である。底部から体部への移行は70と71で違いがみられ、器形を異にする。高台はいずれも低く小さいものである。70は体部外面から内面全面に丹塗りが施され、71の体部外面にはヘラミガキがなされる。

## b. 武器・工具（第15～17図）

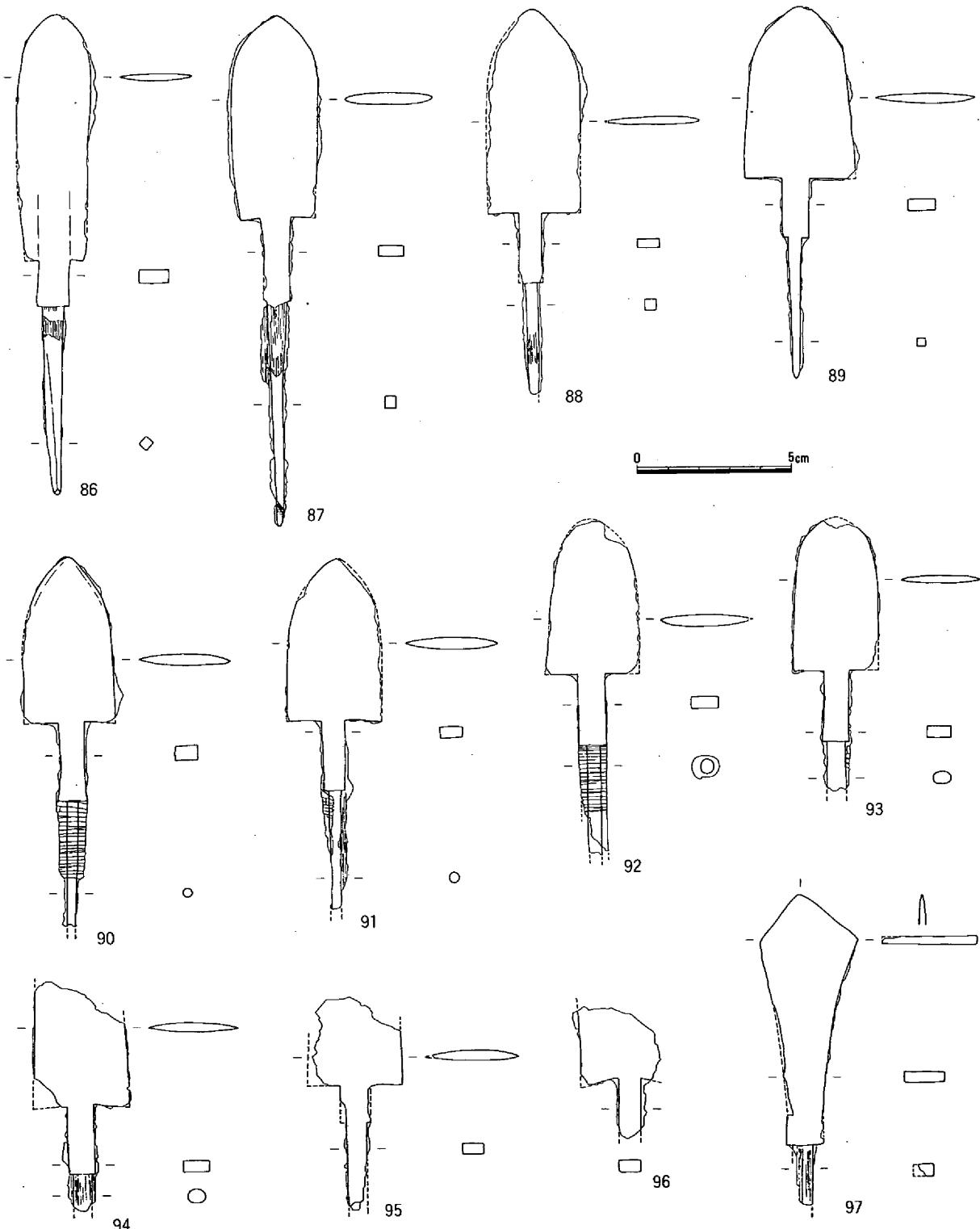
**金銅装大刀金具 (72～77)** 金銅装大刀の金具類が刀身から離れ、玄室前半分から羨道部全体の広範囲にわたって点々と出土した。72は鍔である。材質は銅で鍍金を施すが、純度が低いためか黄白色である。倒卵形で下端は角張る。周囲には円孔を八つ巡らせるが、上端の孔は楕円形である。鍔の長径は64mm、厚さ3.5mm、重量は36.36gを測る。中央の孔は長径27.5mmで、孔の周囲には責金具装着痕跡が認められる。73は鉤である。木口面は倒卵形で、長径29mmを測る。中央に刀身の断面形の孔を抜き、その長径は23.5mm、背幅7.5mmを測る。柄を挿入するために筒状で、筒部の厚さは1mmである。筒部の端は木口面より細く、鍔の装着がこの近くであったと思われる。74・75は佩用金具である。75は一重だが、74は太くして中央をくぼませ、二重に表現している。吊手孔は長軸線よりわずかに片寄る。一対のものとみられる。74は吊手孔も含め長径45mm、厚さ7mm、重さ10.04gを測り、75は長径45mm、厚さ5mm、重さ6.22gである。吊手孔の内径は5mm、鞘孔は長径33・34mmを測る。76・77は湾



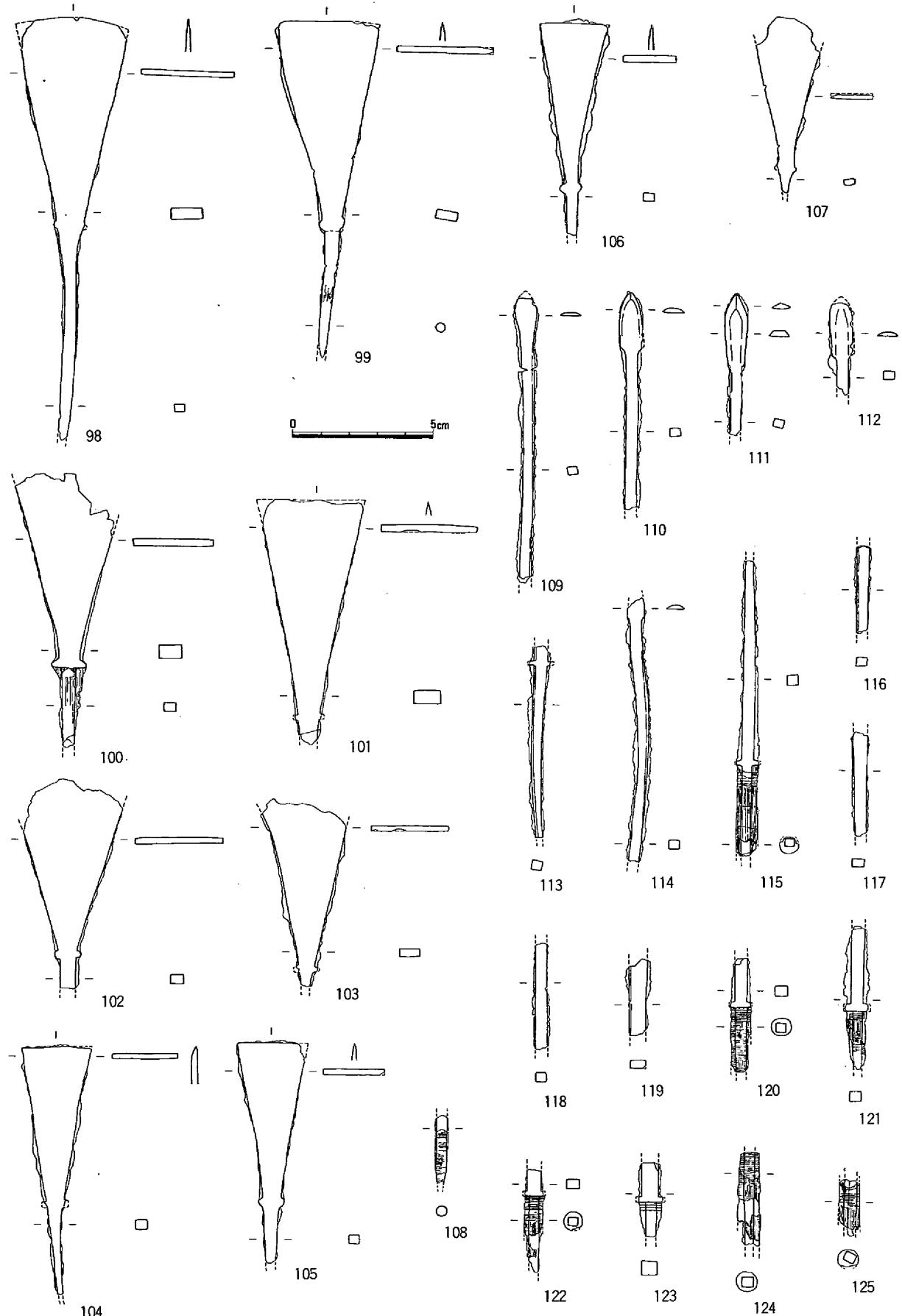
第15図 出土金属器 (1) (1/2・1/5)

曲する薄板で、鞘の装飾に使用されたものであろう。76には穿孔があり、内面には段がある。76の厚さは1.4mm、77は1mmを測る。73～77の材質は銅で、鍍金を施し、色調は黄金色を呈している。

鉄刀 (78～81) 78の大刀は残存長742mm、身長694mmを測る。身幅の34mmに対して茎幅は14mmと細く、刃の関は屈折的で鈍角をなす。背側の関は明瞭ではない。背幅は7mmである。茎は目釘孔の所で折れている。この大刀の鍔は長径が90mm程度と推定され、厚さは3.5mmである。79の刀身は身幅20mm、



第16図 出土金属器 (2) (1/2)



第17図 出土金属器（3）(1/2)

背幅7mmを測る。全面に木質が付着する。刃部の残存状態は悪い。規模が先の鉢の刀身孔に近く、これが金銅装大刀の刀身であるかもしれない。80は茎で、茎尻は丸い。幅が19mm、厚さは10mmを測る。目釘孔が一つあり、釘が残る。79の茎でもいいかもしれない。身に芯のような塊があり、下へバリがはみ出している。81は一方が閉じた筒状で、鞘尻金具とみられる。全長は56mm、厚さが2mmで、内面には木質が残存している。内径は26mmで、金銅装大刀に近い。しかし、鍍金などはない。

**鉄刀子 (82~85)** 82は背と刃の両方に関をもつが、その位置はくい違っている。身幅は15mm、背幅が6mm。背はわずかに内反りである。茎幅は10mmで、茎尻に向かって細く薄くなる。83は背と刃の関が一致し、刀身は茎より薄くなる。身幅は16mm、背幅が4mm。背は直線的で、刃は先端が緩やかに湾曲する。茎幅は11mm、厚さが6mmで、木質が残存している。全体の重量は22.52gである。84は身幅11mmで、全面に木質が残っている。85は身幅が15mmあり、切先に向かって身幅が細くなる。

**鉄鎌 (86~125)** 27本の鎌身の出土を確認した。平根式が22本、尖根式が5本である。多くは玄室奥半分の二か所に集中し、奥壁に接近した側では平根式と尖根式が共伴した。尖根式は他からは出土が確認されていない。平根式は大きく三つの形態にまとめられる。一つは剣先のような形の長三角形式で、86~96がこれにあたる。86は鎌身が細長く、むしろ柳葉式と呼ぶべきかもしれない。籠被をつけ、細長い茎に続く。身の下端は水平になるものが多いが、94や96のように身の下角が抉りのようになるものもある。86は身長80mm、身幅24mm、重さ21.89gで、89は身長57mm、身幅36mm、重さ19.26gを測る。茎に木質が残り、90や92では木の皮を巻いたままの状態であった。92の矢柄の直径は9mmである。二つ目は先端を山形にした圭頭式で、97の一点のみである。籠被はなく、身から関をもって茎に続く。身長82mm、身幅31mm、重さ19.26gである。三つ目は扇形の鎌身をもつ方頭式で、98~107の10点がある。大小の二型に分けられる。身の下端、茎との境には棘が作られている。99は身長76mm、身幅35mm、重さ19.81gを測り、106は身長61.5mm、身幅25mm、重さ9.98gである。尖根式は柳葉式の鎌身に長い籠被をもち、籠被と茎との境には棘が作られている。茎が籠被より細いものがほとんどである。身と籠被の境には関をもつものが多いが、109は身から茎へ滑らかに移行する。茎に木質を残すものが多く、115・120などでは木の皮が巻かれている。120の矢柄の直径は7.5mmを測る。

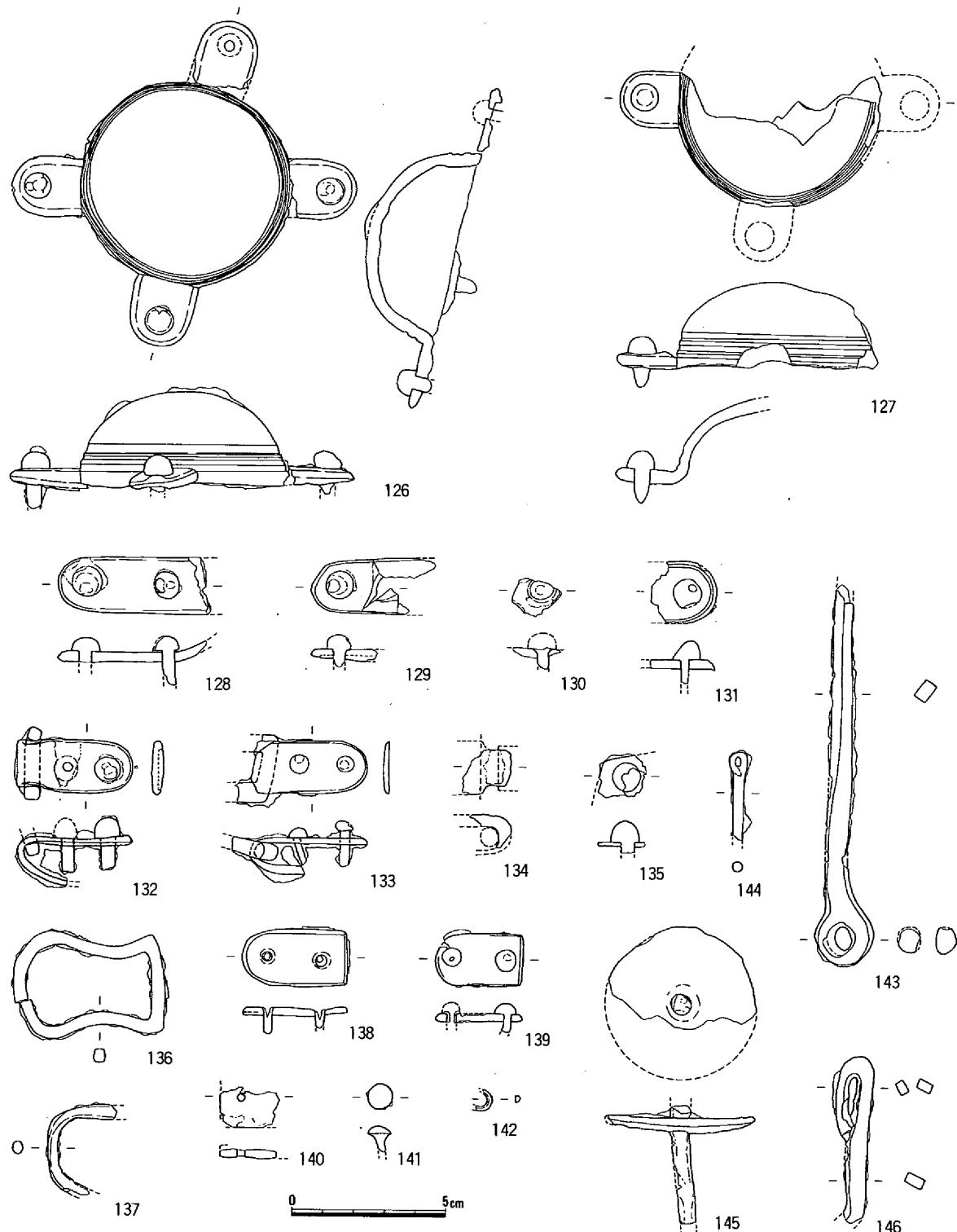
#### C. 馬具 (第18図)

**辻金具 (126・127)** 半球状の鉢部の周縁に三条の凹線を巡らせて装飾とする。四つの脚をもつ正在が、脚の間隔は狭と広が隣り合い、十文字にはなっていない。脚の先には鉢が一つあり、革帶を留めていたと考えられる。126では、鉢の直径は67mm、高さが31mm、厚さは4mmを測る。脚は長さ22mm、幅20mmで、先端は丸くおさめている。127も同形と思われるが、高さは28mmである。脚の鉢は丸頭で、直径は9mm。軸の太さは3~5mmで、長さは17mmが残る。鉄地金銅張の製品である。

**絞具 (132~134・136・137)** 132~134は輪金の基部に鉄板を巻き付け、鉄板には二つの鉢があつて革帶の端部を固定している。鉄板部分は鉄地金銅張で、鍍金の一部を残している。鉄板は、端部から折り曲げ部分までの長さが37mm、幅は17mmあり、端部は丸く作り、輪金の装着部分には抉りを入れて輪金の回転に支障がないようにしている。鉢の頭は丸く、軸の直径は2~4mm、残存長は17mmである。136・137は輪金で、鉄製である。136の形状は、前半がC字状を描き、基部との間は内湾してすぼまる。基部とC字状部分の断面は円形だが、内湾部分は胴張りの方形にみえる。

**帯端金具 (128~131・138・139)** 長短の二種がある。128~131は長型のもので、鉢も短型のものより大きい。129と130は同じ地点から出土していて一体のものであろう。いずれも鉄地金銅張の製品で

ある。128で残存長48mm、幅18mm、厚さ3mmを測る。欠損部分で湾曲するが、本来の姿か疑問である。鉢は二つあり、頭が丸くて直径は9~10mmで、軸の太さは3~4mmを測る。鉢の残存長は最大で16mmである。138・139は短型で完存している。鉄地金銅張と思われるが、138では銅鑄をわずかに残すのみで、鍍金は剥がれている。一端は丸く、一端は直角に切る。全長は34~28mm、幅が19~17mm、厚さは3mmである。鉢が二つ打たれ、139の鉢頭は丸く、直径は7mmを測る。138の鉢の残存長は9mmであ



第18図 出土金属器（4）(1/2)

る。138の裏面には革帶の一部が残り、金具と革帶の接着面に黒色のタール状の物質が認められる。接着剤として使われたものであろうか。

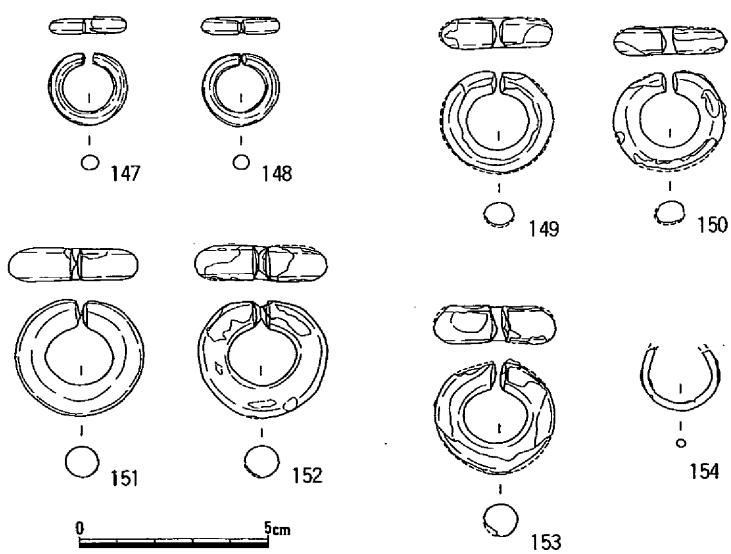
その他の馬具(135・140・141・143)135は菱形の板に鉢を四つ打ったものと推定される。鉄地金銅張製である。鉢の頭は丸く直径9mmを測る。革帶の飾り金具であろう。140は方形と思われる板に鉢孔が一つ穿たれている破片である。残存長が19mm、厚さは3mmである。やはり革帶の飾り金具か端金具とみられる。鉄製であるが、金銅装は確認できなかった。141は鉢の破片である。頭は丸く、直径が8mm、軸は直径2.5mmを測る。銅鑄が認められ鉄地金銅張製品に使用されたと思われる。143は鉄製で、その形態から轡の引手ではないかとみられる。棒状部の断面は方形だが、環状部の断面は円形である。残存長が125mm、棒状部の幅は6mm、環の直径は19mm、環の内径は5mmを測る。

#### d. 装身具(第19・20図)

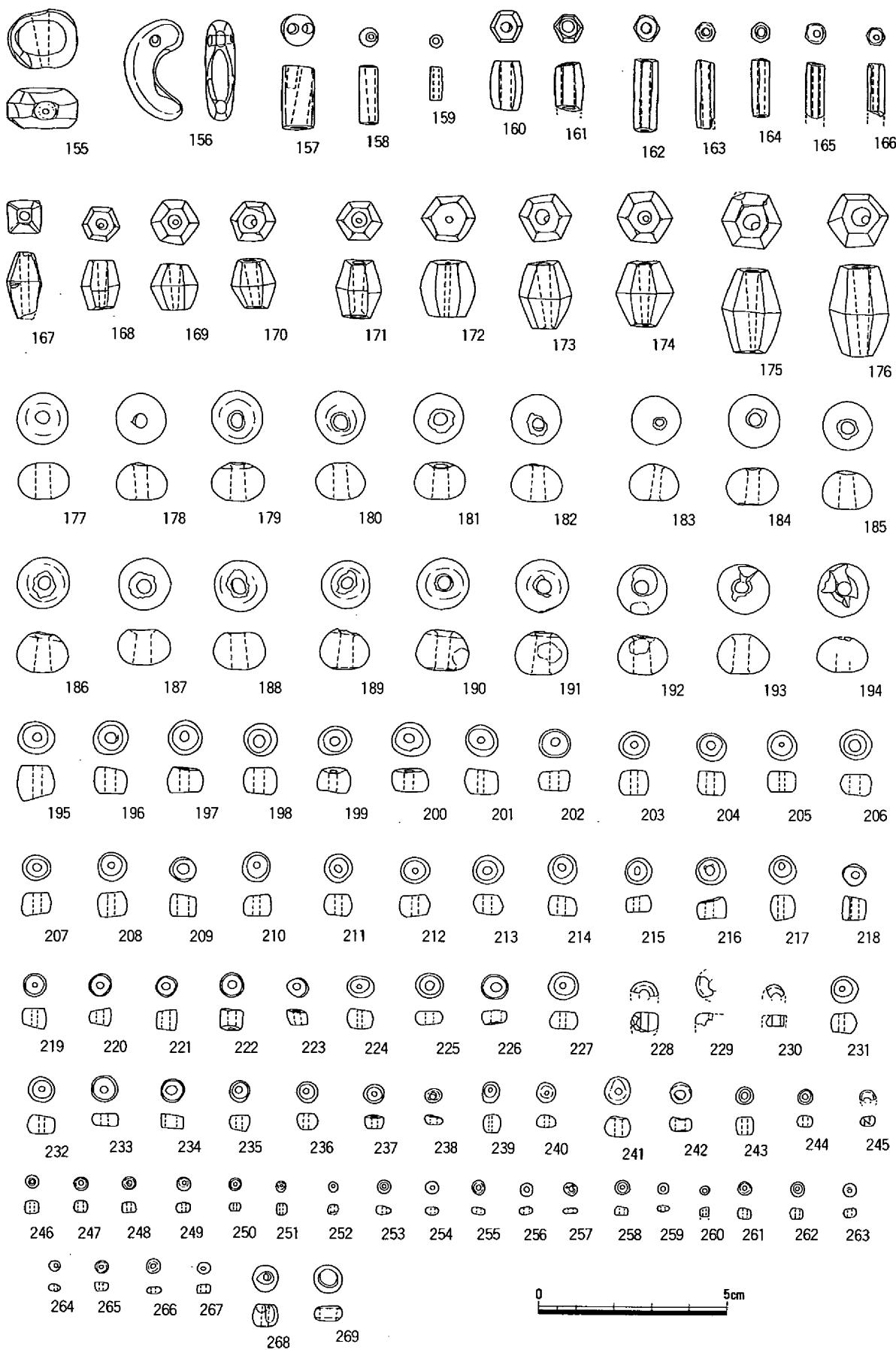
耳環(147~154)一般的な形態のものが七点と細い銅環が一点ある。銅環は耳環とは断定できないが、ここで説明しておく。一般的な七点は、大きさや銹化の程度から三対と一点に分けられる。一対は金環、他は銀環である。147・148はともに玄室奥半分から出土した。環の外径は20.5mm、太さは直径4mm、重量は5.15gと5.49gである。耳環としては小形の部類に入る。銅芯金張で銹化はみられず、147の木口部分が欠損しているにすぎない。この耳環では金箔を銅芯に巻いていて、環の内側に接合線が認められ、木口部分は箔を折り疊んだ状態が見て取れる。欠損部分を見ると、金箔は膜というよりは厚い。149・150も一対で、羨道部の東半から出土した。銹化が進行しているが、149の内側には銀の輝きが残り、銅芯銀張であることが知られる。環の外径は29mm、太さは7~8mm、重さは15.37gと14.53gである。151・152が残りの一対である。銅芯銀張で、銹化の度合いは低く、前者より保存状況は良好である。151は全面銀灰色を呈している。151は玄室と羨道の境付近、152は玄室の前半分から出土した。環の外径は34mm、太さは8~9mm、重量は29.75gと29.13gを測り、もっとも大きい。153は銅芯銀張で、もっとも銹化が進んでいる。玄室の前半分から出土した。環の外径は31mm、太さは8mm、重さは22.28gである。154は直径2mmの銅環の一部で、全面に銅鑄が及んでいる。環の外径は20mmを測り、重さは0.51gである。耳環とすれば装飾付きのものが考えられる。

#### 玉類(155~269) 115点の玉

類が確認され、小破片がいくらかある。根岸古墳から出土した玉類の特色は、その種類が多いことにある。材質の面では碧玉・メノウ・水晶・ガラスがあり、形態では平玉・勾玉・管玉・切子玉・丸玉・小玉・粟玉と変化に富んでいる。なかでも、ガラスの管玉と丸玉は代表的である。ガラスの管玉は六角形に面取りされ、黄緑色・青色・群青色と多彩である。丸玉は緑色で18個が出土し、玄室と



第19図 出土耳環(1/2)



第20図 出土玉類 (2/3)

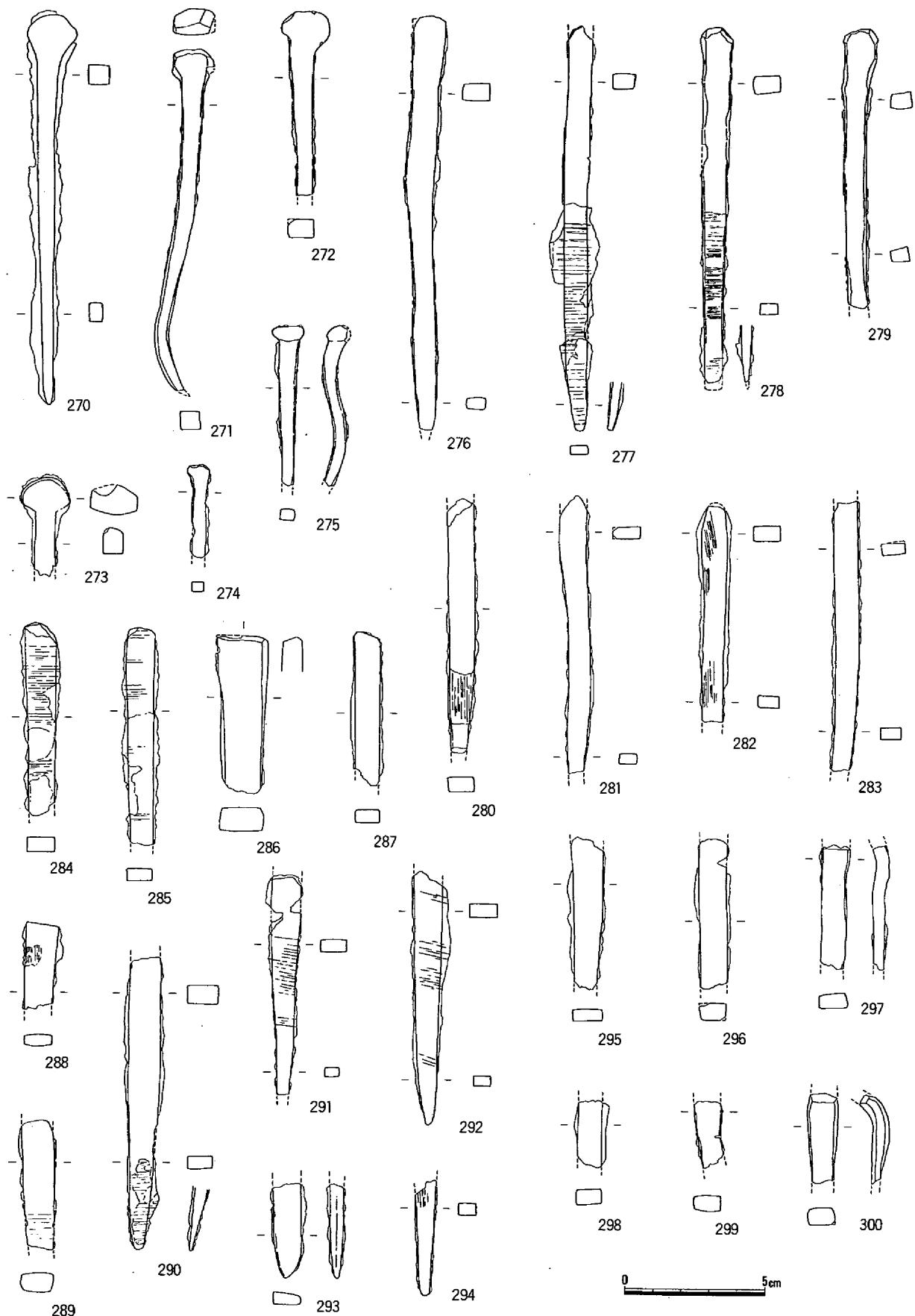
羨道の境付近に集中していた。なお、第11図では玉類は玄室前半分から羨道部にかけて出土していたが、玄室奥半分からガラス管玉1点、水晶切子玉2点、ガラス小玉・粟玉23点が堆積土中から出土している。なお、269は材質が明確ではない。ガラスが銀化したものかとも思うが、形態も他とは異なり、古墳時代のものか疑問もある。個々の玉の計測値や色調については表を参照していただきたい。

#### e. 釘（第21・22図）

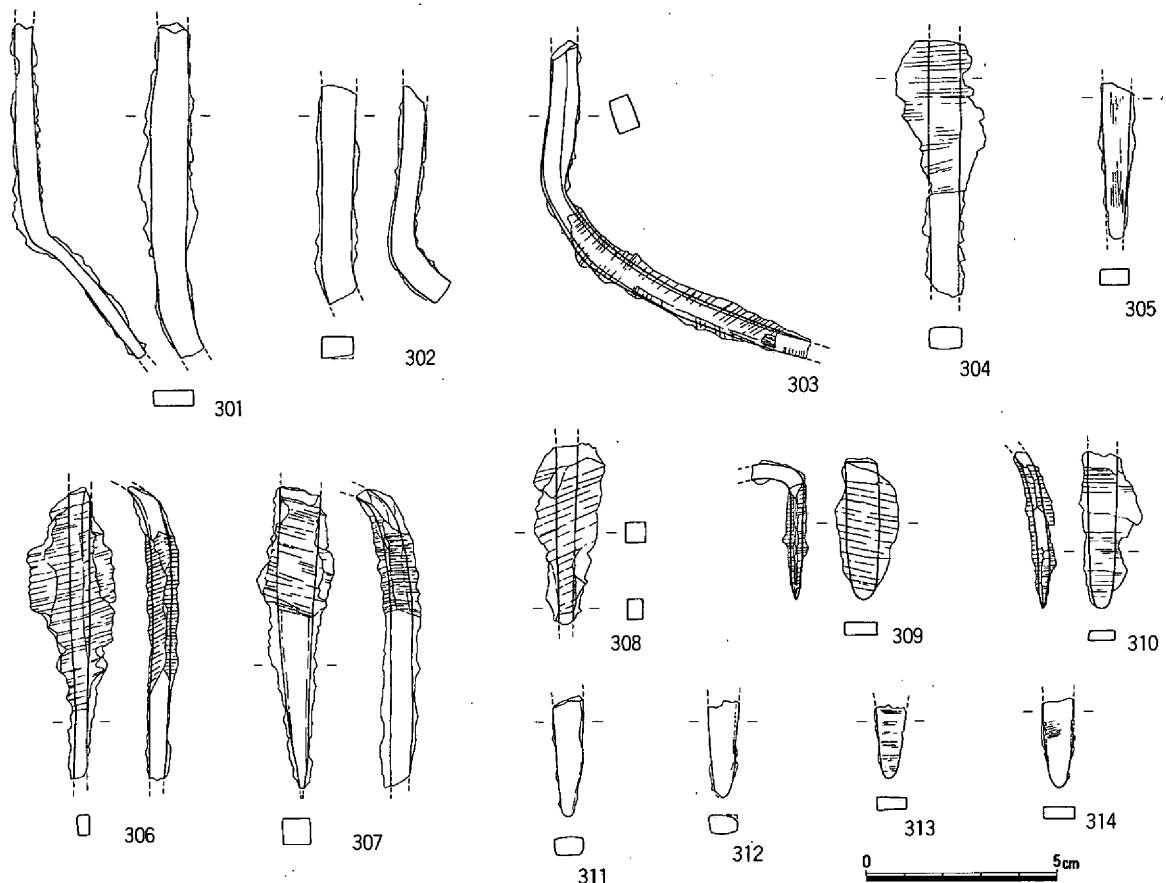
多数が出土した。ほとんどに木質が付着し、木棺に使用されたと考えられる。45点を図示したが、他にも破片が少しある。釘の多くは、第11図に示すように、玄室前半分から羨道東半分にかけて出土したが、292・294・302・303・308は玄室奥半分の堆積土中から採集された。釘のほとんどは断面が長方形で、方形のものは少ない。頭部の形状は、膨らませたもの（270～275）、不定型なもの（278・279）、直線的なもの（286・288）と様々である。頭部の膨らんだものには断面方形のものが多いようである。釘の大きさにも差があり、もっとも細い274・275は幅が4.5mm・6.5mmで、もっとも太い286は断面実測部分で幅15mmを測る。釘の先端は薄くするとともに、広い面も縁を削いで尖らせる。木質の

根岸古墳出土玉類観察表

遺物番号	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	色調	遺物番号	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	色調	遺物番号	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	色調
155	平玉	14.5	17.6	3.7	4.65	碧玉	灰緑色	194	丸玉	9.1	14.1	3.9	3.57	ガラス	緑色	232	小玉	4.9	7.2	1.3	0.32	ガラス	暗青色
156	勾玉	26.3	—	2.4	3.65	碧玉	暗緑色	195	小玉	8.6	6.7	2.5	1.03	ガラス	群青色	233	小玉	3.5	6.9	1.6	0.25	ガラス	暗青色
157	管玉	17.4	8.5	3.1	1.95	碧玉	暗緑色	196	小玉	6.5	6.7	3.1	0.78	ガラス	群青色	234	小玉	3.3	5.8	2.8	0.18	ガラス	青色
158	管玉	15.8	5.0	2.0	0.71	碧玉	暗緑色	197	小玉	6.5	7.3	2.2	0.78	ガラス	群青色	235	小玉	2.9	4.0	1.7	0.17	ガラス	暗青色
159	管玉	9.0	3.3	1.3	0.16	碧玉	暗灰色	198	小玉	6.4	5.6	2.8	0.74	ガラス	群青色	236	小玉	4.2	4.2	1.4	0.20	ガラス	暗青色
160	管玉	13.5	8.5	2.4	1.28	ガラス	青色	199	小玉	6.4	6.2	2.6	0.59	ガラス	群青色	237	小玉	3.6	5.4	1.0	0.14	ガラス	青色
161	管玉	12.8	7.6	3.5	1.29	ガラス	緑青色	200	小玉	6.0	7.0	2.2	0.76	ガラス	群青色	238	小玉	2.7	4.6	1.9	0.05	ガラス	青色
162	管玉	19.0	6.4	2.7	1.29	ガラス	黄緑色	201	小玉	6.5	8.4	1.6	0.69	ガラス	群青色	239	小玉	4.8	3.5	1.0	0.19	ガラス	暗青色
163	管玉	18.2	4.7	1.9	0.76	ガラス	群青色	202	小玉	5.2	6.4	2.2	0.49	ガラス	群青色	240	小玉	3.4	5.6	0.6	0.15	ガラス	暗青色
164	管玉	16.0	4.8	2.0	0.64	ガラス	群青色	203	小玉	6.4	5.3	1.6	0.59	ガラス	群青色	241	小玉	5.6	6.9	1.8	0.32	ガラス	淡青色
165	管玉	14.8	5.1	1.9	0.65	ガラス	群青色	204	小玉	6.1	6.0	2.1	0.54	ガラス	群青色	242	小玉	3.8	5.8	2.4	0.12	ガラス	淡青色
166	管玉	14.0	4.6	1.4	0.53	ガラス	群青色	205	小玉	5.5	7.9	1.2	0.50	ガラス	群青色	243	小玉	4.7	4.9	1.3	0.18	ガラス	淡緑青色
167	切子玉	17.5	8.9	2.7	1.78	メノウ	赤橙色	206	小玉	5.2	5.8	2.7	0.49	ガラス	群青色	244	栗玉	3.0	4.1	0.9	0.07	ガラス	淡青色
168	切子玉	12.9	9.7	2.9	1.61	水晶	透明	207	小玉	5.8	5.3	2.2	0.43	ガラス	群青色	245	栗玉	2.6	4.0	1.8	0.03	ガラス	淡青色
169	切子玉	11.8	11.8	2.6	2.27	水晶	透明	208	小玉	6.1	5.5	1.8	0.59	ガラス	群青色	246	栗玉	3.4	3.5	1.4	0.06	ガラス	淡青色
170	切子玉	13.5	11.8	3.4	2.13	水晶	透明	209	小玉	6.1	5.8	3.0	0.34	ガラス	群青色	247	栗玉	3.0	3.9	1.4	0.06	ガラス	淡青色
171	切子玉	15.6	11.9	3.5	2.60	水晶	透明	210	小玉	5.4	6.0	1.7	0.49	ガラス	群青色	248	栗玉	2.9	3.9	1.4	0.05	ガラス	淡青色
172	切子玉	14.9	13.6	1.3	3.68	水晶	透明	211	小玉	6.1	5.0	2.2	0.46	ガラス	群青色	249	栗玉	2.8	3.8	1.1	0.05	ガラス	淡青色
173	切子玉	18.3	14.0	3.5	4.10	水晶	透明	212	小玉	5.3	5.5	1.6	0.45	ガラス	群青色	250	栗玉	2.1	3.1	1.1	0.05	ガラス	淡青色
174	切子玉	17.2	14.0	3.2	4.25	水晶	透明	213	小玉	4.7	5.6	2.1	0.42	ガラス	群青色	251	栗玉	3.0	3.9	0.9	0.04	ガラス	淡緑青色
175	切子玉	23.0	15.4	4.1	6.54	水晶	透明	214	小玉	5.2	5.4	2.1	0.45	ガラス	群青色	252	栗玉	2.5	2.8	1.0	0.03	ガラス	淡青色
176	切子玉	24.8	15.7	3.8	7.49	水晶	透明	215	小玉	4.2	5.1	2.1	0.31	ガラス	群青色	253	栗玉	2.2	3.7	1.1	0.04	ガラス	淡青色
177	丸玉	9.6	14.1	3.9	4.58	ガラス	緑色	216	小玉	5.1	6.0	2.6	0.44	ガラス	群青色	254	栗玉	2.2	3.5	1.1	0.04	ガラス	淡青色
178	丸玉	9.6	13.7	3.6	4.16	ガラス	緑色	217	小玉	6.0	4.7	2.0	0.46	ガラス	群青色	255	栗玉	2.0	3.5	1.4	0.03	ガラス	淡青色
179	丸玉	10.1	14.0	3.5	4.70	ガラス	緑色	218	小玉	6.4	5.3	1.7	0.34	ガラス	群青色	256	栗玉	2.3	3.4	1.5	0.05	ガラス	淡青色
180	丸玉	9.6	13.9	4.7	4.24	ガラス	緑色	219	小玉	5.4	4.8	1.6	0.31	ガラス	群青色	257	栗玉	1.5	3.8	1.4	0.02	ガラス	淡青色
181	丸玉	9.6	13.4	4.1	3.94	ガラス	緑色	220	小玉	4.4	5.0	2.7	0.21	ガラス	群青色	258	栗玉	2.5	4.1	1.0	0.06	ガラス	群青色
182	丸玉	10.3	13.7	4.3	4.45	ガラス	緑色	221	小玉	5.4	4.9	2.1	0.23	ガラス	群青色	259	栗玉	1.8	3.2	1.2	0.03	ガラス	青色
183	丸玉	10.0	13.3	2.7	4.13	ガラス	緑色	222	小玉	5.4	5.6	2.2	0.31	ガラス	群青色	260	栗玉	2.4	2.2	1.2	0.02	ガラス	青色
184	丸玉	10.0	14.4	4.4	4.68	ガラス	緑色	223	小玉	4.0	5.8	1.7	0.16	ガラス	群青色	261	栗玉	3.0	3.7	0.9	0.06	ガラス	暗青色
185	丸玉	10.4	13.5	4.3	4.35	ガラス	緑色	224	小玉	4.7	4.7	1.4	0.31	ガラス	群青色	262	栗玉	2.8	3.9	0.9	0.06	ガラス	黒色
186	丸玉	10.7	13.5	4.3	4.65	ガラス	緑色	225	小玉	3.3	5.4	2.1	0.23	ガラス	群青色	263	栗玉	2.6	3.4	1.1	0.03	ガラス	青緑色
187	丸玉	9.8	14.0	4.4	4.42	ガラス	緑色	226	小玉	3.3	6.1	2.3	0.22	ガラス	群青色	264	栗玉	2.0	3.0	1.0	0.03	ガラス	緑色
188	丸玉	9.5	14.1	4.5	4.40	ガラス	緑色	227	小玉	4.7	5.6	1.6	0.42	ガラス	群青色	265	栗玉	2.3	3.7	1.0	0.04	ガラス	淡緑色
189	丸玉	10.7	13.1	3.3	4.41	ガラス	緑色	228	小玉	—	7.2	2.2	0.14	ガラス	群青色	266	栗玉	1.9	3.9	0.9	0.03	ガラス	黄色
190	丸玉	10.8	14.0	4.0	5.14	ガラス	緑色	229	小玉	5.5	—	2.6	0.08	ガラス	群青色	267	栗玉	2.2	3.6	1.1	0.04	ガラス	暗赤色
191	丸玉	11.3	14.2	4.0	5.16	ガラス	緑色	230	小玉	—	6程	2.2	0.05	ガラス	群青色	268	丸玉	6.2	6.5	1.5	0.42	メノウ	赤色
192	丸玉	10.1	13.3	4.8	4.07	ガラス	緑色	231	小玉	5.1	5.0	1.5	0.37	ガラス	暗青色	269	小玉	3.8	7.8	4.7	0.18	?	銀白色
193	丸玉	10.6	14.2	3.9	4.27	ガラス	緑色																



第21図 出土金属器（5）(1/2)



第22図 出土金属器 (6) (1/2)

付着部位に着目すると、頭部から付着するもの、下半部のみ付着するもの、先端部には付着しないものなど変化が多い。また、木質の厚さにも差が認められる。棺の組み合わせ方や棺材の相違、また、釘の打ちつけ方の違いなどによって生じたものであろう。曲がった釘がいくらかみられたが、309などは屈折部分にのみ木質が付着し、あるいは錠ではないかと思われる。釘はいずれも鉄製である。270は全長138mm、重量33.53gを測り。277は残存長144mm、重量22.02gである。

#### f. その他の遺物（第18図）

142は銅製の小形環状製品である。玄室前半分から出土した。全体に銅鑄が及んでいる。材質から考へると、装身具か馬具の部品と思われる。外径は8mm、内径が4.5mmを測り、断面形は半球状になるようである。耳環かとみられる細い環状製品（154）と組み合う可能性もある。144は細い鉄線の先端をさらに細くして回し、小孔を作っている。針のような製品になるのであろうか。断面は円形で直径3.5mm、孔の内径は2mm、残存長は2.9mmである。羨道西半分の堆積土中から出土した。145は鉄製の紡錘である。軸の一部と紡錘車の1/2強が残存していた。羨道の堆積土中から出土した。軸の断面形は円形で、直径は7mmである。紡錘車は直径が推定で50mmを測り、厚さは3mm、中央部が窪むように湾曲している。重さは13.1gである。146は、断面が長方形の鉄線を折り曲げ、一端に長楕円形の環を作っている。鉄線は幅6mm、厚さ3.5mmを測り、環の内径は12×2mmである。もう一端は曲がる。用途は不明で、釘かもしれない。これ以外に鉄滓が9点出土している。総重量は693.54gを測る。玄室と羨道の境付近の大石の下からの出土が確認された。もっとも大きいもので、長径95mm、重さ240.17gを測る。製鍊滓とみられるものがほとんどである。スサ入りの炉壁片も1片出土した。

## (2) その他の遺構・遺物

## 1. 近世墓群(第2・23~27図)

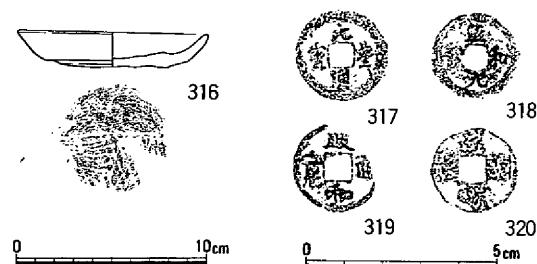
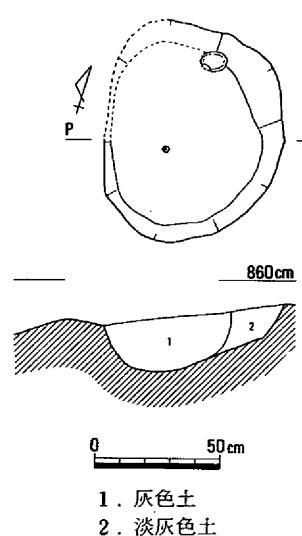
根岸古墳の前庭部にあたる付近から完形の壺が1点と土壙が4基集中して検出された。壺からは火葬骨が出土し、土壙の1基からは錢貨と土器が副葬されていたことから、これらはいずれも墓であると判断された。副葬品の有無があり、また、少數であることから一家族の墓地とも考えられる。1号墓は、蔵骨器が露出した状態に至って、墓であることを認識した。前庭部に掻き出された、副葬品を含む黒褐色土の掘り下げ中であった。周囲に炭の散乱が認められ、あるいは盛土のような施設があったかもしれない。土壙についても後世の削平によって浅くなっている可能性が高い。

1号墓は蔵骨器を埋納していた。周辺の土壙墓の状況や、周囲の炭粒の広がりなどを考えると、土壙に埋納されたものではなく、盛土のような施設によって覆われていたかもしれない。蔵骨器の中からは火葬骨が出土したが、小片で量も少なく、性別・年齢等の鑑定は行っていない。ただ、四肢骨ではなく、いずれも頭骨の破片とみられることは注意され、首塚の可能性も考慮

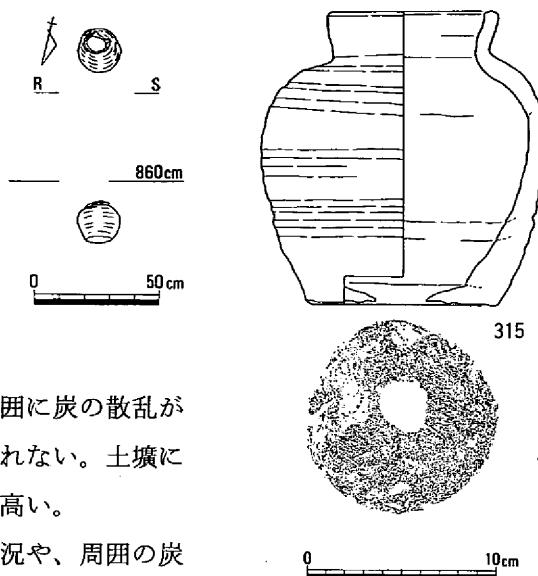
したい。蔵骨器は口径84mm、器高150mm、胴部最大径156mm、底径99mmの備前焼の壺で、底部には焼成後の穿孔がなされている。口縁は直口で、口縁端部は丸くおさめる。胴部外面には、粘土紐の巻き上げ痕跡をヨコナデしたためか、凹線が螺旋状に巡っている。底部は未調整である。焼成は不良で、色調は一部灰色を呈するものの、多くは浅黄橙色である。年代は16世紀の後葉とされる(注1)。

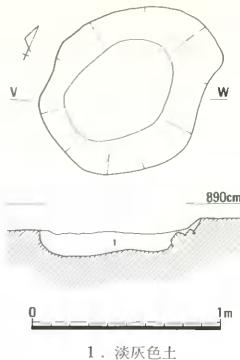
2号墓は1号墓の北東1.5mで検出した。長径89cm、短径71cm、深さ27cmの楕円形の土壙であった。断面は楕形で、底は凹面となっていた。埋土は2層に分けられたが、大きな相違はなかった。壙底の中央からは錢貨が4枚重なって出土し、その下には板材が付着していた。棺を使用した埋葬であったとみられる。1枚の土師器の小皿

が土壙の肩口付近から、壙底からは浮いた状態で出土した。いずれの遺物も副葬されたと考えられる。錢貨はすべて北宋錢で、「政和通寶」が2枚、「至和元寶」と「元豐通寶」が1枚ずつであった。小皿は口径が99mm、器高18.5mm、底径は58mmを測る。底部はわずかに突出気味で、体部から口縁部へ少し内湾している。底部外面には糸切り痕跡が残り、木目の圧痕がついている。焼成はやや



第24図 2号墓 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

第23図 1号墓 (1/30)  
・蔵骨器 (1/4)



第25図 3号墓 (1/30)

甘く、灰白色を呈している。この皿に類似したものが岡山城二の丸跡最下層出土の遺物にあって、慶長前後の時期とされている（注2）。

3号墓は1号墓の西2.5mにあった。長径100cm、短径85cm、深さ20cmの歪んだ楕円形の土壙で、広く平坦な底面をもち、断面は皿形をなしていた。埋土は淡灰色土のみで、副葬品などは出土しなかった。

4号墓は1号墓のすぐ南で、30cmしか離れていなかったため、1号墓が土

盛りをもっていたとすれば、その中に含まれていたと思わざるをえない。土壙は円形で、長径が46cm、深さは14cmにすぎない。埋土は暗褐灰色土で、遺物はなかった。5号墓との関係で、墓壙として疑問もある。

5号墓は1号墓の南2mにあった。円形に近い土壙で、長径53cm、短径47cm、深さは19cmを測る。この土壙には礫が多く含まれ埋土は淡灰黃褐色土と他とは異なり、墓壙かどうか疑問が多い。一方、1.8m離れている4号墓と規模が類似しているもの気にかかる、遺物はなかった。

近世墓群のうち4・5号墓については疑問があるが、他の3基については確実に墓である。問題は1号墓の上盛りの規模である。1号墓の壺と2号墓の小皿は近接した時期のものと考えられ、位置的にも1号墓と2号墓は密接な関係があると思われる。両者は1.5mしか離れていないため、共に上盛りをすれば重ならざるをえない。1号墓の盛土の脇に2号墓を作ったか、あるいは両者を含み、さらには3号墓まで取り込んだ盛土のあった可能性も否定できない。

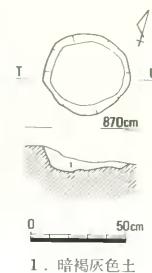
## 2 出土遺物（第28～31図）

根岸古墳は早くから開口していたようで、奈良時代の再使用を始めとして、厚い堆積層の中から各時代の遺物を出土した。ここでは、古墳時代以前の石器と平安時代以後の土器について述べる。古墳周辺の山道や下段の畑からは多量の近世土器が出土しているが、紙数の関係でここでは触れない。

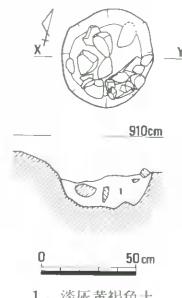
第28図に示したのは石器である。321は鎌で全体の風化が進んでいる。無茎凹基式で全長17mm、幅11mm、厚さ2.7mm、重さ0.3gである。322はスクレイパーとみられる。裏面は大剝離面で、自然面側の縁辺に打撃を加え、丸く刃部を作りだしている。どちらも縄文時代のものと考えられる。

第29図は石室の埋土から出土した古代と中世の上器である。多くは義道からの出土で、331・338が玄室前半分、334は前庭部出土である。323・326・327・330・331は10世紀から12世紀にかけての平安時代のもの、それ以外は13世紀以後の鎌倉時代のものと考えられる。

323・324は須恵器碗で、底部は回転糸切りである。口縁部に重ね焼きの痕跡が残る。325は土師器杯で、底部はヘラ切りである。326～329・331は土師器碗である。いずれも高台を付けている。330は黒色土器碗である。332～336は土師器の小皿で、底部はヘラ切りとみられる。337は瓦器碗で、見込みに



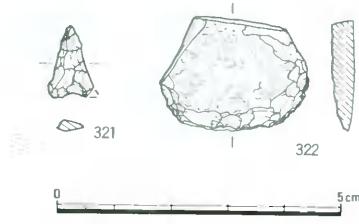
第26図 4号墓 (1/30)



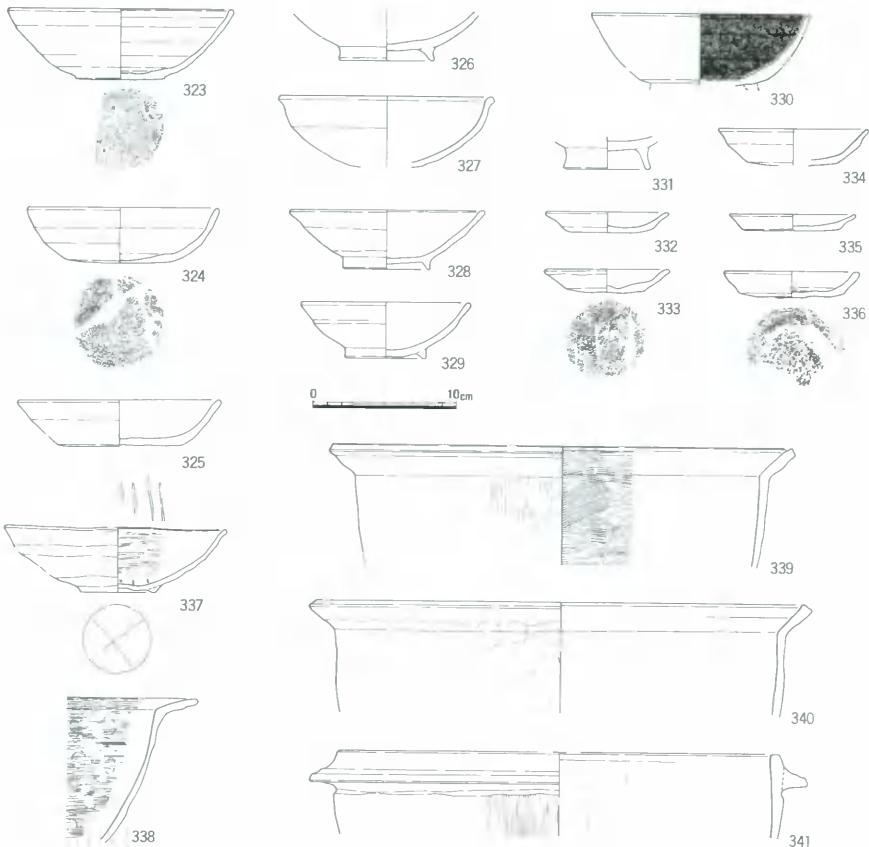
第27図 5号墓 (1/30)

は平行線の暗文がみられ、底部外面には×印のヘラ記号が刻まれている。338～341は土師器の鍋である。口縁部の形状には相違がみられ、341は鍔をもっている。また、内面のハケの粗さにも差があり、ナデて平滑にしているものもある。

第30図は石室の埋土から出土した中世と近世の土器で、349は墳丘上に堆積した貝層出土である。342～344は羨道の開口部付近、第6図上段の第7層の上面あたりからまとめて出土した。土師器の小皿で、底部外面には指頭圧痕が多くみられる。343では粘土紐の巻き上げ痕跡が認められる。16世紀のものであろうか。345～348は石室内の貝層から出土した。345は土師器椀で、底部は糸切りである。346は肥前系陶器の皿である。347は備前焼の壺で、肩部に波状文を施す。348は土師器の甕で、亀山焼の系譜につながるものであろうか。349

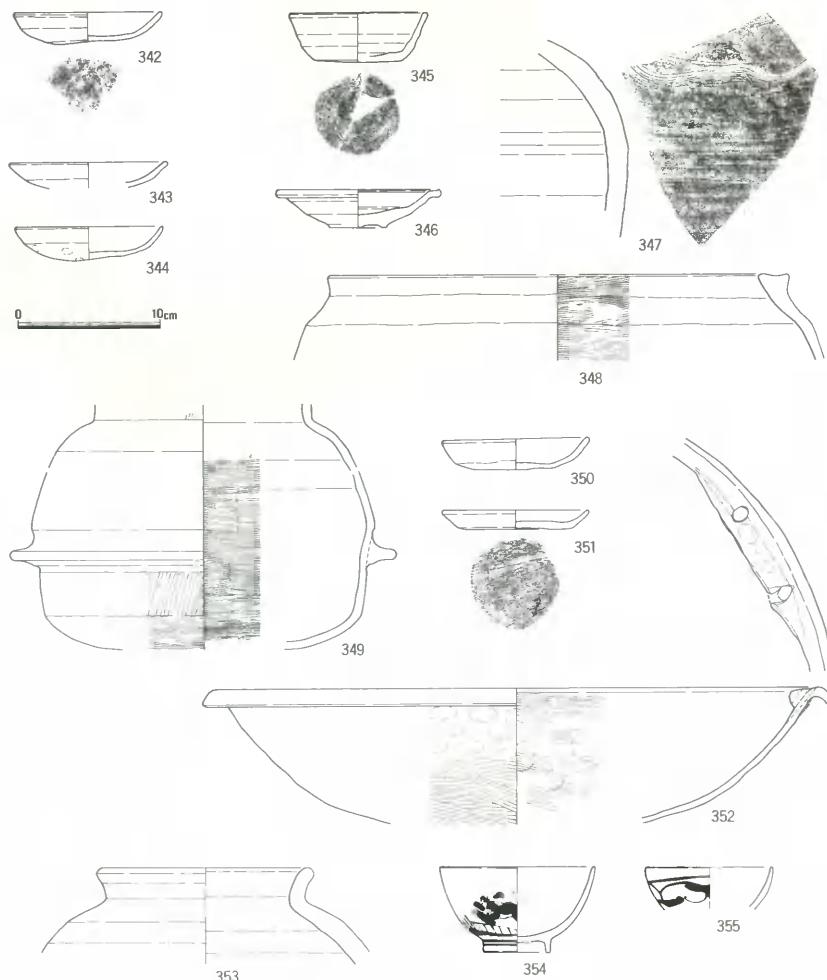


第28図 出土石器 (1/1)



第29図 石室埋土内古代・中世土器 (1/4)

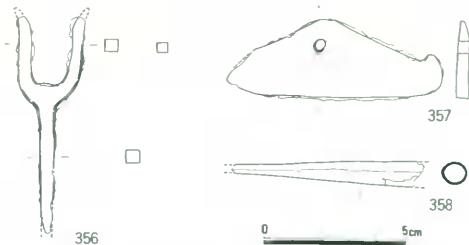
が出土した貝層は石室内の貝層と同時に形成されたと考えている。349は土師器の羽釜で、胴部の肩に把手を付けるものであろう。鍔より下に煤が付着している。貝層から出土した土器の年代は16世紀から17世紀の前半にわたっている。350～355は石室埋土の上方から出土した。350・351は土師器の小皿である。350は344と類似し、底部はナデとオサエ、351の底部は糸切りのようである。352は土師器の鍋で、口縁の内側に把手を取り付ける耳が付けられている。353は備前焼の壺である。347と器壁の色調や自然釉の感じ、さらには断面の色調もよく類似し、同一の個体である可能性が高い。354・355は肥前系染付磁器碗である。ともに植物文様を描く。354の見込みには融着した砂粒を剥いだような傷が点々と残り、高台の接地部にも砂がわずかに付着している。355の器壁は荒れている。これら石室埋土上方の遺物も16世紀から17世紀にかけてのものと思われる。



第30図 石室埋土内中世・近世土器 (1/4)

金属器も若干出土している。356・357は石室内の貝層出土、358は表土出土である。356は雁股の鉄鎌である。身部も基部も断面は方形である。切先部分は欠損している。残存長77mm、身部の幅は24mm、茎の太さは5mmを測る。357は火打金である。長三角形で、一角は丸くしてはね上げたような形に作る。鈍角部分に穿孔がある。358は

銅製の煙管の吸い口である。貝層からは前述したように人骨が多く出土しているので、火打金や煙管の出土を合わせて考えると、石室内への埋葬がなされた可能性が高い。その年代は江戸時代である。

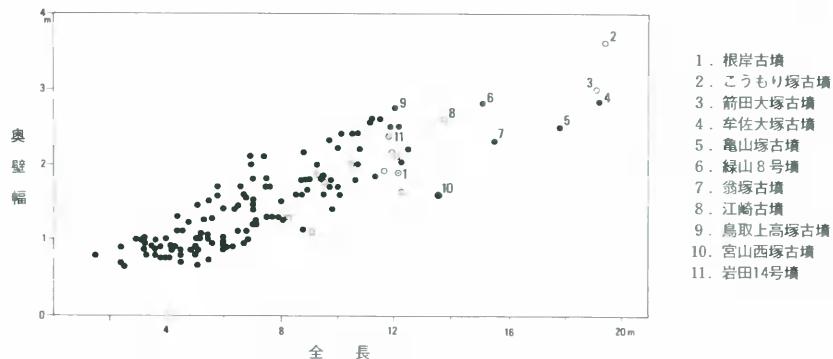


第31図 石室内貝層・表土出土金属器 (1/2)

### 第3節 小 結

根岸古墳の横穴式石室は全長12.3m、最大幅2.1m、奥壁幅1.9mを測った。この石室規模は岡山県内でどのような位置を占めるであろうか。第32図は宇垣匡雅の作成になるもので、1994年までに規模の判明している県内の石室を網羅している。白丸は金銅装馬具を副葬していた古墳である。根岸古墳の石室1は、全長12mあたりを境として左側に密集する古墳の右端近くを占める。全長12mの右側に位置する古墳はこうもり塚古墳をはじめとして国造級の大首長墓である。宇垣氏は、地域の首長墓は全長12m前後の石室が中心になると想え、また、その長さで規制がなされた可能性があるとする(注3)。根岸古墳はまさにこのクラスの古墳であり、砂川の下流域を基盤にしていた首長の墓と考えられる。この地域では、もう1基このクラスの石室をもつ古墳が存在している。それは、根岸古墳のある丘陵の東裾、岡山市百枝町に所在する宮山西塚である。きわめて近接したこの2基の古墳がどのような関係にあるかが今後大きな問題となるであろう。

それでは、地域の首長と考えられる根岸古墳の被葬者の内容はどのようなものであっただろうか。

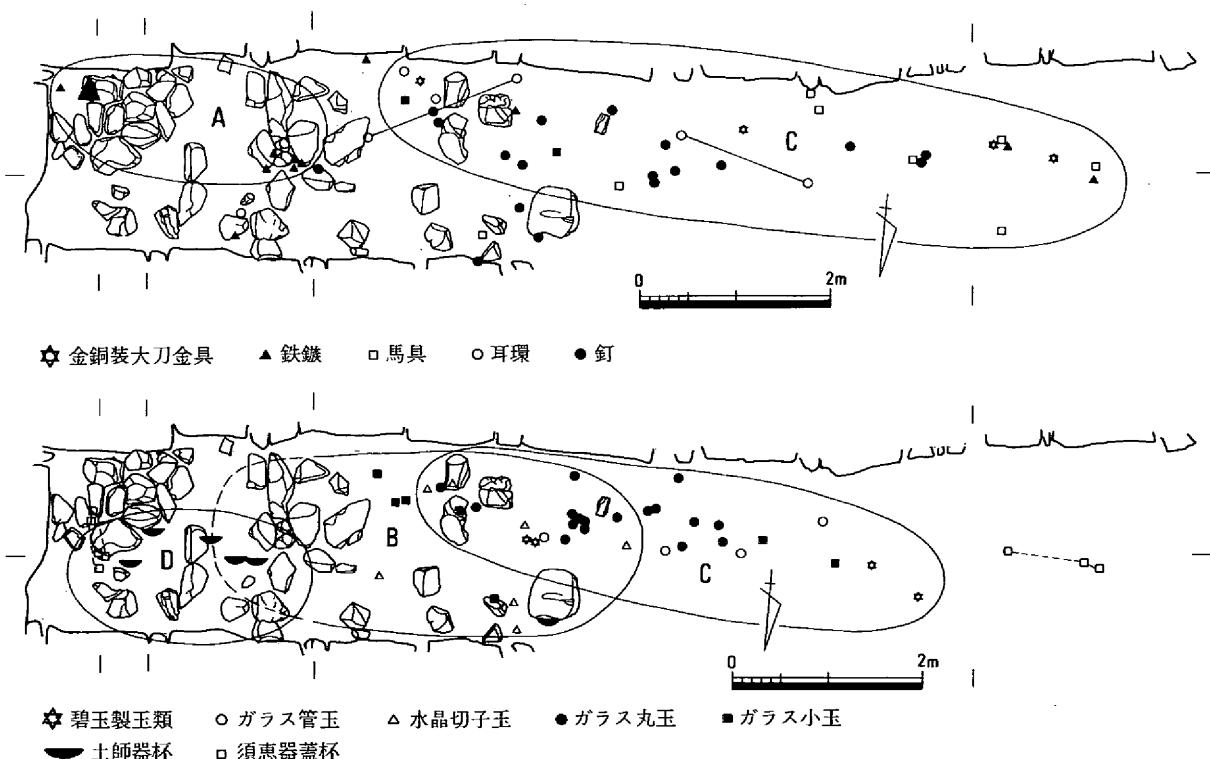


第32図 岡山県内における横穴式石室の規模

(宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』大原町教育委員会 1995を一部改変)

根岸古墳は後世に大きな破壊を受けていたが、最初の奈良時代の再使用にあたって床面を貼り直していたため、貼り床層の中に多くの副葬品が残された。副葬品は攪乱を受けてはいたが、第33図に示すように、理由のありそうな分布状況にあった。石室内のものを搔き出すのではなく、新たに土を入れるために生じた現象と思われる。第33図上段は武器・馬具・耳環・釘の分布である。鉄鎌の集中地点は二か所に別れるが、同じ型式のものが両方にみられ、それらを囲んだのがAの範囲である。Cの範囲には金銅装大刀金具が散乱し、馬具と釘のほとんどもこの範囲から出土した。ただ、馬具の2点と釘5点は玄室奥半からの出土が確認されている。耳環は線で結んだものが対になるが、いくらか離れてはいるものの線が交差することはない。Aの範囲の下にある耳環は対になるものの出土位置を確定できなかったが、玄室奥半からの出土ではある。下段は玉の種類別と一部の土器の分布である。Bは水晶切子玉の分布範囲で、玄室奥半からも2点出土している。この範囲は耳環の分布も考慮して設定した。Cは碧玉製玉類とガラス管玉・丸玉の分布範囲であり、上段のCの範囲と重なってくる。ただ、ガラス製管玉は1点が玄室奥半から出土している。ガラス製小玉・粟玉はBからCの範囲にかけて広く分布し、玄室奥半からも23点が出土している。Dは暗文をもつ土師器碗の集中する範囲で、玄室奥半から出土した耳環と関係させてここに設定した。須恵器については、セットになる可能性のある蓋と杯を破線で結んだ。根岸古墳では最低でも4人の埋葬があった。A～Dの範囲は4という数をある程度念頭に置きつつ検討したものであるが、整合性をみたようで、それぞれの範囲内に棺の位置を想定したい。Aからは鉄鎌しか出土せず、そこから引き出された棺がCの範囲で破壊されたとみられなくもない。しかし、Aでは再埋葬はなされなかったのであろうか。

それでは埋葬の前後関係はどうであろうか。先の検討で副葬品の組み合わせが確認された。鉄鎌と須恵器蓋杯3～6、耳環151・152と水晶切子玉、金銅装大刀は馬具・碧玉製玉類・ガラス管玉・ガラス丸玉・耳環149・150と組み合う。また、土師器杯は耳環147・148と組み合う。須恵器蓋3・5は口



第33図 石室内器種別遺物出土状態 (1/80)

径が134・126mm、器高が42mm、杯4・6は口径120・112mm、器高41・43mmを測る。大阪府陶邑TK209式（注4）と併行し、岡山県では、県南の亀ヶ原1式（注5）に先行し、県北の畠ノ平古墳群3期（注6）と対応することから6世紀末に比定できる。金銅装大刀の鍔は柄孔のまわりに円孔を8個めぐらせた特異な形状を呈している。これに伴う柄頭がどのような型式かは不明であるが、鍔の類例として知りえた群馬県榛名町奥原15号墳の大刀が主頭である（注7）ことからすれば、その可能性が高い。奥原15号墳の主頭大刀は新納泉氏によれば7世紀初頭に編年されるという。土師器杯は飛鳥地域の杯C（注8）とよく類似し、CⅡが主体となる。外面の底部をヘラケズリで調整し、体部から口縁部にかけては粗いヘラミガキを施すものが少數で、外面の底部はナデ・オサエで、体部から口縁部にかけてもナデだけのものが多数を占める。ともに底部内面にはラセン文は認められない。57・59は口径120mm、器高46・45mm、径高指数38を測る。飛鳥I期の中でも小塙田宮SD050出土土器（注9）より新しく、川原寺下層SD02出土土器（注10）以前とみられ、7世紀第1四半期の年代が考えられる。なお、川原寺SD02出土の須恵器蓋杯は畠ノ平古墳群5期に相当するとされる。このように、6世紀末から7世紀第1四半期までのわずか30～40年ほどの期間ではあるが、A～Dの埋葬については先後関係が伺え、とくにAはC・Dより古いとみてよい。問題はCとDの関係である。金銅装大刀は下賜されたものであろうから、埋葬時との時間差が存在するとみなければならない。両者に共通する耳環に着目すると、Cの耳環は銅芯銀張、Dは銅芯金張の細身と異なる。Bにあった一対の耳環は銅芯銀張で、同じBにあって単独出土した153も銅芯銀張だった。153がAに伴うと推定することもできようが、とにかく、銅芯金張で細身というのは新しい傾向ではなかろうか。そうならば、AからC、そしてDという流れが考えられ、Bはその位置から、AとCの間ということになる。

Aに伴っていた鉄鎌は平根式が16本で、おおむね二つの型式からなり、同一型式中に大小の組み合わせがみられた。このことは鉄鎌が葬送にあたって製作された可能性を考えさせる（注11）。鉄鎌の在地生産が言われる（注12）以上、根岸古墳の被葬者が古墳築造当初からその生産に密接に関係する立場にあったことを思わせ、地域首長としての姿を彷彿とさせる。根岸古墳からは鉄滓や炉壁も出土している。次代の首長は金銅装の大刀を佩いて種々の玉を身に纏い、金銅装の馬具に飾られた馬に騎乗する。大和朝廷による地域権力者としての承認を示すとともに、朝廷への奉仕者としての姿をも露す。きらびやかな姿は必ずしも身分の上昇を示すものではなく、時流であったろう。やがて律令的な土器様式が全国を覆うが、そのはしりとなる飛鳥期の土師器が、根岸古墳に複数で副葬される。中央政府に連なる官人と化していく地域権力者の転身を思うとともに、薄葬の高まりをも感じさせる。

注(1) 伊藤晃氏の教示による。

- (2) 宇垣匡雅・柳瀬昭彦・河本清・伊藤晃 他『岡山城二の丸跡』岡山県教育委員会 1991年
- (3) 宇垣匡雅『川戸古墳群発掘調査報告書』大原町教育委員会 1995年
- (4) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966年
- (5) 伊藤晃「第十一章 窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- (6) 弘田和司「第3章第4節 まとめ」『西大沢古墳群 畠ノ平古墳群 虫尾遺跡 黒土中世墓 茂平古墓 茂平城』岡山県教育委員会 1996年
- (7) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『奥原古墳群』群馬県教育委員会 1983年  
類似とはいながら、円孔の数や鍔と円孔の大きさの比率にはかなり違いがある。なお、類例資料の検索にあたっては岡山大学助教授 新納泉氏の援助をいただいた。記して感謝申し上げる。
- (8) 西弘海「V2B 土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 1978年
- (9) 奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』奈良国立文化財研究所 1976年
- (10) 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部編『飛鳥・藤原宮発掘調査概報10』奈良国立文化財研究所 1980年
- (11) 尾上元規氏の教示による。
- (12) 尾上元規「古墳時代後期における鉄鎌の地域性形成について」『古代吉備』第17集 1995年

## 付載 1 岡山市浅川古墳群出土の人骨

九州国際大学

池 田 次 郎

1990年、岡山市浅川・樅原に所在する浅川古墳群の発掘調査が岡山県古代吉備文化財センターにより実施されたが、2号墳および3号墳の主体部に人骨が遺存していた。2基とも尾根上に位置する円墳で、主体部は箱式石棺である。2号墳は鉄剣1本が副葬されていたのみであるが、3号墳では頭蓋骨のある東の小口側から筒形銅器、その南から内行花文鏡が、また西の小口よりから鉄剣が発見された。これらの副葬品から3号墳の築造年代は4世紀後半と推定されている。

### 2号墳

石棺の両小口よりにそれぞれの頭を置き、差し違えた形で2体が伸展位で埋葬されている。すなわち、東の小口近くでは石の上から頭蓋骨が、西の小口よりでは2枚の石の間から頭蓋骨、下顎骨の破片が検出されている。西に頭を向けた人骨を1号人骨、東小口に頭蓋骨がある人骨を2号人骨と呼ぶ。

1号人骨に属すと思われる骨は、脳頭蓋骨の小破片数点、下顎骨および右鎖骨肩峰端付近の破片、左右大腿骨、距骨、第1中足骨などのいずれも破片である。右の大腿骨は、頸から骨体上部にかけての部分を残しており、太く頑丈である。下顎骨は左右の臼歯部の骨体破片で、それには左右の3本の大臼歯と左の第2小白歯が釘植しており、大臼歯は大きく、磨耗は著しく強い。熟年男性骨と推定される。

2号人骨としては、頭蓋骨、第1頸椎、左右の大腿骨骨体中央付近の破片が残存する。頭蓋骨では、前頭骨、左右の頭頂骨と側頭骨、後頭骨など脳頭蓋の破片と、左右の上顎骨口蓋突起の一部、下顎骨の骨体左臼歯部と下顎切痕付近の破片が残っている。上顎骨の左犬歯、左右第1小白歯は脱落、左の第2小白歯と第1大臼歯の歯槽が閉鎖しており、下顎骨には左の第1・第2大臼歯が釘植しているが、第2小白歯は脱落している。大腿骨は太く頑丈で、左大腿骨骨体中央部の矢状径30mm・横径23mm・周87mm、横断示数130.4で、柱状性は著しく強い。残存する下顎左の大臼歯の磨耗も激しく、上顎に歯槽閉鎖が認められ、冠状縫合は癒合を完了している。熟年男性骨と推定される。

2号人骨の頭蓋骨付近から肋骨片2、中手骨、手の中節骨、膝蓋骨破片が検出されたが、どちらの個体の骨か判定できない。

### 3号墳

頭を東に向けた伸展位で埋葬された状態をよく残している。

#### 保存状態

頭蓋骨：後頭平面中央部と右乳様突起先端、下顎骨の右下顎角に欠損部があるだけで、ほぼ完形を保っている。歯槽が閉鎖している下顎右の第1～第3大臼歯以外の歯が顎骨に釘植している。

胴骨：第5～第9胸椎と第2以下の尾椎を除く全椎骨が残存し、第1・第2頸椎、仙骨、第1尾椎はほぼ完全、胸椎、腰椎にも破損は少ない。左右の第1～第5肋骨の肋骨頭よりの部分の破片が残存

するが、胸骨はない。

上肢骨：鎖骨は左右とも両骨端を欠き、左肩甲骨は関節窩と外側縁を含む部を、右肩甲骨は上部約半分を残す。左右の上腕骨はともに近位部約 $1/2$ ～ $1/3$ を残すが、骨頭、大結節を欠損し、また骨体表面の腐蝕が著しい。左右橈骨は遠位端を、右尺骨は近位・遠位端を欠き、左尺骨は骨体近位部の破片約 $1/2$ である。手骨としては、左の有頭骨、舟状骨、有鉤骨、大菱形骨、小菱形骨、第2～第5中手骨、第3基節骨、右の有頭骨、月状骨、第2・第3中手骨、第1基節骨、第1末節骨が残存する。

下肢骨：左右の寛骨はほぼ完形を保っている。右大腿骨は頭の一部、大転子後面、遠位端を欠き、左大腿骨は近位約 $1/2$ と骨体遠位部を残す。右脛骨は近位端を、左脛骨は近位・遠位端を、左腓骨は遠位端を欠損し、右腓骨は表面の腐蝕が著しい骨体破片である。膝蓋骨は存在しないが、足骨は、右では距骨、踵骨、第1楔状骨、第1～4中足骨、左では距骨、舟状骨、第1楔状骨、立方骨、第1～第5中足骨、第1～第3基節骨、第5中節骨、第1末節骨が残存する。

赤色顔料が頭蓋骨、右の第1・第2肋骨、左右鎖骨、寛骨、左の第2・第3中足骨と第1基節骨に付着しているが、肋骨、頭蓋骨以外の骨には痕跡的に認められるにすぎない。頭蓋骨では、鼻骨、上顎骨、下顎骨正中部などの顔面、前頭骨、側頭骨と頭頂骨の前半分などにかなり濃く付着しており、顔面部と前頭部でもっとも濃厚である。

#### 性、年齢の判定

寛骨の形態から男性骨である。恥骨結合面の形状、大臼歯の磨耗度、頭蓋縫合の癒合度すべてが、被葬者の死亡時年齢が壮年前半であったことを示している。

#### 形態特徴

頭蓋計測値（表1）を岡山古墳人の数値と比較すると、脳頭蓋の最大長に差はみられないが、最大幅がやや広く、そのため長幅示数（81.5）は大きく、短型に属す。バジオン・ブレグマ高は高く、長高示数（76.4）は高型に、幅高示数（93.8）は中型に属す。水平周、横弧長、正中矢状弧長などにおいても岡山古墳人との間に差は認められない。特記すべき頭蓋小変異は出現していない。

頬骨弓幅、中顎幅、顎高、上顎高など顔面の幅径および高径すべてが、岡山古墳人の平均値と一致するので、顎示数、上顎示数でも差はみられない。コルマンの顎示数（85.9）、上顎示数（51.1）はともに中型に属す。前眼窓間幅、眼窓幅、鼻幅、鼻高も岡山古墳人と大差ないが、眼窓高はそれよりやや低い。したがって鼻示数（50.5）にも差がみられず、ともに中型に属すが、眼窓示数（76.2）は岡山古墳人より小さく、中型の下限に入る。鼻根彎曲示数（82.6）は小さく、古墳人としては鼻根部の隆起は強い。しかし、側面観における鼻根部の落ちこみや鼻骨の突出は、古墳人一般にみられるよう弱く、歯槽側面角（58）は小さく、歯槽性突顎が強い。顔面頭蓋にも小変異は認められない。

下顎骨計測値（表2）では、関節突起幅、オトガイ高が山陽古墳人より大きいが、下顎長は小さい。下顎枝の高径は山陽古墳人と一致するが、幅径は小さく下顎枝示数は古墳人、現代人よりも小さい。

四肢骨計測値（表3）では、腓骨を除く上肢骨、下肢骨の中央周、最小周など骨体周径は、西日本古墳人、畿内現代人よりはるかに大きく、津雲繩文人の平均値に近い。最大長が計測できた骨はないが、橈骨の生理長（208mm）は西日本古墳人、津雲繩文人より小さく、畿内現代人の平均値と一致する。

橈骨の長厚示数(22.1)が示すように、浅川古墳人の四肢骨は太く短く、頑丈である。

骨体横断示数についてみると、上腕骨では津雲縄文人はもとより、西日本古墳人、畿内現代人より著しく大きく、尺骨では逆にいずれよりも小さい。橈骨の横断示数には、時代差は認められない。上肢骨の扁平性では津雲縄文人とはまったく対照的である。これに対して、大腿骨中央部の横断示数は津雲縄文人の平均値と一致し、西日本古墳人、畿内現代人よりはるかに大きい。上骨体横断示数には時代差はないが、最大径と最小径の比である骨体上部横断示数は大きく、むしろ縄文人的である。脛骨の中央部、栄養孔部の横断示数は、西日本古墳人とともに津雲縄文人より大きく、畿内現代人の平均値に近いが、腓骨の横断示数はやや小さい。

浅川3号墳人の四肢骨は、太く頑丈であり、大腿骨の中央部および骨体上部の横断示数が大きい点で縄文人に近いが、上肢骨の形態は著しく現代人的である。身長を正確に推定することはできないが、橈骨生理長の大きさから、159cm前後と推定される。

以上、浅川3号墳人骨の特徴は、頭蓋骨では、鼻根部の隆起がやや強く、歯槽性突顎が著しい点を除いては、岡山古墳人の平均的特性と完全に一致するが、四肢骨は短く太く頑丈で、大腿骨骨体の横断形態においても古墳人の一般的特徴を示さず、むしろ縄文人に近い。

表1 頭蓋骨計測値

1. 頭蓋最大長	(178)	8 / 1 長幅示数	81.5	40. 顔長	98	63. 口蓋幅	39
2 a ナジオン・イニオン長	166	17 / 1 長高示数	76.4	41. 側顔長	73	63(2) 前口蓋幅	34
5. 基底長	99	17 / 8 幅高示数	93.8	42. 下顔長	109	64. 口蓋高	12
7. 大後頭孔長	35	20 / 1 長耳ブレグマ高示数	66.3	43. 上顎幅	108	64 a 前口蓋高	9
8. 頭蓋最大幅	145	20 / 8 幅耳ブレグマ高示数	81.4	44. 両眼窩幅	99	72. 全側面角	86
9. 最小前頭幅	94	22 / 2 a カロッテ高示数	63.9	44(I) 鼻頬幅	106	73. 鼻側面角	95
10. 最大前頭幅	117	9 / 10 横前頭示数	80.3	45. 頰骨弓幅	135	74. 歯槽側面角	58
11. 両耳幅	128	9 / 8 横前頭頂頭頂示数	64.8	46. 中顎幅	103	75. 鼻背側面角	68
12. 最大後頭幅	113	27 / 26 矢状前頭頂頭頂示数	106.6	47. 顔高	116	75(I) 鼻背角	18
17. バジオン・ブレグマ高	136	29 / 26 矢状前頭示数	89.3	48. 上顎高	69		
20. 耳ブレグマ高	118	30 / 27 矢状頭頂示数	90.7	49. 後眼窓間幅	24	47 / 45 顔示数(K)	85.9
22. カロッテ高	106	31 / 28 矢状後頭示数	83.2	50. 前眼窓間幅	19	47 / 46 顔示数(V)	112.6
23. 水平周	(518)	31(I) / 28(I) 矢状上鱗示数	95.8	F 鼻根横弧長	23	48 / 45 上顎示数(K)	51.1
24. 横弧長	314	Vertex Rad.	123	51. 眼窓幅 右	43	48 / 46 上顎示数(V)	67.0
25. 正中矢状弧長	(372)	Nasion Rad.	93	左	42	44(I) / 44 鼻頬示数	107.0
26. 正中矢状前頭弧長	121	Subsp. Rad.	93	52. 眼窓高 右	32	50 / 44 前眼窓間示数	19.2
27. 正中矢状頭頂弧長	129	Prosth. Rad.	99	左	32	50 / F 鼻根弯曲示数	82.6
28. 正中矢状後頭弧長	(119)		54. 鼻幅	25.5	52 / 51 眼窓示数 右	74.4	
28(I) 正中矢状上鱗弧長	(72)		55. 鼻高	50.5		左	76.2
29. 正中矢状前頭弦長	108		55(I) 梨状口高	30	54 / 55 鼻示数	50.5	
30. 正中矢状頭頂弦長	117		56. 鼻骨長	23	54 / 55(I) 梨状口高幅示数	85.0	
31. 正中矢状後頭弦長	99		57. 鼻骨最小幅	8	61 / 60 上顎歯槽示数	120.8	
31(I) 正中矢状上鱗弦長	69		57(I) 鼻骨最大幅	17	63 / 62 口蓋示数	84.8	
32(I) 前頭傾斜角	64		57(2) 鼻骨上幅	9	45 / 8 横頭顔示数	93.1	
32(5) 前頭弯曲角	135		60. 上顎歯槽長	53	9 / 43 前頭両眼窓示数	87.0	
33(I) ラムダ・イニオン角	84		61. 上顎歯槽幅	64	9 / 45 頸前頭示数	69.6	
			62. 口蓋長	46	57 / 57(I) 横鼻骨示数	47.1	

## 付 載

表 2 下顎骨計測値

65. 関節突起幅	130	70(1) 前枝高 右	72	79. 下顎角	126
65(1) 筋突起幅	114	左	71	68/65 幅長示数	53.1
67. 前下顎幅	49	70(2) 最小枝高 左	57	69(2)/69 高示数 左	80.0
68. 下顎長	69	70(3) 切痕高 右	9	69(3)/69(1) 高厚示数 右	50.0
69. オトガイ高	35	左	8	左	48.3
69(1) 体高 右	28	70 a 頭高 右	60	71/70 下顎枝示数 左	54.1
左	29	左	57	70(3)/71(1) 切痕示数 右	32.1
69(2) 体高 左	28	71. 枝幅 左	33	左	27.6
69(3) 体厚 右	14	71(1) 切痕幅 右	28		
左	14	左	29		
70. 枝高 左	61	71 a 最小枝幅 左	33		

表 3 四肢骨計測値

鎖骨	右	左	尺骨	右	左	脛骨	右	左
4. 中央垂直径	11	11	3. 最小周	38		7. 下端矢状径	38	
5. 中央矢状径	13	13	11. 前後径	12		8. 中央最大径	30	30
6. 中央周	40	41	12. 横径	17		8 a 栄養孔部最大径	33	33
4/5 横断示数	84.6	84.6	11/12 骨体横断示数	70.6		9. 中央横径	21	22
肩甲骨	右	左	大腿骨	右	左	9 a 栄養孔部横径	24	24
12. 関節窩長		37	6. 中央矢状径	29		10. 骨体周	84	85
13. 関節窩幅	28	28	7. 中央横径	26		10 a 骨体周	93	93
13/12 関節窩長幅示数		75.6	8. 中央周	89		10 b 最小周	76	76
上腕骨	右	左	9. 骨体上横径	30	30	9/8 中央横断示数	70.0	73.3
5. 中央最大径		21	9' 骨体上部最大径	30	31	9 a /8 a 栄養孔部横断示数	72.7	72.7
6. 中央最小径		19	10. 骨体上矢状径	25	25	腓骨	右	左
7 a 中央周		69	10' 骨体上部最小径	24	25	2. 中央最大径	(14)	
6/5 骨体横断示数		90.5	15. 頸垂直径	33	33	3. 中央最小径	(10)	
橈骨	右	左	16. 頸矢状径	25	24	4. 中央周	(43)	
2. 生理長	208		17. 頸周	102	100	3/2 中央横断示数	(71.4)	
3. 最小周	46		18. 頸垂直径	46	46			
4. 骨体横径	17		19. 頚横径	47	47			
4 a 中央横径	17		20. 頚周		150			
5. 骨体矢状径	12		6/7 中央横断示数	111.5				
5 a 中央矢状径	12		10/9 上骨体横断示数	83.3	83.3			
5(5) 中央周	50		10' /9' 骨体上部横断示数	80.0	80.6			
3/2 長厚示数	22.1		16/15 頸横断示数	75.8	72.7			
5/4 骨体横断示数	70.6		19/18 頚横断示数	102.2	102.2			

## 付載2 浅川古墳群中の2号墳および3号墳の埋葬主体部にかかる赤色顔料物質の化学分析

武庫川女子大学薬学部

安 田 博 幸・森 真 由 美

岡山市東部の浅川・樺原に所在する浅川古墳群が国道2号岡山バイパス工事とともに調査された結果、丘陵上に2基の古墳（2号墳、3号墳）が確認され、2号墳（円墳）の箱式石棺内からは2体の人骨と鉄剣が赤色顔料を含む土壌中から出土し、また、3号墳の箱式石棺からは赤色顔料に覆われた人骨1体が副葬品（彷彿鏡・筒形銅器・鉄剣）とともに出土した。

今回、これらの赤色顔料について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法<sup>1)</sup>とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、さらに、3号墳棺内人骨の顔面付着の赤色顔料物質については、水銀朱成分についての定量分析もあわせて実施し、所見を得たので報告する。

### 試料の外観および分析用試料の採取

試料1 浅川2号墳箱式石棺の南東側の蓋より採取された、淡灰褐色土壌をうっすらと彩って赤く識別される赤色顔料物質。そのもっとも赤色の顕著な部分5mgを分析用試料とする。

試料2 浅川2号墳箱式石棺の南西小口側石蓋石下の土壌、その中にわずかに赤色顔料の混在がみられる。その赤色部分を周辺土壌とともに5mg採取し分析用試料とする。

試料3 浅川2号墳の箱式石棺内の人骨頭部（南西側）下の土壌、表面全体が赤く識別される。そのもっとも赤色の顕著な部分の5mgを分析用試料とする。

試料4 浅川3号墳箱式石棺内の人骨頭部下の部分的に赤く識別される土壌。そのもっとも赤色の顕著な部分の5mgを分析用試料とする。

試料5 浅川3号墳箱式石棺内の人骨顔面に付着の赤色顔料。その赤色のもっとも顕著な、粉末としてまとまって採取されている部分の10mgを〔I〕の微量定性分析用の試料とし、また、50mgを〔II〕のHgS定量分析用試料とする。

### 〔I〕赤色顔料物質の微量化学分析

#### 試料検液の作製

上記の分析用試料のそれぞれをガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は、試料番号にそれに対応させる。

#### ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No.51B（2cm×40cm）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン（Fe<sup>3+</sup>）と水銀イオン（Hg<sup>2+</sup>）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終ったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジ

## 付 載

ドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置 (Rf値で表現する) と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表1、表2のとおりである。

(1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる  
検出： ( $Hg^{2+}$ は紫色、  $Fe^{3+}$ は紫褐色のスポットとして検出される。)

表1 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試 料	Rf値 (色調)
試料検液 1	0.12 (紫褐色)
試料検液 2	0.12 (紫褐色)
試料検液 3	0.13 (紫褐色)
試料検液 4	0.14 (紫褐色) 0.85 (紫色)
試料検液 5	0.14 (紫褐色) 0.85 (紫色)
$Fe^{3+}$ 標準液	0.16 (紫褐色)
$Hg^{2+}$ 標準液	0.87 (紫色)

(2) ジチゾンによる検出： ( $Hg^{2+}$ は橙色スポットとして検出され、  $Fe^{3+}$ は反応陰性のため呈色せず。)

表2 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試 料	Rf値 (色調)
試料検液 1	呈色スポット発現せず
試料検液 2	呈色スポット発現せず
試料検液 3	呈色スポット発現せず
試料検液 4	0.85 (橙色)
試料検液 5	0.85 (橙色)
$Fe^{3+}$ 標準液	呈色スポット発現せず
$Hg^{2+}$ 標準液	0.89 (橙色)

## 判定

以上の結果のように、浅川3号墳箱式石棺内の人骨頭部下の土壤、および、人骨顔面上の赤色顔料からは $Hg^{2+}$ の呈色スポットが検出されたことから、試料採取位置の赤色顔料に水銀朱(辰砂、 $HgS$ )が存在していることが明かとなった。

他方、浅川2号墳の箱式石棺内の土壤中の赤色顔料からは $Hg^{2+}$ は検出されず、 $Fe^{3+}$ のみであったことから、こちらの試料の赤色顔料は $Fe_2O_3$ (ベンガラ系)であることがわかった。

このように、同一古墳群中の近接する2古墳の箱式石棺内の各被葬者について、葬送儀礼に使用された赤色顔料に差異が見られる結果が得られたことは、興味ある知見と考えられる。

## [Ⅱ] 浅川3号墳箱式石棺内出土人骨顔面上に残存した赤色顔料(水銀朱、 $HgS$ )の定量分析

上記のろ紙クロマトグラフ法による赤色顔料の分析鑑定において、試料5の呈色スポットが、 $Hg^{2+}$ についてはきわめて濃く、明瞭であるのに対して、 $Fe^{3+}$ については甚だ淡かったことから、当初に純度のかなり高い水銀朱( $HgS$ )が試料の採取位置に供献されたことが想像された。幸いにも、今回の鑑定試験のための試料5の採取試料量として、以下の $HgS$ の定量分析法を行うに足る量が提供されていることがかったので、浅川3号墳箱式石棺内人骨顔面付着の水銀朱について、筆者らの常法<sup>1)</sup>とする吸光光度定量法による、 $HgS$ の定量実験を下記のように実施した。

### 吸光光度定量法による水銀朱の定量

試料5の粉末試料50mgを50mlのビーカーに精密に量り取り、濃塩酸3ml濃硝酸1mlを加えて水浴中

で、短時間加温する。蒸留水を適當少量加え、可溶性成分の溶けている溶液と酸不溶性成分とをガラスろ過器でこしわけて酸不溶性成分は少量の蒸留水で吸引ろ過して洗う。上記のろ液と洗液を合わせ、さらに蒸留水を加え正確に200mlとする（これを原液といふ）。

原液を一定量とり、pH 1～2の塩酸酸性とし、さらに蒸留水を加えて、正確に測定に適した一定倍数に希釈する。これを測定用試料検液（以下単に「検液」という）とする。内容量100mlの分液ロートに検液20mlを正確にはかりとり、ジチゾンのクロロホルム溶液（0.01mg/ml）20mlを正確に加えて振とうした後、クロロホルム層を分取する。（このとき、クロロホルム層はジチゾンの色（汚青緑色）を保持していることを必要とする。）この液にNa<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>（無水）を適當量加えて乾燥した後、測定波長490nmで吸光度を測定する。別にHg<sup>2+</sup>の濃度が1～5 ppmのHg<sup>2+</sup>標準液系列について同様の操作を行なって得た吸光度から検量線を作製し、検液の吸光度をそれと対照することによって検液中のHg<sup>2+</sup>濃度が求められる。これに希釈倍数を乗じて「原液」のHg<sup>2+</sup>濃度を計算し、さらに原液量を乗じることによって原液中のHg<sup>2+</sup>量すなわち「量り取った試料」中のHg<sup>2+</sup>量が算出される。つぎにそのHg<sup>2+</sup>量に換算係数（HgS/Hg=237.7/200.6=1.159）を乗じると、同試料中のHgSの量とその含有%を求めることができる。

#### 定量結果

表3 浅川3号墳箱式石棺内人骨顔面付着の赤色顔料の化学分析値

試 料	酸不溶性成分(%)	HgS(%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MgO(%)	CaO(%)
浅川3号墳人骨顔面付着赤色顔料	19.7%	72.3%	0.16%	0.01%	0.02%

以上のように、浅川3号墳の人骨顔面に付着していた赤色顔料は、72.3%のHgSを含む辰砂すなわち水銀朱であることがわかった。

筆者がこれまでに前期古墳の埋葬主体部に遺存した水銀朱を含む赤色顔料について行なったHgS定量の結果としては下の表4のようなものがある。

今回の分析結果は、畿内の

前期古墳出土の水銀朱についての分析結果資料とも相通じるものである点において、興味深いものがある。本古墳の築造時期については、筒形銅器などの特徴的な遺物の出土はあるものの、出土遺物の少ないことなどもあって、断定が保留されている折から、前期的な水銀朱の供献を検出した上記の結果は、若干の示唆を与えるものであろう。

表4 前期古墳出土の水銀朱試料の化学分析値<sup>1)</sup>

試 料	酸不溶性成分(%)	HgS(%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	As <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)
奈良県天理市天神山古墳	8.22%	87.2%	1.09%	0.05%
奈良県奈良市猫塚古墳	15.3%	84.6%	0.07%	—%
奈良県奈良市猫塚古墳	13.7%	72.1%	1.17%	0.17%
奈良県桜井市メシリ山古墳	13.0%	70.1%	2.37%	0.05%
京都府園部町垣内古墳	21.8%	78.1%	1.36%	0.05%
兵庫県上郡町西野山古墳	19.8%	78.4%	0.73%	0.03%

(1991年10～11月分析)

#### [註]

1) 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斎藤忠編 日本考古学論集1 考古学の基本的諸問題』吉川弘文館 pp. 389-407 (1986)

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」『檀原考古学研究所論集 第七』吉川弘文館 pp. 449-471 (1984)

## 付載3 浅川2・3号墳箱式石棺の石材について

岡山理科大学自然科学研究所

白 石 純

### 1. はじめに

浅川2・3号墳の箱式石棺に使用されている石材の岩石種について検討した。石棺石材の鑑定を実施した石材は、2号墳が36点、3号墳が23点の計59点である。石材の観察方法は、肉眼・偏光顕微鏡観察、蛍光X線分析法により岩石学的特徴を調べた。

### 2. 箱式石棺の石材について

2号墳の箱式石棺では、36点の石棺石材について観察した。この結果、試料No.26、32の2点の石棺石材以外はすべて流紋岩である。肉眼観察では、灰白色の石基中に1～4mmの石英・長石と2mm以下の角閃石がみられる。顕微鏡観察では(図版番号1～4)、斜長石・石英・角閃石が認められる。石英は最大径4mmで、角が丸みを帯びた自形である。石基は石英、長石の他にガラスからなっている。また、化学組成による岩石分類法では、SiO<sub>2</sub>の含有量が60～70%の火山岩は流紋岩となることからも、この2号墳の石棺石材は、流紋岩である。そして、この流紋岩の産出地は、この古墳群が立地する丘陵および周辺地域の地質基盤岩が流紋岩<sup>(1)</sup>であることからこの古墳の周辺で産出する石材を使用していると考えられる。また、試料No.26、32の石棺石材は、26が砂岩、32がサヌキトイド(古銅輝石安山岩)であった。32のサヌキトイドの産出地は、鏡下(図版番号5)および分析値(第1・2図、表1)から香川県豊島に産出するサヌキトイドであることがわかった。

3号墳の箱式石棺では、23点の石棺石材について観察した。この結果、2号石棺と同様に殆どの石棺石材が流紋岩であることがわかった。また、石棺石材試料No.1(蓋)と11は鏡下(図版番号6・7)と分析値からサヌキトイドである。そして、この石材の産出地は、1が香川県豊島産、11が香川県屋島産に推定された。(第1・2図)。

以上のように、2・3号墳の石棺に使用されている石材は、3点のサヌキトイド以外は全て古墳周辺で産出する流紋岩であることがわかった。また、サヌキトイドの産地は2号墳の1点が豊島産、3号墳の2点が豊島と屋島産がそれぞれ使用されていた。なお、周辺地域の古墳でサヌキトイドの石材が使われている古墳として浦間茶臼山古墳が知られている。同古墳の竪穴石室の石材には、豊島産のサヌキトイドが使用されていることが確認されている<sup>(2)</sup>。

(註)

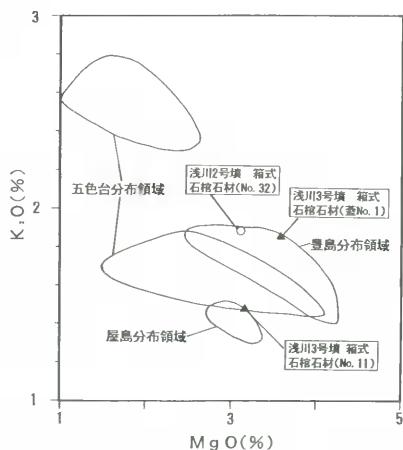
(1) 「日本地質図大系 中国・四国地方」 朝倉書店 1991年

(2) 白石 純「吉備地方の竪穴石室石材の原産地推定」 『古文化叢書 第24集』 九州古文化研究会 1991.3

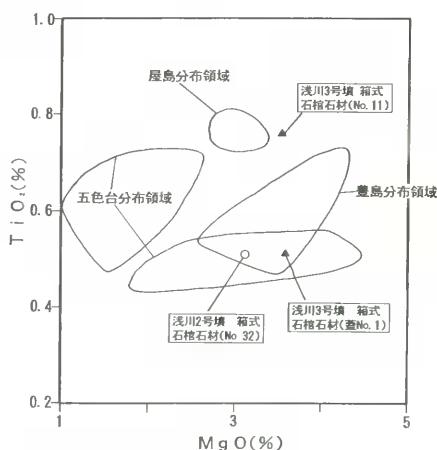
表1 浅川2号墳石棺石材分析値(%)

古墳名	出土地点・試料番号	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O
浅川2号墳	箱式石棺石材No.4	75.98	0.07	12.88	1.25	0.01	0.95	0.25	3.00	4.58
浅川2号墳	箱式石棺石材No.13	68.66	0.38	14.84	3.55	0.06	1.24	1.52	3.64	3.92
浅川2号墳	箱式石棺石材No.18	67.49	0.88	15.55	6.81	0.07	1.55	0.37	2.79	3.07
浅川2号墳	箱式石棺石材No.34	70.17	0.31	13.56	3.73	0.07	1.25	2.32	3.26	3.34
浅川2号墳	箱式石棺石材No.32	63.58	0.55	16.43	5.73	0.08	2.31	4.76	3.40	1.78
浅川3号墳	箱式石棺石材No.1	63.27	0.57	16.42	5.69	0.08	2.51	4.74	3.71	1.74
浅川3号墳	箱式石棺石材No.11	60.21	0.77	17.85	6.31	0.10	2.12	6.01	3.94	1.41

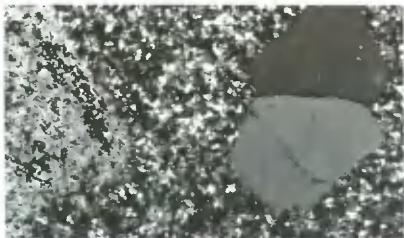
\*No.32・1・11の3点の石材は、サヌキトイド（古銅輝石安山岩）である。



第1図 MgO-K<sub>2</sub>O 散布図  
浅川2・3号墳箱式石棺石材と  
サヌキトイド原産地との比較



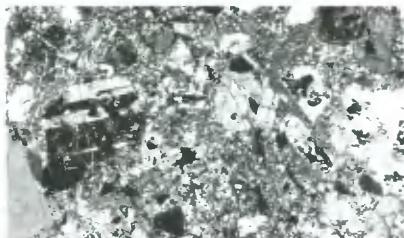
第2図 MgO-TiO<sub>2</sub> 散布図  
浅川2・3号墳箱式石棺石材と  
サヌキトイド原産地との比較



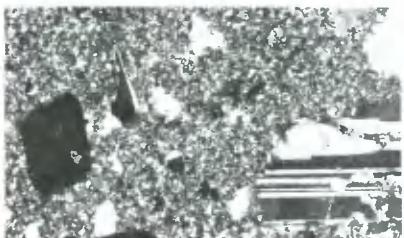
1. 浅川 2号 填箱式石棺石材 No.4



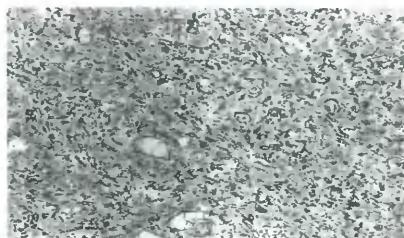
2. 浅川 2号 填箱式石棺石材 No.13



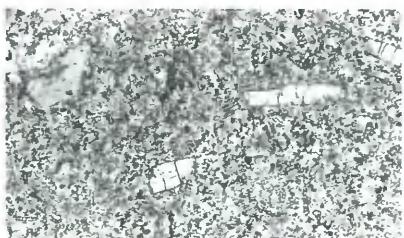
3. 浅川 2号 填箱式石棺石材 No.18



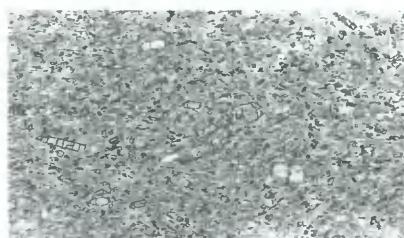
4. 浅川 2号 填箱式石棺石材 No.34



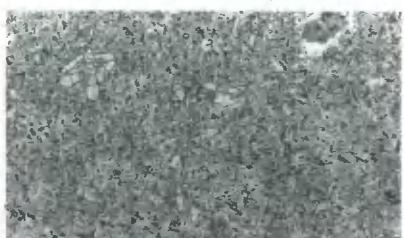
5-1. 浅川 2号 填箱式石棺石材 No.32



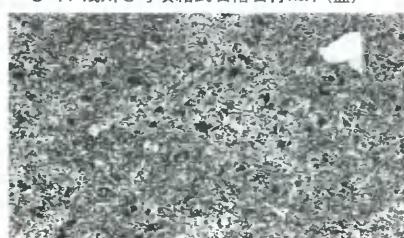
5-2. 浅川 2号 填箱式石棺石材 No.32



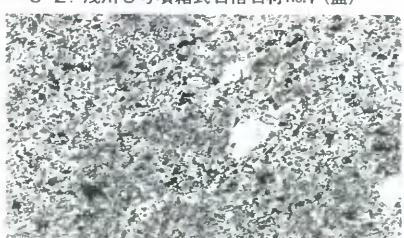
6-1. 浅川 3号 填箱式石棺石材 No.1 (蓋)



6-2. 浅川 3号 填箱式石棺石材 No.1 (蓋)



7-1. 浅川 3号 填箱式石棺石材 No.11



7-2. 浅川 3号 填箱式石棺石材 No.11

1~4. 直交ニコル 5~7. 開放ニコル ×28

## 報告書抄録

ふりがな	こうげいせき・あさかわこふんぐんほか・ならばらこふんぐん・ねぎしこふん							
書名	高下遺跡・浅川古墳群ほか・檜原古墳群・根岸古墳							
副書名	一般国道2号改築工事(岡山バイパス)に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	123							
編著者名	内藤善史・岡本寛久・宇垣匡雅							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	建設省岡山国道工事事務所 岡山県教育委員会							
所在地	〒700-0914 岡山県岡山市鹿田町2-4-36 TEL 086-226-1051 〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	1997年2月28日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因	
こうげ 高下遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 たけわら 竹原	33201		34° 41' 03"	134° 03' 50"	19900507 ～ 19921031	12,000m <sup>2</sup>	
あさかわ 浅川古墳群ほか	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 あさかわ ならばら 浅川・檜原	33201		34° 42' 06"	134° 04' 13"	19900401 ～0502 19900701 ～0901	754m <sup>2</sup>	一般国道2号改築工事(岡山バイパス)に伴う発掘調査
ならばら 檜原古墳	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 ならばら 檜原	33201		34° 41' 43"	134° 03' 45"	19940401 ～0731	805m <sup>2</sup>	
ねぎし 根岸古墳	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 たけわら 竹原	33201		34° 40' 41"	133° 03' 20"	19950401 ～0630	500m <sup>2</sup>	
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
高下遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 中世	溝・住居跡 建物・井戸 土壙・水田	弥生土器・土師器 初期須恵器・石器 玉類・鉄器	弥生時代中期および古墳時代初頭の集落跡を確認			
浅川古墳群ほか	古墳	古墳時代	古墳	仿製内行花文鏡・筒形銅器・鉄劍	3号墳は箱式石棺の主体部が未盗掘			
檜原古墳	古墳	弥生時代 古墳時代	土器棺・土壙 古墳	弥生土器・鏡破片 石器・鉄器・玉類	堅穴式石室を主体部とする前期小墳			
根岸古墳	古墳 墓地	古墳時代 近世	古墳 蔵骨器・土壙墓	須恵器・金属器 馬具・装身具 錢貨・土師皿	長大な横穴式石室内から金銅装大刀金具・馬具などが出土			

図版 1



1. 高下遺跡  
調査前北部  
(北西から)



2. 高下遺跡  
調査前南部  
(北東から)



3. 高下遺跡  
竪穴住居-1  
(南から)

図版2



1. 高下遺跡  
竪穴住居-3  
竪穴遺構-9  
(南東から)



2. 高下遺跡  
竪穴遺構-3  
(東から)



3. 高下遺跡  
建物-1  
(南東から)

図版 3



図版 4



1. 高下遺跡  
竪穴住居-7  
(南東から)



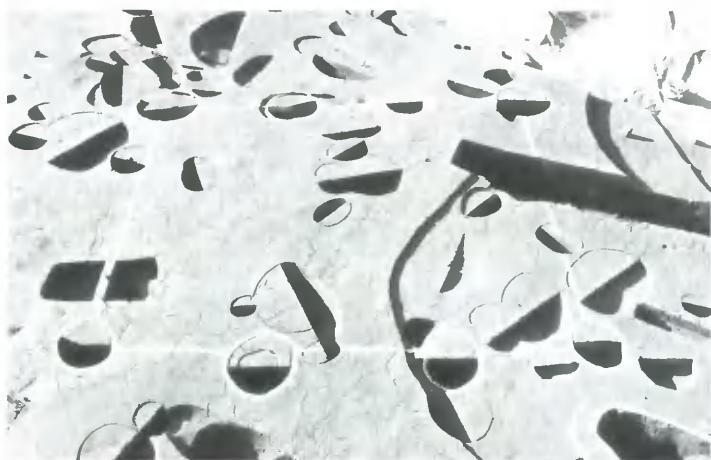
2. 高下遺跡  
竪穴住居-8  
(東から)



3. 高下遺跡  
竪穴住居-8  
周辺古墳時代  
遺構(東から)

図版5

1. 高下遺跡  
建物-3  
(南東から)



2. 高下遺跡  
井戸-1  
(南東から)



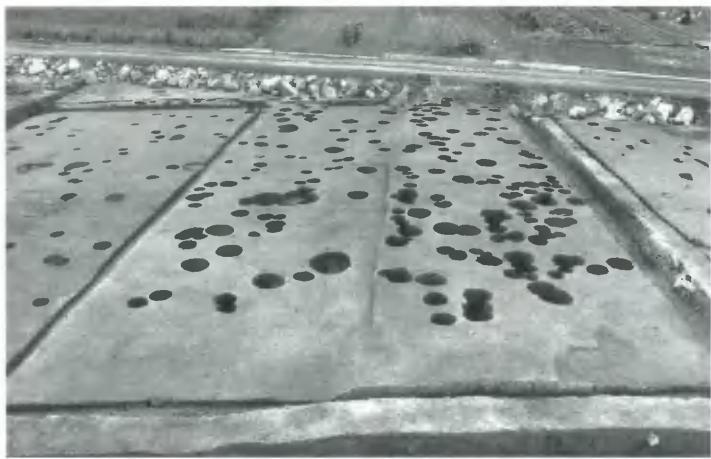
3. 高下遺跡  
土壙-10  
(南から)



図版6



図版 7



1. 高下遺跡  
古代柱穴群  
(東から)

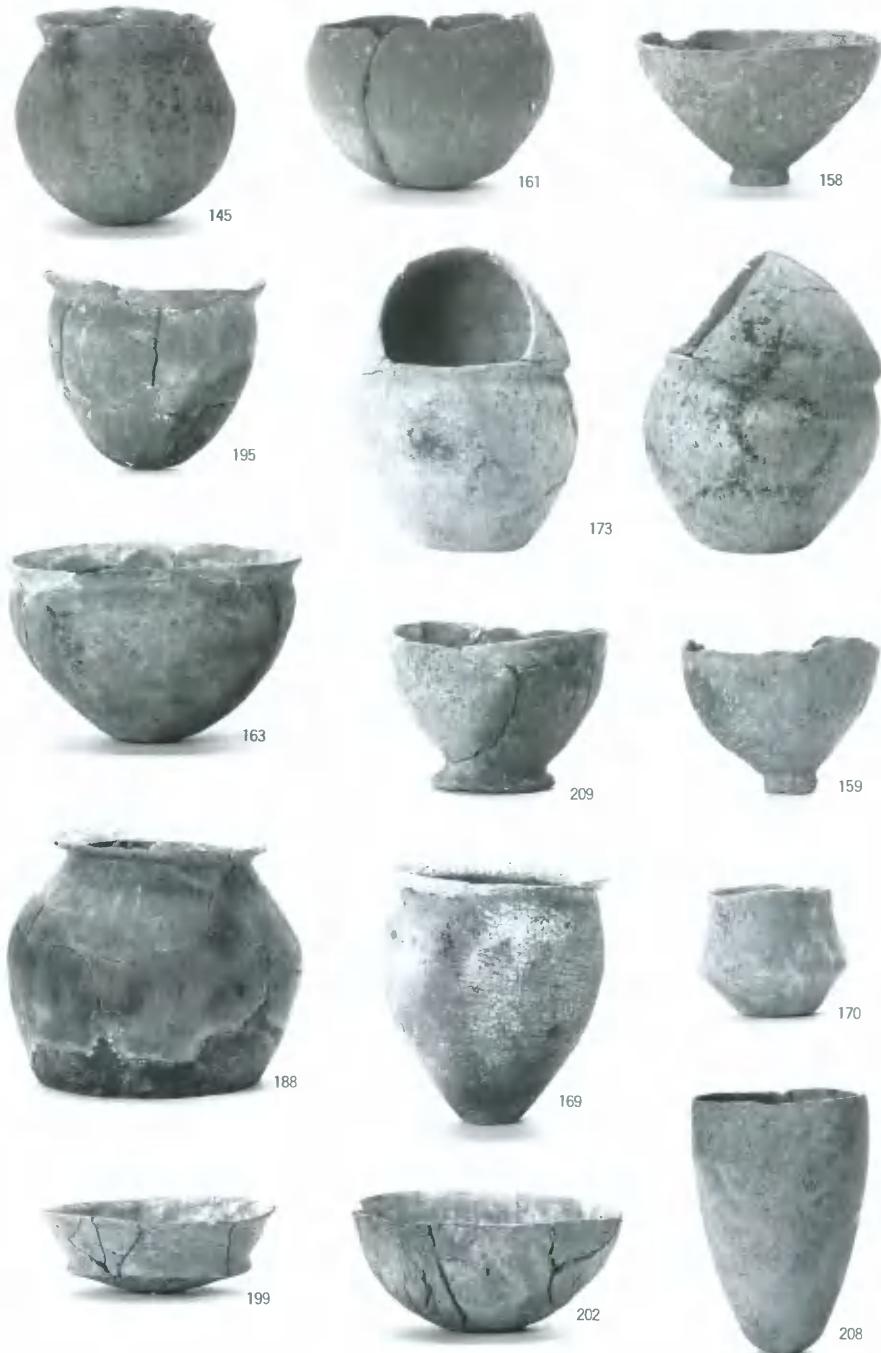


2. 高下遺跡  
井戸-2  
(東から)



3. 高下遺跡  
中世水田畦群  
(南から)

図版 8



高下遺跡出土遺物（1）（土器）

図版9



14



15



17



16



18



71



2



24



25



83



72



40



41



42



43



44



45

高下遺跡出土遺物（2）（石器）

図版10



高下遺跡出土遺物（3）（土製品・玉類・鐵器）



図版12



1. 浅川3号墳  
墳丘検出状況  
(西から)



2. 浅川3号墳  
主体部検出状況  
(東から)



3. 浅川3号墳  
人骨検出状況  
(北東から)



1. 楠原火葬墓  
検出状況  
(北から)



2. 浅川2号墳出土遺物

4



9



3. 楠原火葬墓骨蔵器

10

図版14



1. 檜原古墳群  
遠景  
(南から)



2. 調査前の状況  
(東から)



3. 1号墳・7号墳  
(南東から)

図版15



1. 古墳群全景  
(北西から)



2. 7号墳(手前)・  
1号墳(奥側)  
(南から)



3. 7号墳北東葺石  
(北東から)

図版16



1. 1号墳主体部  
(北から)



2. 1号墳主体部  
(西から)



3. 7号墳乱掘墳  
(南から)

図版17

1. 土器棺-1・  
土壤-1  
(北から)



5



4



6

2. 土器棺-1・土壤-1出土遺物



M8



M1



J1

3. 椿原古墳群出土遺物

図版18



(X線)

(X線)

M2

M3



S3

S4

S5



S6

S6

S8

S7

S7

椿原古墳群出土遺物



1. 根岸古墳遠望（北から）



2. 調査前古墳全景（東から）



3. 墳丘全景（北東から）

図版20



1. 山道堆積土層  
及び墳丘断面  
(北西から)



2. 古墳周溝  
(北から)



3. 石室羨道部  
遺物出土状態  
(西から)



1. 石室内土層  
断面及び遺物  
出土状態  
(北西から)



2. 玄室内遺物  
出土状態  
(西から)



3. 同上細部  
(西から)

図版22



1. 横穴式石室  
玄室南側壁  
(北西から)



2. 横穴式石室  
奥壁  
(西から)



3. 横穴式石室  
玄室北側壁  
(南西から)



1. 横穴式石室南側壁（西北西から）



2. 墳丘盛土内  
列石  
(西から)



3. 石室掘り方内  
土層断面  
(西から)

図版24



1. 調査後古墳全景（西から）



2. 横穴式石室  
全景  
(北から)



3. 石室天井石  
(南上から)

図版25



2. 1号墓 (北から)・藏骨器



315



3. 2号墓 (東から)・出土遺物



316



317



318



319



320

図版26



1. 根岸古墳出土土器 (1)

図版27



1. 根岸古墳出土土器（2）

図版28



54



54



52



57



59



52



57



59



55



60



61



60



61



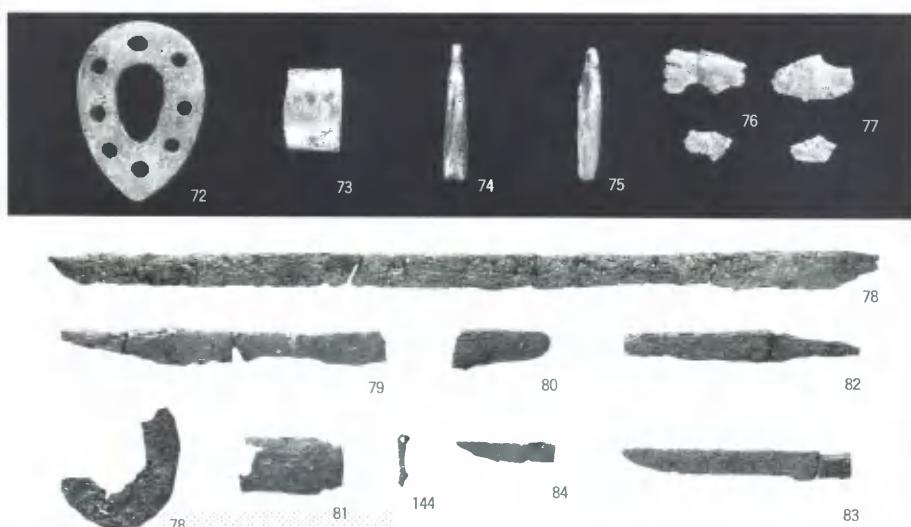
63

1. 根岸古墳出土土器 (3)

図版29



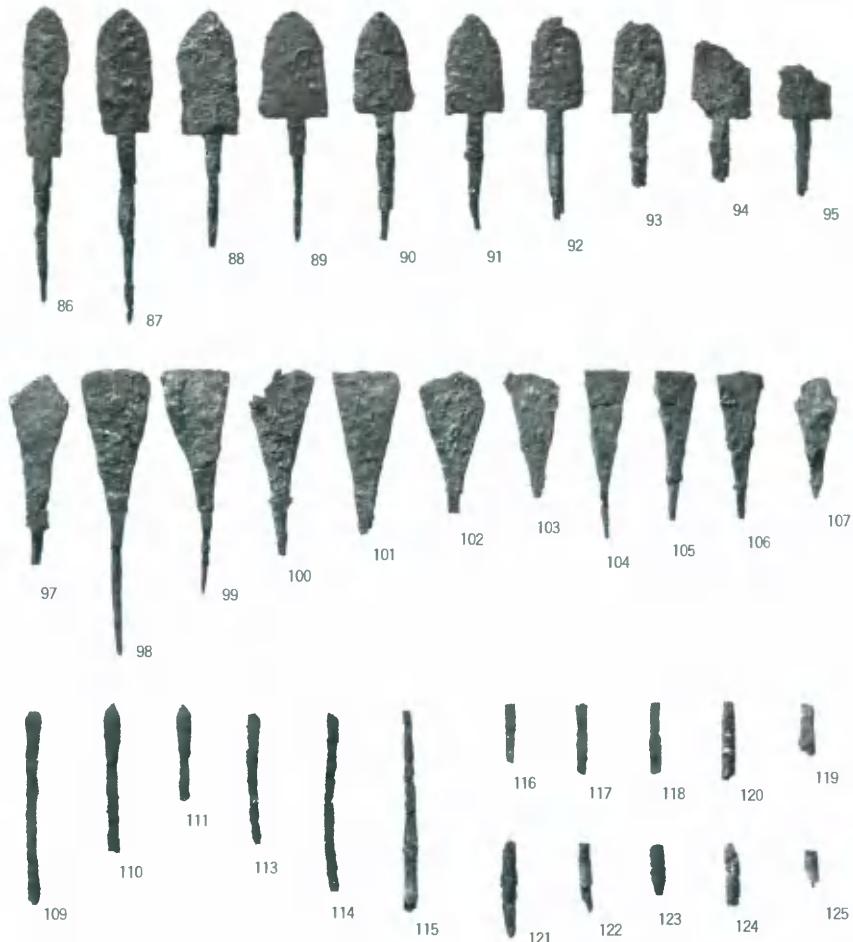
1. 根岸古墳出土土器 (4)



2. 根岸古墳出土金銅装大刀金具 (上)

3. 根岸古墳出土 金属器 (1) (下)

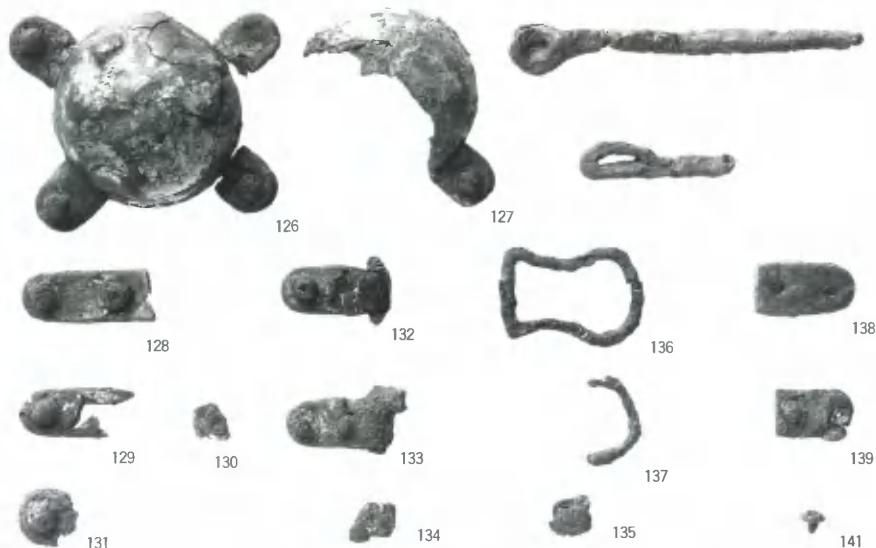
図版30



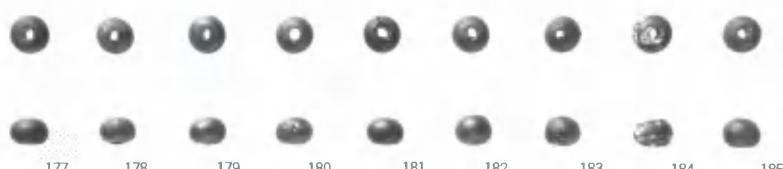
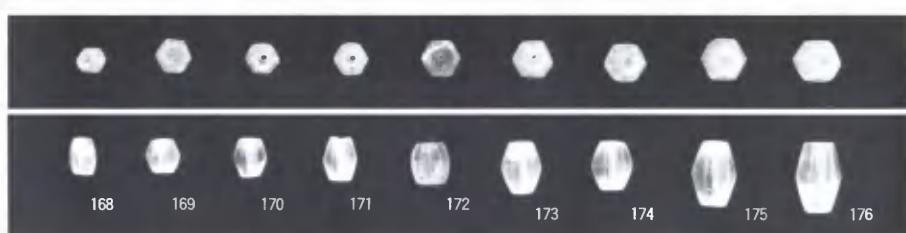
1. 根岸古墳出土金属器（2）



2. 根岸古墳出土耳環

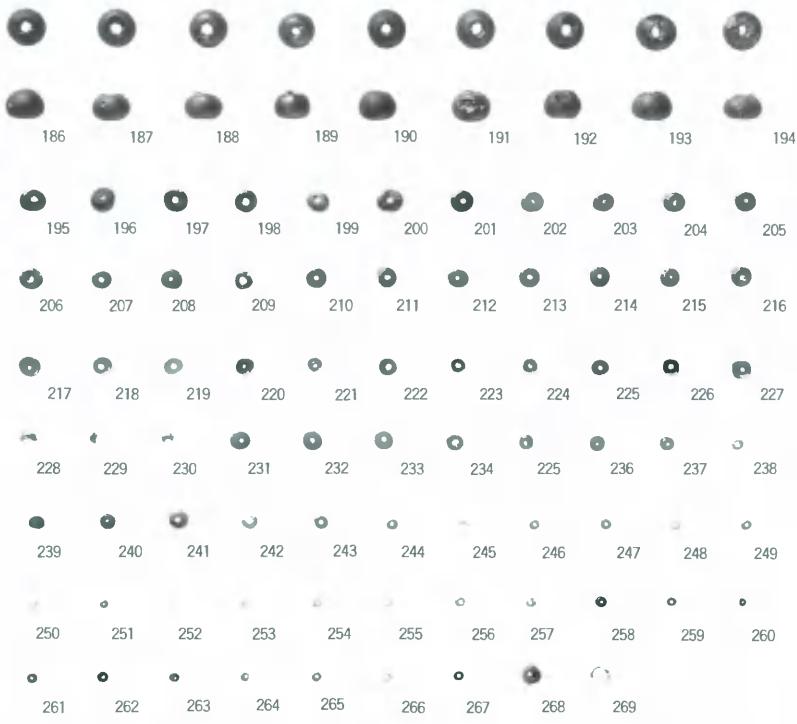


1. 根岸古墳出土金属器（3）



2. 根岸古墳出土玉類（1）

図版32



1. 根岸古墳出土玉類 (2)



2. 根岸古墳出土金属器 (4)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告123

高下遺跡 浅川古墳群ほか  
樋原古墳群 根岸古墳

一般国道2号改築工事  
(岡山バイパス)に伴う発掘調査

1998年2月20日 印刷  
1998年2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
発行 建設省岡山国道工事事務所  
岡山県教育委員会  
印刷 友野印刷株式会社